

シズさんを魔法の学校
に通わせたい。

ちゅんちゅん丸

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

- 1、転スラの再放送見てシズさんを学校に通わせたくなった。
 - 2、早見さんボイスに冷たい感じでせめて欲しい。そうだ、魔法科にしよう。
 - 3、シズさんのキャラが掴めないからオリ？主も追加しよう（前作八幡。だが、キャラが変わりすぎて死んでも八幡と言えないのでハチに。名前考えるの苦手なんす）
 - 4、脳内でいろんなキャラ再生したいからクロスオーバーは必須かな。
- という訳で前作と同様に軽いノリで書いていきます。

また、原作見ながら書きますが、転スラ要素も多少絡みますので細かいところはスルーして下さい。

展開的には基本日常系なノリメイン、たまにシリアルななんびり進行です。俺TUE
Eとかハーレム要素は無いのでご注意下さい。

そんなノリでも良いよ！とか、前作が有りだった方はお付き合いたいだけだと思います。

目次

入学編・・・みたいな何か

シズ、入学する。 | 1

シズ、一日目を終える。 | 12

ハチ、Aクラスに登校する | 22

ハチ、Aクラスにつっこむ。 | 32

ハチ、エルイイイトに干渉する

40

シズ、お勉強がんばる | 50

ハチ、忍者くんにつっこむ | 60

ハチ、仕方がなく、本当に仕方がなく模

擬戦する | 72

ハチ、逃げられなかった | 83

シズ、部活見学に行く | 93

シズ、部活見学に行く2 | 102

ハチ、A組の良心を逃がす | 113

シズ、明日から頑張る | 122

シズ、体験入部しゆる | 130

ハチ、風紀委員ではないと嘆く

141

シズ、少女探偵団に加入する | 150

シズ、お勉強すりゆ | 158

シズ、戦闘する | 167

ハチ、徹夜する | 177

ハチ、実習にてモブ崎に意地悪する。

| 185

	ハチ、妹様に実力をアピールさせられる	194		ハチ、迎撃行動に入る・・・	277
	シズ、お仕事する	203		ハチ、ようやく一息つく。	289
	シズ、やべえやつにあう。	211		ハチ、日常に帰る	299
	達也、妹をなぐさめる。	221		つなぎの話。	310
229	ハチ、めつちやぼろぼろで登校する			ハチ、いろいろ作る	321
	ハチ、天使に惚れる	239		九校戦編・・・前半。つまり学校の話	
	シズ、防衛行動に入る	247	331	ハチ、九校戦に出たくないでござる	
	シズ、ハチ。ブランシユと戦う・・・前	前		ハチ、九校戦の練習に付き合う・・・？	
	の話。	256		ハチ、外堀を埋められ始める	350
265	シズ、決着をつけようとする。			シズ 九校戦を運動会と同列に考える	361

ハチ、ただ見守るだけでいたかった。

369

ハチ、天使達の練習に付き合う。

380

ハチ、仕事を減らして仕事を得る

391

ハチ、天国に行く・・・？

九校戦、開幕・・・!!

ハチ、九校戦の会場に向かう。

411

ハチ、調子に乗る

ハチ、生徒会長様の担当をする

431

ハチ、生徒会長様の担当をする2

441

ハチ、モテ期が到来する・・・？

450

ハチ、黒歴史を刻む！

ハチ、観戦と解説と、それから再び

の・・・

ハチ、めんどくさい事に巻き込まれる

ハチ、新人戦が始まる！

ハチ、天使光井の担当としてがんばる

ハチ、逃げ場を失う

ハチ、逃げ場を失う

ハチ、逃げ場を失う

461

470

481

492

501

513

ハチ、試合に臨む

―――

522

シズ、試合でやらかす。

―――

533

ハチ、準決勝に臨む

―――

543

ハチ、天使を探す、んで、正座する

551

ハチ、暁に死す・・・。

―――

561

ハチ、天使を応援するうー

―――

571

入学編・・・みたいな何か

シズ、入学する。

魔法・・・それが現実の技術となったのは1999年のころらしい。

思い返してみるとそのころの自分は向こうの世界でバンバン魔物と戦っていたかなあ・・・？それとも学校の先生を始めたころだろうか・・・。

まあ今は1999年どころか2095年らしいけど。おかしいな・・・あの子達の話からすると2010年位って言ってた気がするんだけどなあ・・・？80年くらい時差がある気がするけど気のせいかな？

そんなことを考えながらボーっと桜が咲き誇っている講堂前の庭を眺める。

たしかに自分がこっちにいた頃は化学もそんなでもなかった。ピコピコもないしね。陰陽師とか風水とかはあったけど、魔法、それも炎を出したり風をおこしたりは出来なかった。私が居た頃はそうだし、あの子達がいた頃もそうだったはず。

あれ？でもユウキがめら？とかひやど？とかなんとか言う魔法があるって言ったような・・・？ぶりぎどだっけ？あれ？

そもそもが、聞いていた話と現代の様子が随分違う気がするの気のせいかな？そう

は思うものの、まあいいかと思う。

それでも、せつかく大変な思いをして入学したんだ、今更学生として過ごせるなんて夢にも、いや、夢にしか思ってたからこれからの学生生活を思うと少し胸が高鳴ってしまう。

そんな少し浮ついた気分でいられたのもつかの間だった。

「納得できません！」

「納得できるかわけないだろお!？」

「まだ言ってるのか・・・?」

第一高校の入学式、そう、この後入学式だ。

その入学式の随分前から私の、今の私の大切な家族たちが言い争っていた。争っていたというか、わがまま言ってる感じかな。

「なぜお兄様が補欠なのですか!？」

「なんで俺が一科生なんだよ!？」

それぞれがそれぞれわがままを言うのは、私の愛すべき義妹と義弟だ。

「入試の成績ではお兄様がトップだったではありませんか!」

「俺はあんなに手を抜いたのに!!」

「俺としては良く受かったと思ってるんだが・・・それと八千、お前はまじめにやれ」

そんな言い合いといふかわがままを言う2人をなだめるもう一人の家族、一応分類としては義弟になるのかな？を私は微笑みながら眺めている。決して巻き込まれたいくないわけでは無いの。

そんな今の私の愛すべき家族達を眺めながらこれからの生活に胸が高鳴るのは仕方ないと思う。

長く戦いばかりの生活をしてきた私には向こうの世界で聞いたあの子達の話が輝いて聞こえていた。うえーいしてじゅーしーぽーりーいえいとか。おつきな桜の木に願い事を書かなくてももらったりとか。世界を大いに盛り上げる部活とか。わくわくが止まらないよ。

そんな話に聞いた生活がこれから待ってるのだ。

若干聞いてた話と年代も違えば文明やらなんやらに違和感があるが、きつと気のせいだと思う。とにかく気分が高揚しているのだ。

そんな事をぼんやり考えているとなにやら視線を感じた。うん？

「お姉さま!?!聞いていますか!?!」

「シズ姉!?!聞いているのかよ?」

「シズ、俺には無理だ、何とかしてくれ」

振り向いてみると三者三葉の視線が私を貫いていた。ついにこっちにまで矛先が来

てしまった・・・。

まずは私の可愛らしい、とても可愛らしい義妹に視線を向ける。

向こうの世界でも見ないくらいに可憐な容姿に、透き通るような肌、黒く艶やかな腰まで伸びるまっすぐな髪を持つ絶世の美少女の深雪。そんな深雪が頬を膨らませている姿は本当に可愛い。

次にその隣で同じくこちらに視線を向けるのは、私と同じくこちらの世界に迷いついたと思われる義弟。見方によっては整っているようにも見える容姿に可愛らしいアホ毛が生えた少年。記憶を失ってしまったているせいか目が濁ってしまったているが、とても心優しいハチ。こちらもジトつとした視線を向けていて可愛い。

そして、その二人をさっきまでなだめてたのが便宜上義弟としている達也だ。流れ着いた私とハチとは違い深雪とは真正正銘の兄妹で、入試の時にはとてもお世話になった私の自慢の義弟である。やれやれとしているが、とても頼りになる義弟だ。

そんな三人の視線にしつかりと領いてから、私は深雪とハチの頭をそつと撫でる。嬉しそうに眼を細める2人につこりと微笑みながら語り掛ける。

「2人ともすごいね、私の自慢の2人だよ。私なんか達也に教えてもらって必死になつてなんとか合格できたくらいなのに。私のせいで全力が出せないのに一科生に入るハチもすごいし、総代になる深雪もすごいよ。それに比べてダメダメなお姉ちゃんでごめ

んね?」

「そんな!!」

私の言葉に慌て始める2人。そこを好機と見たのかさらに達也が深雪の頬に手を添えながら語り掛ける。

「俺の代わりに怒ってくれるから、俺はいつも救われている。お前が俺の事を考えてくれるように、俺もお前の事を思っているんだ」

「そんな、お兄様……想っているだなんて……」

頬を染めながらクネクネしている深雪と、そんな深雪を見てあれ?という顔をする達也。あつちはまだ大丈夫かな?

そして私はもう一人の義弟であるハチにもう一度微笑みかける。

しゅんとした気持ちを代弁するかのようにアホ毛もうなだれている。もう、可愛いなあ……。

「私のせいでごめんね?」

「俺こそすまん」

しっかりと反省しているハチにいいいいいいこしてあげる。

シズ先生時代に磨かれた私のいいいいこは評判よかつたんだから。

そんな先生時代の事を考えながら、少し頬を染めながら大人しく撫でられているハチ

を見ているとおかしなことに気づいた。

「あれ？ハチ、制服どうしたの？」

「ん？」

「そういえば……」

私が聞くと、達也と深雪もハチの制服を見ると、その肩にあるはずのものが無くなっていたのだ。

「ん？ああ、エンブレムか……はがした。姉さんと一緒に良いからな、おそろだぞ？」
なぜか自慢げに肩の校章があるべき部分を私に見せてくる。これがドヤ顔ってやっだね……ケンヤが良くやってたなあ……。

そんなハチにズルいです……とうらやましげな視線を向ける深雪とため息をつく達也。ううーん、これは……。

「ああ、大丈夫だ、ちゃんとクラスに入る時はつける、でも姉さんと居るのには邪魔だろ？まあ、優等生の妹様には無理だろうがな」

私達の視線に気づいたのか、そう続けるハチ。すごく自慢げなドヤ顔だ。そして深雪はすごい悔しそうな顔をしているので私は今度は深雪の頭を撫でてあげる。お姉さまつと可愛らしく抱き付いてくる深雪をよしよししてあげる。私の胸に顔を埋めながら甘えてくる深雪は本当に可愛い。可愛いは正義だってユウキも言ってたっけ。その通り

だと今ならわかるよ。

「もう・・・でも、私のせいだもんね、ありがとね？ハチ」

そんなやり取りをしていると深雪はリハーサルの為に講堂に入っていた。気のせいか顔がツヤツヤしていた気がする。まあでも気合が入ったみたいだから良かった。頑張つてね、深雪。

そう愛しの可愛い可愛い義妹を応援しながら見送る私達。でも、入学式はまだまだ先なんだよね・・・。

「さて、これからどうしようか？」

「そうだな・・・」

どうしよう？と愛する義弟達に苦笑しながら問いかけると、やはり同じような苦笑で返された。さて、本当にどうしようかな？

それからしばらく、達也、私、ハチの順に長椅子に座りながら時間を過ごしていた。達也はピコピコ（ハイテクすごい）をもって何か調べものをして、ハチは達也とは反対隣で紙媒体の本を読んでいた。

そんな2人の間で私はひたすらニコニコしている。たまに2人に話しかけたりしながら過ごすことしばらく。

—— ねえ、あれ、ウイードじゃない？

—— 所詮スペアなのに・・・

そんな声が聞こえて来た。

ういード・・・たしか二科生の事をさすハイカラな呼び方だ。一科生はぶるーむ？と言うらしい、ハイカラだ・・・。

そんな感動している私とは違って隣の達也とハチはちよつとムツとしていた。

しようがないなあ・・・と思いつながら2人をヨシヨシしてあげる。

そういうえば、あまりいい意味ではないんだっけ？ かつこいい言い方なんだけど、別に二科生になった事なんて気にしてないのになあ・・・。と苦笑してしまうのは仕方が無いと思わないかな？

それからしばらく時間を過ごし、ようやく入学式の時間になった。

私とハチ、達也は三人そろって講堂に入る。ハチはまだ一科生に納得していないようだが、校章を外したままだ。

講堂に入る前にこの学校の生徒会長七草さんと話したが、そこらへんは割愛しておく。

私と達也とハチの名前を聞いてそれぞれ「ああ、あの・・・」という反応をしてきたが、気にしない。入試の時に機械を壊してしまった事とか全く気にしてない。簡単に壊れたり爆発しちゃうピコピコがいけないの。

達也は褒められて、私はちよつとあれな感じで見られて、なぜかハチも謎の生命体を見るような目で見られたが、気にしない。

・・・ダメなおねえちゃんでごめんね？シズ先生時代が懐かしいやら何を教えていたんだと恥ずかしいやらだよ・・・グスン。

言い訳じゃないけど、はいてくとか、しーえーでいーとか、触ったら壊れちゃうようなピコピコは私がいいた時代には無かったし、向こうの世界にもなかったもの。魔法もピコピコ使って行使するようなものでもなかったし。

燃やすか爆発させるか、剣にまとわせるだけだったし。だからピコピコがいけない

の。

そんな感じで心の中で言い訳をしている間もハチと達也は座席を探していたようだ。うう・・・本当にダメなお姉ちゃんでごめん・・・。

「はっ、わっかりやす」

「最も差別意識が強いのは、受けている者か・・・」

はんつと鼻を鳴らすハチとかっこいい事を言う達也。

言われて座席を見るとなるほど、と思う。前が一科生、後ろが二科生かあ・・・いや、ここは私もおしゃれにぶるーむとういーどつて言うべきかな？

「まあまあ。あ、あそこ空いてるね、座ろうか」

一番後ろの席はまだだいたいぶ開いていたので私達は並んで座った。

ちよつと舞台から遠いけど、私達なら問題なく深雪が見れるし、深雪も問題なく見つけてくれるだろう。私達の兄妹愛の前ではこの程度の距離なんてあってないようなもの。

そんな事をふふーん！と考えているとすぐ近くに人の気配がした。あれ？とそちらを見るのと、声が掛けられたのは同時だった。

「あの、隣は空いてますか？」

「ふひゃっ!?!」

「あ、はい、大丈夫ですよ、どうぞ」

とても可愛らしく、礼儀正しい眼鏡の少女が声を掛けてきたことで一番近くのハチが慌ててしまったので私が代わりに応えてあげる。よしよし。びっくりしたね？

でも、あんまり胸ばかり見るのはよくないぞ？とよしよしした後ちよつとだけツネっしておく。

その後、とても可愛らしく礼儀正しい少女、柴田美月さんとこちらもとても可愛らしいどこか猫を思わせるような、活発な印象を受ける少女、千葉エリカさんと自己紹介をした。

昔の日本にはこんな明るい赤の髪をした人はいなかったと思うんだけど？可愛いけど……。

「ふうん、達也君にハチ君、シズさんね、よろしく〜」

こちらこそよろしくね？と恥ずかしがりやのハチと、静かにたたずむ達也の代わりに微笑みながら応える。

ダメお姉ちゃんんの頑張りどころだね。頼りになるところをアピールだ！フンス！と気合を入れる。

その後美月ちゃんとエリカちゃんとの会話は入学式が始まるまでそれはもう盛り上がったのだった。

シズ、一日目を終える。

とても・・・とても長い入学式が終わった。

これが噂の長い、なが〜い眠りを誘うありがたいお話つてやつなんだね。むこうで偉い貴族様のお話を聞いた時の事を思い出したよ・・・あれは本当に辛い時間だった。

それでも、深雪のお話はとても素晴らしかった。やつぱり自慢の義妹だ。

明日から深雪の周りにはぎやかになりそうだね。

：良く考えたらいつもの事だったよ。

隣の達也も当然だと言わんばかりの表情だ。うんうん。

達也と反対の隣に座るハチは・・・ぐっすりと眠っていた。ああ・・・後で深雪に怒られちゃうよ？

昨日も遅くまで作業していたせいか寝不足だったらしい私の義弟君は式が始まる頃には寝てしまっていた。

ハチの隣に座っていた美月さんにもたれかかりそうだったので、私の方に寄せて、今は肩に頭を置いてスピースピーと可愛らしく寝ている。

でも、もう入学式も終わったし、そろそろ移動しないと、気持ち良さそうに寝ている

けど起こさないかね。

「もう、ハチ？そろそろ起きて？」

ゆさゆさと優しくハチを揺さぶる。「ふふ、可愛らしい寝顔ですね？」「ほんとだ」という美月さんとエリカさんの声に、眠りの義弟が少しずつ覚醒していた。

「うう……ふあ……」

「もう、さつき深雪がこつち見てたよ？あとで謝ってね？」

うえ、まじか。とげんなりとしたハチ。

シズねえ、説得手伝つてくれ、という可愛い義弟の頼みにもう、仕方がないなあど苦笑する。

「起きたか、もう入学式はおわったぞ」

「ふああ……そうか……」

「もう、周りの人はでていっちゃったよ？」

そんな私たちのやりとりで美月さんがふふふ、と口に手を当て上品に可愛らしく微笑んだ。その隣ではエリカさんもニヤニヤしている。

「おはようございます、よく寝てましたね」

「そうね、お寝坊さんも起きたみたいだし。そろそろ行きましょ？」

入学式前に話しただけでもいい子達だと思っていたが、わざわざ一緒に行くために

まっついてくれた二人。折角仲良くなれたから一緒に行こうと言ってくれた。とてもとてもいい子達だ。

そんな二人にハチは少し頬を赤くしながら「すまん」と謝罪した、さては照れてるね？この義弟君は。

その後、移動しながら二人と話しているとエリカさんは剣道？剣術が得意らしい。私とハチが剣を使うと聞いてとても目を輝かせていた。今度試合しよ？やだよ、と話してるハチとエリカさん、仲良くなれそうで何よりだよ。

そんな話をしながらあいでいかーど？をもらう列にならんだ。けど、あ、あれは……！

「ぴ、ピコピコ……!!」

あ、あぶないあぶない……私一人だったら難しかったけど、ここにはハチも達也もいる。もうなにも怖くないよ。

……あ、これは言うのと負けが確定するから言っちゃダメってユウキに言われてたんだ。えと、これでかつる！だったね？たぶん？

達也とハチに手伝ってもらってなんとかあいでいかーどを発行した。あれでしょ？冒険者かーどみたいなものだよな？

そんなことを考えながら横を見ると、達也とハチだけじゃなくて、エリカさんと美月

さんもささきさつと発行していた。くつ、これがじえねれーしょんぎやつぷなんだね、若者しゅごい。

ユウキにいろいろ教えてもらっていたのを思い出さなきゃ。これからは若者言葉を使つて世代差をつめていこう・・・(使命感)わかりみが深くて、おけまるすいさん？とか、ろじかるしんきんぐで論理的に考えるんだ。

「ふう・・・なんとかピコピコで発行できたよ・・・！」

そして、これは進歩といつても過言では無いかもしれない。ほとんど達也とハチにやつてもらったけど、自分でできるところとか指紋認証？とか、なんかで私の操作が必要だったみたいだし、できるところは頑張ったよ。私すごい、いや、しゅごおーい。

「ああ、少し画面にヒビが入っただけで爆発しないですんだし、やったなシズ姉」

「そうだな、なんとかなつてよかったよ」

ぴ、ぴこぴこ？ばくはつ??とエリカさん達が??している。現代人のこの子達にはわからないかも知れど、私は見た目ほど若くないからね、仕方ない、仕方ないんだ・・・。そんな私に気を使つてくれたのか、エリカさんが声を明るくしながら問いかけて来た。

「ところで、みんなは何組？」

「E組だ」

「私もです」

「私も、よろしくね、達也、美月さん」

達也、美月さん、私の答えにエリカさんはやたつ！同じクラスだ！と笑顔になる。飛び跳ねて喜ぶ姿にケンヤ達を思い出す。今の私ではもうどうにもできないけど、思いは託した。だから、スライムさんがケンヤ達の事なんとかしてくれたと信じてる。

そんな事を考えていると、エリカさんが今度はハチに問いかけた。

「それで、ハチ君は？」

「A組だ」

「えっ!？」

「えー組だ」

そうじゃないっ！とぶんすこ、いや、たしか現代風に言うならちよべりば？いや、たしかユウキが言うには今の時代は激おこぶんぷんどりーむって言うんだっただかな？そんな感じのエリカさん。元気な子だなあ……。

「制服、エンブレムないじゃない!!」

「はがした」

「なんでっ!？」

「姉さんとおそろがいいからだな」

「そんなことっ?!?!」

「大事なことだぞ」と言うハチに、なんなの!?!と頭を抱えはじめたエリカさんをヨシヨシしておく。うちの弟がごめんねー?

「アリガト、シズさん・・・」

「ふふ、でも、お姉さんとおそろいにするためにエンブレムをはがすなんて、本当は褒められた事じゃないでしょうが、うらやましいですね」

ジト目でハチを睨んでいるエリカさんと、微笑んでいる美月さんにハチは自慢げな顔で答えた。

「まあな」

「褒めてんじやないわよ、美月・・・」とうなるエリカさんをヨシヨシしていると、今度は。パタパタと可愛らしい足音が聞こえて来た。この音は、深雪かな?

さつきまでいろんな人に囲まれてた人気者の、私達の自慢のお姫様、深雪が駆け寄って来ていた。

「お兄様っ!お姉さまっ!」

「深雪」

とても嬉しそうにこちらに微笑みながら駆け寄ってくる深雪に私と達也が同時に応える。

私達と目があつた瞬間深雪の表情が晴れやかになり、顔いっぱい喜びを爆発させながら私に抱き付いて来た。ヨシヨシ、よく頑張つたね、えらいよ、よくよしよし!

全力で深雪を甘やかしていると、隣で「あれ?俺は?」とハチがつぶやいている。大丈夫、私はちゃんと見てるからね?

いろんな人に囲まれてたせいかな、少しだけ、それこそ、私達にしかわからないくらいの微細なものだが、少し不機嫌気味というか、疲れ気味な深雪だったが、なぜか後ろに生徒会長さん連れだつていた。

思わず達也もはやかつたね?と疑問形の発音になつていた。私はヨシヨシし続けているけど。深雪を離そうとすると泣きそうになるからしようがないんだよ。

「こんにちは、また会いましたね」と人懐っこい笑顔を浮かべる生徒会長さんにこんにちは、と返す私。

ハチと達也は会釈していた。微妙な空気なのか、どうしようかな?と考えていると。「ところで、お兄様、お姉さま?その方たちは?」

とまさかの生徒会長さんと、これまでの抱き付きヨシヨシを鮮やかに回避してなぜかこちらに切り込んできていた。え、こつちなのか!?

驚いていたのは私だけかな?と思つたけど、達也がエリカさんと美月さんを紹介するときに少し間があつたから、達也もそれなりに動揺してるみたい。

「ねえ、俺は？」と悲しそうにしているハチの事は視界に入らないらしい深雪は、なぜか温度を感じない笑顔で「早速クラスメイトとデートですか？」と視線の矛先を達也に向ける。あ、あれ？私も深雪の意識から抜けたのかな？

どうもいろいろな人に囲まれていたせいで、深雪の機嫌が良くないみたい。

達也がクラスメイトだよ、失礼だよみたいな感じで話したり、エリカさん達と自己紹介をしている間、私とハチ、生徒会長さんは微妙な空気のなか、苦笑し続けていた。

いつの間にかすつかり打ち解けたころ合いをみて、今度は達也が切り込んだ。

「深雪。生徒会の方々の要件は済んだのか？」

と質問すると、生徒会長さんは「大丈夫、また今度ねー」みたいな感じで去って言った。ホントはもっと上品な感じだったけど。

一緒にいた男の子にすごく睨まれてたけど、ホントにダイジョブだったのかな？それと、私とハチはいつまで空気してればいい??

その後、なんだかんだでホームルームに参加する空気じゃなくなつたから、みんなの入学祝いという事で、エリカさんが調べてたおしやれな喫茶店でおしやべりをしながらおいしいケーキに舌鼓をうった。

ああ、これがユウキの言つてたがーるすとーくなのかな、私は見た目ほど若くない、というかおばあちゃんみたいなものだからこの勢いでぶらんの話をするのはつくいていくのが大変だよ。

達也とハチはさりげなく空気に徹して2人で難しい話をしてるし・・・あれ？なんだか私疎外感を感じるような・・・。

達也とハチは2人でなにか難しい話をしてるし、機械の話とかはさっぱりだ。あつちにはまざれないなあ…。

今度は深雪達の方をみると、きやつきやうふふと話してる、うん、あつちも無理。たぶん服の話とかしてると思うけど、よくわかんないや…。

・・・あれ？どうしよう!?!なんか私だけ仲間外れなの!?

と、とりあえずニコニコしながらうなずいとこうかな。え、えへへ…。

「ただいま」

「ただいま戻りました」

悲しい時間を過ごすことしばらく、いや、すぐに深雪が私が会話についていけないのに気づいてくれたからそんなでもなかったけど。

それからエリカさん達と解散して私達は帰って来た。

達也に続いて深雪がドアをくぐる。それから二人は振り返って私とハチを出迎えてくれる。

「おかえり、シズ、ハチ」

「おかえりなさいませ、お姉さま、ハチ」

これが今の私の、私達の日常。私には無縁だと思っていた家族の温かさだ。だから私は、私達は笑顔で答える。

「ただいま」

ハチ、Aクラスに登校する

高校生二日目の朝が始まった。

「いくぜ」

「いっよ」

朝も朝、早朝と呼べる時間帯から俺と姉さんは自宅の地下訓練場にて木刀を持って向かい合う。達也と妹様はハゲ坊主のとこだ。

流派というか、戦闘スタイルが違う俺と姉さんは達也と違ってここで訓練していた。姉さんと短い言葉の応酬をし、今日の稽古が始まる。

ふっ！という短い呼気と共に俺は姉さんとの距離を詰める。

上段からの振り下ろし、は回避されるがそこから軌道を跳ね上げるように変化させ左斜め上へつなげる。バックステップで回避されるが更に距離を詰め水平方向へと斬撃をつなげていくがそれらも全て姉さんに回避され、捌かれていく。

「まだまだあー」

連鶴に果て無し！ここからですよ！と気合をいれる。それでも余裕の表情で回避、逸らしていく姉さん。果てしなく当たる気がしないぜ。

さらに一度の突きで2発同時に突きを繰り出すという、人間やめ始めてる感ある攻撃をするが、これも捌かれてしまう。んなアホなと思うが、そこから再度上下左右の連撃、更には体術も組み合わせ蹴り技も繰り出していくがこれまた軽やかなステップで回避され、捌かれていく。

「うん、だいぶ良くなつて来たね、ハチ」

こちらが必死に連撃を繰り出している中でまだまだ余裕の表情で俺の連撃をさばいていく姉さんとの差に気が遠くなりそうになるが、ギリつと歯を食いしばり、一旦距離を離す。

「これならっ！」

間合いから外れたところで次の技を仕掛ける。訓練用の木刀を専用の鞘に納め、再度呼吸を吐く。姉さんは俺がやろうとしてる技を知ってる為、あえて俺の技を待ち構えている。その余裕、吹き飛ばしてやる！

再度ふっ！という呼吸と共に鞘から姉さんに向かって3つの斬撃を飛ばす。人間やめ始めてる系の技。パート2だ。七閃!!まだ3本しか出せんけど!!どうじゃー!!

「うーん、だいぶ良くなつて来たけど、3つじゃまだまだかな」

と苦笑しながら俺の鞘から伸びる3つの斬撃、その元たるワイヤーを水平方向の斬撃ひとつですべて切り裂いてしまった。理不尽すぎる！

一太刀で行ったその技に、自分でも最近人間やめ始めてる気がしてきたが、姉さんの技能は完全にバグってると思いい知らされる。

それでも、姉さんや達也に負けたくない俺は、そこからさらに斬撃を飛ばすと共に鞘に木刀を収めた状態で姉さんの足元まで超速で踏み込んだ。これぞ縮地だ!!パート3
!!

「お、今のはいい踏み込みだね」

と微笑みながら斬撃を先ほどと同じようにさくつと処理して俺に対応しようと迎撃態勢を整えた姉さん。反応速度が明らかにおかしいが、この間合い、このタイミングなら!

「燕返し!!」

燕を切ろうとして斬撃をいつこふやしたとかいう意味不明な事を言っていた知り合いの技を繰り出す。パート4!!

取った!と思ったが、次の瞬間には俺は上空、というか、天井を見上げていた。

.....あれ.....?

「うん、だいぶ良くなって来たね。コジローさん達の技も大分出来るようになってきた

し。合格かな」

「……姉さんにはまだまだみただけだな」

ふふん、まだまだ負けないよ？と両手を腰に当てドヤ顔をして胸を張る姉さん。めちゃくちゃかわいが姉さんの立派なお胸が強調されて思わず頬が赤くなってしまう。

そんな赤くなつた頬をごまかすように俺は姉さんに疑問をぶつける。

「ぶつちやけ、姉さんがおかしいと思うんだが？2連突きとかワイヤーとか燕返しとかさすがに達也もあのハゲ坊主も魔法無しだと無傷では防げなかつたんだぞ？」

「うーん、とはいっても、一回の斬撃で2、3回斬られるのとかそんなに珍しくないでしょ？」

と、こんな事を正気で言ってる姉さん。

魔法込みならいくらでもいるけど姉さんは純粋な体術でファンタジーな事をやってのけているのだ。正直意味がわからない。

まあ、燕返しを教えてくれた人も魔法抜きでファンタジーしてたけど。ついでにそれを俺もほぼ魔法抜きで再現でき初めているので片足がファンタジーに突入しているとも考えられる。いや、まだつま先くらいか。

「いや、確かに姉さんの基準ではそうかもだが……」

「それより、そろそろ達也達も帰ってくるでしょ、学校に行く準備しようか」

姉さんのファンタジーっぷりにいまだ納得のいかない俺だが、これから行く学校がとても楽しみと全身でアピールしてくる姉さんに苦笑し、まあどうでもいいかという気分になってしまおう。

そんな感じでウムムつてると、達也達が戻って来た気配がした。

「達也と深雪が戻って来たみたいだね、学校に行こうか」

さて、今日もトラブルの香りがプンプンするが、一日、がんばるかなあ……。

ああー早く学校終わらせてガンブラ作りたいなあー……ナアー……。

それから数刻、俺と姉さん、達也に妹様をのせたキャビネットは前に俺と達也が座り、うしろに姉さんと妹様を乗せ順調に学校に向かっていた。

妹様の隣で姉さんが窓に両手と顔をくつつけながら「みらいざらく♪」と言っているが、これは毎度の事なのでスルーする。姉さんは機械にはめっぽう弱いので、機械的なものに大げさに反応する癖があるのだ。かわいい。

俺がやったら気持ち悪いと妹様から絶対零度の視線を受ける事間違いなしだが、今は微笑ましいものを見るような目で姉さんを見ている。正直気持ちは痛いほどわかる。

わかりみが深いわあー。

「それで、あのハゲ坊主、まさかうちの姫様に粗相をしてないよな？」

「ああ、若干セクハラ気味ではあったがな」

車中では今朝九重寺に行っていた達也と妹様の話を聞いていた。俺の後ろで妹様が怖かったです、お姉さま！と言いながら姉さんに抱き付いてヨシヨシしてもらっていた。うちの甘えん坊なお姫さまに若干の嫉妬心が芽生えてしまう。グヌヌ・・・。

まあ、それはそれとして、うちの姫様に手を出そうとしたのか・・・。

「とりあえず、今度の訓練は俺も行くわ、あのハゲぶつ切つてやる」

「やめとけ」

とそんな感じの話をしながら学校に向かった。

途中で妹様が実家から電話がうんぬんとか言い出して空気が氷りつきかけたけど、おむね順調だった。

姉さんに隣に座ってもらって良かった。もし、俺が隣だったら体の半分は氷漬けになつてた自信がある。

学校に着き、姉さんを達也に託した俺と妹様はそのままA組へと向かう。

勿論姉さんの事をしっかりと頼むぞと100回くらい達也にお願いしたので大丈夫だと思う。

その代わり、俺も達也にすげえ眼力で深雪を頼むぞと言われたのである意味ウインウイ的な関係と言えるかもしれん。

ちなみに休み時間毎に姉さんに会いに行く宣言をしたら達也と妹様にすげえ怒られた。ちゃんとワツペンも外すぞ?と言ったが却下された。なぜだ・・・。

その後なんだかんだと説得して何とか昼に合流する話をついたので、とりあえず今日のところは我慢する事にした。今日のところはな!

よく考えればA組とE組は校舎違うレベルで距離があるのでさすがに移動時間がかかるから仕方が無いと思うが、早いとこ素早く、迅速にE組にたどり着けるルートを探る必要があるな。と決意を燃やす。

「ハチ、そろそろワツペンをつけなさい」

「ん?おお、そうか、そうだな」

いまだに俺と姉さん、達也がおそろでワツペン無しで居るのが羨ましいのか妹様がちよつと不満です顔で注意してくる。まじめなコイツには絶対に不可能な事だろうな。フフン。

まあこれ以上煽ると妹様から冷気が飛んでくるのでやめとくが。達也も姉さんもないのにそんな事するか自殺行為だ。

そんな事を考えながらペタリペタリとワツペンを取り付けた俺は深雪と共にA組の教室に入る。

俺と妹様が入った瞬間、それまでガヤガヤと騒がしかった教室が瞬間静寂に包まれた。まあ、正確には妹様が入った、が正しいのだろうが。

教室にいるすべてのクラスメイト達の視線が妹様にそそがれ、あるものは頬を染め、またある者は100年の恋に目覚めたような目を妹様に向けている。

まあなあ・・・それなりに見慣れた俺でもいまだに妹様に見惚れる事があるくらいこの妹様の美貌は神聖すら帯びていると思う。

そして、周りのこのような反応も、もはや妹様にとっては慣れたもの。いつも通りに綺麗な所作でおはようございますとお辞儀をする。

神がかった美貌と、洗練された所作にまた数人の男子共がノックアウトされたが、それすらもいつもの事。俺と妹様はそれぞれの座席を確認して座った。

途中で妹様が茶髪の子に微笑みかけてノックアウトしたりして、アイツは今日一日でどんだけ落とす気なのだろうか？と心配になってしまふ。いや、本人にはそんな気が無いのはわかっているのだが。

妹様と俺が座って少ししてようやく停止した時間が動き出した。

いざ！という感じで、いやなんか友達に押されてかな？ノックアウトされた茶髪の子が妹様に声かけようとしてコケた。

しかしそこは流石の妹様だ。うまい事フォローしてなんか小柄な黒髪の子と茶髪の子とも仲良くなってる。流石だ……。ちなみに、俺のそこには誰もこない、認識されてもない。これもまたいつも通り。流石だ……。グス。

そこからさらに数人の勇者たちが妹様に群がりだした。これもまたいつもの通り。

お熱なクラスメイト達の相手をし始める妹様を横目で見守りつつ、IDカードをセツトし、履修登録をする。

ポチポチととな。これ、姉さんの前でやるとすごい喜んでくれるんだけどな、誰も見てない、当然だけでもさ。

そんな感じで履修登録をサクッと終わらせた頃には先生が入って来た。さて、なんかいろいろ言ってるが、要はA組は優秀な成績を収めた人で構成されているとか抜かしやがった。んなあほな……。

おかしい、絶対におかしい……。魔法特性というか、試験の据え置き型CADの機械を姉さんはうまく扱えないため、どう転んでも一科にはなれないことがわかり切っていた。俺の魔法特性的にもズルをしないと一科にはなれないはずだった。

だから俺は姉さんと一緒に二科生になれるように、しっかりと試験管の先生に聞いて、二科になる為の試技ラインを確認し、それにぴったりとアジャストしたはずなのだ。筆記試験もきっちり全て50点にしてある。全てだ。

そんな感じできっちり二科になれるように完璧にやったはずなのに、なぜ俺は特別優秀とかいうA組に居るのだろうか？今年はいくら不作な年だったのか？一科の合格ラインに到達したのがあまりにも少なくして仕方なく俺が入ったのか？それにしてもA組とか今年がどんだけ不作だったんだよ……。

テストの答え合わせ的には達也と妹様はかなり高得点だった、俺は全部50点。実技も予想通りで、妹様がぶつちぎり、達也と姉さんはギリギリ合格ライン、俺も二科の合格ラインでやった。それで俺がA組っておかしいでしょ……。

そんな事を考えている間に先生はどっかに行ってしまった。

しまった、突っ込んでおけば良かったかもしれない、いや、今更そんな事したら妹様から氷像にされてしまうから今更やらんが：仕方ないね、仕方ない。うん。

もう今日は絶対ガンプラ作るわ。もう決めた。(現実逃避)

ハチ、Aクラスにつっこむ。

さて、そういう考えていると、次はなにやら見学の時間らしい。

一応不埒な輩が妹様に近づかないように深雪についていくつもりではあるが……。どうにも不快な言葉が聞こえてくる。

曰く、最初から放置で二科は可哀そう。

曰く、大した実力もなく、魔法師になろうだなんて図々しい。

曰く、補欠と一緒に工作なんて行つてられない。

アホか。と言いたい。

そも、最初から放置つて、最高じゃないですか。監視員いないつて事でしょ？最高ジャマイカ。

次に大した実力もつて、いや、お前ら例年の二科程度の実力（勘違い）ですけど？前らも大した実力ないですけどwwww？草生えまくリングだわ。

ほんで、最後の、工作バカにすんじゃねえ。工作大好きだつーの。

と、さらつと聞いただけでこれだ。入学式にバカにできていた先輩っぽいのもあれだったが、一科とか二科とかくだらない事で選ばれた人間アピールつて痛々しすぎない

か？そんな事思ってるの俺と妹様だけ？A組の総意なのん？

今も深雪に群がったえらばれしエリート（笑）がそんな感じの事を言っている。

おいおい、その妹様の兄上は二科だぞ？こいつらバカすぎない？なんで妹様と近づきたいのにその兄妹バカにしてんの？？わざわざ攻略難度上げに行くスタイル？？

とかそんな事思っていたら茶髪の子が上手い事遮って妹様を連れ出した。スバラシイ！教室が雪原になる前に救出するとは、ガーディアンになれるよ！いや、俺と姉さんが職を失うからなられても困るけど。

そんな事を考えていると、ぞろぞろと引き連れて妹様達が教室を出ていく。ぞろぞろ、ぞろぞろ・・・って全員かい！！予想はしてたが、流石妹様と言うべきか、あほすぎるA組みのエリート（笑）と言うべきか。

それから、先生の解説付きでなにやら話してる。うん、タメニナルナー・・・やっべ、姉さんダイジョブかな・・・。

達也居るからダイジョブだね？こんなん絶対姉さんわからんぞ？

そんな事を考えてると、先生がなんかクイズ出してきた。おい、それ中学とかじゃやらん範囲やぞ、この例年なら二科生レベルのクラスメイト（勘違い）にわかる訳ないやろが、とツツコミたい。

おいおいと先生に内心でつつこみ入れてたら妹様にかっこ良いところを見せたがっ

たモブっぽい人が挙手した：：とか思ってたら名前は森崎と言うらしい、これモブ崎であだ名決定じゃないですかやだー。

そのモブ崎がドヤ顔で間違えてた。流石エリート（笑）。

先生も今年のエリートが例年の二科レベル（絶賛勘違い継続中）だったのを思い出したのか、妹様に質問しなおしている。

当然のように答える妹様に沸くオーディエンス達。もうこいつら妹様のやることならなんでも良いんじゃないかな・・・？

後で妹様に群がるやからが増えそうだな・・・つかこの後達也と姉さんと合流するつもりなんだけど？トラブルの予感バリバリだわ。こいつら絶対噛みついてくでしょ・・・完全にDQNだもんな、思考が。

ちよいちよい妹様から視線やらが飛んでくるが、がんばってくれと念じるだけにして
いる。

あんなDQN連中の中に飛び込んでいく度胸はないのだ。

不埒な輩が居れば話は別だが、幸い茶髪の子と小柄な黒髪の子は妹様のOKっぽいので彼女達に任せておく。

そんな感じで勘違いエリート達のアホな話と先生の解説を聞いているうちに昼になった。さて・・・妹様には悪いが先に行くこと「ハチ」・・・ハイ。

「ああ、良かった、やっとここちらを向いたわね」

すごい微笑んで両手を胸の前に合わせて良かった、みたいな雰囲気と言ってるが、副音声でオイコラ何無視してたんじゃワレ。みたいなのが聞こえる。気のせいかな？

「お昼に行きますよ」

ついでにこいつらなんとかしろ、みたいな副音声も聞こえるが、そこは華麗にスルーしてああ。とだけ答える。

俺の返事にそれまで群がってた連中が俺に注目するが、妹様が兄妹だ、と軽〜く説明して終わった。

ちよいちよい似てねえな、みたいなことが聞こえるが、血がつながってないからね！とかいちいち説明するのもメントイので放置。

それでは行きましょう！とかモブ崎が仕切りだして、なんだコイツって妹様の副音声と俺の心の声がかぶったのは当然の事かもしれない。やべえよエリート（笑）。

まあ、ね？当然のように食堂でもめるわけでして、ええ。

予想通りDQNっぷりを盛大に発揮したエリート（笑）達。いつてることが意味わからな過ぎて途中からちよつと面白くなって来たじゃねえか。

なんだ、ただの補欠だから席を譲るのが当然だって、だからの使い方間違いまくって

んじやねえか。流石オール50点の俺ですらA組に入るだけある、脳みそが仕事放棄してる感がばない。

しかもその後も一科と二科のけじめはつけないと。とかなんとか、嘘だろ？一科と二科の壁は兄妹が一緒にいる事よりも優先されるらしい。んな訳あるか！こいつらの発想がお花畑すぎて次は何言ってくれんのかちよつと楽しみになって来たじゃねえか。

さくつと達也と姉さん達が席を立つて離れていく中、俺はさりげなくワツペンを外してその中に入っていく。乗るしかない、このビックウエーブに！

あんな不機嫌な妹様と一緒に冷凍食品を食べる趣味は無いのだ。

「あれ？ハチ君?？」

「ようつ」

さりげなくついて来た俺に気づいた千葉に返事をしつつ、姉さんと達也と合流する。とりあえず新顔が居たので自己紹介をしておく。やつはろー。

西城と自己紹介をした後は購買で適当に食べものを買って中庭でお昼にすることに。まあね、みんな途中で席を立ったからね。あんなDQN連中にかまっていたらね、メシマズ案件まったなしだもんね。

んで、姉さんの左右を俺と達也で囲み、更に千葉、柴田、西城と円ののように座り、改めて昼食をとる。

「もう、なんなのよ、あいつら!!」

「まったくだぜ!」

とプリンプンの千葉。西城もご立腹のようだ。ほんとそれな、でもずっと見てるとだんだん面白くなってくるよ? あいつらどんだんアホな発言してくるから次は何言ってくるのかちよつと楽しみだもん。まあ一緒に飯は食いたくないけど。

「同じ新入生なのに・・・」

と悲しそうな表情の柴田。ちなみに俺と達也は予想してたことなので無反応。姉さんも若気の至りだねえ〜とのほほんとしている。プリンスコな千葉はプリンプンしながらサンドウィッチをハムハムしている。ちよつと可愛いじゃねえか、柴田も小さくハムハムしていて、こちらもなかなか可愛らしい。

あれ? なんかこいつらのが優等生くね?

あれやろ? 魔法師って整った顔してるとつおいんやろ? ぶつちやけ一科にいたモブ崎より西城のがワイルドでイケメンやし、妹様と茶髪の光井、小柄な北山以外のクラスメイト達もぱつとしない(俺含む)のに、こいつらときたらなんだ、ギャルゲでメインやれるじゃねえか。

プリンスコハムハムしてる千葉はどこか勝気な感じで、サバサバしていて話しやすく、それでいて猫のような印象を受ける言動など、とても魅力的な美少女である。

柴田はおとなしそうな見た目とどこかほっとさせるような落ち着いた話し方に純粹そうな目の色をしている。なによりもその母性の塊がすごい。姉さんもかなりのものだが、それ以上である。

こんな魅力的な美少女達に加え、達也と姉さん……は魔法特性でわからんでもないが、西城も脳筋のように見えて頭の回転は悪くなさそうである。むしろこいつら本当に二科なの??

実技二科基準で、筆記もオール50点の俺が一科で、特別優秀（笑）なA組だよ？今年の新生生のレベルがお察しである。

むしろあれか？実技の試験がメインでA組になってるのか？それなら脳筋ばっかでもありえるな……。そも達也程の頭筆記試験の成績でも二科って判断してるこの学校の評価基準の問題なのか？そんな気がしてきたな……。まあそれでも俺がA組なのが納得いかんが……。

そんな事を考えながら昼を過ぎた俺達はその後解散してまた放課後で、となった。俺も姉さん成分を補充したし、了解だ、と頷いておく。

それで、あれでしょ？また妹様をめぐってなんかあるんですよね？わかります。

「いい加減にしてください!! 深雪さんはお兄さんたちと帰ると言ってるでしょう!!」

ほらね？

ハチ、エルイイイトに干渉する

お昼に軽くもめ、午後の専門課程の見学でもめ、ほんでなう、なう。

達也と姉さんと合流して俺と妹様（うしろに大量の付き人）はさて帰ろうかとしたところでエルイイイト（笑）のDQNツぶりが発動してしまった。

そこからあれよあれよという間に口論に。予想どおり過ぎじやないですかー。やだー。

校門前で達也と妹様をかばうように西城、千葉、柴田がエルイイイト（笑）達と口論している。俺と姉さんはその間らへんでおー今度はなに言い出すかなー、とか青春だねーと完全傍観者気分で見戦してた。

ちなみに俺は当たり前のようにワッペンを外して姉さんとおそろいにしてある。妹様と達也がこつちを見ているが、いやこれくらい別にいいでしょ・・・。

「いい加減にしてください!!深雪さんはお兄さん達と帰るって言ってるでしょう!!一緒に帰りたいからくっついてくればいいんです!!」

おお、柴田がすごい強気で正論言ってる・・・さつきまでのおとなしそうな印象からは想像出来なかったぜ、まさかこんな性格だったとは・・・。

そんなある意味感動している俺をよそに、やはりというかなんというか、エリート（笑）達がエクスペリエンスでエキサイティングでハラショーな感じで反論する。

「僕たちは彼女に相談する事があるんだ!!」↓アポイントは？

「そうよ、司波さんには悪いけど、少し時間を貸してもらっただけなんだから!」↓いや、だからアポイントは？悪いと思うならなおさら・・・ね？

「二科生にはわからない話もあるんだ!!」↓いや、お前らそんな優秀じゃないだろ。たぶん去年とかなら二科になってんじゃない??（勘違い継続中）

と、こんな感じだ。当然千葉と西城が自活中にやれよ、とかあらかじめ本人に同意は？とか超正論で論破してる。ねえ、こいつら一科と二科逆じゃね？ホント・・・。

そんな感じで呆れてると俺達の期待の星（笑）モブ崎クンがやれやれって感じで出しゃばって来た!キタ——（。△。）——!!

今度はどんなことを言い出すのか、オラ、わくわくすっぞ!!

「だいたいなんで君達は盾突くんかい?ウィードのくせに……」

いや、盾突いてるんじゃないかって、そっちが意味プな事言うから正論で返してるだけですが……。

と脳内ツツコミしてる俺の隣で姉さんが「ういーど……おしやれな言い方だ……」と感心していた。ちよつと瞳をキラキラさせながら「ういーど……」と発音練習を始め

た姉さんにキョン死しそうになる。

「いいかい？ここは実力主義だ、実力において君達はブルームの僕たちに劣っている、つまり存在自体が劣ってるんだ……」

……あ？

何言ってるんだこのモブ。脳みそ腐ってるのか、あ、あん？隣で姉さんが「ぶるーむ……」と感心してるがそれどころじゃない。

てめえみてえなDQNごときが姉さんといでに達也が劣ってるのかなめた事言いやがって……。

途中まで次はどんな楽しい事言ってくれんのかと楽しみだったのに一瞬で殺意スイツチがオンしちまったよコラ。むこうで妹様からもすげえ冷氣出てんじゃねえかよコラ。

どうやって殺してやろうかと思案していると、右袖をクイクイされる。

「ハチ、ハチ。すつつぶ。それよりちよつとしたケンカなら若い子なんだし良いんだけど、あまり大ごとになりそうだったらお願いね？」

と姉さんにたしなめられつつお願いをされてしまった。

うん、俺がああモブを懲らしめようとしたのがばれてたらしい、なんなら達也も妹

様をなだめつつこっち見てらー・・・。

へいへい、ボコるのは今度にしますよ・・・幸いクラスは一緒だし、いつでも出来るしね、ここは穏便に終わらせるとするかね。

そんな結論をしてる間にいつの間にか柴田の一言をきっかけに何やら魔法を行使しそうな雰囲気になって来た。

おいおい、魔法使う気かよ・・・エルイイイトとはいったい・・・と思うものの、しようがない、ばれないように、こつそり干渉するとしますかね。

そう考えている間もモブ崎がCADを抜いて、西城と千葉に向けようとしていた。

「これが、ブルームの・・・!!」

———
キンツ
———

モブ崎がセリフと共に魔法を繰り出そうとしたが、その途中で澄んだ音がしたかと思ふとモブ崎の特化型CAD、小型拳銃をもしたその銃口がズルリ、とずれて地面に落下した。

「ブルーム・・・の・・・その・・・」

「あー・・・」

「その、なんだ……」

モブ崎を迎撃しようとしていた千葉と西城が振り上げた警棒と拳を持て余している。

「い、いったいなにが……」

ふふん、俺が斬った。気づかれないようにこっそりワイヤーでね!!

魔法を使わず、身体技能だけで、ほぼ予備動作なしでやったからたぶん達也と姉さん以外にはばれてないはず。どうよ、これ超安全な対処やん？

そう自我自賛していた時代もありました。

「くそっ！何しやがる!!」

突然の事態にモブ崎が西城と千葉に向かってキレ始めた。

それはこっちのセリフじゃぼけ！いや、横からCADたたつ斬ったのはゴメンかもだけど、対人で使うのはノーでしょーが。つまり正統防衛成立なのだよ。

まあ、心の中だけで突っ込むだけどね、俺が干渉したとか気づかれないし。

「くそっワイードの分際で！」

「なめないでっ！」

そんな事思ってたらエリート（笑）達が死ぬほどキレた。

しまった、ウエイ勢のチンパンジー並の思考能力の低さを甘く見ていた!!幸いまだCADを構えたのは3人、うち一人は光井であれば止めようとしてるだけのようだ。な

ら実質止めるのは2人——と思っていたが、作戦変更。

アウトレンジから魔法が飛んでくるのが見えたので半ば反射的に魔法をワイヤーでたたつ斬る。

パリンツツ！という音にすぐ近くにいた光井がビックリして魔法をキャンセルさせていた。そして

「やめなさいー！」

と、颯爽と登場した朝に遭遇した七草会長とイケメンな女の先輩が登場。全員やっべーって顔してる。なんなら俺もやっべーって思ってる。つい反射で魔法斬ったけど、あれ絶対光井の魔法キャンセルさせるためだったよね？いらんことしたー！！っべー……。

っべー、やっべーとか焦っている間にいい感じに達也と妹様が生徒会長ともう一人がまさかの風紀委員長で、その二人をなだめてごまかして、なあなあにしていた。さっすがー！！

なんか終始生徒会長と風紀委員長の意識とか視線がバシバシこっちに飛んできていたがガン無視しといた。なんなら俺達関係ないよ？という空気を放ちながら姉さんと一緒に桜を見ていた。キレイダナー。姉さんも綺麗だねー？ってニコニコしている。俺達の空気感はない。

そんなこんなであれよあれよという間に解散の流れに。

エリート（笑）達もなんか達也に言つてたけどどうでもいい。光井と北山がチーム司波に加入して一緒に帰ることになったけど、それもおっけー。

CAD関係の話になったけどこれまたどうでも……おい、西城のあれ、音声認識やんけ……姉さん以外にも使い手がいるとは……と感心していると、千葉に話しかけられた。

「ねえ、ハチ君、さっきのどうやったの？」

「へ？なにが?？」

うそやん？さっきの見たの？姉さんとか達也みたいに人外なの？そんな疑問を持つが、そんなことなかった。

「いや、さつき達也君がハチ君がやったって話してたでしょ……」

え？話してた？と姉さんと達也に視線を向けるとうんうんと頷いてきた。あ、サーセン。

「それで？どうやったの？」

「あー……すげえ細いワイヤーで斬った」

「でも、魔法発動した気配は無かったよ？」

俺の返答に納得のいかないメンツを代表して北山が問いかけてきたが、なるほど。そういうこの技俺も初めて教えてもらった時に人間に出来る訳ねえだろって突っ込んだわ。魔法によるものだと思うのも納得。つまり俺も人外魔境に突入し始めてるらしい。認められないわあ……。

「いや、魔法はあんま使えない、あれは身体技能だ」

「「「え?!?!」」」

まあ!?!?!。そう思うよね。俺もそう思ったもん。

「ちよつと死ぬほど修行させられた結果身についた技だ。居合切りの延長というか、なんとというか……」

「いや、それもすごいけど、なんで一科なのに魔法使えないのよ……身体技能とか言われても納得できないからどっちから突っ込めばいいのよ……」

あ、そっちも? さっきの驚きそっちもなの??

「ああ、魔法はあんままだな運動のが得意だ」

「なんで一科なのよ……」

「ほんとそれな……」

なんか一科になっちまったんだよ、と言いながら今年は相当不作みたいですよ、とも言えたらどんなに楽だろうか。

千葉達や姉さん、達也は学校の基準だとその不作をさらに超える劣等生って事になるもんな、ほんと試験基準間違ってるんだろ……。どう考えてもA組の連中のが問題児ばっかだしよ。

それからあれやこれやと話して歩く俺達。

そこからいつの間にかCADの話に。

「へえ、じゃあ深雪のCADは達也君が、シズさんのはハチ君がメンテしてるんだ？」

「ええ、お兄様にお任せするのが一番ですから。あと、予備はハチにもお願いしているのよ？」

「私は魔法特性が特殊でね、普通のしーえーでいーが使えないんだよ、だから専用のをハチに作ってもらってるんだ」

そんな話をするるとみんな口々に達也と俺を称賛してくれる。へへ、照れるぜ……。正直妹様のも姉さんのめめっちゃ大変だったけど。そも専門ですらないけど、必死こいて頑張りました！とは言わずに、達也と一緒に謙遜しておく。姉さんのおかげでいくつのCADがスクラップになったことか……。妹様は納得いかないと何度でもリテイクしてくるし、天下のトールラスシルバーと比べないでくださいませんかねえ……。？

そもそも俺はガンダムを作るために魔法を学んでるようなものだからな。そしたらいろいろ手を出して学んでるうちにCADのデバイスやプログラム方面も出来るよう

になつたつて感じだ。全然関係なさそうに見えるかもだが、どう考えてもガンダニウム合金を作つたり、重量に耐えられる金属や構造を作るのに魔法が不可欠なんだよ……。まあ、そんな事いちいち言わないけどね。

そんな事を考えてると、千葉がくるくる警棒を廻しながら問いかけて来た。

「ねね、それじゃあアタシのホウキもみてよ」

ニシシ、という擬音が聞こえてきそうな表情で俺と達也に聞いてくるが、

「無理、それは俺じゃなくてハチの担当だ」

「そもそれ刻印じゃねえか、一から作るならともかく見て何しろつてんだ」

そう返す俺達に千葉は本当に感心したような表情でやつぱりすごいね、2人とも。と微笑みながら頷いている。

え、なにが?と思つたのは俺だけ??あ、みんなただの警棒だと思つてたの?・・・なるほど。姉さんが機械ダメだからね、音声入力か、刻印型しか使えないんよ、その過程でそつち方面はもつぱら達也じゃなくて俺の担当になつてゐるのだ。

それから千葉による警棒型刻印デバイスの説明をし、柴田がぼけて北山が突っ込んで解散となつた。柴田の癒しオーラばないな、そう思つたところで今日の一日は終わるのであつた。

シズ、お勉強がんばる

次の日。つまり魔法科高校3日目。

「達也さん……生徒会長さんとお知り合いだったんですか？」

「先日知り合ったばかりのはずなんだが……」

今だ桜がらんらんと咲き誇っている通学路。

美月さんのとてももつともな質問に達也が自分自身も納得のいかない表情で答えている。そこにエリカさんとレオ君がそれぞれええ？ほんとい？そうは見えないがなあ……と疑問符を浮かべるのも無理もないとおもうよ？

そう思ったのはいつものように通学しているところにレオ君、エリカさん、美月さんが合流して通学路を歩いているところに後方から「達也くん」と声が聞こえた事が始まりだった。

「おい、すげえなあれ、恥ずかしくないのか？」

「かわいいねえ？」

嬉しそうに大きく手を振りながら満面の笑みで駆け寄ってくる生徒会長の真由美さんに対してハチがつぶやく。私は微笑ましいなあとそんな生徒会長さんを見てほのぼ

のとしていた。

年頃の少年ならば生徒会長の真由美さんみたいな美少女が満面の笑みで大きく手を振りながら駆け寄ってくれば、きつと一日良い事がありそうだと思いきや、そこはさすがの達也だ。いつもどおりクールな表情をしている。でもちよつと冷や汗をかいてるからもしかしたら達也なりに驚いてるかも？

そんな事を考えている間にも真由美さんは達也の前に到着した、やつぱりニコニコ笑顔がかわいらしいなあ。

年頃の少年なら顔を赤くすること待たなしの美少女生徒会長にまるで恋人のように声を掛けられるという状況だ。きつとユウキならすぐ喜んでいたかも？

淡泊な反応の達也にまるで射殺さんとはかりに周りからの殺気が飛んでくることにため息をつきそうになってるのでポンポンと背中をやさしくたたいておく。流石に当人の前でため息をつくのは憚られるのでぐつと我慢してくれたようで安心だ。

「達也くん、オハヨ。それと深雪さんもおはようございます」

随分な温度差だなあ・・・と客観的に見ていると真由美さんはハチ君とシズさんもオハヨ？と声を掛けられたので挨拶を返しておく。気づいてないわけではなかったんだね？

それから生徒会長の真由美さんも含めて学校に行く間に話したことは、要は生徒会の

件での深雪の呼び出しだった。達也と深雪が行くことになるみたい。

途中で視線を感じたのでうしろを振り返ると、なんかもやもやしたのを感じた。ん？なんだろこれ？

真由美さんとお話中の達也には聞けないのでハチの袖をクイクイしてもやもやしたものを指さす。

「ハチ、これなんだろ？」

「ああそれはだな、あれだ」

そういいながらハチの視線の先には真由美さんが、つまり？

「魔法だよ、たぶん多角的な視界をとれるやつじゃね？」

「へー、そんなのがあるんだ」

「まあ、のぞき見し放題だからあんま褒められたもんじゃないけどな」

そういいながらジト目のハチがもやもやに視線を向ける。私は単純にすごいなあと思つたのもやもやに向かつて小さく手を振っておく。

「そ、そういえばハチ君とシズさんもどうかしら？」

そうしてもやもやに手を振りながらニコニコしてたらちよつと慌て気味に真由美さんにそんな事を聞かれた。え、なに？ゴメン、聞いてなかったよ？

なんだろ？と思つてたらハチが生徒会室来ないか？だつてさ、と小声で教えてくれ

た。

うーん、深雪と達也が行って、さらに私とハチが行ったら迷惑かな？と思ったので昼食の約束があるのでーと答えておいた。あ、もやもや無くなってる……。

それからはちよつと歩くごとに別の場所にもやもやが発生していたのでそれを見つめる遊びをこつそりしながら通学して、そのままそれぞれの教室へと移動していった。ふふ、ちよつと楽しかったな。

さあ、今日も勉強がんばるぞい！

そうして早くも昼休み、達也は私に一声かけてから生徒会室へと向かって行った。

一緒に来て欲しいみたいだったけど、流石に迷惑だよ、と達也を説得したら仕方が無いか、と諦めたようだ。

それに、私はこの後お昼を食べてから今日の授業内容の復習をしないとだからね……わかつてはいたけど、今日の授業もさっぱりだったよ……。最近の若い子は随分と難しい勉強をするなあ……。

「姉さん、昼いこうぜ」

「あ、ハチ。うんわかった。みんなも行くかう？」

そんな事を考えていたらハチが迎えに来てくれたので、エリカさんと美月さん、レオ君と一緒に食堂に向かう事にした。

途中で北山雫さんと光井ほのかさんにも声を掛けられたので一緒にご飯を食べる事になった。

それぞれ今日の授業について話たりしながら食堂に向かう事しばらくすると。雫さんとほのかさん（名前で呼んで欲しいって可愛らしくお願いされたのだ）がハチに問いかけた。

「ねえ、なんでさっきは置いていったの？」

「ハチ君は迷惑でしたか？」

ジト目の雫さんと少し不安そうなほのかさんに問い詰められ、ハチは冷や汗を流しながら弁明している。もう、ちゃんと仲良くしないとだめだよ？そんな気持ちを込めながら一生懸命弁明しているハチの頬をつつきながらニコニコした。

うん、今日は楽しい昼食になりそうだ。ちよつとハチとレオ君が居づらそうだが、それくらいは、ね？

「ようし、午後の授業もがんばるよ！」

それから昼食が終わってから最初の授業は実習、つまり、睡魔との闘いから解放されたという事。がんばるよ！

ふんすふんす。と気合を入れてみると、私の自慢の義弟である達也に止められてしまった。

「シズ、気合が入っているとこすまないが、絶対に壊すなよ？」

「わかってる！でも、今日はなんだか絶対調なんだよ。今日はイケル気がするの！」

達也の心配はわかるの。いつも慎重にやろうとしてもなぜかピコピコが壊れてしまからね。

でも、今日は大丈夫な気がする！朝の占いでも4位だったし！

私はそうやって、4位だったから！調子いいから！と一生懸命に達也に調子の良さをあびるするが、達也の心配そうな表情はぬぐえなかった。

「いいか、シズ、ゆっくりとだ。最小の魔法力で、ゆっくりとだ」

心配性な達也に私は大丈夫大丈夫とにこやかに応えながら魔法を発動する準備に入る。

いつものピコピコじゃなくて、こんなにおつきい機械でやるんだからいつもみたいに
はならないよ。

「台車を動かすだけの簡単な魔法位私にだって出来るんだから」

そうやって私は、気楽に魔法を発動させたのであった。

そこからさらに時間がすぎて放課後になった。

おかしい・・・なんであんなにおつきい機械なのに、あんなにもろいんだろう・・・？
ハチに作ってもらったのは最近壊れなくなってきたのに・・・。あんなにおつきい
機械が簡単に壊れるなんてずるいよ・・・。

達也には怒られたし、先生にも怒られちゃうし・・・ういーどには先生いないんじゃない
なかったの？こんなのぜったいおかしいよ・・・。

「シズ」

「んー・・・うん？たつや？」

もやもやと考え事していると達也が声を掛けて来た。あ、そうか、帰る時間だね？
そう問いかけると、達也はいや、と答える。うん？

「これから深雪と生徒会室に行くから、シズとハチにも来て欲しいそうだ」

「え、と。私も??」

んん??成績優秀な深雪とハチ、達也は解るけど、私も？

もう一度確認しても達也はああ、と答えてくる。なんだろう？まあいけばわかるかな

?

「わかったよ。行こうか達也」

「ああ」

そうして私と達也はエリカさん達に別れを告げてから生徒会室に向かった。

「さて、帰るか・・・妹様は・・・？」

よいしょおー！とひとつ気合を入れて立ち上がり固まっているからだをほぐしながら立ち上がると丁度妹様がこっちに向かってきていた。

「ハチ」

「おう、帰るのか？」

「いえ、その前にもう一度生徒会室に行くわ。・・・あなたもよ」

妹様の発言からめんどそうな雰囲気を感じたので逃げようとしたが、その前に妹様に先回りされてしまった。

全力で嫌そうな顔をしてみるが、妹様には当然のように通用しない。

「いくわよ」

「・・・ハイ」

なんとか逃げようと考えたものの、今度逃げたらわかかってんだろうな？という副音声が聞こえてきそうな笑顔で言われたら逃げようがなかった。にげたら後が怖いしね。妹様もそうだし、達也も、姉さんも・・・。

そうして周りからの嫉妬の視線に見送られながら俺は妹様にドナドナされていくのであった。

道中で達也と姉さんと合流したのでそのまま4人で生徒会室に向かう。

おそらく深雪の生徒会への勧誘なのだろうが、なぜ達也や俺、姉さんまでもが生徒会室に行く必要があるのか、それがめんどくさい理由がありそうでげんなりしながら俺は深雪に逃げられないように確保され連れられていく。いや、もうここまで来たら逃げねえから・・・恥ずかしいから手を放してくれませんかねえ・・・？だめ？ソウデスカ。

「失礼します、司波深雪です」

「司波達也です」

妹様、達也に続いて姉さん、俺も名乗りながら入っていく。どうも、ジョン・スミスです。

部屋に入ると同時に複数に視線と、それに敵意を向けられる。

うん、
帰っていいかな？だめ？デスヨネ・・・
デスヨネ・・・
ハア。

ハチ、忍者くんにつっこむ

「副会長の服部刑部です、司波深雪さん、生徒会へようこそ」

神経質そうな思わず忍者君と呼びたくなるような名前の生徒会副会長様が達也と姉さん、俺をいつそすがすがしいくらいに無視して妹様だけに挨拶する。

ほう？これはもうあれだろ？帰っていいってことだよな？そう思うが、いまだ妹様の手は俺を掴んで離さない。

ねえ？みゆきさんや？袖がちよつと凍ってるんだけど？もしもし??

部屋に入っついていきなりブリザードは勘弁してください、と必死に妹様をなだめようとするが、なんとか自分自身で自制できたようだ。ふう：：袖がちよつと凍ったくらいでよかつた。マジで一科はKYの集団なのだろうか？バカなの？

歓迎してる感出すつもりないでしょ？いきなり険悪な感じにするとかあほすぎない??

そんな事を思っていると生徒会長様と風紀委員長様が軽いノリで挨拶してくる。え？今のやり取りに対してツツコミなしなの!?それでいいのかよ生徒会いい・・・!!!

そんな事を考えて現実逃避している間にいつの間にか風紀委員長と服部KY先輩が達也と俺を風紀委員にするかどうかもめていた。え？それ俺初耳なんだけど？と達也に視線を向けるが目を合わせねえ……。あるえー？どういう事なのん？と肘あたりまで氷始めている俺の右腕を確保している妹様を見てもこちらもそれどころじやないようで、いや、俺も腕が半分凍ってるんすけど……。いくら愛しのお兄様をバカにされたからつて俺の腕凍らせるのはちがくない？

「とにかく、実力で劣るウィードに風紀委員は務まらない!!」

「いや、達也君はともかくハチ君は一科だぞ?」

半切れで叫ぶKY先輩は返す風紀委員長様のセリフにびっくりしてる。

あん?なんでビックリしてるんや……。?このワツペンが……。ワツペンが……。そういえば、さつき帰る時にワツペンはがしてたな……。

「いけね」

ともはや肩に迫る勢いで凍っている右手は放棄し、左手で慌ててワツペンをはる。ペタリペタリとな、ふう。セーフ。

そう満足に頷いていると。

「お前、なじえエンブレムをはがしていた!!」

となぜか噛み気味にKY先輩に噛みつかれた。めんどくせえな……。

「なあ、深雪さんや？そろそろ解凍してくれると助かるんだが……」

「あら、ごめんなさい、ハチ。でも……ね？」

「いや、そんな天使のような微笑みで……ね？で腕凍らされてもたまつたもんじゃねえんだよ」

とりあえず、DQNはまともに相手にしてはいけないと言う鉄則に従い妹様に現状一番困っている事について問いかけるが笑顔で返されてしまった。くそう、可愛いからって、可愛いからって許されると……許されると、あれだ、次から気を付けろよな……。ヤレヤレ。

「おい、一年！私を無視するな！！なぜエンブレムをはがした！！」

「はあ……なにか問題でも？」

「なんだその態度は！！」

ねえ、この学校本当に大丈夫？こんなのが生徒会なの？あれでしょ？成績優秀者が来るとこだよな？今年だけでなく、去年も不作だったの？（勘違い継続中）むしろこれが副会長とか今年よりも悲惨だったのか？

「こたえろ、一年！！」

「はあ……なんでって、あんたみたいなDQN集団と一緒に思われなくなかったらで。

あ、そうだ、生徒会長」

「え!?私!?!」

「はい、申し訳ないんですが、自分を二科生にしてもらえませんか?」

「ええ!」

「どういう事だ一年!!!」

達也と妹様がはあ、とため息をついて、姉さんが苦笑いしているが、この際だ、せつかく生徒会長様がいるんだし前々から思ってたことをお願いしよう。

なので、俺は一生懸命説明した。

自分がいかに魔法を使えないか、実技試験は全部二科生程度の成績だったとか、筆記テストは全部50点で返したとか、そもそも一科がたかがテストの成績ごときでえらばれた人間ムーブして同じにみられるのが恥ずかしいとか、そもそも評価方法がおかしいとか一生懸命説得した。

結果

生徒会長様↓なんか同士よ!!といったキラキラした目でこつちを見始めた。

風紀委員長様↓面白い奴だなって顔でニヤニヤしてる。

はしっこにいたぶん先輩↓めつちやびくびくしてる。小動物みたいだな・・・この場で唯一なごむ存在だ。

もう一人のクールビューティー↓ふむ。と考えてた。クール!!

KY会長↓あの、大丈夫？って心配になるくらい顔を真っ赤にしてキレてた。テヘペロ

そつからなんやかんやおれの希望はスルーされつつ二科を風紀委員にするのとはーとか、このクソガキをーとか叫びまくるDQNが達也にも嘯みつき始めて、妹様がキレかけて反論したことでKY先輩はちよつと冷静さを取り戻したようだ。

「司波さん、魔法師は常に冷静を心掛けなさい、身びいきに目を曇らせてはなりません」
「プっ!!あー！ー！はっはっはっはっ!!れ、れいせい……ぶはっ!!はっはっはっ!!し、死ぬー！ー!!」

れ、冷静に、と来たか!!やべえ、さすが一科生だけ。モブ崎も姉さんを侮辱するまでなかなか楽しい事言ってくれてたが、流石KY先輩は副会長だけあって言う事が違う!
こんな笑わせてくれるとは思わなかった。これが一科か!

「な、なにがおかしい一年!!」

俺が笑ったせいでもたもやキレはじめたせいで、今度は達也もふつとクールに笑い、生徒会長様と風紀委員長様もクスクスと笑い始めた。なるほど。なんでこんなDQNを生徒会に入れたのか不思議だったが、ボケ担当だったのか。

「いや、冷静に、ってぶっ！ふふ……魔法師は冷静に、でしょう？先輩」

「ぐぬう……」

俺のセリフにKY先輩あぐぬってる。いや、ぐぬうって言う人初めて見たわ、流石魔法科高校と言うべきか？

そんなふうに関心していると、達也が、これじゃあ話が進まないなって顔をした後、しようがない・・・って顔をして俺の前に立ち、KY先輩と向き合った。いや、ほとんど表情変わってないけど。。。いやー、ちよつとあおりすぎましたかな、がはは！

「副会長、俺と模擬戦をしませんか」

その発言に驚く生徒会メンバー達。まあね、この学校の物差しで見たらね、そういう反応になるよね

「思いあがるなよ、補欠の分際で!!」

再度激怒したKY先輩に場が再び笑顔に包まれたの言うまでもないだろう。

うん。その後姉さんにやりすぎだよ。と可愛らしくメツてされたのは甘んじて受けさせてもらった。いいぞ、もつとやれ。

そういうわけで達也の挑発におもしろいくらいのつてくれたKY先輩が模擬戦をすることになったようだ。

あとはがんばってね、ばはーい♪と帰ろうとしたが、俺の右腕を拘束している妹様が放してくれない・・・。

「のう、深雪さんや・・・?」

「なにかしら?」

暗に俺帰るんで、手を放してくれませんかねえ?という気持ちを込めて声を掛けるも、天使のような微笑みで返さないわよ?と言わんばかりのプレッシャーを感じた。

「いや、なんでもないっす……」

「そう、それではお兄様とあなたのCADを取りに行きましようか」

「んん??達也の、だよな」

「お兄様とあなたのよ」

ええー……達也だけで良くない?なんで俺もなん?

そも風紀委員になるとかもかけらも聞いてないし、なんならもう今日の分のサイオン授業で使ってほとんど残ってないんすけど??

俺には妹様と達也、姉さんみたいに自由に使えるサイオン量がほとんどないの知ってるだろう?と視線を向けるも相変わらず天使のような微笑みで返すだけ。おまえ微笑んでればなんとももなるとか思ってたんだろ?おい。まったく、ヤレヤレだぜ。しかたねえなあ。

そんな事を内心ぐちぐち考えてる間にもCADを回収して演習室に向かう。

ねえ……、ほんとに俺もやんの???

さて、それでは始めようか、と宝塚先輩……じゃなくて、風紀委員長様がルール説明をしている

もうさ、これやる前から結果出てるじゃん……どうみてもあの人純粋な魔法師じゃん、武闘派な達也に対人戦で勝てる訳ないじゃんよ……汎用使ってるし。

もう超余裕ぶっこきまくりんぐな顔してるもん。どうせあれでしょ？移動魔法で壁にたたきつけてーとか考えてるだけでしょ？もう勝負見えてるよお……。

「服部君はこの学校でも5本の指に入るほどの実力です」

「司波さんは心配じゃありませんか？」

ふええ……とか考えていたら俺の右隣にいる妹様に生徒会のクールティー先輩と小動物先輩が話しかけてる。

ええー……それよりも、あのDQNが学校で五本の指とか聞こえたんすけど……？嘘でしょ？そんな驚愕を感じてるのは俺だけのようで、妹様はいえ、ちつとも。いつものように天使の微笑みを浮かべて答えている。まあね、負ける要素ないもんね……。

左となりにいる姉さんに視線を向けるとまたあらぬ方向に視線を向けて小さく手を振っていた。

ああ、またあれか、と妹様と生徒会メンバーの方に視線を向けると冷や汗を浮かべた

生徒会長様がいた。

忍法のぞき見の術が破られて焦っているようだ。

当の姉さんは単純に楽しんでるだけのようだが……今も楽しそうに視線をあっちこっちに向けて探してるしな。

と、そんな事を考えてる間に風紀委員長様の説明が終わり、始まるようだ。はてさて……KY先輩が負けるのは当然として、その後いい感じにうやむやにして帰らないとだ……。試合とかめんどいし、風紀委員とか死んでもやだし。

ただ、気になる事があるんだよなあ……。

妹様をコケにされたシスコンが、おとなしくKY先輩と模擬戦やるかなあ……殺さないよな?とか、あいつの表情がめんどくせえな、さつさとおわらせようって顔してるのとかがなあ、あんま表情動かないから分かりづらいんだが、KY先輩生きて帰れるか?ダイジョブだよな?それくらいの自制心はあるよな??

だんだんと心配になって来た俺はいざとなったら達也を止めようと心に決めて見守ることにした。

「はっめー!」

そう風紀委員長様が開始の合図をすると共にKY先輩がCADを操作する、ささつと操作して魔法式を読み込むまではいいが、やはり純粋な魔法師だったか……。達也へ

の警戒が全くなかった。

きつとKY先輩からは達也が消えたように見えたのだろう。面白いように無警戒な状態で後ろを取られていた。

これで一発入れて試合終了となるかと思ったが、あれ？達也殺気出してない!?
ちよっ!

「あほーー!!」

スパアアアアン!!と縮地により達也まで詰め寄った俺がその頭をハリセンではいた。た。

が、しかし、俺のツツコミは間に合わなかったようだ、ぐはあ・・・と言いながらKY先輩が崩れ落ちてしまった。ああ・・・尊い命が・・・

「いたいな・・・」

「いたいな・・・じゃねーよアホ!なに殺ろうとしてんだよアホ——!」

「.....してないぞ」

「間が空きすぎい!!それ絶対思ってたやつ!だいたいお前めんどくさいからさっさと終わらせようとしただろ?」

俺の質問に達也がそのなかが問題か?という顔をしてる、表情あんま動いてないけどたぶんそう。あと、今更だけど妹様からすげえオーラが立ち昇ってる・・・やべえ。

生徒会のメンツやら風紀委員長様やらがフリーズしてるのもお構いなしに俺は大事なことを達也に伝える。

「いいか達也。アレを見ろ」

「服部先輩がどうかしたのか？」

ああ、そんな名前だったか・・・もう俺の中でKY先輩で固定されてたよ・・・。それはそうと、俺は倒れているKY先輩を指さしながら丁寧には達也に説明する。

「あのプライドだけがチョモランマのように高いDQN相手に認識できない速度で後ろに回って倒しても負けを認める訳ないだろ？」

「・・・なるほど」

「どうせインチキしたとか言いだしてごねるに決まってるだろが」

「だが、それだと普通に倒しても言われないか？」

「言われるに決まってるんだろが、風紀委員長様が審判してるとか関係ないんだよ、ああいう手合いは。相手してる時点で負けなんだから、今回の場合は模擬戦仕掛けたお前の負けなの、勝負に勝っても試合に負けんだよ」

俺が懇切丁寧にレクチャーしていると、達也も納得したようだ。

「そういうことか・・・なるほど」

「いやーさすが副会長、スバラシイですね、俺達の間違っていましたよ。とか適当に後でヨ

イシヨしとけよ?」

「ああ、そうだな」

という訳であれば適当にヨイシヨしてさきさつと帰る事にしよう。俺と達也はヨシ、と頷き合う。

「ちよつとまで、今のは自己加速術式をあらかじめ展開していたのか?」

これからの方針を確認していると、まさかの風紀委員長様からクレームが入ってしまった。なん・・・だと・・・。

「おい、どうすんだよ・・・」

「こまったな・・・」

どう見ても他の生徒会メンバーも私、気になりますつて顔してこっちを見てる・・・これ、帰れないパターンですねえ・・・。

ハチ、仕方がなく、本当に仕方がなく模擬戦する

それからなんだかんだと達也が説明をした。

変数処理は採点されないからね！って説明してるけど、ほんとなんで採点項目に無いんですかね……。

サイオン量とかも結構大事だと思うけど？いや、それがあつたら俺合格できなかったか？どうだろ？

いつの間にかKY先輩がなるほどか言いながらふらふらと起き上がって納得してた。

話違ってたの自分分す。つて感じで妹様に謝ってるので、ようやく選ばれた人間ではなく、ただ去年も今年と同じように不作だったことに気づいたのかもしれない（勘違い）。

さあ、これですべて解決、万々歳だね、帰りましょう！と言いたいところだが、まだ重大な任務が残っている。

「……………」

と無言でこちらを睨んでいる妹様のご機嫌を取らなければいけないという事だ。

このままでは達也をハリセンではたいた罰として生徒会メンバーとか、KY先輩やらと模擬戦しろとか言われかねないからな。うん。制限がかかっている現状で、コップ一杯分くらいのサイオン量で模擬戦とか無理に決まってるのだ。いや、むしろ一日に使えるのがコップ一杯で、今日は実習で結構使わされたから、実質大さじ2杯分くらいしか残ってないぞ？無理でしょ……。

そういう訳で、俺の方針は決まった。

「いやあ、さすがは達也だなあ！」

「……………」

「ええと、この学校で5本の指に入るらしいKY……えと、忍者？先輩に何もさせずに勝つとは、いやあ、流石だなあ!!が、がはは……」

「当然でしょう？お兄さまの本来の実力を持つてすればこの程度のこと……あなたやお姉さまならいざ知らず、同年代でお兄様に勝てる人なんているはずないでしょう？」

あ、おい、ばか！天使！そんな事言ったら……!!

「ほう……君達もそこまで出来るのか……」

「あら、それはそれは……」

ほらあ、めっちゃ楽しそうな顔して風紀委員長様と生徒会長様がこつちをロックオンしてるじゃないですか……。

「いやいや、そんな事ないから、さ、さて・・それよりももう時間だな、帰ろう・・・帰ろう・・・」

「まあまあ、それより、達也君の実力も見れたし、次は・・・ね？」

「そうだな、私も気になるところだ」

そう言つて俺と姉さんにそら、戦えよおい。と言わんばかりの視線を向けてくる風紀委員長様と生徒会長様。

「いや、今日はもう魔法使えるほどサイオン残つてないんで・・・」

と暗に授業だけでいっばいいい感を出す。あわよくば二科にしてもらつてもいいのよ? という期待も入れておく。

「そこなのよね・・・ハチ君の話を信じるなら一科になる訳が無いのよね・・・」

不作だったんでしょ? (勘違い) いい迷惑ですわ。

「だが、学校の提示した基準をしめたから一科なのだろう? ならば確かめるしかあるまい?」

いや、いいつて、ほんと、勘弁して下さい。つか帰らせて?

「せつかくだ、君も模擬戦したまえ」

「お断りします」

風紀委員長様に言われたが、さくつと断る。めんどいのだ。しかもあれでしょ、これ

結果いかんでは風紀委員にされるんでしょ？なおさら嫌だよ。いや、断つてもされそうだけでもさ……。

「逃げるのか、一年……!!」

いやだなーって思ってたらKY先輩が復活したようだ、え？あんたまだやるんですか!!?

「あら？はんぞーくん、もう大丈夫なんですか？」

「は、はいっ!!もちろんです!!」

あざとく生徒会長様がKY先輩をもてあそんでいるようにしか見えない件について。KY先輩ちよろすぎるよう!!つか、こっちはやりたくないの!?!わからないかなあ!?

「それに、私としてはシズ君の実力も見たいんだがね？」

ちらりと風紀委員長様が楽しそうな表情で姉さんを見てる。あ、それは、あかん、あかん奴や……。

姉さん自身はなぜか乗り気でいいの!?!と達也に確認するような視線を向けているが、言い訳がない。

姉さんの魔法を使うにはこの空間は狭すぎる。絶対、ダメ。

達也も妹様も同意見だったようで、姉さんにダメ、という視線を向けたあと、こちらにお前がやれ、という視線を向けてくる。……はあ。

「ねえ、ハチ。達也と深雪がダメって言うんだけど・・・」

やりたくねえなーと思っていたら姉さんが少し悲しそうな表情で俺に問いかけて来た。ぐはあっ！

犬耳が付いていたらきつとしゅんとしおれていただろう悲しそうな表情で、袖をくいくいされたらきゅんとくるに決まってるでしょー！！

思わず良いよ！と言いそうになったが、達也と妹様からの絶対零度の視線により思いとどまった。

「すまん、姉さんがここで魔法使うとちよつとまずそうだから、ここは我慢してくれ：」
「そっか、そうだよね・・・ごめんね？」

え、えへへ・・・と悲しそうに微笑む姉さんに俺のハートはボロボロになりそうだなんなら妹様からも睨まれていて、なんという理不尽なのだと悲しくなるが、仕方がないのだと自分に再度言い聞かせる。

「お、やつとやる気になったか」

「それで、やるとして、俺に何かメリットってあるんですかね？」

姉さんが悲しんでいるのを妹様がさりげなくフォローしているのを横目で確認した俺は楽しそうな表情で語りかけてくる風紀委員長様にとても大事な事を問いかける。

「風紀委員になれる・・・ではだめなのだろうか」

「当然ですね」

「本当は人気なのだけれど・・・」

風紀委員長様の問いかけに当たり前だとうなずくと生徒会長様が理解できないといった顔で困惑していた。

いや、名誉とか進学に有利的なのがあるかもだが、それ俺にはメリットにならないし。なにより放課後活動するだけのサイオンなんぞある訳がないのだ。単純にめんどいし。そんなんやるくらいならガンプラバトルするつつーの。

「勝つたら風紀委員にするのを諦めよう・・・それでいいかね？」

「ついでに二科生には？」

「それは私達の裁量では無理ね」

風紀委員長様と生徒会長様の話に当然だとうなずく。あとはあれだな

「では俺の制服改造を認可してもらえれば」

「ふう・・・君ほど一科生を嫌がる新入生は初めてだよ・・・」

苦笑しながらやれやれしている風紀委員長様。そのやれやれだけでどれだけの女生徒が黄色い悲鳴をあげるのだろうか、とか場違いな事を考えてしまう。これだからイケメンは・・・。

チラリと生徒会長様を見ると仕方ないわね、と頷いてくれた。よし、殺ろう。

そんなわけでKY先輩と模擬戦だ。

さつきまでは気乗りしなかったが、これだけの好条件を出されてはやらないわけにはいかない。

そんなわけで開始位置につく俺とKY先輩。

先程の模擬戦を意識しているのか少しだけ距離が開いて警戒しているようだ。

妹様に無理やり持たされた小太刀型のCADをチラリと見る。うーん、これじゃあケガさせるか？もちつと殺傷力落とした方がいいかな？と小太刀をしまつて、妹様と同じようなスマホ型の汎用CADをだす。うん、これで行こう。

先程と同じように風紀委員長様がルールの説明をする。ケガさせなければOK？りよ。

ルール説明が終わった風紀委員長様が開始の合図をするべく手を挙げた。

「はじめ!!」

その声と同時に俺はKY先輩へと無造作に踏み込む。

「ほっ」

「なっ!!」

無造作に踏み込んだように見える俺に一切反応する事も出来ずにいるKY先輩。こ

れぞ無拍子じやい。我ながら人間やめてるうー。

そしてKY先輩の喉元に今朝方まで作り途中だったマスターグレードツールギスのビームサーベルを突きつけた。

え？なんで持つてるかって？ガンプラ作ってたら朝が来て、気づいたら持つてきてた？みたいな？

なかなかの完成度やろ？とドヤってみる。いや、ビームサーベルだけ出してわからんか。

んで？まだやる？という視線を向けるとめつちや驚いた後、グヌつていたKY先輩はクソつとか悔しがりながら魔法を使って後方に飛んだ。継続ですか、そうですか……。ええーまじで？って思う俺をよそにいそいと魔法式を展開するKY先輩たぶん風を飛ばしてくる感じのやつ。

いやー魔法力に余裕がある人は羨ましいわー……。

当然そんなのに対抗できる魔法力なんてある訳が無いので甘んじて受ける。

びゅー!! あーれーって飛ばされて、壁に着地する。

10点10点10点くくみたいな？そんな余裕かましてると今度は氷のつぶつぶが飛んできた。なるほど、さっきのは距離を開けるためだったらしい。流星は自称エリート。魔法戦はそれなりにできるようだ。

それでも俺には通じないねえ……と言わんばかりに氷の粒を取り出した小太刀型C
AD内臓のワイヤーで斬り裂いていく。

まあ、この空間じゃあ風をおこすか氷発生させるか相手を吹き飛ばすくらいしか出来
る事ないからねえ……単調にもなるってなもんですよ。

「くそっ！なぜだっ！」

エリートじゃないんだよ……きつと。

なんかもう飽きてきたから決めてもいいかな？十分だよね？

「そろそろ行くかね」

そうつぶやくと同時に一つの魔法を起動する事にする。

そこらに転がってるKY先輩の氷のつぶつぶを再利用してこっちも氷をびゅんびゅ
ん飛ばす。

まあ、魔法式の規模がゴミクスレベルなので10個も飛ばせないけどね。そこらの氷
を再利用して燃費向上してこれだけ？笑えよ。はは……。

「くっ！」

と予想通りに真後ろに飛んでくれたKY先輩。

まあね、近接したくないだろうから横には避けれんよな？後ろに飛ぶしかないよなあ

？

「ほいつ」

KY先輩の行動が予想通りに魔法で後ろに跳躍するという先ほどと同じ展開だった。だから俺は先ほどの跳躍からとっさの時の飛距離を記憶し、着地点を狙って魔法を放った。当然これも30cmくらいの範囲で最小限に発動する。

それにより・・・ちようど魔法の発動地点に予想通りに着地したKY先輩は——
「ふべっ!!」

と昔の映像で見たような、漫画のようなスリッパダウンを披露した。

・・・ふっ勝ったな・・・

「ぐうおおおおおおお・・・!!」

と思いつき頭をぶつけたKY先輩がもだえてるところに俺はスタスタと近づいて行く。

もう一回くらいならちっさい魔法は使えそうだけど、もうそんないらんでしょ——
|・・・。

俺はスツとまたもやビームサーベルを出そうとして、ああ、これじゃだめか、と思い直し、小太刀型のCADをいまだもだえ続けているKY先輩に突き付ける。

これでええやろ？

チラリと風紀委員長様を見ると、なんか変な顔をしてらっしやる。

もしもーし?という視線を向け続けるとようやくはっと気づいてくれた。

「し、勝者、ハチ君!!」

「ういっす」

ハチ、逃げられなかった

「し、勝者、ハチ君！」

「ういっす」

いやー、勝った勝った。これ完璧な勝利でしょー。

純粹な魔法力勝負とかだったら手も足も出なかったけど、模擬戦で、こんなクソ狭い空間でよかったわー。

さーて、サイオンもほぼスツカラカンになったし、帰ってガン普拉バトルするぞおー。
「まちたまえ」

ぞおー………はあ。

え、なんすか？という視線を向けると、なんとも言えない、なにしたんお前？っていう顔してこちらを見ている風紀委員長様やら生徒会長様やら小動物先輩やらクールビューティー先輩。

この視線覚えがあるワァー……これ初めて人外の技教えられた時の俺の目と一緒だわー……。

「先ほどの動きは……」

と、先ほどの達也と同じような質問をされたので妹様が俺に代わってドやりながら説明している。つたすかるうー。でもその気遣い、模擬戦が始まらないようにして欲しかったわー。

なんか魔法をすばすばやってたのもめっちゃ聞いて来てるけど。妹様が体術ですで押し通してた。

いや、それ初見では信じられないと思うよ？俺も最初見せられて、体術のみでやっているとか言われても信じられなかったもん。縮地とか無拍子とかマンガかって思ったわ（遠い目）

ほんで、なんだかんだで姉さんも戦わせようとしていた風紀委員長様達だが、KY先輩はもうぼろぼろだし、そもそもこの部屋じゃ姉さんの魔法使う訳にはいかないし、そも体術だつて俺よりずっと上だしと説明して終わった。

良かった。姉さんに魔法使われたらさすがに大事故になるからね。良かった良かった。

おっと、それはそうと。

「さて、それじゃあこれで俺は風紀委員にはならなくて良いですね？」

「ああ、仕方が無いな……」

「約束だもの、しょうがないわね……」

制服も改造おつけ―貰ったし、クソめんどくさかったけど、まあ良しとしよう。
終わりよければってね。

そう思ってたのもつかの間、生徒会長様がやたらと意味ありげに微笑んでいるのを見て、急速に嫌な予感がした。おい、まて、まさか・・・!

「と、いう訳で、ハチ君には生徒会に入ってもらわねっ!!」

と、思ってたら案の定、生徒会長様がめっちゃ目をキラキラさせて寝ぼけた事言い出しおった。おい!

「あ、もちろん、シズさんも一緒に来てもらっていいわよ? 生徒会に所属できなくても補佐、みたいな感じで、ね?」

ね? と可愛らしく胸の前で手を合わせながらこちらに微笑んでくるあざと生徒会長様。

ちよつと小首をかしげながら「ね?」と問いかけてくる姿は確かに可愛らしいが、甘い。めっちゃキュンときたけど、めっちゃ。

こちらと神が作ったって言っても信じられるくらいの美貌を持つ妹様が身近にいるんだぜ? そんな微笑み程度でだなあ……。

「……………ダメ、……かしら……?」

…………そんなちよつと悲しそうにおメメをうるうるさせてもだな……。

「……………おねがぁい……………!」

……………つたく、仕方がねえなあ……………。ヤレヤレだぜ。

「落ちたな……………真由美のああゆうところは素直に尊敬するよ」

「あとでお説教かしら……………」

「ふふ、若いねえ……………」

まったく、やれやれだぜ、とやつてる俺を見て、そんな話をしていたらしい。

それから思ったよりも肉体的にも精神的にもぼろぼろだったKY先輩を保健室へと運び、俺達は生徒会室へと戻り、達也は風紀委員の部屋へとドナドナされていった。さて、社畜ライフのはじまりだぁー、嬉しくねえなあ……………。

結局なんで呼ばれたのかわからなかった姉さんは今、クールビューティー先輩に勉強を教えてもらっていて、俺と妹様は生徒会の仕事を小動物先輩に教えてもらっていた。

いまだにこの2人の名前を教えてもらってない不思議。今更聞けない感はない……………。あーちゃんとかりんちゃんとか俺が呼べるわけが無いのだ。

っていうかき、これ、ダメでしょ……。

なんで試験の成績順のデータあるのさ……聞いてみたらなんか各部活にもあるとかサー……個人情報どうなってるのー？

っていうかさー、なんで俺の実技の成績でA組なのさー？これ絶対おかしいでしょ？

つか、モブ崎の成績とか普通に結構いくね？なんでこれであんなDQNになったの？おかしくない？

試験の時だけ違う人でした！ってくらい頭おかしいじゃん？どういうことなん？

そんなこんなで生徒会初日は終わった。姉さんも今日の復習が大分出来たようで、頭から煙が出ていた。

達也の超スパルタ授業で何とか合格できたが、姉さんは魔法関係の成績とか、数学らへんが苦手なのだ。正直授業についてけるのか不安だったので思ったよりもこの生徒会入りは姉さんのにありだったかもしれないな。

まあ、俺的にはガンブラ製作とガンブラバトルの時間が減るのはポイント低いが。G BNにログインしたいよお……。

そんなこんなで今日も終わったぜ。ぶんぶん。

なんか途中で生徒会長様と達也が寸劇を初めて妹様がグヌヌって、解凍された俺の腕が再度半分くらい凍ったけど、おおよそ平和的に終わったと思う。思いたい。手がかじかんで大変だけど。

それから帰宅して、家族4人で夕飯食べて、今はそれぞれの時間を過ごしている。

俺はもちろんガンブラを作ろうと思ったのだが、予定を変更してあまり得意ではないが、魔法式を組んでいる最中だ。

今日の模擬戦でわかった事だが、オレの魔法構成と姉さん用の魔法をもう少し組み直す必要があると思ったのだ。嘘です、前から思ってたけど、めんどくてやってなかったのだ。ガンブラ作りたかったのよ……。

んで、魔法だが主に威力的な面で組み直そうと思っている。

俺も姉さんも今日のKY先輩を無力化するだけなら問題ないが、それは身体技能であれば、という点だ。

俺はまだ魔法式の組み換えで何とかなるが、姉さんの方は魔法力が強すぎるのが問題だ。

妹様と達也の術式を参考に俺が姉さんの魔法力を抑え込んでいるが、そもその演算領域とサイオン量の問題で完全に抑えきれない上に、俺自身がほとんど魔法を使えなくなっているし、姉さんはそもそも制御が苦手なのだ。変数を定数にしてごまかしてる

が、機械操作が苦手な姉さんにかかればあつという間に焦土と化してしまふ。

これをなんとかするべく省エネの魔法式を組んだりしているが、なかなか結果が付いてこないのが現状だ。

なにか、俺の演算領域をこう、肩代わり出来れば最高なんだが……しばらくは省エネ魔法と、姉さん用の超極小の対人用の魔法を組むかなあ……ウムム。

そんな感じでかれこれ数時間ポチポチウムムっているが、なかなかうまくいかない。

「こりゃ俺一人じゃ無理だな、うん。やはりこういつたプログラムは達也に頼ろう、うん。」

達也は達也でやらなきゃいけない事があるからあまり頼れないのが実情なので、こうして出来るまでこまめやってから相談するのが俺達の日常なのだ。

なのでもうすぐ日をまたぎそうな時間ではあるが、間違いなく起きているであろう達也の元に向かう。

「もつと効率よく姉さんの魔法力を抑え込みたいんだよなあ……それこそアンティナイトがあればだが、なんとかならんもんか……」

そう考えながら達也の部屋にむかう。

いや、達也の部屋とか作業場？最新のCADの調整装置が個人宅にあるというね、もうね。さすがトーラスシルバーとでも言つとくべきか。

それで、考え事しながら行ったのが失敗だった。

「たつえもーん、たすけてくれー……え？」

「……え……？」

そこで停止する世界、というか俺と妹様。

俺の視界には妹様のまだ少し幼さを残しながらも女性としての完成されつつある色気を感じさせる下着姿が映った。

世界が、思考が停止しているせいか、俺の瞳は妹様のその名前のように白く、透き通った雪のような肌とシンプルでありながらもとても可愛らしい下着姿が――。

「ああ、ハチか、ちよつと待ってくれ」

そんな停止した俺と妹様を完全スルーして達也が平然と返してくることにより、世界が、俺と妹様の時間が動き出した。

「い……い……」

「え……と、その、だな……」

瞬時に顔を真っ赤にさせた妹様が涙目になりながらふるふる震えている。めっちゃくちやかわいい。じゃなくて、なにかを言おうとするが、俺の口はただただ意味の無い単語を吐き出すことしか出来なかった。

「いやあああああ……!!!」

「ぬわあああああー！ー！ー！ー！！！！」

泣きながら妹様が放った魔法により、俺は部屋の外にふきとばされていった。

でもどうせなら早見ボイスでばかあっ！って言って欲しかったという声が脳内で響いた気がした。

「ごめんなさい……」

その後、意識を取り戻した俺は妹様に正座をして謝っていた。

ヘイシンテイトウだ。セイシンセイイシヤザイしているのだ。

「もうっ！しりませんっ！」

とプンスコな妹様が可愛らしすぎてどうにかなりそうである。

おまえ、その声とそのルックスでそんな態度卑怯過ぎんぞコラ。

そうは思うものの、この家で最もカーストの低い俺に出来ることなどたかが知れているのだ。

「なんでもしますから許して下さい」

これに限る。

「はあ……では次の休みに買い物付き合いなさい、それで許します」

「うん？達也は？」

おまえ休みの日のたんびに達也とデートしたがるやん？という気持ちを込めて問いかけるが、どうやら仕事のようだ。姉さんも何やら用事があるらしい。でもどうしても買いたいものがあるそうだ。

さすがに妹様を一人で街中に放り出す事も出来ないわけで。

まあ、そういう事ならと承諾したことで何とか妹様のご機嫌を回復させることが出来たようだ。ふう。

その後、結局達也に相談する事が出来なかったことに気づいたのはしばらく後の事だった。

シズ、部活見学に行く

さあ！今日から部活勧誘期間だつて！

どんな部活にはいろうかなあー・・・おら、わくわくすつぞ！

・・・とか、そんな事を思っていた時代がある訳もなく、ただひたすらにメン
ドイだけなんだぜ・・・。

「そっか、でも私は楽しみだよ？」

そんな俺のがっかりハートを聞いた姉さんは俺とは対照的に瞳をキラキラさせながら想像を膨らませていた。

「奉仕部、SOS団、GJ部、スクールアイドル部、けいおん部、えーと、あとはなんだっけ・・・？」

いろいろあるんだよね!?ユウキが言つてたよ！とキラキラさせながら両手を胸の前
に持つてきてグツと気合をいれるかのようなポーズでこちらに満面の笑みを浮かべる
姉さん。

とても可愛らしく、また姉さんの胸が強調されて視線が吸い寄せられそうになつてし

まう。

てかよ、たまに姉さんの口から出てくるユウキってだれだよ!? ちよいちよいずれた発言をしてくる姉さんだが、特にひどいときのやつは問い詰めると大体ユウキってやつが原因みたいなんだが!?

そいつはいつたい姉さんに何吹き込んでやがんだよ!?

うちの学校の部活調べたけど一つも無いぞ!?!? この世界の話なんだよ!?

俺と同じことを妹様も思っているのだろう、生徒会としてすでに俺と同じように部活リストに目を通していたために、姉さんの言った部活が一つも無い事に気づいていた。

だが、楽しそうにしている姉さんにさっきの部活どれも無いよ? とか言えるわけもな
くね……。そもそも達也は部活に興味もないだろうし、そうか、と姉さんに相槌を打つ
ていた。

「ハチ……………」

「わかってる……………」

妹様から小声で聞かれるが、俺もうなずいて返した。

そう、俺にも妹様にも姉さんが悲しむようなセリフを言う勇気が無かったのだ。

「あんなに楽しみにしているのよ?」

「わかってる、最悪俺達で部活作る可能性も考慮しといてくれ」

ええ、わかったわ。と真剣な顔でうなずく妹様。

ここに4人いるし、あとは西城とか柴田とかからへんに手伝ってもらえばなんとかなんだろ。

「うくん、セクシーコマンドー部もありかなー?」

「?!?!」

とニコニコして謎な部活名を告げる姉さんに俺と妹様がそろって驚愕した。

なにその怪しげな部活名。そんな意味プな部活ほんとにこの世に存在するの!?

そんな気持ちを含めて妹様に視線を向けるも、知らないわよ!?!という焦ったような妹様の表情が帰ってくる。

いやほんと姉さんのこの謎知識はどっからくんだよ!?

ユウキって奴にあつたら絶対に1. 2発はぶん殴ろう、そう思った。でも、その前にこれだけは言っておこう。

「姉さん、他のはともかく最後のは名前的にダメ」

その後、なぜかセクシーなんちゃらにこだわる姉さんを妹様と説得しながら登校した。

そんなこんなで放課後になった。

「さあ、どんな部活があるか見に行こー!」

「おー!!」

今日のとてでも難しい授業も終わり、放課後になった。

エリカさんと一緒に部活見学に行く予定だ。元氣良く声を上げるエリカさんに私も元氣よく答える。

「レオ君と美月さんはこないの?」

「ああ、俺はもう決めてるからな!」

「すみません、私も決めてるので」

私の質問に2人が答える。もう決めてるならしょうがないね。

そう考えて今度は達也に視線を向ける。

「すまない、俺は今日から風紀委員だ」

「あ、そつか、がんばってね、達也」

「ああ、それと姉さん、くれぐれも魔法は使わないように」

「うん、わかってる」

私にしつかりと釘をさしてから達也は風紀委員に向かった。まったく、本当に頼りに

なる義弟だよ。

そんな達也を見送ってから私とエリカさんも出発した。

さあ、部活探すぞー！

「……ない……」

「ないわね……」

あれー？おかしいな……？

あれから私とエリカさんは掲示板をみたり、いろんなどを回ってみたけど、どこにも私がユウキから聞いた部活が無かったのだ。おかしいな……

「あ、でもほら軽音部はあったじゃない？」

そんな感じで励ましてくれるエリカさんだが、それに私は顔横に振る事で答える。

「けいおん部じゃないし、放課後でいいむじやなかったよ……」

「そ、そうなの……」

「うん、そうなんだ……」

ユウキがいった、けいおん部は楽器の演奏よりも、放課後にお茶会をする部活なのだ。だからちがった。

他にもぼらんでいあ部もあつたが、特に悩みは聞いてくれないらしいし、GJ部、SOS団は近い名前すらなかった。

アイドル部はあつたけど、特にライブをするわけでは無いらしい。一応見学に行こうとしたらエリカさんに全力で止められてしまった。

「いい？シズさん。アイドル部っていうのは、重度のオト・・・すごく鍛えられたアイドル好きの集団の事なの」

真剣に私に教えてくれるエリカさんにライブに出ないの？と聞き返すと

「ある意味ライブに出ているとも言えるかもしれないけど、あそこは私達のような知識のない人間が行つていい場所では無いの、すごくマナーに厳しいところなの」

だから、アイドル部に行くのはやめましょう。と言うエリカさんに私はうなづくことにした。まさかそんなに怖いところだったとは・・・。

ユウキが言うには廃校を回避するためにみんなでがんばる物語的な事を言っていたはずなのに・・・。

良く考えたらここは廃校の危機には無いからその辺が違うのかもしれないね。

それからは特に行きたいところが無くなったので、今度はエリカさんの行きたいところに行くことにした。

途中ですごい多くの人に囲まれて身動きできなくなりそうになったが、ちょうど通り

かかった達也が魔法で周りの人の動きを止めてくれたので、その隙に私がエリカさんを抱えて離脱した。

「それじゃあ達也君も一緒に行こうよ！」

それからエリカさんのその一言で私と達也はエリカさんと一緒に第二小体育館に行くことにした。

「お、やってるやってる！」

「おー………」

楽しそうに駆けだすエリカさん。

しばらく剣道部の演武を達也とエリカさんと一緒に見学する。

私やハチみたいに世界を渡った子がそうそういるわけもないので動きを見る分にはまだまだ、と言わざるをえない。

でも、エリカさんは私とは違うところを見ていたみたい。

「面白みのない見栄えを意識した立ち回りで予定通りについて試合じゃなくて殺陣じゃない……」

なるほど、エリカさんも剣術？をやるから今の予定通りの演武に不満があるみたい。

まわりに比べてわかりやすすぎるほどに格が違う女の子のそれがお気に召さないみたい。

私のほぼ我流による剣術もどきとは違ってとても綺麗な動きだと感心していたのだけれどなあ……

「本物の真剣勝負なんて人に見せられるものでもないだろう?」

そう言った達也にエリカさんが不機嫌そうにしていた。

「ふふ、エリカさんには不誠実に見えたかな? 剣技の、武の本質をおろそかにしている。そう思ったのかな?」

「んなつ!」

なんとなく、すねているように見えたのでそう言ってエリカさんのほっぺをつんつんして聞いてみると顔を真っ赤にして驚いている。

ふふ、当たっていたみたいだね?

もー!とかわいらしく怒っているエリカさんにふふと微笑んでいると、いつの間にか演武をしていた剣道部のあたりが騒がしくなっていた。

はつきりとは聞こえなかったが、何かを言い争っているようだ。

エリカさんの方を見ると、好奇心満点の表情だけで私に行きましようと言ってきている。達也の方に視線を向けると、はあ、とため息をつきながらも仕方がない、と頷いていた。

「見に行こうか」

私がそう言うと、達也とエリカさんがそれぞれああ、とかやった！と答えながら騒動が起こっている場所に向かう。

「おもしろくなってきたー！」

わくわく顔をかけながらも隠すことなくエリカさんが私と達也を連れてたどり着いたここでは剣術部と剣道部でいいあらそいをしているみたい。

どうやら剣道部の時間なのに剣術部がじやまをしてきたみたい。

あれだね？好きな子にちよっかいをかけちゃうやつだね？今も剣道部のとても綺麗な剣をしていた子にちよっかいをかけてるみたい。青春だなー……。

若いなー、これが若さカー……。私も諦めなかつたり、振り向かなければ若くなれたりするかなー？

それからどんどん口論していくのを眺めていると、どうやら試合をするみたい。

「壬生紗耶香、一昨年の剣道大会全国2位と桐原武明、同じく一昨年の剣術大会チャンピオンの試合よ」

とエリカさんが私と達也に説明してくれた。

おお、それはすごい組み合わせだ。

「そろそろはじまるみたいよ」

そうエリカさんがいうのと時を同じくして、壬生さんと桐原さんの試合が始まった。

シズ、部活見学に行く2

「ぬおおおおおー」

と上段から踏み込んでいく桐原さんだが、壬生さんは冷静にさばき、返していく。

「おお、すごいね?」

「ああ、女子の剣道ってレベルが高かったんだな」

さっきまでの綺麗な演武から一変して、とても荒々しい、だけど、今まで見て来た子達の中では圧倒的なまでの実力に私と達也は驚いていた。

確かに世界を渡った私やハチには速度や臂力面で差があるが、その洗練された剣道の型が相当な修練の果てに身についたものである事は容易に想像出来た。

それは達也も思っていたようで、とても関心しているみたい。そう思っていたら、エリカさんが首を横に振りながら教えてくれた。

曰く、中学時代とはまるで別人、たった2年でそうとう強くなっているそう。しゅごい。ちがった、もっと若さを出すにはしゅごーい!だ。うん、しゅごーい!

それからしばらくして、勝負は決した。

が、そこからさらに雰囲気がおかしくなっていた。しゅごーい?ちがう?

一度は試合に敗北した桐原さんが、今度は竹刀に魔法を付与して壬生さんに切りかかっていた。あ、あ、あれは・・・まさか・・・

「これが、うわさの最近の切れやすい若者・・・!」

「えっ?!この状況でそこに反応するの?!?!」

ちよつと好きな女の子に剣道で負けたからつて今度は魔法で無理やりだなんて、最近の若者事情に驚くよ。

横からエリカさんがなにか言っているが、周りでちよつと叫び声が上がったせいでも聞くこえなかった。

え?なにかな?と私がエリカさんに聞き返そうかと思つたところで再度桐原さんが切りかかっていた。

おつと、壬生さんが体勢を崩してしまっているし、これは危ないかな?

「達也」

「ああ」

「あぶないっ!!」

私、達也の短いやり取り、それだけで達也には十分通じる。それとかぶるようにエリカさんが壬生さんを心配した声を上げるが大丈夫。

即座に桐原さんの前に躍り出た達也が、両腕を交差させて魔法を発動させると桐原さ

んの魔法が消される。

「なっ!?魔法が、キャンセルされた．．．だと．．．!?」

突然魔法を消去され、なん．．．だと．．．!?する桐原さんに立ち直る隙を与える間もなく達也は組み伏せた。

うん、いまのはなかなかイイ踏み込みと、無力化だね。流石九重さんのところで体術を習っているだけあるね。

体術のみの技能だともう勝つのは難しそうだなあ。

そう思っている間に達也は風紀委員会に違反者の報告をしている。

それに怒った剣術部さん達が達也に怒っている。ういーどで風紀委員だど!?って驚いている人もいるみたい。みんな流れるように自然に使うなあ．．．ういーど．．．。それにしても．．．やっぱりあれだね。

「切れやすい若者達だ．．．」

「え!?この状況でまだそこなの!?」

達也は大丈夫だろうけど、ハチと深雪がそうならないように気を付けないと。

私が新たな決意をしている間にもまたもやエリカさんが私に何か言っていたが、またもや回りが狙ったかのように騒がしくなり、聞こえなかった。

剣術部のみんなにはどうやら達也の返答がお気に召さなかったみたい。

ああ、それよりも二回も聞き逃すなんてごめんね？とエリカさんに謝罪すると、そのエリカさんは今度は達也の動きに気を取られて聞こえていなかったみたい。むむむ……。

「すごい……だれも達也君をとらえられない……」

あまりにもすれ違うのでむむつてしてる私。

そんな私とは違ってエリカさんは全てを見切り、いなし、かわし、あしらい続ける達也の技量に衝撃を受けているみたい。

確かに、達也くらいの若さであればどの技能を持つ子はそうそういないだろうしね、毎日九重さんの所でたくさんの人と組手をしている達也からすればこれくらいは当然なのだけだね。

「達也、手伝った方がいい？」

「いや、大丈夫だ」

「そっか」

それなりの人数に囲まれてる達也に一応声を掛けてみたけど、やっぱりいらぬみた
い。

さつきの桐原さんや壬生さんくらいの人達ばかりだったら手伝おうと思つてたけど、これならいらぬかな？

隣で関心してるエリカさんと一緒に観戦していると、困んでた人達が魔法を使おうとしているのが見えたが、それも達也がぴこぴこしてたら無効化していた。

まわりの人達が、なにがなにやらって感じで驚いているけど、実は私もなにかよくわかってない。

エリカさんが私にあれは何？って顔で聞いてくるが、そういうのは達也かハチか深雪に聞いて欲しい。

よくわかんないと素直に伝える。うう……、前にハチと達也が開発してた魔法だと思うけど、難しくくてわからなかったから……。勉強します……。

それからそう時間もかからず制圧した達也は桐原さんを連れて報告に行ってしまった。

「それにしてもすごいね、達也君は」

「ふふん、私の自慢の義弟だからね」

本当にすごい、と感心しているエリカさんに私は自慢げに伝える。

「うん？義弟なの？」

「あれ？言つて無かったかな？」

聞いてないわね……と答えるエリカさんにそういえば言つてないかな？と思いつつ

た。

ちようどいいタイミングだったかな？と思つたので私はそれじゃあ後で説明するとエリカさんに応えた。

「特に隠してるわけでもないし、せつかくだから仲良くなつた皆にもまとめて説明したいしね」

「それもそうね」

という事で私とエリカさんは放課後に集まってお話しする事に決めた。

「よし、それじゃあ達也と深雪とハチが終わるまでもう少しまわろうか」

ほんとにセクシーコモンドー部無いのかな？

もう一度、しっかりと見直してみるのだった。

「くそつ、なんで俺も巡回しなきゃならないんですかねえ？」

愚痴がでてしまうのもしょうがない。だって、仕事させられてるのだから……。

結局なんだかんだで生徒会入りを回避できなかった俺。

一生懸命断ろうとしたり、逃げようとしたが、妹様の前ではあまりにも無力だった。「しつかりと渡辺先輩の手伝いをしてきなさい」

「はっ」

女王様のような表情で冷たい目で見られた日には俺みたいな雑兵はハイカイエスかヨロコンデくらいしか言えないのだ。らじやーとかでも可。

もちろん今日の魔法使用分なんかほとんど残ってないが、そんなもの妹様の氷の表情の前では無意味なのだ。

まあ、実際に喧嘩をとめるだけなら魔法いらんけどさ……。

なんのために模擬戦して風紀委員入りを避けたと思ってるんよ……。こんな絶対おかしいよ……。でもそんな事死んでも言えない。だって言ったら死ぬもの。完全にデッドロック状態だわ。しかもこの状況、妹様の計略によるものだから最初から回避できない運命だったというね……。泣ける。

生徒会の仕事は？とせめて屋内で何とかならんかね？と聞くと。

「お姉さまが部活見学するみたいだから」

ただ、それだけの理由で俺は風紀委員の手伝いをさせられることが決まった。妹様の達也と姉さんへの愛が重い。

そんなわけで、姉さんを探していたのだが、どうやら達也と合流したとさつき連絡が

あった。

なので、俺はしぶしぶ風紀委員の手伝いとしてパトロールをすることになってしまった。

とりあえず適当にふらふらしていると、見覚えのある2人が見えた。

「あ、ハチ」

「ハチ君、生徒会ですか？」

ちみつ子の北山とAクラスの良心、三井だった。

俺はおう、と返事をしながらふと思う、こいつら、ガンダムに出てきたら絶対どっか死にそうだな・・・と。

もちろんそんな事言えんが。

「2人はなんか部活決めたのか？」

とりあえず、死にそうだから気を付けろよ、とか言えるわけないのであたりさわりのない質問をしておく。

三井も北山もZガンダムに出てきたら絶対死ぬと思うとか思ってもいっちゃだめなのだ。

下手に言つて、それが妹様に伝わったらと思つたらね、その日が俺の命日になるだろうしね。正直SEEDに出ても死ぬと思うとか言えるわけないしね。マユラ、アサギ、

ホノカ、みたいな感じだね、最終決戦あたりだね。

あ、そんな事考えてたらめっちゃ罪悪感が出て来た。

北山も三井もA組のなかでは俺と妹様よりの考え方をしてるし、三井なんかはめっちゃくちや良い娘でね、ほんとA組の癒しですよ。それなのに俺ってばよ、さつきから死にそうだな、って最低やんけ!!

「あ、あの？ハチ君？どうしましたか？」

そんな最低な俺がうがあーってしてると、三井が心配そうな表情をしていた。

「ああ、いや、大丈夫だ、安心しろ、何も問題ない。パーフェクトだ」

「それたぶん大丈夫じゃない・・・」

思ったより三井の顔が近くにあったり、慌てて下を向けば姉さんほどではないが、たゆんとした胸が視界に入り、そこからさらにあわわついていた俺は適当に訳わからん返事をする、北山が冷静にツツコミを入れて来た。

「ん、いや、本当に大丈夫だ。すまん」

「そうですか？ならよかったです」

そう言つて微笑む三井。

たわわな自身の胸にてを当ててホツとしながら微笑んでいる。

くっ！なんていい子なんだ・・・！この笑顔、守りたい。

「ああ、それより、2人は部活なんか決めたのか？」

「ううん、まだ」

「これからいろいろ見に行こうと思ってたんです」

「そうか、と答えながら微笑む三井といつもどおりに感情の薄い北山をみて昨日の事を思い出した。

「そういえば、各部活に成績優秀者の情報がリークされてるんだったな。」

「ここは魔法科高校で、夏には九校戦があり、そこがなんか大事ならしい。んで、この2人は成績優秀にして美少女だ。」

「そこまで考えればわかるだろう？そう……。」

「わーわわわ……!!」

「んんっ……!!」

「部活入りませんかー!とかどこどこ部どうですかー?カレーどうですか?とかめっちゃ言いながら迫ってくる、というか駆け寄ってくるのが見えて、もうあれね大量のゾンビに群がられる感じ?ちようホラー。」

「そんなものを見たせいとか、三井と北山がめっちゃびびっている。いや、三井だけか?北山は……たぶんびびってるのか……?あれ……ジト目レベルが上がってる位しかわからんな。」

しょうがない、仕事はしたくないが、A組で唯一話す相手だし、こいつらになにかあったら妹様が怖いし、仕方ない。仕方がないネ。

ハチ、A組の良心を逃がす

「あわ、あわわ……！」

「んん……」

いまにも人の波に飲み込まれそうになっている2人。

光井は半泣きの表情でどうしよう!?!と可愛らしく北山に声を掛けている。

北山もどうしよう、って感じで光井を見ている、このままでは2人はこの人波に蹂躪されてしまうだろう。

「逃げるぞ」

「わわっ！」

「うんっ」

先頭集団があと一歩というところまで来たところで俺は光井と北山の手を掴んで走りだす。

それと同時に残り使用回数の少ない魔法を申し訳程度に放つ。

俺の放った極小の魔法により一番先頭のガタイのイイあんちゃんを足で滑らせてそれに巻き込まれるようにしてゾンビ集団の動きが鈍る。よし、今の内に距離を取ろう。

てててーっつと逃げるとすぐに後ろからゾンビ集団が復活して追いかけて来た。

「ひいっ!!」

不死身のゾンビ集団がユラユラと起き上がっているようにでも見えたのか、光井がもう泣きだしてしまいそんな感じで悲鳴を上げる。北山も表情が薄いが恐怖しているのがわかる。いや、うそ、正直わからんね。

「大丈夫だ、俺が2人を、守るからっ!」(CV 鈴村健○っぽい感じで)

「ふええっ!」

一度くらい言ってみたみたいセリフだけ(ドヤア)A組の良心は、俺が、守るっ!!種パリーン☆なんつって。

そんな事考えながら恐怖の顔から一転、顔を赤くし光井と無表情無反応ながらも若干顔をうつすらと染めている北山を牽引していく。

後方をチラリと見るとさすがは魔法科高校というべきだろうか、少しずつ距離が近づまっている。

「はあ……はあ……」

「ふう……ふう……」

光井と北山も必死に走っているが、辛そうだ、どうする?あまりやりたくはないが、物理的に対処するか?そう考えていると、今度は後方のゾンビ集団とは別口で高速で近づ

いてくる気配がした。

「すまんっ！」

「きやつっ！」

「わっ」

高速で接近してくるそれを確認した俺は、とつさに光井と北山の2人を抱き寄せ、両腰に抱えるとサイドステップで高速で接近してくるやからから回避する。

「へえ……？」

「やるねえ……」

俺に回避されると思わなかったのか、スケボーのようなものに乗った二人の美人達はすぐさま切り返し、停止して俺に視線を向けてくる。

ああ……これはまた、メンドクサイなあ……。

「あ、あの……！ハチ君!？」

無言の北山とは違い光井はめちやくちやパニくっている。それもそうだろう、まるで荷物のように抱きかかえられているのだから。ほんとスマン……。

「ナイト気取りかな……？痛い目を見る前に……」

「その子達をよこして貰おうか……」

こりやまた……完全にこの2人をロックオンしてるじゃないか……あきらかに拉

致する気マンマンの気配がするぜ。

ほんと何なの・・・？メンドクサイよう・・・。それでもこんな危険な誘拐犯に差し出すわけにはいかない訳でして・・・。

「お断りします光井、北山、スマンがもう少し我慢してくれ」

「ええ〜?!」

「わかった。お願い」

さつきからずつと泣きそうな悲鳴を上げ続けている光井には申し訳ないと思う。でも俺は悪くないと思うの・・・。北山は状況を飲み込めたのか大人しくうなずいた。

状況をさつと確認すると、後ろからはゾンビ集団、前方にはスケボー美女2人。

状況は不利だが、なんとかするしかない。こいつらになにかあつたら妹様が怖いからなっ！

「そう・・・それじゃあ・・・」

そう言つてCADを操作する長髪の美女。

だが俺はその発動を待たずに正面の長髪と短髪の美女へと距離を詰めるように走り出す。

長髪美女の魔法が発動し、叩きつけるような下降気流が発生するが、足止め目的のその魔法を俺はサイドステップで回避していく。

「これもよけるんだ、ほんとうにやるわねー」

関心する長髪美女。さらに短髪美女の方が俺を、というより光井と北山を捕まえようとして接近してくるが、俺はさらに加速、回避し、美女たちの側面にある学校の校舎を壁走りしてやり過ごしていく。

2人を抱えているため魔法は使えない・・・というわけでもないが、使用できる回数があまりないのでここは逃げの一手だ。

そのまま俺はすててーっつと走る。

後ろからは美女たちが迫って来ているのが気配でわかる。

「むう、さすがに生身で走っても無理か・・・？」

「え？これ魔法つかってないの？」

ひゃー！とかいやー！とか言ってる光井とは対照的に北山は随分冷静に質問してきた。

荷物みたいに運ばれながら冷静に質問してくるとかすげえな、と思いつながらもああ、と答える。

北山がそう思うのも仕方がない。今の俺の走るスピードはおおよそ生身で出せる速度ではないのだ。しかもとても軽いとはいえ女の子を2人も抱えながら出せるような速度では決してない。それでもスケボーに乗ってる人達にはずんずん迫られているが。

このままだと追いつかれるなあ・・・はあ。

「仕方が無いか・・・コール、試作術式起動」

『ミトメタクナイ!!』

両手が塞がっているので音声入力で魔法を発動する。

本当はCADに返事なんてさせる必要などないのだが、俺と一緒にSEEDを見ていた姉さんがハロかわいいと連呼したことにより起動時に返答するようになったのだ。

腕の中にいる北山が認めてくれないみたいだよ?と言っているがスルーだ。俺もそう思うのだが。姉さんがこれが良いと言ったのだからしょうがないのだ。

「第一段階限定解除」

『ハロー・ゲンキ!!』

一応四葉の本来には第一段階までなら俺の任意での解放許可もらっているし、姉さんには達也が付いている。

これで姉さんへの封印が弱まる代わりに俺の使用できるサイオン量と演算領域に余裕が出来た。姉さんが一人だったら何しでかすかわからないから出来ないが、達也や妹様と一緒に問題ない。

万が一姉さんが魔法を使おうとしても対応できるからな。

突如として俺からサイオンが吹き荒れた事に北山と光井が驚いて、後方の美女達にも

緊張が走る。

まあ第一段階のみじゃまだまだ余裕が出来るとは言えないが、先ほどまでのコップ一杯分のサイオンに比べれば今の俺はバケツ2杯分くらいは余裕で確保出来ている。ちなみに、これでも達也と妹様に比べると悲しくなるくらいに少ないのが泣けてくる。一般的な魔法師のサイオン量よりもいまだ少ないからなあ・・・。

それでも、さつきまでとは全然違う訳で、加速術式を起動して少しづつ美女達を離していく。

途中で風の妨害が入るが、同様の風をぶつけて相殺し、地面が隆起すれば跳躍して回避する。

そこから更に空中に風の足場を作り、そこを足掛かりに再度加速して距離を稼ぐ。

「コール、アイスノンぶぶき」

『デヤンデイ!!』

反撃としてこれまで使えなかった規模の氷結魔法を放つ。

氷の結晶が吹雪となってそれなりに大量に美女達に迫っていく。

思わず足を止め、防御に専念するのを確認するとさらに俺はループキャストによりアイスノンぶぶきを連射する。ふはははは!!サイオンにはまだまだ余裕あるぜえー!と内心高笑いしながらその場を離れ誘拐犯から逃げおおせたのだった。

なにそのネーミング？とつぶやいている北山や、止めて止めて降ろしてえ——！無理無理無理無理もうむりい——!!と叫んでいる光井は大変申し訳ないがまるつとスルーさせてもらつた。いや、ネーミングは姉さんに言つて欲しい。俺や達也が新しい術式を組むとやたらと名前を付けたがるんだよ……。ちよつと可愛さアピールしようとして逆にセンスが古い感じになつてるんだよ……。本人は精一杯可愛い名前を付けたと満足してるから何も言えないんだよ……。これはまだましな方で、わんわんおーとかわんだにやーとかあるんだぜ？さすがにこの辺は音声入力では使いたくないぜ……。それはそれとして……。大泣きしている光井には本当に申し訳ない。ちよつとかわいといとか思つたけど本当に申し訳ない。

それからしつかりと美女達を撒いたことを確認した俺はぐったりした光井とやたらキラキラしている北山をそつと降ろした。腰が抜けているのか、半泣きでへたり込む光井に心から謝罪しつつ、スケボー装備の誘拐犯が出たと風紀委員長様に報告しておく。髪の毛の長いのと短いのつて言つたらあいづらか！とキレてたのできつと常習犯だと思われ。

達也は達也で危険な魔法を使った人を捕まえたら集団でボコられそうになつたとか言つてた。まこと、魔法科高校とは恐ろしいところだと恐怖しておく。おうち帰りたいでござる。

その後、何とか回復した光井だったが、北山がSSボードやりたいと言い出してさらに半泣きになったのは可哀そうだった。ふるふるしながら立ち上がったのに、すぐにくずれ落ちたもんなあ……。ちよつとかわいいか思ってたけど、流石に不憫すぎる。

まあ、普段無表情な北山からすげえ目をキラキラさせながら言われたらそりゃ断れんよなあ……。光井、どんまい。

ちゃんと後で妹様からフォロー入れてやるようにしよう、さすがに可哀そうだもんな。A組の良心で俺にとって清涼剤のような光井にはやはり朗らかに微笑んでいてもらいたいもんな。言えんけど。

シズ、明日から頑張る

結局、ユウキに聞いてた部活はどこにもなかったよ……。

いろいろと見て回ってみたけど、どこにも無かった。

仕方が無いね、明日からは今日見た中で気になったところを中心に見て行こう。

部活見学の一日目が終わり、達也、深雪、ハチと合流した私とエリカさんはそのままレオ君や美月さん、雫さんとほのかさんと一緒にこの前集まった喫茶店に行くことになり、その道中で私はそんな話をした。

達也はそうか、残念だったな。と励ましてくれた。ほんとそれな、だよ。

深雪とハチはなにか目と目で語り合ってた。あいこんたくとってやつだね。

深雪とハチは普段はそんなでも無いんだけど、たまにこうやってやりとりする事がある。私が聞いてもなんでも無いって言うけど、お姉ちゃんとしては少し悲しかったりして。くすん。

それからみんなで喫茶店に入り、それぞれ飲み物と軽食をつまみながら今日の話をした。

「いやーそれにしても、良くケガしなかったな？」

とても関心したような顔でレオ君が達也に問いかけるが、達也はよく切れる刀と対処は同じと答えた事にみんなが驚いていた。

「・・・？何か変かな？当たらなければどうという事はないって昔の偉い人が言ってたんでしょ？」

たしかあずなぶるさんとかいう人だった気がする。みんなが何に驚いて居てるのかわからなかった私はとなりに座るハチに聞いてみた。私もそうだけど、ハチも出来るよね？

そう聞くと、またみんなが驚いていた。

「まあな、ただ、達也が体術でできるって今まで光井達に話して無かったろ？」

「ああ、そういうえばそうだったね」

「俺や姉さん、達也レベルの体術はたぶん同世代ではほとんどいないぞ？」

「そうなんだ・・・」

そうだったのか・・・たしかに、深雪には体術だけじゃ対処できないしね。うっかりだよ。

「はあ・・・深雪も当然すごいけど、達也君もハチ君もシズさんも規格外なのね・・・」
「失礼な、俺は体術は姉さんに負け、魔法も深雪に負け、身長では達也に負けてるぞ、つ

まり規格外なのは俺以外だ」

「それは無理があるだろう・・・」

エリカさんにあきれられたハチが即座に否定するが、それを達也に否定されていた。ふふ、おもしろい。

「それでも桐原先輩も超高校級なのよ？」

「心配では無かったですか？」

私がクスクスしていると、エリカさんが元の話に戻そうと深雪に聞いていた。美月さんも不安そうなので、だいぶ驚愕してる感じで聞いているが、深雪は自身満々に、それこそ、自慢するように朗らかに微笑んでいた。

「ハチやお姉さまならいざしらず、お兄様に勝てる者などいるはずがないもの」

「ハチ君とシズさんなら勝てるんだ・・・」

「少しも躊躇しないのね・・・」

自信満々な深雪の発言に雫さんが冷静に突っ込んでいるけど、どうだろ？最近達也も大分腕を上げてるし、条件次第では負けれると思うんだけどなあ？

エリカさんがちよつと引いてるけど、深雪はそれでも自身満々だった。

「単に体術がすぐれているだけでは無いの」

それから深雪が皆にいろいろ教えていた。

なるほど・・・あのときは達也の魔法無効化魔法だったのか（今更）。ユウキは右手がいろいろ無効化する人もいるって言ってたけど、達也は両手でピコピコを操作する事で相手に使わずらくしていたらしい。なるほど・・・よくわからない。

「お兄様、キャストジャミングをお使いになったでしょう?」

「「「キャストジャミング!?!?!」」」

「き、きやすと・・・じゃんく・・・?」

・・・??

いや、ちよつとまつて、聞いたことある! 聞いたことあるよ!! きやすとじゃんく? じゃんく?

あれでしょ? わかるよ? ほら、ここ!! のどくらいまで出かかっているの! こないだ聞いたの!! えーつと、あれだよ? ホントに、知ってるの! 知ってるからね? ちよつと出てこないだけだよ!?

私えーつと、えーつと・・・と考えてる間にも話は進んでいた。

深雪と達也がいつものように仲良くしていると、エリカさんとレオくんがつつこんだり、あきれたりして遊んでいた。ほのかさんや雫さんもちよつと赤くなっていて、とてもかわいらしいのだけど・・・えーつと・・・。

それからレオ君やエリカさんや私にもわかるように達也とハチのきやすとじゃんみん

ぐについての説明会が始まった。

・・・はい、すみません、全然わかりませんでした・・・くすん。

なんで現代のお勉強はこんなにむずかしいの・・・？魔法って自分を強化するか燃やすか爆発させるか剣にまとわせるだけじゃだめなの・・・？

なんでびこびこが必要なの・・・？さわったら壊れるんだよ？いらないよね？

でも、そんな事言えないよね、だって私はお姉ちゃんだし。ハチや達也や深雪に迷惑かけてばかりのお姉ちゃんだけど、言えないよね。うん、これからもがんばろう。

そう決意している間に達也の説明は終わっていた。

・・・うん、明日からがんばろう。

それから、剣道部とのあれこれがあった時の話ついでに私達についてを話すことにした。

勿論本家の四葉の事は話せないし、深雪と達也の封印なんかも話せないの、話せる範囲で、だけど。

「そういえば、シズさん達は本当の兄妹じゃないの？」

「あれこれの時に達也を義弟と呼んだことを話したときから気になってたのかエリカさんが私達に質問してきた。」

すると、深雪がそう言えば説明してなかったわね・・・と可愛らしく紅茶を飲みながら話始めた。

「正確に言うとうと、私とお兄様は真正正銘の兄妹よ」

じゃあ双子？と聞くエリカさんに達也が4月生まれと3月生まれと説明した。

その話にはポンと手を打ったのが美月さんだった。

「ああ、それでですか。達也さんと深雪さんのオーラが似ているのに、シズさんとハチさんは随分とオーラが違っていたのが気になっていました」

おーら・・・とな？それって魔素の事かな？さいおんとは違うやつだよね？

美月さんも実はゆにーくすぎる持ち？こっちの世界にもあるのかな？そう思ってたら違ったみたい。

達也が言うには、えーと、れいし？りゅうし？ほうしやこうかびんしようっていう、一種の特殊能力らしい。

あまり違いがわからないけど、たぶん向こうの世界のとはちがうみたい。世界の声もこっちでは聞かないしね。

「それで、私とハチが司波家に保護してもらったの」

「何がそれでなんですか・・・？」

さらっと言ってみただけ、流石にわかってもらえなかったね、ほのかさんが可愛らし

く首を傾げ、フライドポテトをつまみながら質問してきた。となりのハチがい、癒される・・・と打ち震えているのを横目に、私はどこまで話そうかと考える。

すると、深雪が私の代わりに説明してくれた。

「私とお兄様の命を救ってくれたのがお姉さまなの」

詳しくは話せないのだけれど、と前置きして深雪は皆に説明を続けた。懐かしいねえ・・・。

旅行先でトラブルに巻き込まれた時にさっそうと現れてすばつと救ってくれたのが私、シズだった。その姿はまるで救国の聖女ジャンヌダルクもかくやというほど、凛々しくも美しく・・・と説明する深雪に恥ずかしくなってきた。や、やめてえ・・・。

それで、なんやかんやで解決した時に、なんやかんやで仲良くなって、でも私には帰る家が無いので達也と深雪の家で居候と言うか、養子にした。と一気に説明した深雪。とても楽しそうだね・・・。私は恥ずかしくて泣きそうだよ？

「それから私とお兄様とお姉さまは・・・」

「そ、そうなんですか・・・」

どんどん話す私達の可愛い義妹である深雪はどんどんと昔の話をしているが、ほのかさんやみんなが乾いた笑みを浮かべているよ・・・。達也あーと視線を向けると、こくりと頷く。さすが達也、そこにしびれる懂れる！

「深雪」

「あ、すみません、お兄様」

達也が深雪をそつとなでる事ですいぶんと熱心に話していた深雪が話しすぎに気づいたみたい。

ほつとみんなが息をつくとき、美月さんが、あら？と右手の人差し指を頬に当てながら可愛らしく首を傾げた。また隣でハチがい、癒されるう・・とつぶやいていた。

「それではハチさんは・・？」

「シズお姉さまについて来たわ」

「説明雑う!!シズさんとの差がすごいわね!」

さくつと説明する深雪にエリカさんが華麗にツツコミを入れていた。

ふふ、ずいぶん仲良くなったねえ?

私が微笑んで居ると、みんなも気になったようで、ハチに視線が集まっていた。

「あん?俺は姉さんに拾ってもらった以前の記憶が無くてな、姉さんと一緒に旅して、達也と深雪のトラブルに巻き込まれて、それから世話になった感じだな」

視線に気づいたハチが説明すると、みんなの空気が凍ってしまった。

・・・あれ?これも言ってなかったかな・・?

シズ、体験入部しゆる

「まあ・・・、なんだ・・・その、そういう事だ」

とても重い空気になってしまったのを反省したのか、ハチがしどろもどろに話しを終わらせようとした。

うーん、どうしようかな？

ハチも思ったように、それからいろいろとわちやわちやしてる、ふふ、かわいい。

「ま、まああれだ。それで、達也と深雪の家に引き取られてだな、その、なんだ・・・ガンダムに出会ったわけだ」

「は？ガンダム?！」

何を話せばいいのやらって顔をしていたハチが口にだした言葉にエリカさんが反応した、というより、何言ってるんだコイツって顔をしていた。それにレオ君がおお！と手を打った。してつるのかな？

「ガンダムか！いいな！俺も少し前にGBNやってたぜ！」

「お？まじか?！」

「おうよー！」

それからハチとレオ君は2人の世界に入ってしまった。これがレオ×ハチってやつなのかな？ 順番にこだわらないといけないらしいけど、私にはよくわからない世界だ。ユウキにも詳しくわからないけどって説明されたっけ……。

「どうやら、ハチの記憶のヒントがあるみたいなのよ」

「え？ ガンダムに？」

「ええ……」

ハチとレオ君が別の世界に旅立ってしまったのを深雪が優しく？ ちよつとあきれながら捕捉してくれた説明に雫さんが胡散臭そうな表情で深雪に聞くが、深雪も遺憾ながら……という表情で答えた。

「嘘でしょ？」

「いや、本当だ。アレを見たときになぜかやたらと反応してな、あとエリカ、お前の苗字にも反応してたぞ」

「ええ!? 千葉家のゆかりなの？」

わからない。と答える達也がそもそも最初は自分の名前すらも覚えて無かった事、会話や一般常識と呼ばれるものの知識はある程度ずれがあつたものの問題無かつたが、自身の事はさっぱり覚えて無かつた。と説明する。

そういうえばあの頃は名前もわからないから大変だったなあ……。

「今の名前はかろうじて本人の記憶からひっぱりだした名前なの」

「それで犬みたいな名前なのね・・・実はナンバースなのかと思ったわよ」

あの戦闘力とかね・・・魔法が使えないのはそれもあるの？とエリカさんが問いかけると達也が違う、と首を横に振った。

「あれは、シズの魔法力に干渉してるせいで使えないだけだ」

「え？どういう事ですか？」

ああ、そこは話すの？は、話さなくても良くないかな？ね？達也？お願い！私は必死に胸の前で両手を合わせて達也にお願いしてみが、そんな私の心の懇願は達也には届かなかったみたい。

ああ、こうやってお願いすればハチと深雪は聞いてくれるのにい。

「シズは、普通のCADを使えないんだ。魔法力が強すぎて爆発させてしまう」

「こないだの実習の時はビックリしたわよ・・・」

「ゴメンナサイ・・・」

そ、そんなにはつきり言わなくても良くないかな？本当の事だけど、お姉ちゃん、恥ずかしいよ。

でも、あれは学校の機械がいけないと思うの。あんなにおっきいのに、台車を動かすだけの魔法で、あんなにもろいなんて誰も想像も出来ないと思うの。

あの日そういつて達也に言い訳をしたら、学校側も台車を動かすだけの魔法で爆発させることは想定していなかっただろうから仕方が無いといつてたっけ。ぐうの音も出なかつたよ……。

「会ったところから機械に対して苦手意識があつてな。機械やCADの操作が苦手になり、気付いたらCADのみならず、電子機器全てが爆発するようになったんだ」

「そ、そんな……こと……ナイヨ?」

うう……否定したいけど、うう……。

みんなからのウソでしょ……!?みたいな視線がイタイよお……。

すつごく気を付ければなんとか出来るんだよ!?学校の入試のだって、すごく慎重になんとか操作出来たんだからね!?まあ、ハチだけじゃなくて、深雪にも私の封印をしてもらつてたけど……。

「大丈夫です、お姉さま」

「うう……ダメなお姉ちゃんでごめんね?」

天使のような微笑みを受かべる深雪に私は抱き付く。うう……妹に慰められる……お姉ちゃんなのに……。

「そういうわけで、これからシズが何かを操作しようとしていたら気を付けてくれ」

「ええ、わかつたわ」

「うう・・・みんなの優しさが、つらい・・・」

達也が心配してくれてるんだらうけど、エリカさんの力強い返答も、その優しさが私の心にグサグサくるよ・・・。

そんな私を気づかってくれたのか、美月さんが優しく微笑んでくれた。

「大丈夫ですよ、シズさん、誰にでも苦手な事はあります。一緒にがんばりましょう?」
私もこの眼を制御出来ないんです、一緒にがんばりましょうね?と言ってくれた美月さんが、天使に見えたよ。これはあれだね、私に天使が舞い降りた、ってやつだね。

「頑張ろうね、美月さん」

「はい!がんばりましょうねシズさん」

私と美月さんが仲良くなれた瞬間だった。

そうしたらさみしがり屋の深雪も私の袖をくいくいと可愛らしくひっぱり、少しすねたような表情をしていた。

「お姉さま、私もお手伝いします」

「うん、いつもありがとうね。深雪」

ふふ、いつもありがとうという気持ちを込めて深雪の綺麗な髪をなでてあげると、とても気持ちよさそうにしていた。

こうして、部活見学の一日目は私の心に大きな傷跡を残しつつ、私が不用意に機械を操作しないようにみんなで気を付けるといふ不名誉極まりない同盟が結成されて終わったのだった。泣きたいよ……。

—— 次の日 ——

部活見学2日目だー！ー！！

今日もとっても難しい授業が終わった。いろんな意味で終わったよ……。
今日もまた実習で機械を壊してしまったけど、切り替えて行こうと思うの。

本来はういーどには先生がいはいはずなのに、今度から先生が付くことになったらしいけど、絶対に私のせいだよね？

先生からすごく信じられないが……って言われながらいろいろ聞かれて、達也がそれに答えてくっつけてしてたらいつの間にかそういう事になってた。

何を言ってるのかわからないかもだけど、本当なの……。催眠術とか、そういうのじゃないの……。

・・・何度も言ってるけど、触ったら爆発するような機械がいけないと思うんだ・・・
ぐすん。

まあ、でも、これからは部活見学の時間だし、切り替えて行こう！うん。

「さあ、いくぞー！」

「今日はどこに行くんですか？」

私がおー！と握りこぶしを上げると、隣に立っていた美月さんが微笑みながら問いかけて来た。

昨日の内に美術部に入部を決めた彼女が今日は付き合ってくれみたい。決して私
が勝手に機械を触って壊してしまう事を防止するための監視員ではない、純粋な友情だ
と思うの。達也から決して美月から離れないように、とか魔法を使わないようにとか
いっぱい言われてるけど、心配性が過ぎると思うの。私だつて成長してるし、こう見え
てみんなよりもずっと年上なんだから（推定150歳くらい）

ちなみにレオ君は山岳部に決めたい。なるほど・・・美月さんの美術部は、私に
は難しいけど、レオ君の山岳部はイイかもしれない・・・。今度行ってみようかな・・・。
そんな事を考えながら私達は部活見学へと歩き出した。

「ねえ、美月さん、あつちのあれ、えすえすぼーどなんかかって奴、やってみない？」

「ええ!!?SSボードですか?だ、だめですよ!あれ魔法使うとこですよ!!」

とりあえず、雫さんとほのかさんが入ったっていうえすえすぼーどなんかかってところに来てみたら体験できるみたい。

これはやるしかないよね!って美月さんに言ってみたらすごい勢いでダメって言われたでござる・・・。ござるって私が子供の頃でも使ってる人見た事なかったけど、これで使い方あつてるかな?いろいろと現代知識を教えてくれたユウキはとても物知りだね。

それはそうと、せっかくだから体験してみたいなあと思ったので説得してみようと思う。

「でも、楽しそうだよ?雫さんとほのかさんも入ったって言うし、ちよつとだけダメかな?」

今は2人とも見かけなくて、2年生の人が案内してくれていた。2人はいないけどせっかくだからやってみようと思っただけど・・ダメかな・・?そんな気持ち

込めて美月さんに聞いてみる。

「でも……達也さんにはシズさんに絶対に魔法を使わせないようにってお願いされていますし……」

「わかってるよ、でも、何事も経験だと思いの、それに今日は大丈夫な気がするの」

「ううん……でも……」

私が一生懸命美月さんをお願いして、少しずつ美月さんがうなずいてくれそうになって来た。

あと少し……これで勝つる……「でも、やっぱりダメです」なん……だと……だよ。

「ダメ？」

「ダメです」

もう一度、今度は胸の前で両手を合わせてお願いのポーズで聞いてみるが、美月さんは胸の前でバツテンをしてダメですモードに入ってしまった。あああ……。

そんな……こうやって頼めばハチも深雪もいつも許可してくれるのに……そんな……

これはもう駄目かな……仕方ない、と諦めようとしたらさつき説明してくれた2年生の人がわつしと私の手を握っていた。

「あなたも興味あるんでしょ？ やってみましょ！」

「良いんですか？（壊しても）」

「もちろんよ!!」

「失敗しても？（爆発しても?）」

「大丈夫!最初はみんなうまくいかないものよ!!」

そんな2年生の先輩さんの心強い声援により、私はやってみることにした。

「だ、だめですよ!シズさん!ああ・・・シズさーん!?いえ、私は大丈夫で・・・いえ、私はもう部活決めて、いえ、ですから!」

わっしょいわっしょいって感じで私と美月さんはえすえすぽーどなんちゃらの体験をさせてもらう事になった。よーし、がんばるびい!!

ちゅどー~~~~~ん!!!

その日、達也と生徒会長さんと、風紀委員長さんにめちやくちや怒られた。

美月さんにも泣きながらダメって言ったじゃないですかあ・・・って怒られた。ゴメンナサイ・・・。

翌日以降の私の部活動見学が非魔法系のみ限定され、かつ、友人のいずれかの監視

が強化されるのが決定されるのであった。

ハチ、風紀委員ではないと嘆く

部活見学2日目

「今日も俺外まわらないとダメなのか？」

「お兄様が巡回してるのだから当然でしょう？」

今日のお勉強も平和に終わった俺はさて、帰ろうか、という当然の要求をすることも出来ず、当たり前のように妹様に命令されてしまった。

お前の愛しのお兄様は風紀委員だが、俺は生徒会（認めてないが）だろうが、その当然でしょう？はどこも当然じゃないと思うのだが？

「今日はお姉さまはほのかと雫の2人と非魔法系の部活をみるそうだから大丈夫よ」

「いや、だから、あのだな・・・？」

一生懸命断ろうとする俺に、妹様がぐいぐい来る。だからね？俺、今日も実習で魔法使ってるから今はもうほとんど使えないのだが？せめて生徒会の雑用とかならまだわかるが、外周り、というか、暴動やら騒動収めるのは向いてないというかだね・・・。聞いてる？

そんな気持ちでいろいろ話したが、一転、妹様が神妙な表情で語り出した。

「ハチ、大変なのはわかつているけれど、お兄様を手伝って欲しいのよ」
「え？いる？あいつに？手助けいる？」

「おいおい、たかだか学生程度で、あの達也が困るような案件が起こせるとも思えないのだが？そんな表情で妹様に問いかけてみると、妹様も小さくうなずく。

「もちろん、そこらの有象無象に危害を加えられるようなお兄様ではないけれど……」
「有象無象って、お前も結構いうね……」

「ちよつと引くわ。ここ一応魔法系の高校の中でも最難関って言われてるらしいよ？いや、モブ崎とか見ると疑わしくなってくるけど……」。

「それでもお兄様にも言ったけれど、お兄様の力の一端でも見た有象無象が私利私欲に群がってくるかもしれないでしょう？」

「お、おう……否定できない……のか？」

「ねえ？俺今お前の口の悪さにドン引きしてるよ？そこスルーなの？言いたい事はわからんでもないけどね？」

「お兄様は大丈夫だとおっしゃっていただけ……」

「まあ、実際大丈夫だと思うけど……」

「それでも！気苦労にはなるでしょう!？」

「お、おう……それ、オレの気苦労はカウントに入っていないよね……？いや、実際

達也には二科生ゆえの嫉妬やらなんやらがバンバン行きそうではあるから妹様の心配もわからんでもないのだが……。

それでも、え？本当にフォローいる？って言いたくなくなってしまるのが安定の達也クオリティー。絶対にいららないと思うのん。どっちかと言うと、光井と北山に姉さんが制御できるか心配の強いよ？

そんな事を考えていると、妹様が俺の手を両手で握りながら胸の高さまで上げて、涙目で懇願してきた。

「お願い、ハチ。お兄様なら大丈夫なのはわかっているの、それでも、心配で……お姉さまへの干渉で大変なのはわかっているけれど、お願い」

さっきまでの女王様という感じの命令ではなく、純粹に心配しているといった表情の妹様。

気のせいだろ、そう言うのは簡単だった……。

あいつが司波達也でなければ……。

そして、目の前にいるのが司波深雪でなければ……。

決して杞憂とは言えなかった。ついでに姉さんも2人の監視が付いているとは言え、何をやらかすか心配ではあった。

「はあ……わかった。出来る限りの事はしてみる」

ため息と共に俺がうなずくとそれまで心配そうな表情をしていた妹様の表情が安心した、というような微笑みに変わった。

俺も、達也も、もちろん姉さんもだが、俺達のお姫様のこの表情にはめっぽう弱い、どんな難題もこんな表情で言われたら軽くこなせてしまうだろう。つまり、断れないのだ。

まったく、やれやれだぜ……。

「ありがとう、ハチ。お願いね？」

「ああ」

微笑む妹様にうなずき返すと、妹様はああ、そうだと忘れてた事を思い出したような表情になりながらポンと可愛らしく手を叩いた。

「期間中は第一段階の解除はしていても良いわよ？」

「ん？マジか？それは助かるが……」

正直、鎮圧するだけならば魔法は必要ないが、昨日みたいな事があるとさすがに面倒だからこれは正直助かる。

「ええ、生徒会室にいる間は魔法を使う事はないでしょうし、私がお姉さまの封印をしておくわ、必要であれば第二の解放も許可するわよ」

いや、お前……いくらなんでもブラコン過ぎませんかねえ……。第二解放つて、俺

達に何をさせる気なんだコイツは……。それあれだよ？姉さんが下手に魔法使うところの学校半分くらいガレキになるんだぞ？

俺だつて、あれだよ？結構すごい事できちやうかんね？すごいよ？わかつてる？

「大丈夫よ、問題ないわ」

それ絶対大丈夫じゃないやつうー！

なんだ、おま、それ知ってるのか!?嘘だろ!?それともあれか？天然で言ったのか？つっこんでいいのかわからんからそういうのやめれていつも言ってるでしょー!?

そう思ったが、とりあえず突っ込まずに大人しく巡回業務に入ることにした俺マジ大人。

お願いね？と妹様に微笑みながら送り出された俺は早速達也に合流しようと歩き出した。

そこへー

『こちら生徒会、中庭で乱闘が起きました、至急向かってください』

「え……」

『中庭で乱闘が起きました、至急向かってください』

「あー電波がーあー……」

『向かいなさい』

「・・・はい」

ふっ・・・生徒会長様からのご指名が入ってしまつたぜえ・・・仕方がない、とりまそこをサクツと片付けて達也と合流するかねえ・・・。

それにしても生徒会長様怖すぎない？妹様クラスの恐怖感じたんだけど？

「(誠に遺憾ながら)生徒会です、今すぐ反省してください」

「く、くそ・・・」

「うぐぐ・・・」

とりあえず、魔法使つて乱闘してたのでサクツと鎮圧した。勧告？するわけないね、めんどいもん。

オイコラ、端末出せやコラ。

そんな気持ちを込めて乱闘してた人の端末を確認、風紀委員長様に報告しつつ、部活連とか言う謎の組織の会頭様にもご報告しておく。

・・・どう聞いても30代くらいのおっさんの声が聞こえたけど学生じゃないのん？あるえー？

とても気になったけど、スルーしよう、気にしたらダメなやつだと思う。

「それじゃあ、後で反省文提出してくださいね、それでは」

後ろからなにやら文句が聞こえるが無視して達也と合流すべくまた歩き出した。

『こちら生徒会、第3体育館に至急向かってください』

「・・・へい」

おのれえ・・・生徒会長様めえ・・・忍法のぞき見の術だかマルチスコープだかを使いまくって確実にこつちを監視してやがる・・・どんだけ俺に仕事させる気だこらあ・・・後でチチもむぞこらあ・・・。ちよつと、かなり、相当？めちやくちや美少女だからって調子に乗ってんじやねえぞこらあ・・・。

とか言っつてやりたいけど、怖くて言えない今日この頃。チキンな俺は渋々現場に向かう事にした・・・。

「生徒会です、とりあえず反省してください」

「ぬうおおお・・・」×3

「へぶううう・・・」×3

また乱闘があつたのでとりあえず鎮圧した。途中からやたらと外野から魔法がバン

バン飛んできたのでそいつらもまとめて鎮圧した。

なんなの・・・？ここいつから紛争地帯になったんだよ・・・。どんだけ魔法飛ばしまくってんだよ、おかしいでしょ？ケンカしてるだけじゃやなくて静止しようとした俺を狙ってきて、明らかに妨害目的のスカタンも居たしで意味わからんのだが。

妹様に封印肩代わりしてもらってよかったわー。

これ封印状態だったら半分くらい逃がしてたわー、マジ助かったわー・・・。そも巡回したくなかったけど。

とりあえずまとめて端末取り出してまたもや風紀委員長様とあきらかに高校生ではないハスキーボイスの持ち主に報告しておく。

「とりあえず、全員反省文お願いしますね」

それでは、と言って離れようとした俺に、ウイードのくせにい・・・みたいな声が聞こえたがガン無視だ。一応差別用語なので追加で報告はしといたので後で死ぬほど絞られれば良いと思います。

それにしてもウイードって・・・俺は一科生なんだが・・・ああ！そういうえばワツペン外してた・・・これのせいでもしかして妨害あった？まじか・・・めんどくせえ・・・。

まあ、いいか、とりあえず今更だもんな。

さて、今度こそ・・・『こちら生徒会、校庭へ至急向かってください』

うぬらあああああああああ!!!

なんだ、アホか!?アホの集団の集まりなのか!?エリートって書いてアホとでも読むのかゴラア!!

ざけんなゴラア!このままじゃ妹様に氷像にされちゃうだろうこらあ!あれめっちゃ寒いんじゃない!?わかってんの!?わかってないでしょ!?ねえ!?生徒会長様よお、見てんだろ?知ってんだよ?コラ、おい、泣くよ?泣いちゃうよ?良いの?わかってる??そんな思いを込めてすごい嫌だ、っていう気持ちを一ミリも隠さずに校庭に向かう俺、マジ社畜。

それからいくつかの現場に向かった俺は当然のように乱闘をしているアホアホ集団を鎮圧し、ついでにそれを妨害してきたチンパンジー共も叩き潰しておいた。

それだけじゃなくて、途中で姉さんが消えたときと光井から泣きの連絡が入ったり爆発音が聞こえたりしているのが聞こえて、もうてんやわんやの事態で大変だった。

途中からようやつと達也と合流したが、さらに妨害が加速して、これ妹様にばれたらヤバくねって思いながらその日は終わった。

シズ、少女探偵団に加入する

部活勧誘期間二日目の夜

「ねえ、ハチ。お願いがあるんだけど」

「ん？なんだ？」

実は、と私がハチにお願いしたもの、それは名探偵セットだ。

いろいろできる眼鏡と声を変える蝶ネクタイ、麻酔針を発射する機能付き腕時計、キック力を上げる靴の4点だ。

これを装備すればだれでも名探偵になれるってユウキが言ってたのを思い出したんだ。

「え？そんなもんどうするんだ？」

「実はね・・・あ」

ハチの質問に答えようとしたところで思い出した。

そう言えば、今日見た事は内緒にして、エイミイさんとほのかさんと雫さんと4人で解決しようという話にしたんだった。

少女探偵団に私が入ってるのに少しだけ気恥ずかしさはあるものの、これも青春か

な、と思う事にしてる。

明日から証拠集めとかするので、探偵セットが必要になった。それで探偵といえ、ユウキが言っていた小学生探偵が有名だったから、私もその装備をしようと思ったんだけど、どうしようかな・・・ハチにも言わない方がいいかな？

うーん・・・と悩んだ私は結局今は説明しないことにした。なので私は人差し指を立て、口元までもっていつて、ナイシヨ♪とごまかす事にした。通はここでういんくもするらしい。ユウキは物知りだね。

とりあえず今日のところはそれで納得してくれたハチだけれど、流石に今日の明日では準備は無理だって言われちゃった。うーん、どうしようかな・・・。

それから私は自分の部屋にもどり、あれこれと良さそうなものを探すことしばらく。

「あ、これ・・・そっか、これにしよう」

さあ、明日もがんばろう。

久ぶりに手に持つそれを大事にしまい明日に備えて私は眠った。

次の日の、つまり新歓期間の三日目。

私と雫さん、ほのかさんとエイミイさんで学校の屋上に集合していた。

「えと、それで？シズさん？それは何ですか？」

「ふふん、これはね、変装だよ」

仮面をつけた私にほのかさんが問いかけて来たので当然のように答えた。

少女探偵団結成という事で、なにかしら探偵ツぽい服装にしようと思っただが、あいにくと準備する事が出来なかった。

でも、こつそり達也を魔法で攻撃した犯人を特定するのが目的なので私は冒険者時代に使っていた仮面を持ってきていた。

もちろん当時使っていたものではないが、似せて作ったものだ。魔法力を抑える効果はないけれど、わたしにとってはあの人のつながりを感じられる数少ない物なので、こつちに來てすぐに作っていたの。

達也に魔法を放つたり妨害している人を捕まえるだけならすぐにも捕まえられるけれど、エイミイさんとほのかさん達は証拠を押しえて通報したいみたい。

なので実力行使ではなく地道な張り込み、つまり今に至るわけ。ほのかさん達は屋上の端で少しだけ顔をだしつつ双眼鏡で達也を監視している。私はその横でアンパンと牛乳を飲んでる。うん、おいしい。張り込みの常識ってユウキが言ってたからね。みんなにもしつかりと配っておいたよ。

これから私達はまず達也を妨害している人を特定するみたい。それを学校に報告し

て、しかるべき処分をしてもらう予定らしい。

それで、そこまでのあれこれ達也達には内緒にして実行するつもり見たい。

それはそうと、どうしようかな・・・。

3人は達也に見つからないように隠れてるつもりなんだろうけど、すでに達也に捕捉されてるよって伝えた方が良いのかな・・・。

でもこうやって張り切っているほのかさん達を見ると、ケンヤ達の事を思い出すからあんまり水を差すような事はしたくないんだよね・・・。

なので私はしばらくはこの子達が満足するまで付き合おうと思った。

決して昨日こつそり部活見学をして、またもや爆発させてしまったものすごく怒られたからとかではないよ？部活動見学禁止を言い渡されたのとは全くもって無関係だからね？

そうこう考え事をしてっていると、どこかに走っていく達也を物陰から魔法で攻撃しようとしてる人がいた。

それからエイミイさんがあれは剣道部の人だーって言うのでそれを確認する事に。

みんなで今度は深雪のところに行こうとしてるけど、どうしようかな・・・。

さっきの妨害してた人はすでにハチが補足してて、たぶんもう証拠も持つてるよって言ったらかわいそうかな・・・。うーんと悩んでいる間に3人の中で深雪のところに行つ

て生徒の名簿を見せてもらう事に決まったみたい。
・・・うん。もう少し様子を見てようかな。

その夜

「そういえばシズ、今日は何をしていたんだ?」

4人での夕食を終えた後の食後のていーたいむ中に達也がそういえば、という感じで聞いて来たのはやっぱり今日の事だった。

「ああ、そういえば、北山と光井となんか赤いのと屋上にいたな・・・」

赤いのもってエイミイの事だよな? それよりもどうしようかな? 説明した方が良いのかな? と考える私た。ハチもなにしてたんだ? って気になってたみたい。

「えーつと・・・」

どうしようかな・・・ あんなに張り切ってたほのかさん達には内緒ですよ! って可愛らしくお願いされてんだけど・・・

「お姉さま・・・? 何をされてたんですか?」

「え、えつとね・・・え、えへへ」

もう絶対にハチと達也はわかってるよねえ・・・深雪はまだわからないみたいだけど、

これ言わないでいたらかわいそうだもんね……。

秘密って話してたけど、ごめんね、ほのかさん。

だって、いつもはかわいらしい深雪が、怖いんだよ？

いつもどおりの表情で微笑んでいるけど、さつきから室温がすつごく下がってるし、
たまたま今日の席決めで深雪のとなりに座っていたハチがまた凍りはじめているんだ
よ!?

こんなの冒険者時代に竜の谷にいた翼竜と戦ってた時の方がまだ怖くなかった
よ……。

それからいろいろと深雪に質問責めにされて結局全部しゃべっちゃった……。ごめ
んねほのかさん。

でもね？深雪は怒ると怖いんだよ？だからしかた無いよね？

「それで、達也にちよつかい出してたやつを罰してやろうとストーカーしてた……。と
なるほどねえ……。それと、深雪様や、そろそろ解凍してくんない？俺の半身が氷漬
けなんすけど……。」

「あら、ごめんなさい？ハチ」

やっぱりなあ、って感じでハチはうなずいていた。やっぱり気づいていたよね。

深雪がとつても怒っているせいでまたハチが凍らされている。

「いやおまえ、微笑んでれば何でも許されると思うなよ？あと、そろそろ解凍してくれませんかねえ？」

「ええ、そうね。お兄様を攻撃するなんて許せないわよね？」

「ねえ？なんでそのかえしになるの？おかしくない？ねえ？」

ハチと深雪が楽しそうにやり取りしているのを私と達也は微笑みながら見ている。うん、やっぱり家族でいるのはたのしいなあ……。

ハチ的には大変かもだけど、これも深雪の愛情表現だと思ってるので私も達也も無理には止めたりはしなかった。

「シズ、あの3人が無茶をしないようにだけ気をつけてくれ」

「そうだな、詳細はまた今度は話すが、どうもきな臭いやつらに達也が目をつけられたっぽいんでな、姉さんがいれば万が一はないと思うんだが」

きな臭い、の部分で深雪が反応していたけど、今はまだ詳細は私達には話せないのかな？調べてる最中かな？

そう思ったので私と深雪はわかった、と素直に頷いておいた。

「とりあえず、しばらくは様子見だな……」

最後に達也がそう締めてその日のていーたいむは終わった。とりあえず私は明日も3人を見守ってればいいよね。

それから私達は達也をすーカーしながら放課後を過ごした。

なんども達也に危害を加えようとしているみたいだけど、そのすべてを達也はかわし、きやすとじやみんぐで相殺していた。

ハチもすぐそばでそれを観察しながら犯人、というよりも背後にいる組織を泳がせて特定しようとしてるみたい。

ほのかさん達は達也の安全のためにやってくれているみたいだからあまり深く踏み込ませないようにしないとだよね。

普段は魔法の勉強でみんなに迷惑をかけてるダメダメなおねえちゃんだけど、こんな時くらいはしっかりと役割を果たそう。

外野からの魔法攻撃を鮮やかに回避していく達也を見ながら私はそう決意した。

シズ、お勉強すりゆ

「部活勧誘期間おわったね」

「これでなんとかなってくればいいんですけど・・・」

勧誘期間中ずっと 達也をすとかーしてた私達は、その間に集めた写真を生徒会の匿名窓口に送って本日は解散となった。

もはや秘密もなにもない状態で達也とハチにバレバレな私達の活動は大変申し訳ないことに、私の報告によって逐一達也とハチに伝わっている。達也さんと深雪には内緒ですよ？と言っていたほのかさんには本当にごめんなさいとしか言えないよ。

達也が言うには写真には証拠能力がないから変に逆恨みされずに済むだろうという事で現状はとりあえず様子見をしているみたい。え？写真には証拠能力なの？あんなにはつきり見えるの！？と聞いたら魔法を使っているとところは映ってないだろうと説明されて、なるほどって思った。

そうして部活勧誘期間が終わったので証拠を提出したのがつい先ほど。

ほのかさんはこれでなんとかなって欲しいという思いで提出していた。とても心優しくして純粋で可愛らしいね。

取り合えず、これでこの危なっかしい少女探偵団の活動も終わりかな？と私はちよつと残念に思いながらも安心した。ふふ、最後に向こうであつた冒険者の子達を思い出しちやつた。

今日はこのまま解散して、また明日と手を振り合う。うん、ちよつと恥ずかしいけど、こういうの、良いよね。

ほのかさん達と解散した私はそのまま図書館に向かう。

今日は深雪とハチが生徒会で、達也は風紀委員がやつと休みになる、とほつとしていたのでハチと深雪が終わるまで図書館で勉強したり、調べものをする予定。

そう思つて図書館に来たけど……。

「あれ？達也がいない……？」

おかしいな、深雪を生徒会に送つたら来るつて言つてた気がするんだけど……？あれ……つて考えていると、私の端末に着信があつた。ぶ、ぶるぶるしてる……！

「わわっ……！えーつと、えーつと……」

わわわ、と慌てている間にぶるぶるは停止した。ふう……このぶるぶるの短さは電話じゃなくてめえーるだね。

「……どうやって見るんだっけ？」

むむ、むむむ……えーつと……。うん、わからない。

下手にぼちぼちして壊したらハチにおこられるよね、うん、私は自分で見るのを諦め図書館の司書の人をお願いする事にした。

親切で優しい司書の人に端末を操作してもらおうと、遅れてくるみたいですよと教えてくれた。

今の人は私がピコピコを操作できないと話しても変な顔しなかったのでもいい人だと思う。今度からここでピコピコがなり出したらお願いしよう。そう思った。で、電話なら取れるんだよ？

「うーん、達也はおくれてくるみたいだし、私は勉強しようかな……。」

そう思った私は心優しい司書の人に二人用の個室を取ってもらい、そこで勉強する事にした。

えーと、きやすと、じゃみんぐはあんでないと使って魔法使えなくする。でも、魔法力強ければ使えるらしいよ……。と。

そういえば、昔そんな事言われたような気もしなくもないような……。たしか？どこかの犯罪組織をつぶしてる時にあんでないと使ってのにナジエツカエルンデイス!? みたいな事言われたっけ？

あの時はなに言ってるんだろ？って指輪突き付けてすごいドヤ顔してたおじさんに

思ったつけ……。構わず燃やしちやっただけだね。なるほど、あの時持ってた指輪があらんてないのだったのか……。ふふ、私もずいぶん博識になったものだね、これはもう今度のですとも赤点回避待ったなしだね。

ええと、つぎは……。

「いであ……。えいどすが記録されているぶらつとふおーむのこと。ここも大丈夫。よゆーよゆー」

最初聞いた時はさっぱりだったけどね……。いであ？えいどすつてなに？つて思ったもん。

まあ今はぶらつとふおーむつてなに？つて感じだけど。後で達也に聞いとこう。

ああ、そうだ。ええと、放出系統の性質は、ええと……。

「ほうしゆつけいというは、そりゆうしとふくごうりゆうしにかんしようする……。？相互……。？干渉？」

……。この教科書はいつたいなにを言ってるのかな……。？……。意味がわからないよ……。

いつも思うけど、どうしてこの世界の魔法はこんなにややこしいのかな……。起動式つて絶対にいらなと思うの。でも、深雪が使う魔法はいろんな事が出来るから、そういう複雑な事にきつと必要なんだよね。

達也が言つてた複数行程の魔法とか私に出来る気がしないしね。燃やすか爆発させるか剣にまとわせるか身体強化だけだもん。全部一工程。ね？起動式じゃないでしょ？

でも現代の魔法はそういう訳にはいかないみたい。

もちろん、私も達也とハチのがんばりで何とか複数行程の魔法も少しは使えるようになったけどね？ほんとだよ？試験でも台車を動かして止めて、戻してつてやったしね。あれは本当に大変だった・・・。

そうこうしていると、達也が来たみたい。

「シズ、待たせたな」

「ううん、大丈夫。生徒会でなにかあつたの？」

「いや、部活の勧誘を受けてんだ」

私の隣に座る達也に聞くと、そんな返事が返つて来た。へえ？部活？

結局あれから私の部活見学は全面的に禁止されて、それから達也の監視ばかりしてたから部活に入らなかつたんだよね・・・。本当は入ろうと思つただけど、生徒会長さんと風紀委員長さんからお願いだから魔法系は入らないでって言われたんだよね・・・。

そうしたら非魔法系になるんだけど、魔法の学校だからかあんまりめぼしい部活が無

くて入らなかつた。

部活つて入らないとダメなんじゃないのかな？つて聞いたらほんとはダメだけはいよつて言われたのはちよつとだけ悲しかった。私も青春したかつたなあ……。

一応レオ君も居るし、山岳部に入ろうと思つたんだけど、深雪に猛反対されたからなあ……。あと楽しそう、というか興味があるのが特になかつたしなあ……。うーん。

そんな事を考えながら、それで？どんな部活なの？と聞いてみる。

「ああ、剣道部だ」

「へえ？剣道部かあー」

剣道部は、うんダメだね。自分で言うのもあれだけど、聞くまでもなくダメつて言われる未来が見えたよ。

でも達也に剣道か……。うん、それもちよつと違う気がするかな？

「断つたの？」

「ああ、やることがあるからな」

「そつか」

少しもつたいたないような気がするけど、実際達也は忙しいからね、それに体術が主体の達也からしたら剣道を今更やるのは非効率だしね。

それから私と達也は深雪とハチが終わるまで静かに勉強をしたり、調べものをして過ごした。

うう、達也がすばるただよう……。

それからその日はみんなで帰って、みんなで夕食を食べて、何気ない話をして終わった。

それで、次の日。

ついにほのかさんが、写真を送った事がほぼ無意味だという事に気づいてしまった。

雫さんがそもそも写真じゃ魔法を使ってる証拠にはならないと指摘して、ほのかさんが両手両膝をついてがっかりしていた。

それからなんだかんだと励ましていたら私にめえーるが来たのを雫さんに読んでもらった。あれ？なんかこれだと私が文字も読めないみたいに聞こえるかな？違うよ？端末のピコピコが出来ないだけだからね？

こほん、それはそうとどうも深雪が生徒会室に来て欲しいみたいなので、今日の少女探偵団は解散になった。

ほのかさんの事は頼んだよ！と私はエイミイと雫さんによろしくとお願ひして、がっかりしてるほのかさんにふあいとだよ！って言うてから生徒会室に向かった。

「深雪ーおまたせー」

「お姉様っ!」

ほのかさん達と別れて生徒会室に入ると深雪が可愛らしく駆けてきた。おつとと、と思いながら私は深雪をやさしく抱きとめる。

よーしよし、かわいいねーと深雪を撫でる。嬉しそうに微笑む深雪に私も嬉しくなつてくるね。

この時、ほかの生徒会の人たちや周りの視線を気にしないのが深雪を可愛がるポイントだね。気にしたら大変だもん。

「それで?どうしたの?」

「はい、少し外に出る用事が出来たのですが、お兄様もハチも別件で出払っていらして」
申し訳なさそうに話す深雪のお願いとは、つまり、外に出るから付き合つて、つてことだね。そのくらいならお安い御用だよ。むしろあーちゃん先輩さんが申し訳なさそうにしているところを見るとなおさらね。

だから私はそれくらい問題ないよ、と言う意思を込めて深雪に微笑む。

「でえとだね、もちろん大丈夫だよ」

「お姉様、そんな…デートだなんて…」

両手を頬にあてて、いやんいやんとくねくねする深雪。そんな可愛らしい深雪を私は

にここをこしながら見つめていた。

シズ、戦闘する

「さあーいきましよう！お姉さま!!」

「うん、そうだね」

いやんいやんとしてた深雪が戻ってくるまで数分待つて、私と深雪は生徒会の用事で学校の外に向かった。

さて、行こうかと歩き出した私の手を深雪が握り、2人で手を繋いで歩き出す。

「ふふ、深雪と二人きりででえとするのも久しぶりだね」

「ええ、お姉さまと一緒に深雪は嬉しいです」

ニコニコ。すぐくニコニコで上機嫌の深雪とでえとしながら手を繋いで歩道を歩いていると、あちらこちらから視線を感じた。ある人は顔を赤らめ、またある人は100年の恋に目覚めたような表情でうっとりしている。

まあ当然だけだね、深雪はとでも、とつても可愛い私の義妹だからね！そこら中から視線を集めてしまうのは当然の事だよ。

私はもう自慢したくなるほどかわい義妹だけど、深雪自身はこうして視線を集めるのはいつもの事なので全く意に介していないけどね。

そうこうしながら歩いていると、あれ？あれは……。

反対側の歩道にほのかさん達を見つけた。私の視線を追っていた深雪も気づいたようだ。

「あれは、ほのかと雫ですか……」

「うん、みたいだね、でもあれは……」

そっか、深雪はエイミイを知らないんだっけ。後で紹介しないとだね。それよりも何かをしているみたいだけれど、もしかしてまたすとーかーしてるのかな……？

「お姉さま……なにか胸騒ぎがします」

「うーん、たしかに。危ない事してないと良いんだけど」

とりあえず、早めにお使いを終わらせて、ほのかさん達を追いかけようという事にした私と深雪は足早にお使いを終わらせようとしているが、深雪はさっきのほのかさん達が気になるようで、浮かない顔をしていた。

「なにもないと良いんですが……」

「大丈夫だよ。お姉ちゃんにお任せだよ！」

「ありがとうございます、お姉さま」

少し不安そうにつぶやく深雪に私は安心させるように微笑みながらサラサラの深雪の髪をすくように撫でた。

これで少しでも深雪の不安が薄ればいいなあと思いつつながら優しく撫でると深雪はすぐに嬉しそうに微笑みながら私にそっと抱き付いて来た。ふふ、甘えん坊さんだね。私達の近くにいた少女達がきやーとしていてるけど、するーだね。その横の男の子たちもボーっと赤い顔して見てるけど、これもするーだね。うん、気にしてない、気にしない。

「さて、それじゃあほのかさん達を追いかけようか」

「はいっ！お姉さまー！」

それから少しだけ時間がかかったけど（店員さんもぼーっとしてたよ・・・）お使用も終わったので私と深雪はほのかさん達を追いかける事にした。

「深雪、わかる？」

「はい、お姉さま。向こうで魔法が使われたみたいです」

急ごうと駆けだす私達。それにしてもさすが深雪だ、さすみゆ？だね。

私にはさつぱりだけど、魔法を使った気配がわかるんだもん、すごい。達也とハチも出来るみたいだし。みんなすごい・・・んん？あれ？これ出来ない方がダメなやつだったりするのかな？こんどほのかさん達とエリカさん達にも聞いてみよう。

そんな事を考えている間にほのかさん達を見つけた。

けど、ほのかさん達はなんか、あれ、えつと、へるめつと？をかぶった集団に囲まれ

て苦しそうにしていた。

「お姉さまっ！」

「任せてっ」

まだ距離があるけど、今にも刃が振り下ろされようとしていた為、私はとつさにそこそこ本気で踏み込んで距離を詰める。

「私の友達に手を出させないよ」

一瞬でほのかさん達の元にたどりついた私は振り下ろされようとした刃物を炎をまとわせた手刀で溶断した。

ふふん、こういうしーえーを使わない魔法なら得意だよ。

な、なにものだあ!?!と騒ぐへるめつと共を警戒しながらほのかさん達を守るように立ちはだかる私。

こういう時に応えるのはたしか……。

「江戸川コナン、探偵さ」

私は手に炎をまとわせながらドヤ顔で答えた。キメ顔だっけ? たしか、ユウキにいつか言ってみたしセリフランキングで上位だと教えてもらったので間違いないはず。

そしたらへるめつと達がとても怒り出した。

くそ! あんてないとの出力を上げろ! とかなんで魔法が使えるんだ! とかとても騒

いでる。

「うう……!!」

「ああ……!!」

私は何やってんだろ? ってへるめつと達を見ていると後ろでほのかさん達が苦しみました。

ええっ?!? って驚いたけど、そう言えば、あんてないとは魔法が使えなくなる上に頭が痛くなったりするんだっ! ちよつとみみなりがするくらいで普段とあんまり変わらないから忘れてた!

それに気づいた私はとっさに全員を無力化しようとしたけれど、その前に深雪が到着していた。

「愚か者どもめ、お姉さまや私に非魔法師のキャストジャミングなど通用しません」

冷たい視線でへるめつとさん達を見た深雪は魔法を発動した。

黄金の雷鳴が奔り、へるめつと達に襲い掛かると、うめき声を上げながら気絶していく。

見える範囲のへるめつとさん達を無力化した深雪は先ほどの冷たい表情からすぐに微笑みへと変えてほのかさん達の安否を気遣った。

「もう大丈夫よ、ケガはないかしら?」

「深雪が助けてくれた・・・これは夢？」

深雪の微笑みに安心したのかほけーつとしていたほのかさんがつぶやくが、深雪が夢じゃないわ、みんなが無事でよかった。と再度微笑みかけるとようやく現実に戻って来たみたい。うん、無事でよかったよ。

「ありがとう、深雪、シズさん」

そこまで確認した私は深雪に視線を送る。

「深雪、ちよつと行ってくるね」

「はい、お姉さま。すぐにハチとお兄様も来ますのでこちらはお任せ下さい」

「うん、よろしくね」

そう言って駆けだす。ほのかさん達がいた通路を曲がるとすぐに跳躍し、壁を二度ほど足場にして屋上に到達すると、そのまま、さきほどのへるめつと達とは距離を置きながらもこちらを監視していた人を追いかける。

ビルからビルへと飛び移りながら追いかけるけれど・・・。

「思ったよりも実力者っぽいかな？」

私が追いかけてくるのに気づいたのか相手が速度を上げて逃げて行く。

さっきのへるめつと達はずいぶんお粗末だったのにずいぶんと手練れがうしろにいるなあ・・・。もしかして別口？

しばらく追いかけていると、ハチから連絡があった。ふぶん、電話ならとれるんだよ。「もしもし？ハチ？」

『ああ、姉さん。今どこだ？』

ハチに問いかけられて私は追いかけてながら周辺を伺う。えーつと……。

「うーん、山？」

『……どこのだつてばよ……』

だよ。うん、ここどこだろう……。

あ、でも向こうも逃げ切れないと思つたのかどこか山の中にある廃工場いところに隠れてみたい。

「うーん、どこかの廃工場っぽいのがああるよ、それよりもハチ、封印いつこ解除してもらつてもいい？」

『……わかつた。ああ、今達也が捕捉した。すぐに俺も向かう。……必要ないだろうけど』

「うん、よろしくね」

そう言つて電話を切ると、少して私を拘束してる封印が少し緩くなつたのを感じた。

「よし、それじゃあ行こうかな」

工場に到着した私はそのまま入口つばいところから侵入した。
「さて、やっぱり罠かな？」

人の気配は・・・近くにはない。さっきの人たちとは別件の気がしてきてるんだよね・・・。

コツ・・・コツ・・・と私の足音だけが静かに響く工場内の通路を歩きながら周辺の様子を確認するが・・・。

「うーん、出てこないのかな？」

私がそうつぶやいた瞬間、空間がゆらいだ。

私はとっさにバックステップで回避すると、それまで私がいた空間が爆ぜた。

「・・・何が目的なの・・・」

私が問いかけるが、返答には再度の空間の揺らぎが返って来た。

またもや私はそれを回避する。答える気はない・・・か。

「それにしても、この程度で私をどうにか出来ると思ってるの？なめないで」

またもや相手の攻撃が飛んでくるが、今度は避けずにあえて受け止める事にした。

私は右手を突き出すと、手のひらを突き出してその魔法を受け止めた。

当然、私の手のひらの先で爆発が発生するが、私はそれをまったく意に介さず歩き続けていた。

「・・・見つけた」

私が魔法を受け止めた事により、先ほどから隠れて魔法攻撃を行っていた相手が動揺していた。

うまく隠れていたけど、もう逃がさない。

「試作術式起動」

『難易度を選んでください』

相手との距離はまだそこそこあるし、距離を詰めようとしても先ほどのように鬼ごっこになってしまうとされる。なので今回はあえてしーえーでいーを使う事にした。私にはピコピコは無理なので、音声で認識して使うしーえーでいーだ。

「いーじーもーどど」

『難易度EASY、了解しました。試作術式起動、どうぞ』

この難易度は、ハチがつくってくれた私の術式規模を選択するためのものだ。はーどが戦略級、のーまるが戦術級、いーじーが対人戦闘用（強）すーぱーいーじーが対人用（弱）、うるとらそふとが対人用（極弱）だ。

今回は思ったよりも油断できそうにないのでいーじーを選択した。

試作術式が起動したのを確認した私はそのまま魔法を発動させる。

「術式起動。フレイルムノヴァ」

『フレイムノヴァ（HARD）発動します』

えっ!?!ちよつとまって!?!はーど!?!ちがう、ちがー!?!!!

ちゅどー!?!!ん!!!

試作術式の誤作動により、想定の5倍くらいの威力で発動した魔法。それにより廃工場は壊滅してしまった。

あ、あれー!?!?

ハチ、徹夜する

「姉さん、俺達が昨日話した内容、覚えてるよな？」

姉さんと連絡をとり、達也が捕捉した姉さんの座標に到着した俺を待っていたのは燃え盛る紅蓮の炎だった。

紅蓮の華を咲かせる廃工場と山間部の木々たちに、ああ、やつぱり間に合わなかったか……とあきらめにも似た境地に俺はたどりついていたが、とりあえず、姉さんに状況を聞いてみようとした。

俺の質問に、姉さんはうつ、と申し訳なきような表情をする。

四葉本家が干渉してこないように気を付けて行こう。と話していた翌日にこの状況なので姉さんもやりすぎた事は自覚してる。しゅんとしてかわいだけけだ。

ただ、今回は強すぎる魔法力が問題である為、こちらも責めてるのではなく、確認、という意味合いが強いのだが、少し責めるような雰囲気になってしまったのは申し訳ないとは思っている。

というよりもさ、姉さんがこの規模の魔法を使わざるをえない状況が気になるんだけど？ どういうこと？

「あの、あのね？きのうの事はもちろん覚えてるよ？ぶらんしゅでしょ？でもね？ほのかさん達を襲ったその人達とは別で、怪しい人がいたの」

「ああ、それは深雪にも聞いたな・・・姉さんがここまで追いつけないのが信じられないんだが・・・ああ、それで封印一個解除したのか」

姉さんがその気になった場合、そこらの、それこそ光井達を襲ったような輩など、一瞬で捕まえられるのだが、その姉さんがここまで逃走を許すとなると、封印解除が必要になるのもうなずけた。

「それで、フレイムノヴァをいーじーで使おうとしたら、はーどで発動しちゃって・・・」
「え、まじか・・・」

え、まじで？そうなつてくると、これ、完全に俺の調整ミスじゃね??

結局、ハードになったフレイムノヴァを制御している間に敵には逃げられた・・・と。つべー・・・。

「とりあえず、わかった。この辺の鎮火はとりあえず済んだし、証拠隠滅もハゲ坊主に依頼してあるから俺達はとりあえずとんずらしよう」

「あらほらさつさー・・・だね」

やりすぎた事を反省しているのか、姉さんの意味不明な返しにも元気がないな・・・。
やばいな、このままだとマジでヤバイ。まず、姉さんが落ち込んでるの見て、妹様か

ら冷却魔法くらうだろ？この時点でヤバいけど、その後、山つつーか、廃工場爆発させたのが俺のせいってバレてもつかい凍らされるだろ？まじヤバくね？んで、なんならやりすぎだって、四葉の老家からも怒られてミーティアがリフトオフしちゃうよ？これが何気に一番ヤバい。もうヤバすぎて妹様に凍らされるのが大した事ないように思えて来たわ。泣ける。

「ま、まあ姉さん、今回の俺のミスだから、気にしないでくれ」

ついでに、妹様への言い訳もオナシヤス。

「うん、ごめんね・・・？」

ちよつと泣きそうになりながら謝る姉さんにキュンときてしまうが、冷静にスマンと返した俺は偉いと思う。

その後、達也と妹様と合流した俺と姉さんは、その後なんやかんやと雑事を終えて自宅に帰還した。

姉さんが落ち込んでたり、廃工場を爆発させたのがやっぱり妹様の機嫌を損ねてしまったのでいつものように氷らされてしまったが、これはいい。よくないけど。

さすがに廃工場爆破はやりすぎなのでこれはハゲ坊主に依頼するだけでなく四葉の

本家に連絡する事にした。妹様よ、マジで謝るから、嫌いなのは知ってるけどそれ以上は勘弁してくださいな……。

んで、四葉に連絡したら当然のように当主のゴスロリ様がご降臨されました。暇なのかな？

事情を説明したらすっげえニコニコ顔で俺に指名で仕事を入れてやんよとおっしゃられまして、ええ。それを受ける事でチャラにしてやんよとの事。迷いなくうなずきましたとも！

モニター越しとはいえ、話してる最中に持つてる扇子へし折って、ミーティアラインを起動するのは卑怯だなんて思いましたまる。

まあすべて俺の責任なので甘んじて罰は受けようと思う。指名依頼とか社畜な俺的には嫌な響にしか聞こえないから今から怖すぎるけど。

ついでに今度、俺の師匠連中の伝手で一人面倒を見て欲しい奴がいるそうで、それもお願いされたでゴザル。

全然チャラになつてない上に、拒否権が無いでゴザル。

チャラにするよつて話が終わつてから、明らかに思い出したようにああ、それとつて話して追加するのは完全にブラック企業体質だなんて思った。それにハイとしか言

えない俺も生粋のブラック社畜だけでも。泣きたい。

つか、師匠連中のもつて、だれだよ……。超こええよ……。

通信が終わった後、姉さんが申し訳なきそうにして、達也が同情するような視線を向けて、妹様から冷気が出まくって、ため息がでちゃうぜ、はあ……。最近、あんまガンブラ作れてないなあ……。

そんな感じで今日一日でどんだけ泣きたいと思ったのかわからんくらい泣きたくなる一日が終わった。あ、姉さんのCAD達也和相談して改修しないと……。はあ。

だから、この時の俺は、姉さんから逃げ切った敵の存在をすっかり忘れていたのだ。た。

次の日

「今日の実習はコンパイル時間の短縮練習です」

結局ほぼ徹夜で姉さんのCADの改修を終えた俺は、しばしばする目をコシコシしながら学校に来ていた。ね、眠いでゴザル……。

一緒に徹夜して改修してた達也はピンピンしてたのが理不尽です。あいつはいつたいてい何で出来てるんだってばよ。いつも通りハゲ坊主のところに修行に行くあいつを信じ

られないものを見る目で見てた俺は悪くないと思う。

まあ、俺もそのすぐあとに姉さんに修行でほこぼこにされたけども……。

昨日の件でまだちよつと落ち込んでた姉さんだが、修行を開始したらすぐにいつも通りになつてね、いや、元気になつてくれて嬉しいよ？ 妹様にも凍らされなくてすむし。でもね？ 徹夜明けで朝からほこぼこにされるのはきついかないかって……。もちろんそんな事言えんけど。

結局昨日の誤作動は姉さんの魔法力増加が原因だという事になった。

いまだ魔法力が増加したとか考えたくもないって思ったけど、どうやらそうじゃなくて、単純に姉さんが光井達を守ろうと張り切つてたのが原因で魔法力をそそぎすぎたのが原因で、威力が増大してたという事らしい。

どっちにしろその辺も強度を機械側でうまい事処理できるようにしないと同じ事が発生するわけで。

それらを処理っていうか、対策するのに徹夜したわけだ。結局最後には達也が頼りになつたわけでした。さすが天下のトールスシルバーさまだわ。

そんなこんなで何とか対策した翌日つつーか今、ナウ。

先生様の解説により今日の実習が始まるわけだが……。ええと、2人一組でコンパイルを起動させる……。と、制限時間は850ms……。ふむ。なるほど？ このクソみた

いな実習にいったい何の意味があるのか聞きたいところではあるがまあ、楽な実習なのでそこはまあいい。姉さんは絶対にやっちゃいけない類の実習だと思ったが、そこも問題ない。

目の前で光井と北山が組むのも想定通りといえる。その後妹様にクラス中の奴らが押しかけてつたのもまあ、想定内。その後、迷惑そうにしてた妹様が俺をロックオンして実習のパートナーにしたのも、まあ・・・いい。

クラス中から敵意向けられてるけど、それもまあ・・・よくねえよ。

おいどうすんだよ、これ完全に俺このクラスでぼっち確定すんじゃねえかって妹様に文句言ってみたら。

「あら、何を言ってるのかしら、私達がいるでしょう?」

とすげえ良い笑顔で言いやがった。クラスのやつらの半分くらいが真っ赤になってんじやねえかよ。マジでコイツはそろそろ自分の笑顔がどれだけの思春期男子を地獄に追いやってるのか自覚した方が良いと思います、マジで。

というか、それもだが、アレをしろ、アレ。

「森崎君がどうしたの?」

右手の人差し指を頬に当てて首を傾げる妹様。どうしたのじゃねえよ、つかなんだそのあざとい挙動、おまえ、生徒会長様に汚染され始めてんじやねえかよ、つか、それも

問題だが、いや、ホントお前がただ神のごとき美人なだけじゃなくてあざとかわいいま
で身に着けたら大変な事になるな、超大問題だよ。いや、そうじゃなくて、あの、モブ
崎、森崎？がめっちゃ俺の事睨んでるだろうが、アイツあんなんでも男子のカーズト
トップらしいじゃねえかよ。

「それがどうしたのかしら？」

どうしたのかしら？じゃねえよ、いちいちかわいいなおい。やめろ、クラスの男子全
員地獄の一丁目に足踏みいれてるじゃねえか。つて、だからそうじゃなくて、アイツに
目を付けられて逆恨みされるだろうが！つか、現時点、つてか今日までの段階でもめつ
ちや目の敵にされてるんだぞ？

「あら、それはごめんなさい」

微笑みながらあやまつてんじゃねえよ、まったくごめんつて思つてない顔だろそれ。

そんな事を妹様と言ひ合ひながらお互い適当に実習の課題をサクツとこなすことに
した。もちろん、その間にもガンガンモブ崎から敵意を向けられていたが。はあ・・・。
心の中でため息をついて今日のお昼何にしようかな・・・次のガンプラ何作ろうか
な・・・とか現実逃避することにした俺は決して悪くないと思つた。

ハチ、実習にてモブ崎に意地悪する。

妹様とのやりとりを続けていると、いつの間にか実習が始まっていた。

はじまつてはいたが、どうにもまわりの奴らがチラチラと妹様の方を見ている。

美貌もさることながら妹様はなにせ今年度の新入生のトップだ。エリート（笑）が多いA組の連中からすれば今回の実技も気になるところなのだろう。

だが、そこはさすがの妹様だ。意識を向けられるのに慣れすぎているため、チラチラ見られたくらいではかけらも気にしないぜ。

つまり超マイペースに順番待ちの列の後ろに並んでいた。もちろん俺の右腕をガツチリホールドした状態で。まわりの視線がイタイぜ。

そして妹様スキーな光井が北山を引き連れて一緒に並ぶ。これぞ完璧なる妹様ガードである。

クラスメイトの視線から妹様を守るべく俺と妹様の前に並ぶ光井の優しさと頼もしさに涙が出そうである。その母性の塊で俺を癒して貰えないものだろうか？…あ、すみません深雪さん？腕凍ってる！ごめんなさい、もうセクハラとか考えないのでゆるしてください。

俺がそんな光井の優しさに心を洗われて妹様に凍らされている間にも実習はずんずん進んで行く。

まわりのクラスメイト達がコンパイルの起動時間に一喜一憂しているのを何とはなしに見ていると、やはりというか、やたらと敵意を向けられる。

「はぁ……」

「ふふ、もてもてじゃない」

モブ崎の敵意にため息をつく、妹様がクスクスと微笑みながらふざけたことをおとしやられおった。

おい、もてもてはお前だよ。ユー。アングスタン？とか言ったらきつと氷漬けにされるんだろうなあ……。

「かんべんしてくれ……」

「あなたも森崎君をからかうのをやめれば減ると思うわよ？」

「……善処する」

「それはやめないと言っているのと同じね？」

くすくすと楽しそうに手を口元にあてて微笑む妹様だが、こいつもモブ崎が姉さんと達也をコケにしたことに対して激怒していたので、決してやめろとは言ってこない。

むしろ態度にはだしてないが、副音声でいいぞもつとやれつて聞こえてくるもん。

そうこう妹様と話していると、モブ崎のターンが来たようだ。

ちなみに、今回のコンパイルの短縮授業だが、合格ラインは二科生が1000msまで、一科が850msだ。

そしてここまでのトップは450くらいらしい。よく見てないがたぶんその辺つて光井が言ってた。このクソみたいな術式を組み立てるのに500を切っている時点で、流石は魔法科高校のエリートと言えるかもしれない。

お勉強が出来るのはいいが、やはり性格面も少しは考慮してもいいんじゃないかな？と思うが、それはもう諦めている。それはそうとモブ崎だ。

実習を始める前にこちらを指差しながら何かを言っていたが、正直メンドくさかったのでほとんど聞いていなかった。まあ、毎回実技のたんびに似たようなこと言ってるので聞く必要がないとも言えるが。

だいたいエリートの実力みせたるーとか、森崎家のクイツクドローがーとか、司波さんにはーとか、そんな感じ。いつもへーとかすごーいとか言って適当に返事している。

「あなた、いつもそういう態度だから森崎君も怒っているのよ？」

「へー」

妹様があきれているようだが、お前もアイツらに声かけられるとき、多少は猫被つてるが似たようなもんだらうが。そう思うが、当然言わない。まだ氷漬けになりたくな

いしな。

“ おお！すげえ！”

とちよつとした歓声が上がった。ん？なんぞ？と思つたらモブ崎の成績が良かったらしい。

ほお？と見て見ると、321とな。

おお、流石はエリート（笑）とか自称するだけの事はある。モブ崎に続いて北山も340と好成绩を叩き出したが、今のところはモブ崎がトップのようだ。超どや顔でこっち見てる。そして、地味に北山がモブ崎に対してグヌつてる・・・たぶん。なんか無表情でモブ崎見てるからそうだと思う。

「あら、流石ね」

「ソーダネ」

妹様も素直に称賛しているようだ。先ほどまでの最短時間から大幅な短縮をしている上に、妹様も一目置いている北山と光井よりも早い。確かにすごい。すごいんだが・・・。

「さあ、次は私達の番だけれど、ハチ？」

「へいへい」

わかっているわね？という表情の妹様に適当に頷いておく。

先程までのクラスメイト達の起動は見た。起動式もクソみたいなのが入っているのは先ほどの先生の説明を聞いている間に確認した。

俺は妹様が測定の準備が出来たのを確認すると、CADの前に立ちそれっぽい感じに起動式を起動させる。まあ、こんくらいだろ。

『クリア。タイム、320ms』

おお、狙い通りだ。良い感じ、いい感じと思つてると、うしろの方でモブ崎クンがくそー！とか叫んで悔しがっているのが聞こえるが、ざまあみやがれとかちよつとしか思つてない。

思つてないけど、ちよつと、口の端つこの方が上がつてしまうのはしょうがないと思うのだ。計測補助をしていた妹様もクスクスと笑つてらつしやる。

「ふふ、ほんとうに、ハチは器用な事をするわね」

「さて、なんのことやら・・・俺は普通に実技をこなしたただけだぞ」

「ええ、そうね、森崎君より1msだけ早くね」

「ああ、たまたまな」

ふふ、相変わらずねとクスクス笑いながら今度は妹様がCADの前に立つ。

妹様がCADの前に立つと、先ほどから実習で騒がしかった周辺が途端に静寂に包まれる。

妹様の神のごとき美貌と、そのまなざしに一気に周辺の空気が引き締まっていく。誰もが妹様の実技に注目していた。

「くわよ」

「ほこよ」

ただCADの前に立ち、そこに手をかざしただけで、まるで神聖な儀式を執り行うかのような雰囲気醸し出す妹様。

物音ひとつ立てる事すら許されない空気の中で、先ほどまでの微笑みから表情を引き締めた妹様が俺に視線を向ける。俺は適当に頷いて測定の状態にはいる。空気を読めないとか言わないでえ。そして記録は――

『クリア。タイム、250ms』

その記録に先ほどまで静寂に包まれていたオーディエンス達が沸き立った。その後ろでモブ崎くんが崩れ落ちていたのを横目で確認しながら妹様を労った。

「そんな不服そうな顔すんな」

「やはりお兄様に調整してもらわないと・・・」

「いや・・・こんなクソみたいなCADならそんなもんだろ」

とかそんな事を話しながら俺と妹様は今日の実習を終えた。先生がすごい複雑な表情をしてるが、知らんがな。

一応何回かチャレンジしても良いらしいが、妹様は一度目でぶつちぎりのタイムを叩きだしたので不要だし、俺もそここのタイムなので不要。というか、俺も妹様もこんな内容ならそれぞれで練習した方がましだし、俺はそもそも何度も実習する魔法力はない。よって、開始10分そこらでひまになってしまった。

その後、必死の表情をしながらモブ崎がCADを操作しているのを見たり、北山と光井にアドバイスの事を妹様がしたり、話したりして過ごした。ねえ？この実習ほんどに必要？

ちなみに、モブ崎クンは一回目がベストタイムでその後はやるたんびにタイムが遅くなつていったらしい。

さらには北山と光井にも最終的には記録を抜かれていたらしい。いやはや、気分がイイね！とかちよつとしか思つてない。思つてないつたらない。

実技の授業の後も一般科目等の授業が進み、お昼の時間になった。

今日もいつものようにとんずらすることも許されず、妹様に拘束された俺は妹様と光井、北山と4人で昼を食べたる事に。めちやくちやまわりの視線がイタイでござる————!!

「んあ？今日は達也待たなくていいのか？」

「ええ、お兄様が先に食べておくようにと言っていたわ」

へえ、珍しい事もあるもんだ。妹様が達也と一緒に飯を食べようとしないうなんてなあ……としみじみと思っていると「だから、すぐに食べて実習室に行くわよ」

意味がわからないよ……。

「お兄様がエリカと西城君の補習に付き合っているらしいの」

……なんとなく読めたけど、それで？

「差し入れを持っていくわよ」

とても上品に、それでいて上品さを損なわないように早めに飯を食べてる妹様だが、それ、オレも行くの？

「当然でしょう？」

……当然かなあ？いや、まあこの流れだと姉さんも居るだろうから行くのは構わないんだけどね？こう、さ、選択肢が欲しいじゃん？

「もう、仕方がないわね、わがまま言わないで行くわよ」

……これわがままなん？普通の意見ちゃう？違うの？そう思つて視線を向けると、すました顔で食事をしてる妹様。視線をずらすと苦笑しながら行きましよう？と言つてくる天使光井にいつものように無表情ながらも行こう？と言つてくる北山。

はいはい、わかりました、わかりましたよー！

はあ、飯の後は仮眠取ろうと思ってたんだがなあ……。まあ、しゃーなしだな。

そんなこんなで俺達は西城達の分も飯を買い込んで実習室に向かった。

つまり、荷物持ちつつて事ですね、知ってた。達也と姉さんと千葉に西城、天使柴田の分つてなるとそこそこ量あるもんね。なんなら西城の分だけで結構な量がある。

はあ、と思いながら俺は実習室に向かつて妹様に引きずられるように足を進めて行った。

ハチ、妹様に実力をアピールさせられる

妹様と天使光井、ジト目の北山に連行される事しばらく、俺達は達也達が居残り補習している実習室についた。着いたのだが……。

「ちよつとまって下さい……」

と申し訳なさそうに言ってから身だしなみを整え始める天使光井。大丈夫、そのままでも十分にかわいいよと言ってあげたいが、そんな事俺から言われても嬉しくないどころか軽くドン引きされそうなので黙って待つのが紳士な俺。

こういうの慣れてるしね、だって、俺の手を掴んで連行してきた当人も同じ事してるし。

そんな訳で実習室の前でいそいそと身だしなみを整える妹様と天使光井を感情の籠っていない瞳で見つめる俺と北山。はたからみたら結構シニールなんじゃないかな。

「では、行きましようか」

「はいっー」

やがて満足いったのか、それぞれひとつうなずくと妹様が俺達に確認を取った。

いや、お前ら待ちよ？とかいちいち指摘しない俺と北山。

天使光井は元気よくうなずいていた。

それぞれの反応を確認した妹様は失礼しますと一声かけて入室した。

「お兄様、おじやましてもよろしいでしょうか？」

そつと入室した妹様と先ほどまでのテンションが見る影もなくなって縮こまっている天使光井に泰然自若とした北山、それにぬぼーつとした俺に実習室にいた面々が反応する。が、それをゆるす達也では無かった。

「エリカ気を逸らすな、すまん、深雪、次で終わりだから少し待ってくれ」

とプレッシャーをかける達也。昼休みも中盤に差し掛かったここまで合格してないだろう千葉と西城に対して鬼のような事をのたまう達也に、妹様ってばはい、わかりました。と可愛らしく華のように微笑むもんだからこのドS兄妹がと思ったりして。もちろん言ったら氷漬けにされるから言わんけど。なんなら消滅させられる可能性すらあるね。

だが、こいつら鬼かと思ったのは俺と天使光井に天使柴田だけのようだった。

むしろやる気マックスオリックスと言わんばかりに瞳に炎をともしてる千葉と西城の2人。そういやこいつら見るからに体育会系だもんね。こういうの大好物なんかーとか思つて眺めてると、さすがというかなんというか、きつちり一発で、．．一発でいいの？で合格した千葉と西城はそれぞれへろへろとへたり込んでいた。おつー。

千葉と西城が達也に感謝の言葉を伝えるていると、妹様の視線が飛んできた。はいはい。

「おつかれさん、ほれ」

「ああ、助かった」

妹様の視線を受けて、俺は達也に購買で買ってきた食糧を渡した。

「お兄様、ご注文の通りそろえてきましたが、足りないのではないでしようか？」

妹様が達也にそういうが、達也もそれはわかっているようで、千葉と西城、天使柴田とこそつと居眠りしてた姉さん呼び寄せてお昼としゃれこむことにした。実習室でしゃれこむも何もないけど。

一応、実習室でも機械の近くで食べなきやオツケーというけつこう緩い校則になつて
るらしく、みんな安心して食事する事に。もちろん俺と妹様と天使光井と北山は食べて
来たので飲み物だけが。

それからあれやこれやと話していると千葉がエキサイトしてきた。

千葉の道場では最初は素振りだけでいいらしい。なにそれ天国か？とか思った俺は
もう駄目かもしれん。

俺？最初は木刀もつて魔法使わずに5メートルくらいある岩斬れつて言われたわ。
魔法使わず。斬るまで飯とか休憩も無しとか今思つても意味不明過ぎたわ。

おっと、そんな事を考えている間にもいつの間にか千葉にお願いされて妹様が実習をやる事になってた。ほー．．．なんで？

妹様がCADの前に立ち、天使柴田が計測の補助に立つと、サイオンの光が閃いた。

「．．．235ms．．．」

「え．．．？」

「すげ．．．」

と絶句する天使柴田と千葉に西城。まあね。とんでもない数値だよ。すごい、いや、しゅごーいってかんじ。

天使光井は素直に称賛してるけど、北山は人間やめてるレベルみたいなこと言い出してた。

そんな周りが絶句したり称賛してる中、やった本人はお兄たまのじゃないとだめええーって感じで達也に甘えてた。雑音だらけで洗練さのかけらもないとかずばつというねえ．．．とか思っても言わない。ってかこれまで俺ほとんど発言してなかったりして。

ちなみに姉さんに関してには風紀委員長様と生徒会長様のお達しにより、実技が免除されたらしい。これ以上機械を壊されたらたまらないという学校側の考えが痛いほど伝わってくる。そのうち俺と達也で姉さん用のCADを学校側に提出する必要があるん

だろうなあと思っっている。そんな事を思っていると、今度はいつの間にか俺に視線が集まっていた。ん？

「え？なに？」

「ハチ、今日は後何回魔法使えるのかしら？」

え？なにその質問？って聞こうと思っただけど、妹様の笑顔がさつさと答えるよコラって言ってるように見えたので、おとなしく単一行程レベルならまだ10回位いけるが・・・と素直に応える。

その答えを聞くと天使光井と北山が絶句してた。

「え・・・今日実技で一回しかやってませんでしたよね・・・？」

おそるおそると聞いて来た天使光井に俺はうむ。と正直に頷く。

千葉と西城がそれでA組なのかよ・・・とショックを受けてるようだが、失礼な。術式規模はうんこな俺だが、強度と速度、特に速度に関しては妹様にも負けないんだぞうと威張ってみる。限定解除ではなく、封印術式を完全開放すれば俺だってそこの魔法師よりはサイオン多いんだぞう。

「ふふ、みんな、面白いものを見せてあげるわ。ハチ？」

え？俺？何？そう言ってみるものの、妹様はどうにも俺にもコンパイルの起動をさせたいようだ。

何がさせたいのかなんとなくわかるものの、とりあえず何すればいいのん？という視線を妹様に向けると、珍しくいたずらを考へてゐるような微笑みを浮かべていた。

おいおい、新しいファンでも開拓する気かよ、どうすんだよそれ？とか思うものの、当然そんな事ない訳で。

「折角だからあなたの事も知ってもらいましょう？」

「え？それいる？知りたい人いる？」

俺の事知りたい人とかいなくない？いる？そりや天使光井や天使柴田は優しく聞いてくれるかもだけどさ、姉さんとかお前や達也ほど人から興味持たれるようなものないけど？

でも、そんな俺の意見は軽くスルーされてしまつてね……。

「そうね、西城君、好きな数字を行つてくれるかしら？」

「……へえ？面白いな、それ」

深雪が微笑みながら聞いてみると、西城はなにがしたいか察したようで、不敵な笑みを浮かべている。

千葉や北山は興味深そうに、天使組と姉さんは頭にはてなを浮かべている。まじ癒されるツス。

そんな事を考えていると、西城がそんじやあ893で。つて言つてきて。ヤクザか

よって思ったけど誰もそんな事思っていないようだ。

「ハチ」

「へい・・・」

現実逃避してみたけど、妹様の絶対零度の瞳から逃げられる訳ないのだよ・・・。

これで、全然見当違いの数字とか出したら俺の身が大変な事になってしまうので、しつかりやるのだが。

はあ、とため息をつきつつ、コンパイルを起動させる

『クリア、タイム、893ms』

よーしよしと思っていると、みんなびっくりしてた。あれ？北山と光井は見てなかったっけ？

「・・・まじかよ」

「え!?うそでしょ!?!じゃあじゃあ600!」

終わっていい?って思ってたらビッククらしいたべーって顔してる西城の横から千葉がリクエストしてきた。

当然妹様からやれよって視線が飛んでくるので喜んでやらせて頂きますとも。

『クリア、タイム、600ms』

これで終わっていい?って思いながら振り返ると、すごいキラキラした目で俺を見つ

めてる天使組と姉さんがめっちゃくちや近くにいた。

当然、そこからめっちゃいろいろ言ってくる姉さんと柴田と光井のリクエストに応えながらコンパイルを起動させる。

もうそろそろ今日の限界なんだが、こんだけ喜ばれるとこんなクソみたいなCADを起動させるだけの作業も悪くないと思えなくもない。おじさんはりきっちゃうぞおー．．．みたいな？でも、みんなが純粹に喜んでいうか、楽しんでる訳ではない訳で。

「すごいわねえ．．．」

と感心してるんだかあきれてるんだかよくわからん顔の千葉に俺のメンタルが微妙に刺さされてるが、気にしない。

「それじゃあ．．．、200」

「はいよー」

気にしない精神で言われたようにコンパイルを起動させる。そりゃー。

『クリア、タイム、199ms』

むっ．．．しまった、ここにきて外してしまった．．．。まだまだ修行が足りんぜよって言ったらいろんなところから鬼コーチ的な人達が集合しそうだから絶対に言わないが。

「いやーしっばいしっばい」

てへーって顔して・・・したら妹様からはたかれそうだからすまなそうな感じで、何されるかわからん恐怖にビクビクしながら振り返るとみんな絶句してた。

「・・・え？なに？」

「いや、なに？って・・・ええ・・・?!」

なんなの？って視線を向けても妹様はすげえドヤ顔してて話にならん、まあ機嫌が良さそうでいいけど。達也も苦笑するだけで、姉さんもニコニコしてて、それで、千葉に視線を向けると、困惑してて。

ええ？なにがいけないのさーって思っていると、午後の始業のチャイムが鳴った事どうやむやになっちゃった。

結局妹様が満足気だったからいいかって事いして満足する事にした。

それよりもさ、今日もう魔法使う余力無くなっただけ・・・？そんな視線を向けて見ても妹様は気にしないようですて・・・はあ、やれやれだぜ。

シズ、お仕事する

「こんにちわ、久しぶりだね。 그레이さん」

「は、はいっ！ お久しぶりです、シズさん！」

みんなの前でハチがどやってから、あれ？ 深雪かな？ 二日後。

私達の家に 그레이さんがやって来るので、私とハチは 그레이さんの迎えに来ていた。いやー ひさしぶりだねー。いつものように目深にかぶった帽子付きのまんど？ けーぶ？ を着た 그레이さんは今度はハチに視線を向ける。

「ハチさんも、その・・・ お久しぶりです・・・」

「ああ。 久しぶり・・・ あー、元気にしてたか？」

「はい・・・」

2人とも恥ずかしそうにして挨拶をして、それから 그레이さんはペコリとお辞儀をした。

「これから数日の間、 よろしくお願いします」

「よろしく」

ペコリとお辞儀する 그레이さんにペコリとお辞儀を返す。 うん、相変わらずおとなし

くて、可愛らしいね。

・・・さて、なんで私達が 그레이さんと挨拶をしているかと言うと。

先日の私の工場爆発のせい、これ以上四葉の本家に迷惑かけないでね。という事で、監視要員として 그레이さんが派遣されたみたい。

あいにくと達也と深雪は九重さんのところに向かっている、で 그레이さんの迎えは私とハチで行う事にしたために、2人で学校終わりに駅まで迎えにきていた。

駅のホームで 그레이さんと合流した私達は、そのまま家に向かうかと思ったら、どうやらそうではないみたい。

「それで、これなんです。・・・師匠から、四葉経由での依頼だそうです」

「うげ・・・」

그레이さんが申し訳なさそうに取り出した指令書にハチがとても嫌そうな顔をして受け取っていた。

ここでみるのもあれだから・・・と私達は近くの喫茶店に移動して、奥の席へと座り、指令の内容を確認する事にした。

あーこれはもしかして、監視とか面倒をみてーっていうのはついでで、元からこれを依頼するつもりだったのかな？そうなってくると、この仕事、思ったよりも大変かも？

「それで、どんな内容なのかな？」

「ああ、時計塔に関与してた魔術師の捕獲もしくは排除だよ」

ああ、なるほど……いつものかあ……

思わず私も顔をしかめてしまう。時計塔の魔術師達は現代の魔法師とは存在意義が違う。らしい。

えーと、たしか、根源への到達を目標にした人達だけ？ 根源がなんなのかはよくわからないけど。

現代の魔法師はしーえーでいーを使つて高速戦闘を主体とした戦力を突き詰める集団みたいなどころがあるから魔法を使う。といつてもその存在意義はまったく違つていた。

だからこそ時計塔から来た魔法を使う人を総称して魔術師。しーえーでいーを使う高速戦闘を主体とした現代の魔法を使うものを魔法師と分けられているらしい。たぶん、調布と田園調布くらいは違うんだと思う。

それで、時計塔の魔術師の、特に脱走したとかそういう感じの、となるとほぼほぼその工房は凄惨な状況になつてゐる事が多い。

前に捕まえた人は人間を実験材料にしたので、その現場はとても悲惨な事になつていたのを思い出した。

「はあ、まあこれも仕事だしな、しょうがない武装してこいつて言われてた時点で気づいてたけどな…」

「すみません……」

「グレイさんが悪い訳じゃないから気にしないで」

ハチがいつものようにやれやれって感じで言うのと、グレイさんがすごく申し訳なさそうにしていた。私はとっさにグレイさんの頭を撫でて微笑む。

本当に、指令を持ってきただけで一切の責任が無いのにね。本当に美月さんやほのかさんみたいに心の優しい子だね。

それから私達は喫茶店で一息ついた後に現場に向かう事にした。

「そーいや、今回はロード来ないのか？」

「師匠は……」

きやびねつとで現場付近に向かいながら、ハチが何気なく聞いた内容に、グレイさんが途端に悲しそうな表情になる。

そんなグレイさんの表情に慌てた私とハチはあわわってなるけれど、その後のグレイさんの言葉で安堵した。

「師匠は……ぎっくり腰で入院してしまいました……」

「ぎっくり腰かぁ……」

とても悲しそうなグレイさんには申し訳ないけど、大した事なくてよかったです。今にも師匠さんが亡くなってしまいうんじやないかって顔してたから心配しちゃったよ……いや、本当に彼には申し訳ないけどね。

「本当は拙がお世話をしたかったのですが……」

「そうか」

達也のお世話大好きな深雪と同じくらい彼のお世話が大好きなグレイさんにはとても心苦しいんだろうなあ……。

ハチの表情を見ると、すごく微妙な顔をしてるし、彼にあきれてるのかな……。ぎっくり腰で動けなくなったりするところなんてちよつぴり彼らしいと思う。前にあしの小指をテーブルにぶつけて泣いてたってグレイさんが言ってたしね。

いつもすぐくっかっこいいのにたまにこうしておちよちよいなのが彼の面白いところだと思う。

それから私達はグレイさんを慰めながら過ごし、少しして現場付近に到着した。

「さて、ここから少しすると相手の結界に入る事になる」

埼玉の郊外までやって来た私達は、目の前の森に突入していく前の最終確認をしていた。といってもこういう現代の魔法とか魔術の事はグレイさんとハチにお任せのただめな私です。とりあえず私に出来るのはしっかりと聞くことだけ。

「ここからは一応消音と光学迷彩の魔法をかけて突入するが、魔術結界に引っかかるだろうから、いつ襲撃があっても大丈夫にしてくれ」

ハチが説明すると、私とグレイさんは慎重に頷いた。

魔術結界をどうにかして侵入していきたいけど、系統が違いすぎてさすがのハチにも難しいみたい。だから私達はいつも正面から突入するしかない。脳筋って言わないで。

「それじゃあ行くか・・・コール、試作術式起動・・・」

『ミトメタクナイ！』

よし、と頷いたハチが腰に下げた刀をボンとたたいた後、試作術式を起動させた。

グレイさんが可愛らしく首を傾げながら認めてくれないみたいですが・・・？と言っていたが、ハチは気にしないでくれと言って術式を発動する。

「第一段階限定解除」

『ハロー！ゲンキ！』

ハチの言葉にしーえーが答え、術式が起動すると同時に私にかかっていた負荷が軽くなったのを感じる。ハチもこれである程度魔法の選択に余裕が出来たみたいで、すぐに続けて魔法を起動させていた。

ちなみに、ハチの装備は術式刻印の刻まれたわいやー内臓の刀に通常の腕輪型しーえーでいーを装備して、さらに音声入力用のねつくれす型のしーえーでいーと三つも装

備している。とても器用なハチはいつも複数なのでばいすを持つている。ほんとうにすごい。

私？私はハチと似たような刻印の刻まれた刀に、ハチと同じ音声入力用のねつくれす型のしーえーでいーを装備している。でも今回はきつとしーえーでいーは使わないだろうなあ……。私、能力を制限するためだったり、遠距離攻撃用にしーえーでいーを使っているだけで、近接戦闘で燃やすだけならしーえーでいーいらないしね。

そして 그레이さんは大きな鎌を構えてうなずいていた。この鎌、とてもおしゃべりな愉快な箱みたいな感じの魔術礼装で、とてもすごいらしい。普段の 그레이さんとの会話ではただのおじさんみたいなの事ばかり言ってるからぜんぜんそんな感じしないけれどね。

さつきまで静かだったのは街中でしゃべると 그레이さんが怒るからみたい。それで、今も空気を読んでしずかにしているとの事。意外と空気の読める箱なんだ。

「よし、それじゃあいくか」

「うん」「はいっ！」

こうして私達は森に突入していく。

森に入った瞬間、何かの膜を抜けたような感覚と共に、緊迫した空気が流れ始めた。

「ハチ」

「ああ、やっぱりいるな」

グレイさんともうなずき合いながら夜の森を静かに駆け抜けて行く私達。

すぐに視線のようなものを感じたので、すでに私達を捕捉しているのだろう。

しずかに走り続けること数分、岩壁に洞窟を見つけた。

どうやら今回の相手は天然の洞窟に魔術工房を作っているみたいだ。

「さて、それじゃあさつきと終わらせて家に帰ってゆつくりするか」

そうつぶやいたハチに私とグレイさんはそれぞれ答えて洞窟に突入していった。

シズ、やべえやつにあう。

洞窟に突入してからどれくらいたつだろうか。

はじめこそ天然横穴の洞窟だと思われたが、そこから下に降りて行く階段を見つけ、また探索し、と繰り返す事幾たび。私達は未だに終わりの見えない洞窟探索を続けていた。

問題はそれだけではなく……。

「追加だ！正面5、左右からもそれぞれ複数接近してきてる！シズ姉！」
「任せて！」

ハチの指示に従って私は正面から接近してくる骨で作られたトカゲのような敵に向かって切り込んでいく。

骨トカゲの繰り出す槍をかいくぐりながら2体を同時に炎をまとった剣で切り伏せる。

切り伏せたその後方3体から追撃が入るが私はそれを剣でいなしながら応戦する。

「ハチさん！後ろからも！」

「わかっている！シズ姉、そのまま前進だ！左右の通路からの足止めする。グレイもシ

ズ姉に続いてくれ！」

私とグレイさんはそれぞれ返事をして追撃をかける。

指示を出しながら魔法を起動したハチの魔法で作られた氷塊が左右からくる骨トカゲに殺到していきその足を止めた。

ハチが左右からの敵を足止めしたその隙に私とグレイさんは追加で正面からせまる敵を素早く殲滅した。正面を殲滅したのを確認すると、左右の通路を無視して駆け抜けて行く。

「はぁ．．．はぁ．．．」

通路を駆け足で駆けながら私達は通路を走る。最初こそ余裕を持って行っていた探索だが、今や全員が少なからず消耗してきている。このままじゃまずいかな．．．。

そんな不安を思わず、という感じでグレイさんが声にだした．．．その表情はやはり疲労と不安に包まれている。

「あと、どれくらい続くのでしょうか．．．?」

少なくとももう3回は階段を下っている。敵も階を下る毎に増えて行く．．．。

幸い1体1体はそれほど強くはないが、何しろ数が問題だ。もう私達3人で100体くらいは倒しているだろうけど一向に減っていく気配がない。

どこまで続くのか、そんな不安をグレイさんも、ハチも持っていた。

「どうだろうな．．．予想以上の規模の魔術工房だが、流石にこれ以上の追加がそうそうあるとも思えないが．．．」

そう分析するハチにグレイさんも静かに頷いている。

たしかに、これまでに当たった魔術師の工房はどこもここまで広大なものでは無かった。

どこもとてもいやらしい罠があつたりしたけど、ここまでのものは今までなかった。それととてもいやらしい気配もするし本当にいやらしい。大事な事なので何回も言うよ。

それをハチもグレイさんも感じているみたい。

正直なところ、ここまでの規模であれば一度撤退して、それなりの装備と、出来れば深雪と達也にも参戦してもらつて改めて突入したいところだけど．．．。

「撤退したいが．．．やつこさんはこつちを逃がすつもりは無いみたいだな．．．」
「はい．．．まるで誘われているみたいですよ」

ハチとグレイさんが言うように、どうにも私達はこの魔術工房の主に誘われているようだ。

先程後方から来た骨トカゲはしばらく走ると追いかけてくるのをやめてただこちらに武器を向けるだけになっていた。ただひたすら奥へ、奥へと追いやつていくのだ。

そうしていく事で、少しづつ、しかし確実に私達は体力を削られ、魔法力を使わされていた。

最初はわからなかったけれど、今ならわかる。きつとハチも、グレイさんも感じ取っているだろう。この工房の主の待つ最奥がもうすぐだという事に。

奥に行く毎に増していく気配の濃さに私達はより一層警戒しながら進んでいく。

「しかし、この気配は・・・思ってたよりヤバいな・・・」

「はい・・・」

「姉さん、最悪もう一段階解放するかもしれない」

濃密な気配に息をのむハチとグレイさん。特にグレイさんはそういった気配に敏感なので少し気持ち悪そうにしているくらいだ。

そんな状態を見てハチがさらなる封印の解放を聞いてくるが、私はいいの？と視線で問いかけると、苦笑しながらうなずいていた。

「ああ、勝手に第二段階まで解放すると、本家がうるさそうだが、この場合はしようがないだろ。最悪土下座でも靴舐めでもなんでもするさ」

そういつて苦笑いしながら親指を上げるハチに、私はわかったと頷いた。

きつとそうなったら謝るだけじゃ済まなくて、きつといろいろ大変な事をさせられるだろうけど。その時は私も一緒に謝るとハチに微笑むと、グレイさんもうなずいた。

「今回の依頼は師匠からでもありますので……その時は拙も一緒に謝ります」
「そうだね、3人で一緒に謝ろうか」

そういつて微笑む私にハチとグレイさんも笑い出した。うん、いい雰囲気だね。変に疲れや緊張を引きずると、どんな失敗につながるかわからないからね。この雰囲気はい感じだ。

そうして進むと、かなり広い空間に出た。

魔法的な力で確保しているであろう明かりに照らされている空間はざっと見ただけでも学校の校庭に迫る広さはあるかもしれない。

「おいおい、埼玉の郊外とはいえ、こんな広い空間をまるっと工房にしているとマジかよ……」

「それに、この気配……」

その空間に驚いてるハチとグレイさん。もちろん私も驚いている。

「ふふ……いらつしやい。可愛らしい侵入者さん達……」

突然、そう、突然に広大な空間の一部がゆがんだかと思つたら、1人の女性が出現していた。

紫のローブを着こみ、目深にフードをかぶっている為表情はわからないけれど、いかにも魔術師です。という感じの女性だった。

私も、ハチも、グレイさんもすぐにそれぞれの武器を構えて戦闘態勢に入る。

私は手に持つ刀を構えながらもその女性に問いかけた。

「こんばんわ。あなたがこの工房の魔術師さんかな？」

「ええ、そうよ。凛々しいお嬢さん。この私の工房へようこそ」

私の問いかけに魔術師の女性は綺麗にお辞儀をしてきた。ついでにチロリと視線を感じると、私の腕に鳥肌が立つてきた。え？すっごい寒気を感じるんだけど？

「あの時は逃げられたけれど、今度は逃がさないよ」

「あら？気づいていたの？でも残念ね。それはこちらのセリフよ」

その言葉と同時に魔術師の女性の魔力が膨れ上がっていく。

「おいおい……」

「そんな……」

膨れ上がる魔力にハチとグレイさんが驚愕している。

さらに女性の左右の空間がゆらいだかと思うと、更に人がたっていた。

1人はまたもやいかにも魔法使いと言うような紫がかった黒いローブの格好にとんがり防止をかぶった男性が無言で杖を構えて立ち。もう一人はスーツ姿で眼鏡を掛けたマジメそうな男性だ。この人だけなんか普通の人だね……。

そんな3人だけでなく、普通の人には魔力は感じないけど、他の2人の魔力が尋常じゃ

ないね。

向こうの世界で言うのと、それぞれ魔王に匹敵するくらいの強さを感じる。

まずいかな・・・？ハチもグレイさんも普通の魔術師ならば十分対応できるだろうけれど、まだ魔王に対応する事は難しいだろう。2人とも全ての封印を解除できるならまだしも、現状では・・・。

「ハチ、グレイさん。私の後ろに」

戦力差はハチもグレイさんも感じているだろうに、私がそう言うのと、2人とも小さく笑みを浮かべながら私の言葉を否定した。

「俺も戦う」

「拙も戦います」

2人とも怖いだらうに強気に笑みを浮かべながら私の横に並び武器を構えた。

そんな2人に私は苦笑してしまう。

「もう、しょうがないなあ・・・」

そう言う私に2人は微笑みながらうなずき合い。それぞれ武器を構えていた。

「それじゃあ姉さんには一番ヤバそうなアイツを頼む」

「シズお姉ちゃんって言ってくれたら頑張るよ」

ハチの言葉にそう返すとむぐつつてうなるハチ。ちよつとかわいい。

慌てた時とかは時折シズ姉って呼んでくれるけど、みんなの前だと澄まして姉さんとか呼んでくれないんだよね……。こんな時になんだけれど、向こうはなぜかこつちの準備を待つてくれてるみたいだし、折角だから普段から思ってた事を聞いてみる。ちよつとイジワルだったかな？

「姉さん「シズお姉ちゃんは？」……シズ姉、これで勘弁してくれ……」

ハチの言葉にかぶせて見るけど、これが限界みたい。うーん、しょうがない、今日のところはこれで我慢しようかな。

「うん、今日はそれでいいけど、今度からはシズお姉ちゃんつてよんで欲しいかな」

「ああ、善処するよ……」

それは、無事にここを切り抜けようという約束だ。私とハチは笑い合う。

「だから、あの人は私に任せて」

「ああ、頼む。グレイにはあの女を頼む」

「わかりました」

グレイさんの術式礼装は魔術師に対して非常に有利だからね。いくら格上でもすぐには敗北する事もない。

「グレイにはつらいかもしれないが、なるべく早く俺か姉さ「シズお姉ちゃん」……シズ姉が援護に行けるようにする」

「クスクス・・・はい。拙も出来るだけやってみます」

微笑みながらもしつかりと覚悟を決めた表情でうなづくグレイさん。

ここに彼、ロードエルメロイがいれば、きっとグレイさんも安心して戦えると思うけれど・・・いまここには彼がない。彼の分まで私達が彼女を支えてあげないとだね。

「んで、俺はあのおっさんを相手にするわ。つかなんだあのおっさん。見た目普通のおっさんだけど、気配が尋常じゃないんだが・・・なんなら一番怖いまである」

そうつぶやくハチの視線を受けたのか、スーツの人がハチに視線を向けて来た。その瞬間、私達を静かな、それでいて強烈な殺気が襲い掛かった。うん、絶対やばい奴だね・・・。

そうして私達の準備が完了したのを向こうも確認してみた。

「さて、そろそろいいかしら？可愛らしい侵入者さん達？」

そういつて、クスクス笑いながら杖を掲げるロープさんの頭上に多数の、数えきれないほどの魔力球が作られ私の腕に鳥肌がツ立った。こわい。

そしてもう一人の黒いロープの人も杖を構えると、こちらも巨大な魔力球を作り出した。

それに対して私とグレイさんがそれぞれの武器を構えて迎撃の態勢に入る。

「さあ、始めましょうか！」

そう言うと同時にローブさんの魔法の雨が降り注ぐ、私とグレイさんで炎をまとった刀と鎌で切り裂き、魔力の雨を消滅させていく。

そこに、さらに黒いローブの人の魔法が炸裂する。

『ブラック・マジック』

さつきまでしゃべらなかつた黒いローブの人がそう言って放たれた魔法は広大な空間をその漆黒の魔力球によって蹂躞しながら放たれた。

達也、妹をなくさめる。

ハチとシズが帰って来ない……

グレイが来るからと迎えに行つた2人はおそろくそのまま四葉の本家からの仕事が入つたのだろう。

昨日の夜に俺の端末にハチから連絡が入つたのが最後だ。なんだ洞窟行つてくるつて。意味がわからない。

それからほぼ丸一日経過しているが、いまだにハチもシズも帰ってきていない。

「まったく……」

いくら俺が感情を失つているといつてもさすがにため息のひとつもつきたくなくなる。

勿論、2人の安否が気にならないと言えば嘘になるが。ハチとシズがそろつた状態であの二人をどうこう出来るような存在がそうそういるとも思えない。

それこそ十師族の当主クラスの存在でもない限りシズをどうにか出来るとも思えない。

そうは思うものの、現状目の前の惨状を前にしてはため息もつきたくなくなるというものだ。もちろんつかないが。

「お姉さま……」

そうつぶやきながら手元のガンプラを組み続ける深雪に俺はどうするか……と思索してしまふ。あれはたしか、ハチが組み途中のツールギスだったか、次のガンプラバトルで使うんだと珍しく瞳に生気を宿していたのを覚えている。まあ今の状態を見たら生気を失いそうであるが。

「お姉さま……大丈夫でしょうか……」

先程から同じような事を繰り返しながらハチが大事に秘蔵していたガンプラを組み立てて行く深雪だが、言葉ではシズだけを心配しているようで、しっかりとハチも心配しているのだろう。

まあ恥ずかしいのか決して口では言わないが、昨日の夜から今に掛けて帰って来ない2人を心配しているのは明らかだ。先ほど師匠のところから帰って真つ先にこのハチの部屋に入って来たからな。

今日の朝になつても帰って来ない2人だが、四葉本家の仕事であればそれはままだ事。それだけであれば深雪もそれほど心配はしていない。

だが、それがまる一日連絡もなくなつてくると話は変わってくる。

シズを慕っている深雪にとつて、丸一日シズと連絡も取れなければ話す事も出来ないという状況はきつと何かしていないと不安なのだろう。俺もなるべく励ますようにし

ているが、やはりこういう時にはシズの存在は大きい。

まあ、その不安の解消のためにハチの部屋に入って、アイツの秘蔵のガン普拉をひたすら魔法で組みまくるのは兄としてどうかと思ってしまうが。

アイツは変なところでこだわりがあるから、決してガン普拉を組むときに魔法を使おうとしないのだ。

なぜ使わないのかと聞いたらガン普拉への感謝の気持ちと好きと言う気持ちを込める為に魔法を使うのは邪道だとか言っていたな。

そんなこだわりなど関係ないと言わんばかりに今も深雪の魔法によつて素組とは思えない程の完成度で一体完成しているが。つなぎ目も完璧に処理されているところにハチによる影響が見られる。

そんなアイツが今の深雪の行動を見たら卒倒するだろうな……。

そんな事を考えている間にも深雪は時折シズの名前を呼んだり、ハチへの文句をつらつらと良いながらやたらと似通った茶色のガン普拉をかれこれ40体ほど作り続けていた。

……それにしてもアイツはなんでこんな似たようなガン普拉を40体近くも買っているんだ？ガン普拉の種類には詳しくないが、明らかに不要だろう。

それでも深雪にとっては気晴らしになるのか先ほどからピカピカとサイオンを光ら

せてはガンプラを完成させていく。

「はあ・・・お姉さま・・・あら？これで終わりかしら？ええと、まぐ・・・アナック？」
そして、最後の一体を完成させた深雪がようやくくちらの世界に帰ってきたようだ。

「深雪・・・」

「お兄様・・・」

先程まで目のハイライトが消えた状態で恐ろしい勢いでガンプラを作り続けていた深雪に俺は優しく、そつと頬に手を添える。

深雪が気持ちよさそうに目をつぶるのを見て、ようやく落ち着いたようだ、と一安心する。

ハチの秘蔵のコレクションは全滅してしまったが。マグアナックとやらはまだしも、アイツの作りかけだったツールギスや大事にとっておいたネオジオングやパーフェクトストライク、PGユニコーン等がアイツの作業台に並んでいた。

買って来た時に瞳を輝かせながら俺に話していたから覚えている。とても楽しみだと珍しくテンション高かったからな。

帰って来た時にアイツが崩れ落ちる姿が目には浮かぶが今は妹が優先だ。あいつには後で変わりのものを買い与えておけばいいだろう。

「大丈夫だ。あの二人がそうそうどうにかなるわけがないさ」

「はい……」

言葉ではハイと答えてくれるが、やはり心配なのだろう。その表情は晴れなかった。「それよりも今日の事だ」

「はい、司先輩、それにブランシユ、ですか……」

ハチが休みの日に限って手間のかかる案件が起こってしまった。

学内の差別撤廃をうたう有志同盟とやらが放送室を占拠してからのあれこれに何度アイツがいれば負担を軽減できたろうかと思ってしまった。

結局生徒会長にすべてゆだねる形で終わつたが、それで解決したわけでは無い。

明日以降が本番だろうと思ひ、念のためこれまでの情報を確認するために師匠のところに行つてきたのだ。

そこで聞かされたのが司先輩がブランシユにかかわっている事、何を企んでいるかまでは不明だが、何かをしようとしているとの事だった。ハチも独自のルートで調べていたから最新の情報を共有できないのが悔やまれるな……。

そうして師匠からブランシユの事を聞いて帰つてきても2人は帰宅していなかった。

その事について深雪の精神が限界を迎えた結果、ハチの部屋に突入してガンブラを作り始めたのが数時間前の話だ。

だが、もう日付も変わってしばらく経っている。これ以上は深雪の健康に良くない。

「深雪、もう夜も遅い。今日はお休み」

「ですが・・・お兄様・・・」

「2人が心配なのはわかる。だが、お前が体調を悪くしてしまつたら帰つて来た2人が心配するだろうか?」

俺がそう言うのと、深雪も渋々ながらも納得したようだ。

「・・・わかりました。わがままを言つてしまい申し訳ありません」

悲しそうな表情で謝る深雪をそつと抱き寄せながら俺は大丈夫。と声を掛ける。

「さあ、もう寝ようか・・・」

「はい・・・お休みなさいませ、お兄様・・・」

そううなずくと深雪は立ち上がり自分の部屋へと向かつていった。

「ふう・・・さて、この惨状をどうするかな・・・」

そう思ったが、ふと、家の近くに2人の気配を感じた。

「やれやれ、やつと帰宅か・・・ん?」

まだ距離があるが、間違いなくハチとシズだろう、それにグレイもいるようだ。

しかし、2人の気配に違和感を感じる、そう思つて2人のエイドスを読み取つた。

「これは・・・まずいな・・・」

読み取つた瞬間に非常事態が発生していた事を理解した。

俺はその情報を読み取るのと同時に先ほど寝るために部屋に向かった深雪に声を掛けに行く。

「深雪、すまない。2人が返ってきたようだ」

そう声を掛けるとすぐに部屋の中の気配が、深雪には珍しく、非常に慌てたようにパタパタとドアを開けた。

「お兄様、2人は!?!」

「落ち着くんだ、深雪。2人はまだ少し距離があるが、こちらに向かっている。ただ、2人とも負傷しているようだ。治療の準備を頼む」

俺の言葉に動揺するが、すぐに表情を引き締め、わかりました。と答えた深雪はすぐに治療道具の準備を始めた。そうするうちに三人の気配は大分近くまで来ているようだ。

俺はそのまま玄関まで行き外に出て三人を迎えに行く。

「ハチ、シズ、グレイ!」

迎えに行く俺が見たのは、エイドスを読み取った情報通りに傷ついた三人の姿だった。

俺の声を聴くと、それまで泣きながらハチとシズを両肩に支え歩いていたグレイが顔を上げた。

「達也さん！助けて下さい！2人が・・・2人が・・・!!」

そこには十師族当主でもないかどうかにも出来ないだろうと思っていたシズとハチがボロボロになっている姿があつた。

ハチ、めっちゃぼろぼろで登校する

「達也さんっ！2人が、2人が・・・!!」

「よう・・・」

「ただいまぁ・・・」

そう答えるグレイの両肩に支えられて何とか歩いていた2人はそう弱々しく答えるがその状態はひどい物だった。

2人とも全身に傷を負っているが、ハチは打撲に骨折、火傷と全身ボロボロで一番重症だ。シズも全身にダメージを負っているし、グレイも2人程ではないがケガをしているのがわかった。

2人がいてここまでの事になる相手に戦慄を覚えるが、今はそれどころではない。

「ここでは治療も出来ない、まずは家に運ぼう」

「お願いします・・・」

泣きながらここまで2人を支えてきたグレイからハチを受けとり、すぐに家に戻る。

「深雪、お湯と包帯を」

「はいっ！」

玄関で俺達を待っていた深雪は三人の状態を見ると息をのむが、すぐに俺の声に反応して治療の準備をしに行った。

俺とグレイはハチとシズをリビングまで運ぶと、そつとソファに横たわらせる。

すると、シズとハチも意識を失ったようだ。これだけのケガでよくここまで意識を持たせたな……。

俺は自室に戻り、CADを手にとると、すぐにリビングに戻った。

「待つてろ、すぐに治療する」

そう声を掛けて三人にそれぞれ魔法を掛ける。

すると、時を巻き戻したかのようにハチとシズ、グレイの傷が回復していく。

俺の魔法により、細かな傷や骨折は治ったが、なぜかハチとシズの火傷が治らなかつた。

「これは……」

「どうしたんですか……?」

エイドスの情報を読み取ったうえで魔法を掛けたというのに2人の魔法による火傷のような侵食が修復されなかった。

打撲や骨折、裂傷などは修復されているのでおそらく2人を攻撃した魔法によるものだろうと推察は出来るが、これでは……

「ふう……達也、助かった」

「ん……ありがとう達也。大分楽になったよ」

「ハチさん、シズさん！」

俺が深雪に推察を話していると、2人が起きたようだ。そんな2人をずっと看病していたグレイが泣きついていた。

「目覚めたか、それで、一体何があつたんだ？」

「ああーまだグレイから聞いてないか？」

「今の今まで2人の治療を優先していたからな」

おお、そりゃサンキュな。と軽い返事をしたハチがその後語った内容に俺と深雪は驚愕する。

まさかこの2人に体術で優勢に立てるものがあるとは……それに他の魔術師2人か……厄介だな。

「それで、恥ずかしながら俺が最初にボコられて、全体魔法で姉さんも焼かれて、グレイが聖槍解放したどさくさで逃げて来た。向こうも特に深追いするつもりもないみたいで途中で何とかまけたから後は追跡されないようにルート変えたり隠れたりして何とかここまで帰って来たんだ」

いくら四葉の依頼とはいえ、この2人とグレイをもつてしても撤退するしかない

は・・・これはブランシユに時間を掛けられないな・・・十師族の介入を警戒していたが、これはそうも言つてられない。

それからは今日起こつた事を話して夜も遅いので後日とした。

翌日

「やっぱり深雪のごはんはおいしいねえ！」

朝起きたら姉さんが元気いっぱい朝ごはんを食べていたでゴザル。

姉さんの向かいでは妹様が幸せそうな顔して姉さんを見ていて、その妹様の隣でグレイが苦笑いしていた。

・・・ええー・・・意味がわからないよ。

やつらの魔法ダメージ姉さんもめっちゃ喰らつてたじゃん・・・なんでもうびんびんしてるん??

これ単純な火傷とかじゃなくておそらく魔術的な呪いよ?なんでそんなほがらかなん??

そんな感じで俺が信じられない物を見る感じで姉さんを見てみると、姉さんと妹様が気づいたようで俺に挨拶をしてきたので俺もやつはろーと返しておく。

朝の挨拶がこれではないのは理解しているが、なぜかたまに頭をよぎるのだ。．．それとはともかく、姉さんだ。

今も幸せそうにご飯を食べている姉さんの隣に座りながら聞いてみた。

「姉さん、昨日のダメージは大丈夫なのか？」

「身動き取れない程じゃないけれど、さすがにしばらくは安静にしないとかな？」

そうもぐもぐとご飯を食べながら答える姉さんを観察すると、確かにまだ火傷のような傷が見えた。その割には元気そうに見えるけど、きつと妹様を不安にさせないようにしてるんだよね？

今も元気いっぱい妹様にお茶碗を差し出しながらおかわりを要求しているけど、心配させないようにだよな？

あれー？俺めっちゃ足引きずりながらここまで来てたんすけど？座るのめっちゃしんどかったんすけど？なんなら飯も食べれる気がしないんすけどー？あれー？

なんかこれじゃ俺が大したことないのにやたらしんどそうにしてる痛い奴みたいじゃない？

俺も姉さんも魔法ダメージはとんとんくらいだと思ってたんだけど．．．。

箸ひとつ持つのも苦勞している俺を見て、グレイが立ち上がって気づかってくる。

「ハチさん、拙がお手伝いしますね」

「いや、大丈夫だ」

俺のお茶碗と箸を持って食べさせようとしてくるグレイに俺はやんわりと首を振る。恥ずかしいやんけ……。姉さんが同じくらいダメージで平気そうにしてるのになんか俺だけ看病されるのとかめつちや恥ずかしいやんけ……。しかも普段はフードで隠してるグレイも今は外して、妹様に並ぶほどの美貌、グレイの場合は綺麗というよりかわい、という感じだが、それがめつちや近くで俺にあくんしようとしてるんだぞ？

そんなんごほうb……。恥ずかしいやんけ。

そう思つてふるふると傷む体に鞭打つて首を振つてみるが、華麗にスルーしてきたでゴザル。

「拙がお手伝いしますね」

「いや、スプーンで食べるから……」

「拙がお手伝いしますね」

「……ハイ」

まさかの断れないやつだった。

だんだんグレイの瞳からハイライトが消えそうだったので、俺はおとなく従う事にした。

いや、正直たべるのしんどかったから助かるんだけどね？

「ふふふ……♪」

「ふふふ……♪」

それからしばらくは妹様とグレイの上機嫌な鼻唄を聞きながらの朝ごはんを過ごした。

「ごちそーさま♪」

「ごっそさん」

しばらくして食べ終えた俺と姉さんは手を合わせて食後の挨拶をした。これとても大事。

妹様とグレイは2人ともとても嬉しそうに俺達の食器を片付け始める。うん、2人ともほんとうに尽くすの好きだね。ダメ人間製造機って呼んだら怒られるかな？

おっと、それはそれとしてだ。そろそろ確認しないといけない事があった。

正直朝からの全身の呪いによる痛みと、姉さんがその状況下でピンピンしてるショットで忘れかけてたが、ちゃんと確認しないとだな。

食器を洗い終えた妹様とグレイがイスに座り直したのを見て、あ、さりげなくコー

ヒーまで入れてくれたグレイに感謝してから妹様に問いかけた。

「なあ、深雪さんや?」

「どうしたの?」

妹様は姉さんにお茶を出しながら問いかけてくる俺に一切視線を向けずにひたすら姉さんを幸せそうに見つめつつ俺の問いかけに返事をしていた。

副音声でじゃますんなコラの的な声が聞こえるけど、こつちにも引けないのだ。

「なあ、深雪さんや、俺に言う事あるんじゃないかしら?」

そう、昨日の夜はダメージからすぐに眠ってしまったので気づかなかったが、朝起きたら俺の秘蔵のガンブラ達のごとごとく組まれてた件である。

それを妹様に問いかけると、そういえば……と妹様は思い出したようだ。

「ごめんなさい、ハチ。お姉さまが返ってこなくて不安だったからあなたのガンブラを組んでしまったわ」

「不安だったからの行動がおかしいでしょ……」

不安だから何かで気を紛らわせるってのは理解できるが、なんで俺のガンブラ達が犠牲になってるん?

ご丁寧なマグアナック隊まで1体残らず完成させられてるし。

組み途中のツールギスどころかストライクやユニコーンまで完成してたんですけ

ど・・・？

そんな視線を向けると、流石に妹様も悪い事をした自覚があつたのか申し訳なさそうな表情をした。

「ええ、ごめんなさい、今度変わりのものを買いに行きましよう？」

だから、本当にごめんなさいと謝る妹様にしようがねえなあと許してしまう。

まったく、毎度遠くに仕事で行くたんびになにかしら妹様がしでかしてくるんだもの。今回は結構ハードだったけど。まったくやれやれだぜ。

道理で今日の朝ごはんがいつものソーセイジじゃなくてアルト○イエルンな訳だ。流石に妹様も反省しているみたいだ。

え？安い？そんな事ない、だつてさ、○ルトバイエルンなんだぜ？贅沢だろ？

それから少しして達也がハゲ坊主のところから戻ってきて、今度は達也のお世話をして幸せそうにしてる深雪を眺めながらこれからの事を話した。といつてもあれだな。

「んで？公開討論会が明日ねえ・・・」

「ああ、そこでおそらくブランシユも動いてくるだろう」

二科生への差別無くそうってか？一科生の選別方法変えないと無理でない？アホばかりじゃん。

それじゃダメ？ダメかー。

「まあ、わかった。こっちの相手は今は情報が無いから置いて、さっさとそっちを片付けちまおう。正直あれは封印を完全開放するか、達也と深雪の助力が無いと無理だ」

「ああ、そのつもりだ」

「今度は負けないよ！」

姉さんがフンスと気合を入れるのを確認した俺達は学校に行くことにした。

グレイは留守番しつつ、ロードと連絡を取って情報を集めるつもりみたいだ。

「なあ、俺めっちゃ歩くのしんどいんだけど・・・」

「行くわよ」

「・・・・・・ハイ」

めちやくちや重い体を引きずりながら俺は妹様にいつものように腕を確保されて登校するのであった。

ハチ、天使に惚れる

一生懸命抵抗してみたが、結局妹様に引つ張られて学校に来てしまった。

姉さんが来る気マンマンだったので、行くしかないのはわかっているが、それでもこの全身の呪いが半端なくきつい。

朝からいろいろ試行錯誤してみているが遅々として回復が進まない。いや、正確に言えば少しづつは回復してるのだが、しばらくは厳しいかもしれん。

とりあえず今日の夜にでもハゲ坊主に相談をする必要があるそうさ。もしくはこの依頼元であるロードに何とか・・・できるかなあ？

あのロード知識はすげえけど、魔術師としてはポンコツもいとこだって言ってた気がするしなあ・・・あとはグレイの槍に期待しよう。うん。最後のが一番可能性感じるわ・・・逃げてるときは気づかなかったけど、魔術的な呪いならあの槍でなんとかできんじゃね？

おお、これはいい考えだ。と自画自賛して他人に丸投げする事を決意している間に俺達は学校に到着した。

さあ、いざ我が教室へ！と向かうところできつもと違う光景が飛び込んできた。

「なあ、深雪さんや？これはいったい何が起きているんだ？」

「主義主張のためなら何をやってもいいと考えている愚か者たちの勧誘行動よ」

なんとなく察してはいたものの、とりあえず、俺の腕を未だ確保したままの妹様に問いかけると想像以上に冷たい返答が返って来た。ちよつとちびりそうになったのは内緒だ。

「あーつまり、同盟とやらの勧誘活動で、生徒会との討論会で勢いづいた・・・と？」
「そうとも言えるわね。本当にくだらしない」

そう言う妹様により早くも俺の袖が凍り始めた。

すでに達也も姉さんも自分の教室へと向かっている為、ここにはいない。つまり、俺はこの不機嫌な妹様をなだめる手段を持ちえないという事だ。

ああでも、妹様の魔法力のおかげで呪いによる痛みが和らいできたな・・・なんだか眠くなってきたよ・・・パトラッシュ・・・。

ふう、あぶないあぶない。危うく天国に召されるとこだった。

あと一瞬気づくのが遅かったら完全に昇天してたね。てか、光井が朝の挨拶に来て俺に（正確には妹様に）笑顔を浮かべた瞬間間違いなく天国に昇天してたね、間違いはない。

妹様が俺の腕をへし折らんばかりにねじって来なければ間違ひなく天使光井の笑顔で昇天してたね。

ほんと、現実引き戻された瞬間妹様の氷のような笑顔があつて死ぬかと思つたわ。なんだかんだで北山が俺を現世につなぎとめてくれたと言つてもいいかもしれん。助かつた。北山があと一瞬でも声かけてくれるのが遅れたらと考えると恐ろしくて夜も眠れない。よし、昼寝しよう。

そんな感じで朝からデッドオアアライブな感じで肝を冷やしたが、それ以外は特に問題もなく過ぎて行つた。

流石に一科の教室では同盟の勧誘などあるはずもないので昼飯時以外は平和なもんだつた。

体中が痛くてまったく授業に集中できなかつたが、それはまあいつもの事なのでいいか。うん。

そんでもつてようやく放課後だ。なんとか今日一日を乗り越えた俺は明日に備えてさつさと帰る事にした。流石に妹様も俺を放課後まで酷使する事はためらわれたのか承認してくれた。ありがてえ……。

それにしても、今日は同盟がわらわらして勧誘がうざつたいし、それを耳にしたモブ崎がなんかごちやごちや言つてるわでメンドクサイぜ。さつさと姉さんと合流して帰

ろう。

どうせ達也と妹様は生徒会と風紀委員で明日の準備とかあるだろうし、俺もほんとは参加した方が良くいかもしれんが、流石にダメージがキツイ。

そうこうして姉さんのクラスに向かっていると少し先で天使柴田がなにやらむつり眼鏡野郎に話しかけられていた。

見るからに同盟の勧誘で、天使柴田は迷惑そうにしていた。

つかなんだあのむつり眼鏡は・・・ってあれは剣道部の主将の司なんとかじゃないか、よし、エロ眼鏡と呼ぼう。どうせ天使柴田を勧誘すると見せかけてあの母性の塊を凝視していやらしい笑みを浮かべてるに違いない（断定）

ここは俺が颯爽と天使柴田を魔の手からかばってポイントを稼ぐチャンスなのではない!?行くしかない（ゲス）

よし、助けると決めたからには颯爽と爽やかに行こう。なんなら相手を勘違いさせるくらいでちょうどいいだろう。

「し、柴田・・・」

「あ、ハチさん・・・」

まあ、そんな事できるわけがないってね・・・爽やかに挨拶が出来たら今頃もうちよつとA組で話すやつとか出来てたっつーの。コミュ障なめんな（逆ギレ）

それでも、そんなにも俺にも天使柴田は安堵の表情を浮かべながら俺に笑顔をかべてくれた。流石天使だ。この笑顔を一生守りたいとそう思ったぜ。

さりげなく天使柴田をかばうようにエロ眼鏡に立ちふさがる。

すっかりと俺の天使にエロい視線むけてんじやねーよ、割るぞ、もしくはもぐぞコラという視線を込めると、エロ眼鏡はいやらしい視線を（勘違い）天使に向けてからいやらしい事を言いながら去っていった。本当に最後までいやらしい奴だった。いや、ここは嫌らしい先輩ですねって言うのが正解かもしれん。

気が変わったら声を掛けて欲しいとか絶対に嫌らしい事をするに違いない（妄想）！
とりあえずエロ眼鏡が去っていったのを堪忍した俺は天使柴田に振り返る。

「もう大丈夫だ。安心してくれ」

そういつて柴田を安心させるように俺なりに精一杯爽やかに微笑むと柴田はほっとしたように一息つくとちよつと頬を染めながら俺に感謝してくれた。惚れても良いよ？

「ありがとうございます。ハチさん」

そういつて微笑む天使がそこにいた。その笑顔に俺のハートが打ち抜かれそうになった。あぶないあぶない。危うく恋に落ちるところだったぜ。

それから軽く事情を聴くと、天使と同じ霊子放射光過敏症で悩む人達のサークルが

あつて、そこに入らないかという勧誘だったらしい。

何度も断つているのだが、それでも勧誘してきたらしい。エロ目的の野郎はある意味変な根性があるから手に負えない。

俺はしつかりとエロ眼鏡の危険性を伝えた上で、天使柴田にエロい事をするのが目的に違いないと危機感を持ってもらいつつ、何かあつたら俺の端末に連絡するように説得した。へへ、天使の連絡先ゲットだけ（ゲス）

それから天使柴田は部活に行くといふので、俺は姉さんと合流した後、しつかりと部屋まで送つていった。

帰るときには注意するようにと何度も話してから俺達は帰宅する事にした。もちろん帰る時と帰宅した後念の為に連絡を入れるように話しといた。同盟が周りでやたらめつたら勧誘しまくつてるので天使柴田も不安だったのだろう。よし、念のため達也のガードも追加しておこう。これで完璧だ。

その後俺と姉さんは今度こそおとなしく帰宅した。

勿論途中で達也に天使柴田の件を伝えてそれとなく見守るように依頼した。あいつの眼なら多少離れていようと問題ないからな。本当に便利である。

それから帰宅した俺と姉さんは家で留守番していたグレイに介抱されてから達也と妹様が帰宅するまで仮眠をとることにした。

ちなみにグレイの槍ではこの呪いを何とかするのは無理っぽいとの事だった。残念。ロードも無理との事だった。

それから少しして達也と妹様が帰宅したので俺達は4人でハゲ坊主のところに行くことにした。

ちなみにグレイは留守番である。以前一度行った時に坊主からセクハラされそうになり、苦手意識が出来たようだ。それ以降本人の苦手意識とロードからの接近禁止命令によりグレイはハゲ坊主のところに行かなくなっていた。

それから俺達はハゲ坊主のところに行くと、ハゲ坊主は庭の縁側に座って俺達を迎えた。

ハゲは達也と妹様の霊気を見て見事だとかなんとか褒めまくってから、俺に残念な目を向けて、姉さんにもうちちょっと抑えられない？って言って来たりしたが、あまり突っ込まれてもメンドイだけなのでさっさと本題に入った。

まずはエロ眼鏡について、これは俺も調べた情報と共通の部分もあったが、なんか古い陰陽師の家系らしい。超薄いらしいけど。やはりエロ眼鏡の方がキャラがたっているな。

んで、その義理の兄がずぶずぶの犯罪組織で日本支部のリーダーとの事。リーダーは知ってたが陰陽師の家系とまでは調べられなかったぜ。

それから俺と姉さんの呪いについて聞いてみたが、ハゲ坊主にも解呪は無理だそう
だ。このパターン絶対術者倒すとかって流れになる奴じゃないですかヤダー。

ぜったい自力で解呪しよう、あんな化け物共と戦うなんて御免である（フラグ）

なんとかしろよハゲとお願いしてみたら（妹様と姉さんが）デレデレしながら護符を取
り出してきた。

とりあえずコレはつとけば症状楽になるそうだ。

試しにペタリと・・・お、マジだ。きつさが半減したので姉さんにもペタリと張って
あげる。

そうすると姉さんも大分軽くなったよと微笑んでくれた。

俺とハゲがデレデレしたのは言うまでもないだろう。

とりあえずあるだけ出せよと笑顔で妹様にお願いされたハゲは嬉しそうにしながら
100枚くらい護符をくれた。これでしばらくは何とかなるだろう。

そうして俺達はハゲ坊主のところから帰宅するのであった。

シズ、防衛行動に入る

今日は公開討論会の当日だ。

朝食の席で私の隣にハチ、その隣にグレイさんが座り、向かいに達也と深雪という席に着きながら朝ご飯を食べている。今日も深雪のご飯がおいしいね、

その横ではハチと深雪、達也、グレイさんが今日の流れを確認している。

「そういう訳だから、俺とシズ姉は講堂の外で待機な」

「うん、わかったよ」

だいたいの流れを確認したハチは私の方に確認の意味も込めて聞いてくるので私はうなずいた。

生徒会と風紀委員として深雪と達也が講堂の内部でうらんしゅ？ぶらっしゅ？の警戒をするみたい。

私とハチはどちらかといえば屋内戦闘は苦手なので講堂の外で外周警戒をすることになっている。

どちらかと言えば苦手なだけで出来ないとかじゃないよ？ただちよつと燃やしすぎたり、爆発させたりするには屋内はちよつとあれなだけだからね！

それからいつものように登校して、いつものようにとても難しい授業をしてから放課後を迎えた。

授業の内容？それは、あれだよ・・・ね？

と、という訳で！私とハチは放課後に公開討論会がやっている時間に講堂から出て、それから偶然出会った美月さんと一緒に警戒という名の日向ぼっこをしていた。警戒はどうしたのかって？それは、あれだよ・・・温かい日差しと、美月さんがたまたま持ってたドーナツがいけないの。

私達は3人でベンチに座りながらドーナツをもふもふ食べる。おいしいねえ・・・。少し先では雫さんとほのかさんがえすえすぼーどなんとかの部活動をやっているのが見える。

「いい天気だね」

「ああ・・・そうだな。このまま寝たい・・・」
「本当ですわ・・・」

ドーナツを食べた後は3人でとてと歩きながらそんな事を思ってしまった。

いまだ体は傷むけれど、これくらい魔王レオンに会い、イフリートを宿したときに比べればなんてことはない。

だから、この放課後のちよつとふわつとした時間がとても平和だなあって思つてついついつぶやいてしまった。

きつとハチも同じような気持ちなのかもしれない。

雫さんやほのかさんが部活に励んでいるのを見ながらふわふわとしていたのがいけなかつたみたい。

ん？あれは……。

気づいたら、学校の入り口、裏口のあたりが騒がしくなっていて、雫さんとほのかさん達がいるところに制服を着ていない大人が複数人向かっているのが見えた。

「ちよつと行つてくる、シズ姉は柴田を頼む」

「うん、よろしく」

「え？……え？」

わたしわたしている柴田さんを私は守りながら先行したハチを追いかける。

すぐに校舎の方かな？から爆発音が聞こえると同時に学校全体が慌ただしくなる。

「きゃあつ！」

と叫びながら驚く美月さんを落ち着かせるように抱きしめ、ポンポンと背中を優しく撫でる。

あ、ありがとうございます……と不安そうに見上げてくる美月さんに、かわいいなあ

と思いながらも大丈夫だよと微笑みかけてあげる。

ほっとしなたように落ち着いた美月さんの手を引きハチを追いかける。

その間にハチも雫さんとほのかさん達の所属する部活を襲っていた人たちを制圧したみたいなので合流した。

「思ったよりも派手に来たな」

「そうだね」

それから私達はえすえすぽーどなんとかの人達を集め、それから付近で部活をしていた生徒達を集めつつ、騒動に備えていた。

ハチが言うように、何かやるだろうとは思っていたけど、学校全体で騒動を起こしてくると思わなかったよ。

どうしようか?という視線をハチに向けると、ハチも達也と連絡しているみたい。

とりあえず連絡が終わるのをまってからだね、と思っていると、私の袖をクイクイと引つ張られた。

思わずそちらを見ると、私の袖を引つ張る雫さんと、その後ろにとても不安そうにしている美月さんとほのかさん、それとその部活に所属している人達がいた。

「これからどうするの?」

そう冷静に質問してくる雫さんに後ろの人達もうんうんと頷いていた。

不安そうにしているほのかさんと美月さんに私は微笑みかけて、大丈夫だよと安心させる。

まだ若いこの子達には突然のこの事態に戸惑ってしまうのも仕方ないよね。

ここはお姉ちゃんである私がしっかりと守ってあげないと！と気合を入れていると、ハチも連絡が終わったみたい。

「シズ姉、とりあえず俺達はこのまま外の部活組を救助、護衛しつつ、安全を確保だ」
「わかったよ」

ハチの言葉にほのかさんと美月さんがほっとしたようだね。

先程までの緊張した表情とは違って、少し笑顔も出始めている。

「深雪に許可ももらったからな、今回は俺達も負傷してるし、最初から第二段階解放で行く」

ハチの話に美月さんとほのかさんが負傷しているですか!?!と驚いている。

「ああ、今回のとは別口だから大丈夫だ」

そう言うのとハチは胸元に手を当て、目を閉じて集中する。

「コール、試作術式起動」

『ミトメタクナイ!』

眼を開けたハチが術式を起動すると、美月さんが認めてもらえないのでしょうか…

?と可愛らしく小首をかしげているが、ハチはいつものように気にしないでくれ、と言ってから続けた。

「第一段階、第二段階・・・限定解除」

『ハロー！ゲンキ！テヤンデイ!!』

ハチの言葉にしーえーでいーが答え、術式が起動する。

いつもの第一段階のみの解除と比べるべくもないほどに私を制限する拘束が軽くなつていくのと同時にハチから魔法力があふれ出した。

その変貌に雫さんも美月さんもほのかさんも驚いている。

「よし、それじゃあ行くか」

それから私達はそれぞれの部活の子達を集めながら学校に侵入してきた人達を制圧していくことにした。

ハチの言葉にみんなが真剣な表情でうなづく。

ここにはほのかさんと雫さんが所属する部活の先輩も居るみたいだけど、生徒会という事もあって、ハチの指揮下に入ってくれるみたい。

「とりあえず、俺と姉さんが侵入者を叩くから、先輩と北山とてんs・・・光井はそれぞれ層を重ねるように対物と情報強化の障壁を展開してくれ」

「わかった」

「わ、わかりましたー！」

ハチの指示のもとにほのかさん達が重ねるように障壁を展開していく。すごい、とてもスムーズなしーえーでいー操作だ・・私には絶対にムリだね。

そうやって私がすごいなーって思っていると、それぞれ障壁を展開出来たみたい。

「よし、これならシズ姉の魔法にも多少抵抗できるはずだ」

「わたし!?!」

すごいなーって思ってたらまさかの私用だった!ちよつとしよつくだよハチ!?

しかもこれだけ嚴重に重ね掛けしてるのに多少つて・・!!

「みんな、全力で障壁を展開するのよ!!」

ハチの言葉に必死になって障壁の強度を上げようとしているのはえすえすぼーどなんかの部活見学の時に私に体験入部させてくれた人だった。

あの時、ちゃんと爆発させてもいいですかって確認したのに(してない)・・あんなに必死になって障壁を展開してるのを見るとちよつと悲しくなってくるよ・・。

そんな内心でしよつくを受けている私をよそに、侵入者が10人くらいこちらに向かってくるのが見えた。

しかもご丁寧私達を挟むようにだ。

「シズ姉、こっちは頼む」

「わかったけど、ハチ、後でお話ししようか」

さつさと正面を私に任せて挟撃してきた侵入者を迎撃に行こうとするハチに私はしつかりと釘をさしておく。たしかに私は魔法を使うのが苦手だけれど、今回ののはさすがに傷ついたよ？

そんな気持ちを含めてハチに言うと、ハチは小さくビクツとした後わかった・・・といつて挟撃してきた侵入者の迎撃に行った。

「さて、それじゃあ・・・」

ハチが行ったのを確認すると、侵入者達が銃を構えるのが見えた。

「なめないで」

たかが魔法師用の銃程度で私の守りを突破できると思わないで。

私は炎を身にまとい、右手の先から炎の剣を出現させると侵入者達に向かっていく。

接近していく私に侵入者達がそれぞれ銃を撃ってくるが、無駄。

全ての銃弾を右手の剣で切り払い、そのまま懐に飛び込んで侵入者達を切り払っていく。

私は生徒会でも風紀委員でもないためしーえーでいは学校に預けたまま。だけれども、私の場合はしーえーでいが無い場合の方が戦い易いし、ただ燃やすだけならいい。

なので私は次々にあらわれる侵入者達からほのかさん達を守りつつ、時に銃弾を切り払い、時に侵入者を燃やしていった（殺してないよ?）

そうしてしばらく侵入者の相手をしていると、ようやく落ち着いて来たのか、十文字さんという高校生らしくない人が来て、状況が終わった事を教えてくれた。

達也からハチにも連絡があつたみたいで、図書館に侵入した本命部隊を叩いたので、この後保険室に来るように言われたみたい。

いやー何事も無くてよかつたよ。なんだかんだで調子に乗って私の炎がほのかさん達が張つてた障壁を半分くらい吹き飛ばしちゃつたときはどうしようかと思つたけど、なんとかなつてよかつたよ。うん。

そう思つてたらジト目のハチがこつちを見ていて……。

「姉さん……」

「はい、ごめんなさい。ハチの判断は正しかったです……」

心なし障壁を張つてた人達も雫さんみたいにジト目をしていたのが辛かつたです……。

シズ、ハチ。ブランシユと戦う・・・前の話。

という訳で、外での戦闘を終えた私は達也に指示された保健室にやってきた。

「達也、深雪。お待ちせ」

「お姉さまっ！」

私が保険室に入ると中に随分と人が居た。

えーと、生徒会長の真由美さんに風紀委員長の摩利さんになんかおつきい人に剣道部にいた子、レオ君にエリカさん、おっぱいのおつきい子・・・と思つたらたしかかうんせらーの人だ。に達也と深雪。うん、どういう集まりなんだろ？

そんな頭を傾げる私の表情を見て、達也が説明してくれた。

つまり、この間みた剣道部の子が悪い人に利用されてた、と。そういう事だね？いろいろ説明してくれたけど、たぶんそういう事だと思う。

そう聞くと達也もだいたいそんな感じだとうなずくので間違いないね。

そうして私が達也の説明を受けると、今度は達也から質問された。

「それで、シズ。ハチはどこに行ったんだ？」

「そういえばいませんね・・・」

達也の質問に今気づいた、って感じで深雪も聞いてくるけど、深雪は相変わらずハチには照れ隠しで冷たくしちゃうみたい。本当は気になって仕方が無いってバレバレなんだから。

それを指摘すると、きつと深雪は可愛らしく拗ねてしまುದろうから今は言わないけれど。後で絶対に深雪に言ってからもう、知りませんっ！てすねる深雪の頭を撫でてあげよう、そんな事を考えながら私は深雪と達也にハチが雫さんとほのかさん、美月さんを家まで送っている事を説明した。

すると、達也は少し難しい顔をする。どうしたの？と私が頭を傾げると、達也が簡単に説明してくれた。

「とりあえず、ブランシュの片を付けに行く」

「なるほど・・・わかった」

よくわからないけど、この空気の中では何も言えないのでとりあえず空気の読める私は神妙な顔をして達也の言う事にうなずいておく。

そんな！危険よ！みたいな事を生徒会長の真由美さんが言うけれど、たぶん問題ないので大丈夫。心配しないで？といって頭を撫でておいた。

私が頭を撫でると途端に顔を真っ赤にして慌てる真由美さんにもう一度、安心してね？という気持ちを込めて微笑むと、小さな声で気を付けてね・・・と言ってくれたので

私はうん、任せて！と答えた。

それにしても、真由美さんはちょうどいい位置に頭があつてなでやすいなあゝ可愛いなあゝ。

そう思つてたら袖をクイクイと引かれたのでそちらを見ると、深雪がすこしすねたような表情で私を見ていた。

「ふふ、深雪もかわいいね」

そう言つて、撫でてあげると深雪もすぐうれしそうだ。本当にあまえんぼうさんだね。

そんなところも可愛いけど。

そうして私がひとしきり撫でまわした後、私と達也、深雪、レオ君、エリカさん、おつきい人、それと剣道部に絡んでた思春期少年とでぶらんしゅ？の拠点を攻撃しに行くみたい。

うん、知つてた知つてた。拠点つぶすんでしょ？知つてた。

なんか最初にいた工場が爆発したらしくて、そこからさらに奥に行つたところにあるなんかの廃工場にいるみたい。

最初の工場つて・・・と達也を見るとうなずいていたので、きつとこないだ私が爆発させたところみたい。

おかしいな・・・あの時工場には人が居なかった気がするんだけど・・・隠れてたのかな？お買い物に行ってた？まあいいか。どうせ次の工場も爆破すれば一緒だよね？

「深雪、ハチに連絡して後で合流するように伝えてくれ」

「はい、わかりました」

そうして深雪がハチに連絡するのを待つてから私達は行動に移った。

ああ、違う、たしかこういう時には・・・。

「40秒でしたくしな!!」

私はこれから出撃するママの気持ちになつて声を上げた。

・・・その後のみんなの反応はイマイチだった。おかしいなあ・・・？たしかこういえばおつけーって言われたのに・・・達也にはもう少し時間がかかるだろう。つて冷静に返されちゃったし。あれー？

ー 少し戻つてハチサイド ー

「それじゃあ私達は帰りますね」

とりあえずテロリスト共を制圧した俺と姉さんは今日はもう部活にはならないからと解散になった天使光井と北山、それと天使柴田と一緒にCADを受け取りに事務室に向かった。

事務室で天使光井がペコリと可愛らしくお辞儀をして帰宅する旨を告げて来た。

うん、またねっ☆と返そうとしたのだが、いやうそです、普通におうとか返そうと思つてましたが・・・ここで俺は気づいてしまった。

あれ?この天使達をそのまま返しても大丈夫なのか?・・・と。

だつてこれ、ガンダムシリーズだと、この後敵として現れたり、怪しげな組織に捕まつて強化人間にされたりするパターンじゃね?・・・と。

ロザミイとかプルとかステラみたいにさあ・・・。あとたぶん天使柴田と光井もなか誰かをかばつて死にそう・・・。

俺が、守るからあ!!からのステラアアアアア!!とかおのれストライクウウウウ!!
!!つてなるやん。あ、これちゃう、イザークは全然関係なかった、ただ言いたいだけだわ。

もちろん大変この3人には失礼極まりない事だとは思うのだが、そう思つてしまうともうそれ以外の可能性が考えられなくなるわけ・・・。

あかん、心配すぎる・・・この後達也と合流するのに保険室行く必要あるけど、こい

つらが無事に帰宅してからでもいいかな・・・いいよね？ね？

そうと決まれば善は急げである。全然善でないけど。ほんとクソですみません・・・
「姉さん、先に達也と合流しといてくれ」

「うん、いいけど。ハチは？」

姉さんが首を傾げながら聞いてくるが、真実をいう訳にはいかない。

今俺がこいつらをそのまま見送つてもきつと北山が強化人間になって敵として現れる事はないとわかつてるし、天使光井や天使柴田が誰かをかばって死ぬことは無いだろうけど、それでも、俺は、守りたい世界があるんだ！とか自分に言い訳してみた。

「いやな予感がする。俺は念のため北山と光井、柴田を送つてから合流する」

「それならわたしも行くのか？」

すげえ失礼な事考えたせいですげえ心配になったとか言えないので、神妙な顔してそれっぽい事言ってみたら、姉さんも心配してくれたでゴザル。

でも、理由がクソすぎるのでさすがに姉さんも巻き込むのは申し訳なさすぎる。

どうせこの後ブランシュつぶしに行くとか達也が言い出すだろうし、そつちに戦力を集めた方がいいに決まってる。というか、姉さんも巻き込むとか俺の数少ない良心がズタズタになってしまう、なので姉さんにはぜひとも向こうに合流してもらおう。

「いや、大丈夫だ。俺の思い過ぎだろうから。後でグレイと合流してそつちに行く

よ」

「そっか、わかった」

そう言うとうようやく姉さんも納得してくれたようだ。

あぶないあぶない、アニメで見た展開がありそうだと考えてたら本気で心配になって送ったとかクソみたいな理由に姉さんを巻き込まずに済んだようだ。

当然この考えは墓までもつていく所存だ。

俺はそんなクソみたいな考えを心の奥底にしつかりと封印してから北山と天使光井と天使柴田に向き直る。

どうもさつきからの俺と姉さんの話を聞いていたみたいで、天使2人は今にも心配で泣きそうな表情になっていて、俺の良心がズタズタのぼろぼろになってしまふ。

だが、ここで真実を言えば、引き返せないレベルで好感度が下がってしまう。まさにポイントオブノーリターンだ。姉さんが聞いたらテンション上がりそうだな。

なので、俺はこの真実を墓場まで絶対にもつていこうと再度しつかりと心に決めて、3人にうなずく。

「大丈夫だ。一応念の為俺が送るから安心してくれ」

お前なんかじゃ安心できないよ！とか言い出すような子達じゃないとは思っているが、俺だけでどれだけ安心させることが出来るかは不安だぜ。

とりあえず、せめてグレイを呼んで道中に合流しておくか。

そう考えて俺はグレイに連絡を取って、途中で合流する旨を話してから学校を後にしようとした。

「やあ、柴田さん。一緒に来てもらおうか」

後にしようとした俺達の前には、いつぞやの変態眼鏡がいた。

「剣道部の司甲!」

天使光井がご丁寧な役職からフルネームまで教えてくれた。さすが天使。

そうそう、そんな感じの名前だったわー。知ってた。ついでにブランシュ日本支部のリーダーの弟でしょ? 知ってる知ってる。だって新歓期間中に達也を攻撃してたやつの中にコイツいたし。

つい昨日も天使柴田の母性の塊をエロい目で凝視してたし。

「仕方が無い・・・実力行使だね・・・」

何も言っていないでゴザル!!! 勝手に解釈して勝手に結論すんなボケエ——!!!!

つてようやく見たらコイツ絶対正気失ってるやつやーやーやー!

ああーやー! クソみたいな事考えてたらホントにガンダムみたいな展開になって

もうたー！ー！ー！！俺のアホー！ー！ー！ー！！！！

やってやる、やってやんよコラあ！！絶対に天使達は守ってやるからなコラア！！

いろいろとヤケになった俺は北山と天使柴田、天使光井を守るべく戦闘態勢に入
た。

シズ、決着をつけようとする。

「よし、全員のつたな。行くぞ」

「おー!!」

とても高校生とは思えないがっしりとした人は十文字先輩というらしい。

その十文字先輩の言葉に私は元氣よく右手を振り上げて答えるが、私以外誰も声を上げてくれなかった。これが現代の若者か、と思うと悲しくなってしまうね。

それにしても十文字先輩だ。たぶんだけど私と同じでみんなより年上なんだと思うの。

私は見た目ほど若い訳じゃない。もしかしたらみんなと同じ歳くらいに見てくれる人もいるかもだけど、それでもやっぱり深雪やエリカさんに美月さん、ほのかさや北山さんに比べるとどうしても同級生というのは無理があると思うの。いまでも私はシズ！普通の女子高生☆って言うのは抵抗があるもの。

ユウキが言うには女子高生たるものパンを加えて登校して曲がり角でぶつかった後、下着を見せなきやいけないらしいけど、私には無理。

・・・深雪や他の子達がやっているとこも見た事ないけど、女子高生はそういうもの

だつてユウキがいつてた。この年で私にはとても出来る気がしないよ……。

だから私は見た目と年齢の差で悩む十文字先輩の苦勞もわかるつもりだ（断定）。

私は見た目ほど若くないからね。それでも高校生は無理があると思つている私だからこそ、私には十文字先輩の気持ちがわかる。

だから私は十文字先輩の理解者になる。

「何か困つたことがあつたら相談してくださいね？」

「あ、ああ……」

そう言つて私は十文字先輩に微笑みかけたのだ。それがかれこれ十分くらい前の話。いきなり言われてもちよつと困らせちゃつたかな？

それからみんなの準備が終わつたので、十文字先輩、いや、これからは同士先輩と呼ぼうかな。

の準備したやたらおつきい車にみんなで乗り込んだ。

……んんん？？なんか人が増える??

私が首を傾げていると、そのにゅーかまーは気軽に達也に挨拶をしていた。

「よう、司波兄」

「桐原先輩」

だれだろ？つて思つて見てたらあれだ、剣道部で青春してた子だ。好きな子のために

がんばるんだね。

「司波兄、司波姉。俺も参加させてもらおうぜ」

「どうぞで」

「うんうん、あおはるだね！」

私は青春だなあ……って思いながらもちろん了承した。若い子の恋を応援するのも年長者の役目だもんね。

そうして私達はこのおつきい車、達也いわく、おふろーだーと言うらしい。に乗り込んで、ブランシユをこらしめに出発した。

それにしても……。

「おふろーだー……ぶらんしゅ……みんなはいからだね」

「それはどうなのかしら……？」

エリカさんに突っ込まれた。

私は見た目ほど若くないからね……仕方ないよね……。

それからしばらく走行してようやく敵のアジトの近くに来たみたい。もうすぐ目的地というところで同士先輩が真剣な顔で切り出した。

「司波、お前が考えた作戦だ、お前が指示を出せ」

私？とか思う事もなく、当然のように自慢の義弟達也が指示を出すことになった。当然だね。

その結果、達也と深雪が正面から突入。同士先輩とおおはる先輩が裏口担当。エリカさんとレオ君が逃げる人を出さないように外周を。

「それで、シズは……」

「私は、お客さんが来てるみたいだね」

達也の問いかけに私は先んじて答えた。

この気配は、この間の魔術師だ。

達也も感じ取れてるみたい。そんな達也を見て、深雪が心配そうにしてる。

「一人で大丈夫か？」

「ふふん、大丈夫！お姉ちゃんにまかせなさい!!」

そう言つて、達也と深雪を安心させるように微笑むと私はおふろーだーのどあを開いてそこから外に踊りだし、バク転の要領で天井に着地する。

「エリカさんとレオ君は、ぶらんしゆが逃げないようにするのもだけど、骨トカゲにも気を付けてね!!」

「え!? 骨トカゲってなに!？」

エリカさんが聞いてくるけど、もう敵の本拠地は目の前だ。

私は剣を抜いて炎をまとわせる。

「なるべくそつちにはいかせないようにするけれど、よろしくね! はあああああああ
!!」

エリカさんとレオ君に注意をした私は気合一閃。敵の本拠地を守る門を炎の剣から飛ばした斬撃で吹き飛ばした。

そのまま正面の入り口つぼいところも吹き飛んだけど、もちろん計算通りだ。もちろん
ん・・・ホントだよ？

「うわー・・・」

「すっげ・・・」

エリカさんとレオ君がぼーぜんとしてるけど、ここからは私にも余裕がないから達也にお願ひするしかないかな。

そのままおふろーだーが門を抜ける前に私は飛び降りて気配のする方に向かって走っていく。

みんな、がんばってね!!

私が気配のする方に走っていくと、前回同様に骨トカゲが大量に表れた。

「たあ————!!」

山の中とは言え、これだけ開けた空間なら前回のように力を抑える必要がない。

私は炎をまとわせた剣の出力を上げてその刃を3倍くらいまで伸ばして骨トカゲを切り裂き、燃やし、吹き飛ばしていく。

「これで！ちえりお——————!!!!」

そして、骨トカゲがまとまっているところに炎の斬撃を飛ばして殲滅する。

ふふん、第二段階まで解放した今ならこのくらい鎧袖一触だね。ちよつと木が燃えてるけど大丈夫大丈夫。

私が骨トカゲを殲滅すると、以前と同じように空間がゆがんで前回と同じように紫の服を着こんだ女の人が現れた。

それと同時に私の二の腕を鳥肌が襲う。ぞぞぞーっつてしたよ……。

「まっつていたわよ、可愛らしいお嬢さん」

「……………」

その言葉に私はなにも返さなかった、いや、返せなかったと言つてもいいかもしれない。

第二段階まで解放した今なら戦つてもそう簡単に負ける事はないと思うけど、なんだろう、この魔王に睨まれた村人の気分とでも言えば良いのかな？ 蛇に睨まれたカエルと
言うか……………」

なんだかとおつても鳥肌がすごい事になっているけれど、それを無視して私は剣を構える。

「これで三回目……………今度こそ決着をつけるわ」

「ええ……………今度こそ私のものになつてもらうわよ。あなたの次は先日一緒にいた、銀髪の子、それからあなたの学校のメガネの子、ジト目口りに純朴そうな子……………今から楽しみよ……………連れて帰つたら着飾つて写真を撮つて、着せ替えして、それから写真を撮つてスハスハ、クンカクンカして……………楽しみだわ」ゴクリンコ

銀髪の子に、メガネの子つて、もしかしてグレイさんと美月さん!?! その後ののはきつと雫さんとほのかさんだね……………」

そつか、だから今日、ハチはほのかさんと雫さん、美月さんを家まで送るつて言つてたんだね（勘違い）

なら、グレイさん達の事はハチに任せて、私はこの人を倒さないとね！

あれ？いつの間にかこの人と戦う理由が時計塔からの依頼じゃなくて私達自身になつて来てる気がする・・・。

いや、それはまた今度考えよう。

まずはこの人を倒して、それから達也と深雪に追いついてぶらんしゆをこらしめないと。

「魔法科高校一年、シズ。参ります！」

いきまーす！が正解だったっけ？と思ひながら私は剣を構えていつものように炎をまとわせる。

すると魔術師の人・・・魔女でいいかな。魔女は私から距離を取るように空中に飛び上がりながら多数の魔法弾を放ってきた。

一発一発が30センチくらいのおおきさの魔法弾が数えきれないくらい空中に投影されると同時にこちらに放たれる。

私はジグザグに走りながら回避し、回避しきれないものは炎の剣で切り払いながら少しずつ接近していく。

私が回避した魔法弾は地面に着弾して爆発していく。私なら何発かは耐えられると思うけれど、あまり受けたくはないね。

「ふふふ、可愛らしくてつよい。素晴らしいわ」

「それは、どうもっ!」

向こうはまだまだ余裕みたく、楽しそうに魔法をバンバン放ってくる。

私はというと、実はそんなに余裕がない。それというのも前回のダメージのせいで体の反応が悪いのが原因だ。

朝は深雪の手前、強がって見たけど、こうなつてくると結構辛いものがあるなあ…。

「その体でそこまで戦えるなんて、素直に称賛するわ」

「まだまだっ!」

「でも、これはどうかしら?」

そう言うと、魔女は魔法の雨を降らせると並行して右手を振り上げて巨大な魔力球を生成した。

「さあ、これをどう対処するのかしらね?」

そう言うと同時に魔女が右手を振り下ろす。

私に向かって巨大な、それこそ紫の太陽が落ちて来たかのようなサイズの魔力球が落下してきた

あー…これは、流石に第二段階でもきびしいかなあ…

「それでもっ!伊達に英雄として何十年もやってないよ!」

英雄シズは、伊達じゃない!!

「たかが、魔力球ひとつ!! たああああー!!!」

私は限界まで巨大化させた炎の剣を振り上げて魔力球に叩きつける。

巨大な魔力球と私の炎の剣がせめぎ合う。その余波で周辺の木が次々と吹き飛ばされていくと同時に私の足が地面に陥没する。

「あはははは! すごいわ! 私の魔法を受け止めるなんて! でも、どれだけ耐えられるかしらね?」

そう言うと同時に魔力球に魔力が追加されて、圧が増加する。

「ぐぬぬぬ・・・!!」

まいった、このままじゃ押し負けるなあ・・・せめてもう一段階解放出来ればだけど・・・少しづつ押されていく状況に、私も焦ってくる。

「このままじゃ・・・」

「姉さんだけに良いカツコはせさねえよ」

魔力球からの圧が軽くなると同時に私の横から慣れ親しんだ声が聞こえた。

私がハツとして横を見ると、私と同じように剣に魔力を込めたハチが苦しそうな表情で魔力球を押し返しながら私に微笑みを向けていた。

「ハチ、あなたじゃもたない!!」

「へっ！この威力、ここら一体がダメになるかどうかなんだ、やってみないとわからないぜっ！」

私が静止してもハチはやたらと楽しそうに、いや嬉しそうにかな？しながら魔力球を押し返そうとしてた。

このままじゃハチが・・・！

「もういい、ハチ、やめて!!」

私がそう言ってもハチは微笑みながら逃げようとしないう・・・このままじゃ・・・！すると、私達の後方で魔力が爆発的に増大した。この感じは！グレイさん!!

「聖槍抜錨！ロング・・・ミニアドツーーーー!!!」

グレイさんの叫びと共に輝く黄金の槍が展開され解き放たれた。

黄金の輝きは私とハチが押し返そうとしていた魔力球とほんの僅かな時間、せめぎ合う。

それでも、黄金の槍の前ではさしたる抵抗をすることも出来ずに魔力球を消し飛ばしてしまう。

さらにその先の魔女にも黄金の槍は迫り、そのまま雲を突き抜け、空へと伸びていった。

「たすかった・・・？」

「ああ・・・俺もう満足だわ」

黄金の槍が消えた後には雲間に覗く空だけが見え、先ほどまでいた魔女はいなくなっていた。

そつと安堵の息を吐く私に、どこか満足そうなハチが答えると、慌ただしくグレイさんが駆け寄って来た。

「シズさん、ハチさん！無事ですかっ!？」

「ああ」、「何とかね・・・」とそれぞれ返す私達にグレイさんはほつと安堵したみたい。「前回に続いて今回もグレイさんに助けられちゃったなあ・・・」

「マジでたすかった、悪くないシチュエーションだったが、流石にまだ死にたくなかったしな」

私とハチが感謝の言葉を伝えると、グレイさんは少し頬を染めながら良かったです、と微笑んだ。かわいいねあ。

それにしても・・・

「また逃げられちゃったなあ・・・」

それから私達は少し休んでから達也と深雪たちの元に向かうのだった。

・・・もちろん、ズタズタになった森や山は見ないふりをして。これ、どうやってごまかそうかなあ・・・。

ハチ、迎撃行動に入る・・・

時間は少しだけ戻って、ハチサイド。

「よし、帰るか！」

「ええ!？」

「え?・え!？」

天使2人に北山を送り届けようとしたら、変態エロ眼鏡が現れた事については完全にスルーして提案してみたが、優しい天使達は見て見ぬ振りが出来ないようだ。

「さすがにこのままはダメだよ」

「むう・・・ダメか？」

実はエロ眼鏡が完全にイっちゃってる顔で天使柴田にパンイチになりながらルパンダイブかましてきたので俺は天使柴田と天使光井の目を汚さないように2人の正面に立って汚物から守りつつ、秒殺で叩きのめしたのがついさっきの事。

とりあえず今はエロ眼鏡が脱いだ服を適当に掛けて放置している。

そんなエロ眼鏡を放置して俺の至上の任務であるところの天使の護衛をしようとしたが、冷静クールな北山にダメ出しを食らってしまった。

だが、俺としてはこんなエロ眼鏡よりも天使の方が圧倒的に優先度は高いし、さつきと達也達と合流しないと後ほど妹様に冷凍されてしまうので、できればこいつは放置したいのだが……。そんな気持ちを込めて北山に再度聞いてみるが、北山さんは両手の一指し指でバツテンを作っていた、なんなら口もバツテンだった。

「ダメ」

「ダメか……?」

ちよつとかわいいじゃねえか、とか思いつつ、もう一度聞いてみる。べ、別にもう一回バツテンして欲しいとかじゃないよ? なんなら天使達もやってくれないかなー? とかちよつとしかオモツテナイヨ?

そんな気持ちを込めてもう一度聞いてみた。

「うん、ダメ」

「ダ、ダメですよ!」

「ハチさん、ダメです。メツ!ですよ?」

北山は再度手と口でバツテンを可愛らしく作り、天使光井も慌てながらダメですーっつて手をワタワタさせて、最後にこのままではかわいそうです。という天使柴田が可愛らしくメツ! って言ってくれたでゴザル。

もう俺満足だわ……今度から定期的に怒られるような事しよ。そう決意した瞬間だっ

た。気を付けないといけないのは妹様の前でやると水漬けにされたり、あまりやりすぎると妹様に報告が上がってやはり水漬けにされてしまう事だろうか。

「もう一回メツつてたのむ」

「メツ」

「メ、メツ・・・ですよ」

「メツ！です。ハチさん？メツ！ですよ？」

とりあえずもう一回くらいなら大丈夫だろうとお願いしてみたら律儀に北山と天使光井、天使柴田がやってくれたでゴザル。

おらあ、もう満足だべ・・・。そんな充実感を感じていると、ようやく風紀委員が来たようだ。

と、思ったたら風紀委員長様もいるでゴザル・・・。

「ああ、風紀委員長、それが今回の首謀者の一人です」

「ああ・・・なんで半裸なんだ？」

「それも操られてたみたいで、なんか脱ぎ散らかしながらこつちの女生徒にとびかかってました」

俺の完璧な説明に風紀委員長様が納得いかない顔でそ、そうか・・・とつぶやいていた。

まあね、ブランシユの首謀者と半裸になる事の関連性ゼロだもんね。

でも操られてたのは事実なのでしつかりと取り調べてもらおうように風紀委員長様に伝えて、俺は天使達の護衛任務に戻るのであつた。

「よし、帰るか」

今度は天使達も反対じゃないようで、安心である。

その後、俺はコミュニタ-に天使達と乗りながら各所に連絡を取つていた。

まずはグレイに連絡して、天使達を送る途中で合流するように連絡した。天使達には親戚と合流すると話した。

ほんで、次にハゲ坊主。どうもきつき操つてたのが現代魔法じゃなくて、いわゆる魔術師達がしているような奴で、ぶっちゃけそっち方面だとこないだのクソ強い奴らが出てくるとも限らないので応援要請だ。こないだのスーツ着た暗殺拳の使い手とかはハゲに押し付けたい。

それから達也にも現状を伝えつつ、合流が遅れる事を伝えておく。これは妹様対策なところが大きい。

そこまで連絡したところで俺は天使達に顔を向ける。

・・・前にあれだな。天使柴田に天使光井ときて、北山だけ名前のみと言うのはちよつとアレではないか？と思つてしまった。

ジト目・・・ロリ・・・ちみっこ・・・どれもピンとこないんだよなあ・・・天使つてイメージでもないし、いや、もちろん可愛くないというわけでは無いのだが、こう、イメージがね？

これは今後の課題としよう。

そこまで考えて改めて天使達に顔を向ける。

天使2人は少し不安そうにしている、北山は無表情ながらもこちらに真剣な視線を向けていた。

そんな視線を受け止めて俺は三人に現状の説明と今後の動きについて説明した。

「三人は現状をどれくらい理解している？」

俺の質問に三人はそれぞれ答えるが、ほとんど理解できていないようだ。なぜ討論会からテロリスト襲撃につながり半裸の男に襲われるのかさっぱりようだ。

まあね、どれも繋がりが全くないもんね。なんで差別撤廃の討論会からテロリスト襲撃がつながり、そこからなんとか収束して帰ろうとしたら変態に襲われかけるとか今聞いても意味不明だわ。

なので俺はあまり時間がないために詳細が説明しきれない事を謝罪しつつ、ブラン

シユに利用された二科生の事、またそれとは別口でやたら怪しい魔術師と思われるやつらに天使達がロックオンされてる事を説明した。

怖がらせてしまうようでも申し訳ないが、現状天使達を守りきるには説明をしたうえでこちらの庇護下に来てくれた方が確実に守りきれると判断した。

「そういう訳だからこれからちよいと味方と合流して、それから現地に向かう事になる」
「わかった」

「わ、わかりました」

「よろしくお願いします」

そう告げる俺に北山と天使達がそれぞれ不安そうにしながらもお願いしてきたでゴザル。もう、今日は満足だよ……。

……と、思ってたけど、まあこうなるよねえ……はあ。

天使達にほんわかしていると強烈な殺気が俺を貫いた。一瞬マジで貫かれたかと思うくらいに強烈な殺気で、天使達と北山も顔色を悪くしていた。

おのれ、暗殺拳の使い手め……天使達を怖がらせるとは、絶対ぶつころしてやんよ……

!!

ガン切れない俺はそのままコミュニーターと停止させ、天使達を守りつつ降車する。

ひと払いがされているのであろう。俺達が下りた場所のすぐ横に野球のグラウンド

があり、そこで奴は待ち構えていた。

「どうやらあちらさんはこちらの天使達を傷つける気は無いようで、律儀に待っているようだ。それでも殺気だけで天使達と北山の顔色はもうすでに真っ青になっている。」

「だから俺は絶賛第二段階まで限定解除している魔法力を持って、天使達、もう北山も天使でいいんじゃないかな・・・天使達を野球場の端まで連れて来て守るようにシールドを展開させる。」

「すまない、どうやら向こうはどうしてもお前らに用があるみたいだ。一応シールドを展開しておくが、北山と光井も物理と魔法のシールド展開を頼む」

「わかった、お願い」

「俺が言うのと北山がうなずきながら光井と協力して魔法を展開していく。さすがは一科生と言うべきか、やはり見事な展開でしつかりとしたシールドを展開した。」

「その横で天使柴田が心配です、という表情をこちらに向けているので、俺は安心させるように微笑みながら、奴に振り返って刀を構えた。」

「大丈夫、すぐに応援も来る。安心してくれ」

「そう、すでにハゲにもグレイにも連絡してある。現在地の情報も送ってあるし、到着まで10分とかからないはずだ。だから、それまで耐えればいい。さいわい相手はこないだの暗殺拳の使い手だけだ。」

骨トカゲやら魔女やら魔法使いやらがいない。

つまり、倒してしまっても構わんのだろう？ って感じた。

「待たせたな」

「問題ない、それでは始めようか」

そう言つて構える俺に相手もカンフー映画のような構えを取る。

前回はぼこぼこにされたが、最初からそれだけ動けるとわかつていればやりようがある。要は姉さんやら鬼師匠共と同じ世界の住人で、人間の限界を越えてるいわゆる人外系だつて事だろ？

だから、俺は相手を人間だと思わないように、意識を切り替える。

それと同時に自身に加速系の魔法を掛け、ついでに相手にアイスノンふぶきを放つ。

「ふんっ！」

「まだまだ！七閃!!」

アイスノンが暗殺拳のこぶしにより粉碎されていくが、それくらいわかりきつてい
る。

俺は間を置かずに刀からワイヤーを展開させ、斬撃を飛ばす。通常時であれば3本ま
でだが、限定解除して魔法による加速を加えた今は5本の斬撃を同時に飛ばせる。同時
に体中が呪いにより激痛が走るが、今は無視する。

「ふっー」

するとさすがに5本同時に捌くのは無理だったのか、相手はダメージ無視で超速でまっすぐ踏み込んできた。

多少のダメージなどかけらも気にしていないのか、防御魔法が掛かっているようで、俺の七閃を最低限だけガードしながら懐に入り込まれてしまう。

「クソっ!!」

「とらえたぞ」

初撃のこぶしは何とか刀の刀身で受け流したが、何ていう威力だよ、アホか!

続けて肘、廻し蹴り、またもや拳とさまさまな攻撃が休む暇もなく飛んでくる。俺はそれをギリギリのところまで捌きつつ、なんとか距離を取ろうとするが、相手もそれは理解している。ぴったりと張り付いて距離を、魔法の距離を取る事が出来ない。

くそつたれが! わかっていなかったが、近接においては相手の方が一段も二段も上だ。まったく刀の間合いですらなかなか優位がとれない。

「はあっ!」

「ぐっふう!!」

そんな俺の焦りを見透かしたように相手はさらに踏み込んでショルダータックルのような攻撃をしてきた、それが接触すると同時に信じられないくらい衝撃が来て俺は

吹き飛ばされた。

「ゴホッ！ゲホッ！つつう．．．!!」

意味がわからないくらい吹っ飛ばされて天使達の近くまで転がって来た俺は、血を吐きながらなんとか立ち上がる。

「ハチさん！」

「大丈夫だっ！」

天使達が心配そうに声を上げるが、俺は声を張り上げ再度刀を構える。それと同時に援護に入ろうとしていた北山を視線で静止する。

ぶっちゃけ全然大丈夫じゃないけどね!!なにあれ!?ただのショルダータツクルに意味がわからないくらい吹っ飛ばされたんだけど!?中国拳法って意味プーなんですけど!?!?

大型バイクにぶっ飛ばされたみたいだぜ!!経験ないけど。

「北山、光井、増援もあるかもしれん、絶対にシールドを解除するなよ．．．」

ぜえぜえしながらマジヤバどないしよって全力で焦っていると、暗殺拳の野郎が構えを解いていた。

「ふむ、まだ時ではなかったか．．．少年、この決着はまた今度にするでしょう。その少女達を守りたくば力をつける事だ」

「どういう事だ・・・」

「そのままの意味だ」

そう言うのと、奴は走り去っていった。

それを見送る俺。ぶつちやけ足がぐくぐくで追いかける余裕がないだけですハイ。

それから少しして、気配もなくなると、俺はふいーと息をつきながら片膝をついた。ぶつちやけなんで向こうが引いてくれたか知らんが、超助かったとしか言いようがない。ありやあ魔法有りのハゲでもきついんじゃないの？ ってくらい意味がわからん強さだった。これだから人外は・・・。

「はあ、とりあえず向こうが引いてくれたみたいで助かった。光井、北山もういいぞ」

そう言うのと、天使光井と北山はシールドを解除する。いやあ、こないだの魔法使いとか骨トカゲとか魔女が居たら絶対無理だったわ。修行しなおそつ・・・俺も人外の領域に入らないとじゃないですかやだー。

そう考えていると天使達が走ってきて俺の頭やら体やらをぺたぺたし始める。

あ、ちよつ！と慌てて静止しようとする、すぐ目の前に涙目の天使達がいた。

「大丈夫ですか!?! ケガはつ!?! ああ! 血が!!」

「ハチさん! 血が!! すみません、ありがとうございます! すぐに治療しますからね!!」

必死な顔の天使光井と天使柴田が俺の口についた口をハンカチで拭いて、傷の手当を

しようとしてくれてるが、こっちはそれどころじゃない。

本人達は必死で気づいていないが、さっきからはよばよしたのが体に当たって、別の意味で大変な事（意味深）になっている。なので俺は必死で起き上がろうとすると、天使柴田が抱き付いてきた。

「まだ 動いてはダメです!!」

「?!?! # \$ & , % !?!?」

その後、言葉が出なくなっただけでオーバーヒートした俺は、グレイとハゲが到着するまでおとなしく天使達にされるがままになっていた。

ハチ、ようやく一息つく。

天使柴田と天使光井に死ぬほど心配されて、それから天使の胸に抱かれながら天に召される寸前にグレイとハゲが到着してなんとか俺は残りの人生も現世で送っていけるようになった。

あと少しハゲとグレイの到着が遅かったら俺は今頃天に昇っていたかもしれない。

先まで死ぬほど足がブルってたけど、天使の抱擁により大分回復してこれからの人生も頑張っていこうと思えるくらいにはある意味復活した。

それから天使達の護衛をハゲに任せて・・・まかせて？んん??任せていいのか？

・・・いや、さすがに大丈夫だろ。うん。大丈夫だよな？変な事しないでね？ふりじゃないよ？

死ぬほど心配なんで速攻でブランシユ片付けて迎えに行こう。うん

「そんじゃあ姉さんと達也と深雪のとこまで行って、さっさと終わらせてくるから少しだけまってくれ」

「ええ!!その怪我で行くんですか!?!」

俺の言葉に天使柴田が心配ですって顔してくるが、ほんとそれな。俺も休めるなら休

みたいけど、そうすると結局妹様に大変な目に合わせられるよね。なので俺の答えは一つなのだ

「これくらいへっっちゃらさー！」

「死ぬほど痛いのを必死に我慢しながら笑顔を浮かべる男の顔をしてるけどほんとに平気？」

サクツと北山に見破られたことでやつぱりキズがーって天使達が詰め寄ってくるが、俺は大丈夫だから、と必死になだめる。

それ以上お胸様をおしつけられたら違う意味で身動きとれなくなってしまうがな。

「心配してくれてサンキューな。見た目ほどじゃないから安心してくれ」

「ハチさんは拙が守りますので安心してください」

俺にニコぼ能力があれば話は早いのだろうが、ないので誠心誠意説得してなんとか納得してもらった。

初対面ながらもグレイもしっかりと守りますからとガッツポーズをしている。うん、あんま強そうじゃないけど、むしろめっちゃ可愛いけど、まあ天使達がしようがねえなって感じで納得してくれたからいいか。

「ハチさん、気をつけてくださいいね!!」

「無理は禁物ですよ！」

勿論後で死ぬほど土下座する所存だ。

それからしゅたたたーと魔法使つて半分飛ぶような感じでなんとか達也達にいるであろう山に着いたら、今度はとんでもない爆発が見えたもんですからもうね。

「あれは・・・姉さんか」

「シズさんですね」

誰が見ても姉さんだわ。

まだ結構距離あるけどこっちまでビリビリ衝撃波きたもん。間違いない。最近では学校のCAD爆発させすぎて爆炎の支配者とか呼ばれてるらしいのだが。

こんな爆発見たら俺もそう思うわ。

・・・一応姉さんの為に言つとくと、学校での爆発はさすがに俺の普段の封印もあるから部屋を軽く焦がして、窓とかドアを吹っ飛ばすくらいの威力で済んでるからな？今の威力なら学校の建物がどんだけ吹っ飛ばか想像もしたくないぜ・・・。

それからなんだかんでコロニー落としごっこをしてる間にグレイに聖槍をチャージっていうか、抜锚してもらって、魔女ごとえいやーとロンゴミアドして欲しいなんとかなった。

いやー、まさかコロニー落としっぽい状況を堪能できるとは思わなかったぜ・・・。

ぶっちゃけ暗殺カンフー使いとの戦闘で体がボロボロだし、ここまでの移動とか、コロニー落とし防いだりとかで第二段階解放した分の魔力、つてーか、サイオンが枯渇しかけてるからこれ以上長引かなくてよかったわー。

正直まだブランシュ残ってるけど、達也と妹様が行ってる以上、俺と姉さんとグレイの一番なんてないやろ。

妹様からのお仕置きに耐えるだけのサイオンだけ残って入ればもうなんでもいいや。

「いやー、危なかったね、ハチ、グレイさん、ありがとう。たすかったよ」

「おう」

「間に合ってよかったです」

姉さんもニコニコ、俺もニコニコ、グレイもニコニコ。もうこれで終わりでもいいんじゃないかな？

「ダメ」

「ハチさん、ダメですよ？拙も手伝いますからもう少し頑張らしましょう？」

そう思ったただけなのに、姉さんとグレイに突っ込まれたでゴザル。心のなかを完璧に把握されているでゴザル。

でもグレイが優しく俺を励ましてくれたのもうちよつとだけ頑張ろうって、そう思えた。

すんごい至近距離まで顔を近づけて来てメツて顔をしながら人差し指を立てている美少女に言われてなお無視して帰れるやつとかいるだろうか？とりあえず俺には無理

よ。

正直グレイに言われなくても妹様が怖くて結局行くんだけれども、そこんところはまああれよ、様式美と言いますかね・・・。

そんなわけで姉さんとグレイと一緒に達也達のとこに行ったら、千葉と西城が骨トカゲとバトっていたので、サイオンが枯渴しかけているとは言え、ほっとけないイケメン（自称）な俺は姉さんとグレイと共に2人の援護に入った。

んで、数分で骨トカゲを殲滅して（だいたい姉さんとグレイがやった）改めて西城と千葉を見ると、西城がボロボロになってた。

とりあえず、まだ余力のある姉さんとグレイに周辺を警戒してもらって、俺はハタヘタと座り込んだ西城と千葉に声を掛けた。

「よう、西城、千葉。大丈夫か？」

「おーハチ、マジで助かったぜ、ダンケな」

「ハチ君、助かったわ。ありがとう」

西城はボロボロに見えるけど、意外と元気に返事して、千葉は小傷はあるものの、こ

ちらも問題なさそうに感謝の言葉を口にした。

「ほとんど、姉さんと 그레이 がやったがな」

「マジで助かったぜ、最初骨トカゲってなんだよって思ったけど、マジで骨トカゲが来たからびつくりしたぜ」

「ほんとよね、シズさんもだけど、 그레이 さん？にも感謝だわ。こいつ硬くなつて盾にはなるけど、なぐるしか出来ないからほとんど骨トカゲを倒せないしで正直ハチ君達が出来てくれなかったらあぶなかったかも」

「なんだと？なによ？と西城と千葉がイチャイチャし始めたので、とりあえず俺はしばらく傍観者をしとくと、すぐに思い直したのか、千葉が再度感謝の言葉を掛けてくれた。こいつマジでいい奴だな。」

「それはそうと、 ホントにありがとね。後で 그레이 さん？も紹介してね」

「おう、後で紹介するわ」

少しすると姉さんと 그레이 が戻ってきた。

案の定、そこらにまだ骨トカゲの残党がいたので殲滅してから戻って来たらしい。

それから 그레이 を西城と千葉に親戚だと紹介して、しばらく過ごしていた。

え？達也の援護に行かないのか？って？

いや、行こうとしたんだけどさ・・・外からでもわかるくらい妹様のサイオンがゴウ

ゴウと吹き荒れているの見たら、ちよつと中に入るのはためられる訳でして……ぶつちやけこわい。

結構奥の方で魔法使つてるっぼいのに入口あたりまで凍つてるんすけど……。どんだけ切れてんのよあのブラコン娘は……。

もうね、ブランシユとか言う一般ピーポーがちよつと武器持ったり、アンテナイト持った程度の集団なんぞ、サイオンがほとんど無い現状でもさしたる脅威でもないのに、達也と妹様、聞くとところによると、十支族に剣道部のエースが突入してるんではないけど。どこから剣道部のエースが沸いて来たのか知らないけど。

もうオーバーキルもいいとこだよ……。これで俺と姉さんが突入したらアリ一匹生き残れない。

俺はそこまで鬼では無いので、あえて突入しないのである。決して妹様が怖いわけでは無いのだ。

だからこれは仕方ないのだ、うん、仕方ない。そう考えて腕を組みながらうんうんとうなずいている俺の肩に後ろからとつても冷たい手が置かれた。

「あら、ハチ。遅かったわね」

肩からの冷氣にめつちや覚えがあるなーって思つて首を動かすと、そこには案の定、妹様が天使のような笑顔を浮かべていた。

「あ、ああ・・・その・・・だな」

「ええ、わかっているわ。大丈夫」

大丈夫、と言いながら俺の肩がパキパキと凍らされているのですが・・・これ一般的に大丈夫って言わないと思うのですが・・・とか言いたいけど当然言えない訳でして。

そうやってビクビクしていると、妹様に気づいた姉さんがほわツとした笑顔を浮かべて妹様に手を振った。

「深雪、遅くなつてごめんね？大丈夫だったかな？」

姉さんに声を掛けられた妹様は先ほどまでの氷の冷笑を瞬時に花がほころぶような笑顔に変えて姉さんに飛び込んで行つた。

「お姉さまっ！怖かつたです!!」

「よしよし、怖かつたね、よく頑張つたね、偉いよ」

ぜつたいに嘘やん・・・とか思うけど、絶対にそんな事言えないなつて思っている俺をよそに、遅くなつてゴメンと言いながら妹様の頭を撫でる姉さんと、姉さんに撫でられてこれ以上の幸せは無いって全身で訴えてくる妹様、それを見て苦笑いする西城と千葉。

そんな感じでしたららく待つと、達也と、なんか知らん人達が来たので、ああ、これでメンドクサイこれまでのあれこれが終わったんだな。そう思った。

それから俺は達也に一言声を掛けてから天使達を迎えに行くのであった。

ハチ、日常に帰る

重い体を引きずって、なんとか天使達の元にたどり着いた俺。

そこでやはりハゲにセクハラされそうになっている天使達が見て、キレた。

そのまま大乱闘エンジェルブラザーズが開幕したのは言うまでもないだろう。

サイオンが枯渴仕掛けていたので、純粋な身体能力のみであったが、奮闘虚しく後一歩ハゲに俺の刀は届かなかった。

それから最終リミッターである最後の封印を解こうとしたところでハゲの弟子たちがハゲを止めて、天使達に謝罪させて帰らせた。

勿論俺も今度こそハゲのものを切り落とすと宣言して置いた。修行を増やす覚悟もある。

めっちゃ切れてた俺に天使達が若干引いてたような気もするが、きつと気のせいだろう。

ハゲのセクハラから解放された天使達をそれぞれ自宅まで送ることにした。

・
・
・
・
デカ!!

え？ナニコレ!?この家ってか豪邸デカすぎじゃね？ってこれ北山の自宅う!?

これ北山・・・いや、北山さん、北山様の自宅なのお?!?!

あまりの豪邸に俺も天使柴田も絶句である。天使光井は知っていたのか苦笑いしている。可愛い。

はあくすつげ。まじすつげ。でつけー・・・ほえー・・・。

もうビビりすぎて語彙が死にまくりだけど、仕方ないでしょーこれ。

その後、なんとか落ち着いた俺と天使柴田にお茶でもどう？って聞かれたけど、流石にあつちこつちボロボロのきちやない服でこんな豪邸に入るわけにはいかない。変に汚しても弁償できるかわらんもの。なのでまた今度と約束してから天使柴田を送る事にした。天使光井は北山邸に泊まっていくそうだ。

それからまたぶーぶに乗って今度は天使柴田の家へ・・・ふええ、語彙が死んだつきり戻ってこないよお。

「ふ、ふたりきりですね・・・」

「お、おう。そうだな・・・」

さつきまでは天使光井がいたから会話が途切れずなごやかな車内だったが、おとなしい性格の天使柴田とコミュ症である俺の2人になった瞬間車内は沈黙の空間となった。

新たな沈黙シリーズにランクインだ。セガールいないけど。

あまりに会話が無いため、俺も、天使柴田もめちやくちや肩ひじはって、両手を膝の上ののせて、お互いをチラチラ見たり、何かを言おうとしてどもつたりを繰り返しては黙る。そんなことを繰り返して出て来たセリフがコレである。ちよつと頬を染めている天使が可愛すぎてもうどうしたらいいのかわからんね。あと、そんなに胸を寄せられると視線がもつてかれそうになるから気を付けてね？もちろん言えんけど。

きつと、天使柴田は俺をキュン死させる気なんだろう。めつちやドキンコしたわ。

これが天使柴田じゃなければ2人きりかよ、最悪、死ね・・・の短縮語かな？と思つてしまうが、天使柴田がそんな事思わうわけが無い。・・・ないよね？

それから、ぼつ・・・ぼつ・・・と話しながら過ぐすと天使の自宅、つまりエンジンルームについてた訳だ。つまりここがアヴァロンである。

見た目は普通の家だが、外からでもわかる、天使柴田の聖域のような癒しオーラがここからでも見える。

それにしても普通の家で安心したわ。また豪邸だったらどうしていいのかわからなかった。なにもしないけど。

それで、到着して、降車したらたまたま母親が帰宅していたのかまたもやお茶を勧められたが、俺のごとき穢れた存在が聖域を汚すことが出来る訳が無いので、断腸の思い

で辞退した。

チラリと見ると天使柴田も残念そうにしている、ちよつとくらいいいかなつて思つたけど、踏み出した足の汚れを見て、それから全身を見て、流星にあかんやろつて思つて帰宅する事にした。

いや、魔法を使えば綺麗にはなるんだけどね？もう帰るだけだしいいかなーつてね？柴田母にもめつちや心配されたけど。あとデカイ。天使柴田をさらに越えていた事だけここに記す。

ただ、天使柴田の家は良くも悪くも普通の家のようだ。

今回の相手が天使柴田を狙っていたのか、北山なのか、天使光井なのかは不明だが、この三人を守る為の何かしらは必要かもしれないな、今日のところはしょうがないからハゲのところの僧侶に監視してもらおうとして、対策が必要かもしれない。

その辺はまた明日にでも相談しよう。

それから自宅に戻ると、妹様が達也と姉さんに甘えまくっていた。

同時に2人に甘えるとか器用な事するなーと感心していると、姉さんと達也は気づい

ていたのか、それぞれおかえり、と言ってくれた。

「ああ、ただいま。姉さん、達也」

「あら？ハチ、遅かったわね」

「ああ・・・」

さつきまで猫の鳴きまねをしそうなくらい甘えまくっていた妹様が、俺の声に反応して、今更すました顔で俺に声を掛けてきたが、お前・・・姉さんと達也に甘えまくって、おいてそんな澄ましたって無駄だよ？

だが、紳士な俺は当然そんな事を突っ込まない、突っ込んだ場合の未来なんてわかり切ってるからね。

なので、俺の答えは決まっている。

「まあな、北山と光井、柴田が狙われていたからな。その護衛と、ハゲのところに監視を依頼していた」

「どういう事・・・？」

俺の言葉に妹様も甘えている場合ではないと判断したのか超なごりおしそうにしながらピシりと姿勢を正して聞いて来た。

流石に友人の危機をさつきまでのとろけた顔で聞く気は無いようだ。

達也と姉さんも真剣な表情になっている。

それからあれこれと報告して、天使柴田と天使光井、北山が狙われていた事を説明した。

とりあえず今回の件で魔女と暗殺カンフー使いは撤退したけど、たまたま撤退しただけで、問題が解決したわけじゃないのが悩みどころである。

「なるほど、そういう事があつたのか」

「ああ、なんであいつらが狙われていたのかわからんがな」

「達也がまじかよ……って感じでうなつている。いやわからんけど。もうちよつと感情出しても良いと思います。」

強いて狙われる理由を言うなら最強に可愛い事かな。たぶん狙われた理由とは関係ないだろうけど。

「あれ？そう言えば私もそんな事言われた気がするよ」

「なに!？」

「ほんとですかお姉さま!？」

姉さんの爆弾発言に俺も妹様もめっちゃビククリだよ!!

いや、でも最初に会合した時にそんな事言つてたような言つてないような……。

そうしたらグレイもそういうええ拙も……と言つてきたのもう確定でしょこれ……

「つまり、可愛いからお持ち帰りしようとしてた……って事か？マジで!？」

またまたー、そんな事あるわけないじゃないですかやだー。

それからあれこれ話してみても結局わからなかつたので、これ以降は天使達の警護について話してその日は終わりとなつた。

ふう、何とか今日を無事に終えたぜ……正直冷凍されることは覚悟してたから良かった良かった。

それから数日間はブランシュにキレてやりすぎた妹様を励ますために達也を筆頭に俺も姉さんもあれこれと奔走する羽目になつたが、これくらい凍らされるよりは大分ましだ。ヨユーヨユー。

達也と姉さんと、なんだつたら俺ともそれぞれ別口で買い物に行つたり食事に行つたりと甘えまくりな妹様。

流星は司波家最強である。妹様が本気になつたら誰も逆らえないのである。

ブランシュにやりすぎて落ち込んでた妹様だが。まあね、さすがに一般人にちよつと毛が生えた程度の集団にニブルヘイムはやりすぎじゃない？いや、山の一部を更地にした姉さんが隣にいるからそうとも言えんかもだけど。

んで、そんな一般人に超強力なオーバークイルをした為、自宅内で結構落ち込んでた妹様を兄妹一同で励ましまくって、甘えさせまくって、結果、逆に落ち込みモードからの

脱却が遅れてしまうという事態にはなったが、まあ達也も姉さんも気にしてないので問題では無いのだ。

「ハチ？聞いているの？」

「ああ、聞いてるよ。どうした？」

「もう、やつぱり聞いてないじゃない、それで、これはどう？」

「やれやれ、と考えていたら、いつの間にか妹様に声を掛けられていたらしい。適当に返事をしたため、妹様はちよつぱり頬を膨らませながら俺に手に持ったものを見せながら問いかけた。

「ああ、いいんじゃないか？」

「もう、さつきからそればかりじゃない。お兄様の誕生日プレゼントなんだから、ちゃんとみなさい」

そう言つてプンスコ可愛らしくしている妹様に俺は今度こそしっかりと向き合つて答える。

「お前が選んだものを達也が気に入らないわけないだろう？」

「も、もう……」

真つ赤になつた妹様は可愛らしかつたとだけ言つておこう。

それから少しして、達也と妹様は壬生先輩という方の退院祝いに行くそうだ。

聞いたことがあるような無いような、って思ってたらかの有名な剣道小町らしい。いや知らんけど。

姉さんが綺麗な剣だとほめていたが、なんで達也と妹様が行くのか不明だった、まあいい。

俺と姉さんは珍しく2人で学校に向かう。

もう桜は散ってしまっているが、2人で学校までの道を歩きながら姉さんの方を見ると、とても楽しそうに微笑んでいる。

鼻唄をふんふんさせながら元気に歩く姉さんに俺もなんだか楽しくなってくる。

「なあ、姉さん?」

「ん?どうしたの?」

俺はなんとなく、聞いてみたくなった。

「学校は楽しいか?」

姉さんにとっては学校に行く必要などあまりないのではと考える事がある。達也もそうだけど。

いろんな事が出来る達也と、圧倒的な魔法力を持つ姉さんに学校というのは退屈で、

窮屈じゃないのかと。

そう思つて聞いてみた。

すると、姉さんは満面の笑顔を俺に向けて来た。

「もちろん、とつても楽しいよ！」

歩きながら姉さんはいろいろ話してくれる。

「たしかに勉強は苦手だけどね。みんなで学校に行つて、勉強して、話して、そう言うのは私にはできなかつたからね」

微笑みながら、少し寂しそうな眼をする姉さんはそれでもとても楽しそうに続けた。

「だから、とつても楽しいよ」

「そうか」

姉さんのその言葉に俺も微笑む。すると、姉さんも俺に聞いて来た。

「ハチは？ 楽しくない？」

そう聞いた姉さんは不思議そうな顔をしていた。

俺は・・・どうだろう。A組のアホ共はあれだが、千葉や西城はいい奴だし、生徒会も、まあ小間使いの如く使われるが、そんなにいやじゃない。北山は無口だけどいい奴だし、天使柴田に天使光井に毎日癒されている。

そう考えると、あれだな・・・

「悪くない」

「そっか、悪くないか」

俺の答えに姉さんも微笑んだ、俺の頬は・・・ちよつと赤いかもしれん、思わず姉さんと反対側を見て、頭をかく。照れるぜまったく。

「悪くない、よね？」

「ああ、わるくない」

そう姉さんと2人で微笑み合いながら俺達は学校へと向かう。

入学から今まであれこれとあつたが、それはそれとしてだ、とりあえず、今日のところはあれだな。

日常を、再開しよう。

つなぎの話。

入学してからのごたごたがやっとこさ一息ついたので、最近の俺達はのんびりと過ごしながら日常を過ごしていた。

今回はそんな平和な話。

という訳で、今日はみんなで達也と姉さんの誕生日を祝うとの事で、行きつけの喫茶店に集合していた。

どうも千葉が企画したらしく、内緒で俺達と接点のあるやつらを集合させてサプライズパーティーをするつもりの方だった。

なのでこの集まりの正確な趣旨を理解しているのは発案者の千葉と、賛同した妹様、それに巻き込まれた俺。

とりあえず、妹様に言われた俺は喫茶店を抑えるべく貸し切りの予約を入れ、マスターには誕生日パーティーだと伝えて料理の手配と、ケーキの手配をした。

参加者はA組とE組のメンツを千葉と妹様が招集、人数を確認した俺はマスターに人数を伝え、料理の内容を微調整する。

休日、かつ時間帯がそこそこのピーク時間になるであろうから料金がそれなりになり

そうだが、達也程ではないが、俺にも収入はあるのでこれくらいは問題ない。

問題があるとすれば、天使達を出迎えるために最高のパーティーにする必要があるという事だろうか。

しかし、控えめな性格の天使達にはあまり豪勢な感じで開催されてもとまどうかもしれん。

だからあまり豪勢になりすぎないようなパーティーにする事にした。

「とりあえず、店舗内は改装するとして、くす玉と、横断幕、どこぞの芸人でも呼んだけばいいか？」

「そうね、でもお兄様とお姉さまは芸人を呼んでも嬉しいのかしらう・それよりも・・・」
そんな感じで俺と妹様の会議は白熱していく。

それを聞いていた千葉がドン引きしているが、俺と妹様でどうした？と聞いてみる

「いや、あんた達・・・深雪が重度のブラコンシスコンなのは知ってたけど、ハチ君も落ち着きなさい」

失礼な、落ち着いてるっつーの。

落ち着いて、天使達が降臨する場所を整えようとしているだけだろう？さすがに今から打ち上げ花火の手配は出来ないだろうしな。これでも自重してるんだぞ？

隣を見ると、妹様も俺と同じような表情で千葉を見ていた。

「うん、わかった。とりあえず、準備はこれくらいでいいから」

「だが、天使達を出迎えるのにこれじゃ地味じゃないか？」

「お兄様とお姉様の誕生日にこれだけではお二人ともがっかりしないかしら？」

まだ場所と料理と日時を決めたくらいなのに千葉が話し合いを終わらせてきたが、俺と妹様は不安ではない。

「いいのよっ！仲間内だけのパーティーでなにするつもりなのよ!？」

「だが……」 「でも……」

「ああもうっ！いいのっ!!もう！深雪も想像以上だったけど、ハチ君はなんなの!?!天使が降臨ってなんの儀式をするつもりなのよっ!!」

激おこな千葉に言われて俺と妹様もしぶしぶ千葉の話に納得するのであった。

たしかにあんまり派手にやったら逆に驚いてしまうかもしれない。

たしかにやりすぎたら天使柴田と天使光井が腰を抜かす事も考えられる。うむ、ならばしかた無いな。

「わかった、後は一発芸でも考えとくわ」

「あー……うん。まあいいわ……それくらいなら、まあ」

せめて歓迎の意味を込めてこれくらいはやろうと俺が提案すると、千葉はため息をつきながら賛同してくれた。

こうして俺と妹様と千葉は達也の誕生日を祝う為の準備を終えて、当日を待つのであった。

そんで当日。

「それじゃあ、かんぱーい！」

「「「「かんぱーい!!!」」」」

千葉の音頭にみんなでグラスを掲げてパーティーが始まった。

俺も当日朝早くからここにきて内装の飾りつけをしたり、いまだ狙われるかもしれない天使達の迎えに行つて、なう。

「でも、私達も参加してよかったのかな？」

パーティーが始まって酒が入ってるんじゃないか?というテンションな千葉に西城がつつこみ、天使柴田が可愛らしく苦笑いしていると、天使光井がそんな事を言つてきた。

むしろ、天使が参加していないパーティーってなんの意味があんの?天使の祝福は必要に決まってるじゃん?

そう思っていたら妹様と姉さんが満面の笑みで答える

「もちろん！是非来て欲しかったわ」

「そうだね、お祝い事はみんなでやった方が楽しいもんね」

「「「「え？」」」」」

妹様が満面の笑みで答えて、姉さんがそれに追随すると、空気が凍った。

みんなどゆこと？つて顔で姉さんを見ている。てか姉さん気づいてたのね……。

姉さんはみんながなんで凍っているのか理解していないようで頭にはてなを浮かべて微笑みながら首を傾げていた。

「うん？どうしたの?」

ニコニコ笑顔で不思議そうにしている姉さんが可愛い……。

だが、いつまでもそうしているわけにはいかないので、そろそろネタ晴らしをすることにした。

「ちよつと、予定と違ったけど、今日はシズさんと達也君の誕生日パーティーだよ!!」

ドドーン!!とそこそこある胸を張りながら千葉が今回のパーティーの趣旨を答えた。

すると、空気を読んでくれるマスターが、隠してた横断幕を広げる、そこには……

『達也君、シズさん、お誕生日おめでとう!!』

と書かれていた。

それを見た全員が面白いくらいそろって驚いていた。

うむ、企んだかいがあるつてもものだ、千葉も満足そうに腕組みしながらうなずいてい
る。

俺も天使達の可愛らしいおどろき顔を録画出来て大満足である。永久保存待ったな
しだよ。あ、もちろん隠し撮りじゃなくて、みんなに許可取つてあるぜ？

記念にって言つたらみんな笑顔でうなずいていた。まあ天使二人にそれぞれ一個ず
つ、妹様からの要請で達也と姉さんにさらに一個ずつ、あとは全体用に一個、すべて俺
が思考制御でいい感じに録画している。

それを見た千葉と西城がドン引きしていたが、気にしないキニシナイ。

それからみんなでうんまい飯食べて、ケーキ食べて、ジュース飲んで、わいわいがや
がやと話して、俺が一発芸で魔法と刀を使った天使の像を作ったりしてドン引きされたり
と楽しい時間は過ぎて行つた。

こんな幸せな時間がずっと続けばいい、そう思った。

そう思ったのは俺だけでは無かった、姉さんは満面の笑みで、俺に微笑みかけてくれ
る。

「ふふ、本当にありがとうハチ。とつても嬉しいよ」

「そりゃよかつた」

姉さんが喜んでくれたのなら感謝、感激ってね。

そうして、達也と姉さんの誕生日は楽しいままに終わった。

姉さんも大満足だったみたいだし、妹様も大満足。

俺も妹様に凍らされる事も無いとまさにウインウインな感じだった。

それからさらに数日が経過して、休日の今日。

珍しく俺にも達也にも姉さんにも妹様にも予定が無かった。

正確に言うくと、俺と達也に仕事が入っていたのだが、先方からのキャンセルにより、日程が延期となった為に、急遽ひまになったのだ。

なので、俺は朝から研究に励んでいた。

どうもひまだったらしい姉さんと、たまたまりビングで休んでいた達也とその達也にやたら色っぽい視線を向けまくっていたやたらと薄着な妹様と4人そろってモニターを見る事にした。

そこに映っていたものは・・・

『スターライト・ブレイカー……!!!』

モニターの中で白い服をまとった界限では悪魔と呼ばれたりもする茶髪の幼女が、人

に向けてはいけなレベルのピンク色の魔法砲撃を放つているところだった。

それを見た反応はそれぞれ違う、ドン引きしている妹様に、目をキラキラさせて物語に集中している姉さん、泣いている俺、ふむと考える達也と様々だった。

それから話は進んでいく。

最初は敵として現れていた金髪ツインテの幼女と、茶髪ツインテの幼女が仲良くなつていくシーンである。

『なまえでよんで』

そして互いのリボンを交換しあつて、再開を誓いあう二人。スバラシイ友情である。

俺はさつきから泣きっぱなし、姉さんはキラキラさせてる、妹様は人に向けちゃいけないレベルの砲撃を放った幼女と喰らった幼女が仲良くしてる事に相変わらずドン引きして、達也は相変わらず思考していた。

そうして物語が終わつて、俺が涙を拭いていると、それぞれが感想を言ってくれる。

「面白かったね!!」

姉さんはニコニコ満面の笑みである。楽しんでもらつて俺も満足である。

「……………人の趣味はそれぞれだね」

妹様はまったく理解できないって顔だった。おい、馬鹿野郎、お前全国のファンに謝れコラ。

「興味深いな・・・」

「?!?!」

そして最後の一人である達也の感想に思わず俺と妹様はぎよつとして達也の顔を見た。ぶつちやけ2度見した。

正直こいつからの感想はかけらも期待していなかったのだが、まさかの好感触である。妹様もその美貌を仰天の表情に変えて達也を見ている。つか美人はそんな表情でも美人なんだなあとか場違いな感想を持ってしまふ。ずるいよね？

それはそうと達也である。エンディングが流れている今も思考を続けているようだ。「この間見たガンダムのは口と同じように思考し、会話する人工知能付きデバイスに、周囲の魔力を収束して放つ魔法・・・どちらも実現すればシズの制御にハチのサイオン不足を補ってあまりある」

達也のそのセリフに俺と妹様はなにに興味を持ったのか理解した。

ふう、危なく達也が田村さんとこの王国民になるのかと思つてビビつたぜ。

つかどうしよう、この後A、Sも見ようかと思つてたけど、カートリッジシステムとかめつちやコイツの琴線に触れそうだよなあ？でもそうすると、絶対コイツこの後自室にこもつて研究するよね？そうすると、折角の休日になつたのに達也と一緒に時間が過ぎせなくなる妹様がいる訳だ・・・後はわかるね？

うん、この話はここまでだな。うん。

とりあえず、あれだ。なんとなく妹様もこの先の展開が予測できたのか、こつちにジト目を向けて来てるし。何とかしよう。

「そういう事だ。これに関しては俺も出来れば実用化したいと思ってる。ただ、これには技術的な問題がある」

「ああ、そうだな。ただ発想は興味深い。これは・・・」

そこからさらに思考しようとする達也を遮って俺は言葉を続ける。

「そこで、俺に少し考えがある」

「なんだ？」

「まあ待て。それに関しては後日研究所で話すし、当てもあるからそれに関しては手伝ってもらおう。だから今日はだな」

「ああ」

「折角の休日なんだ。みんなで出かけようぜ？」

そう言つて、俺は達也に向けてた視線を妹様に向ける、するとそこには達也と姉さんとお出かけたけれど、言えなくてモジモジしているクソ可愛らしい妹様がいた。

それを見た達也も理解したのか、思考をいったん中断させた。

「そうだな、それじゃあ深雪、シズ、出かけようか」

「はい！」

「うん！」

そうして兄妹そろって出かけて行き、俺は妹様に凍らされることなく平和な日常が過ぎていくのであった。

ハチ、いろいろ作る

「へえ・・・九校戦ねえ・・・」

「そうなの」

俺は昼食の焼きそばパンをもごもごさせながら今しがた聞いた話を反芻する。

普段は表情が乏しい北山がめずらしく目を輝かせて語るその内容は、まあその、楽しそうですね？って感じだ。

「雫は毎年九校戦を見に行ってるんですよ！」

「うん」

そんな北山に感化されたのか、天使光井が楽しそうに報告し、北山がちよつと恥ずかしそうにうなずいている。

うん、今日も癒されるなあ・・・と思いつつ2人を見る。ほんと平和だなあ、と思わざるをえない。

4月のブランシユやらのごたごたから大分時間が過ぎて、最近の話題はだいたいテストか九校戦の話題になってきている。

今日もそんな話をしていいる中でそんな話題が出て来ていたが、正直俺も達也もあんま

り興味が無かったからそんな詳しくないのよねん。

そんな話をしていたせいかな、北山の九校戦愛が爆発していたのだろう。

だから俺も少しばかり興味が沸いたので聞いてみる事にした。

「ほんで？それっていつやるんだ？」

天使光井が楽しいんですよ！すごいんですよ！と満面の笑顔で言われては興味を持つのも当然の事だから聞いてみたのだが、2人からドン引きの目で見られたでゴザル――。あれー？

「8月3日から10日間だよ」

「へえ・・・結構長帳場なんだなあ」

北山が親切に教えてくれたので感謝しつつ、なげえなおい、とか思っていると、天使光井が苦笑していた。

「新人戦っていう1年生の部もありますからハチさんと雫は参加する事になると思いますがよ？」

「・・・え？」

苦笑しながら天使光井がいった内容が良く理解できなかつたなあ・・・いや、天使の言葉だからもちろん言ってる意味は解るんだけど、理解したくないと言いますか：。「すごい嫌そうな顔だね」

「なんとなく予想はしてましたけど、九校戦に参加するのってすごい名誉なことですよっ。」

俺はよっぼど表情に出ていたようで、まあ隠しても居なかったが。

それを見て北山と天使光井から突っ込まれるが、苦笑いの天使光井が可愛い。では無くて、よく考えて欲しい。

「俺が名誉を欲してるように見える？」

「見えない、……ね」

「あ、あはは……」

九校戦が大変楽しみな北山には申し訳ないが、俺にも仕事があるし、研究や開発とやることがあるのだ。

今のところクソの役にも立たない学校の授業に時間を取られていた分、夏休みにはしっかりと時間を取ってがつつりやろうと思っていたのだ。これはゆゆしき問題である。

特に次のガンプラバトルのように新作を作っていたり、実物のガンダムを作るための研究の一環で製作していた武装ユニットや、俺と姉さんの新武装もそろそろ完成が見えて来ていたというのに何という事だ。

「まあ、仕事が、な……見る分には今年は深雪も出るだろうから問題ないが、参加、と

なると時間がなあ……」

「仕事……?」

「ハチさん、仕事してるんですか?」

ガンダム作る為にいろいろと作ってたら四葉のゴスロリ様に当然のように目を付けられてそこから達也と同じように企業で社畜になってます!!とか当然そんな事言える訳ないので、なんとなくぼかして説明しておく。

とりま、機械工作の趣味が高じてアルバイト的なことをしている感じで説明しておいた。

「へえ、そうなんだ……」

「すごいですね!!」

2人からめっちゃ関心されておいらもう鼻が伸びまくって成層圏突破しそうですぜ。まさにインフィニットストラトス。

いま現在作ってるのもだいたいそんな感じのパワードスーツ。

特に名前は考えてないので俺は飛行ユニットとしか名前を付けてない。まんまI Sの名前使ったら著作権的なのがあるかもだもんね。

これが完成したら、その次はアームスレイブ作って、それからガンダムだ。まだまだ先は長い、きつと完成させて見せる。

「サンキュな、それとは別に今姉さんと俺のCADも作ってる最中でな、これがいま結構な佳境に入ってるもんでな、あんまテストとか九校戦に時間使えないだろうから、参加は難しいんだ」

そんな話をして残念そうにしている天使光井と北山との至福の昼食を終えた俺は午後の授業と生徒会業務へと戻っていくのであった。

しかし、この時の俺は知らなかったのだ。

第一高校の人員不足に頭を悩ませる生徒会長とか、九校戦というイベントに目を輝かせる姉さんの熱意やら、達也と姉さんと参加しようともくろむ妹様の想像以上の熱意を・・・まあ、知っていたとしても回避できなかつただろうからあれだったが、せめて精神的な疲労は軽減出来ただろうことを。

それはそれとして、一日を終えた俺と達也はそろって家の地下にある達也の自室というか、研究室であれやこれやと話していた。

「それで、収束魔法のプログラムはどうだ？」

「8割完成している。だが、これは危険な魔法だ、少し使用するだけならごまかせるだろ

うが、何かしらのカモフラージュは必要になるだろう」

「まあな、よそからサイオン引つ張つてきて使用するとか、渡るところにわたると半端ないかな」

「ああ、幸い使用するのに考えたくもないほどの処理能力と速度が必要になるからほとんどお前専用、いや、お前にしか使えない魔法になるだろうがな」

「そんなポンポン使えるもんでもないが、緊急時には切り札になる」

そう、俺と達也が作成していた魔法の進捗についてだ。

収束魔法は周辺の、他人の使用した魔法の残存サイオンを使用する魔法だ。つまり、場に魔法式が乱立すればするほどその効果を上昇させる訳だが、当然話は簡単にはいかない。

不用意に干渉しようとしても単なる相克をおこすだけで何も出来ない。そこを使用された魔法を理解し、それと同様の魔法式を使用し、増幅し、改変して利用する。達也のなんちゃつてキャストジャミングと逆の理論だ。

これによつて俺はクソめんどくさい手順を踏まないと使用できないが、最小のサイオン消費でも状況によつては工程数の多い魔法を使用できるようになるわけだ。理論上は。たぶん…メイビー、できたらいいなあ…。

あれこれと頑張っているので姉さんも多少制御が出来るようになって、俺の負担が

減ってるので4月の頃よりは魔法を使用する選択肢を増やす事が出来ているが、それでも一般の魔法師の半分程度と言ったところだ。これではまだまだ心もとない。

それを補うためにもこの術式は実用化にこぎつきたいと思っている。

「それで、そっちの作業の方はどうなんだ？」

「ああ、俺の素体は完成している。姉さんの方もほぼ完成しているが、後は強度を詰めていくところだ。例のAIも現在学習中だな」

「わかった。とりあえず暫定のプログラムだが入れてテストしながら改善していこう。シズのも強度の確認をするのにどちらにしろ使用するしかないだろう」

「だな、一応もう少してガンダリウム合金が完成しそうだから、最終的には俺と姉さんの武装はそれで作る予定だ」

「・・・なに？」

あれ？さつきまで順調だったのに、達也が突然だんまりしたんですけど？

ちよつと？お前ただでさえ表情無くて怖いんだからそんな顔して睨まないでくれな
い？ちびるよ？

「あ、あれ？説明して無かったか？」

「ああ・・・」

何隠してんだよファツキンって顔をしている達也に俺は説明をした。

なんだかんだで月面のチタニウムから作る程度にしか知らなかったもので、そこから俺なりにいろいろ加工して、姉さんの魔法力にものを言わせた高火力炉で精製した結果、これまでにない強度を誇り、それでいて軽量とあらゆる耐性に優れた金属が出来たので、ガンダリウム合金と命名した。

ここまでを一気に説明した俺に達也は「つため息を吐く。

「はあ、それについてはしばらくは他言無用だな。だが、本当に精製が安定して出来るようになればシズとお前の刀やシズのCADについては問題が解決するな」

そうなの。だから怒らないでね？

そうしてこの日はそれぞれの進捗を確認した後、暫定で俺が組み上げたCADを確認する。

姉さん用の両手剣型CADグランドリオンと、俺のワイヤー内臓式刀、七天七刀……じゃなくて、えーと、ちゅんちゅんm……これもダメだ。

うーん、雷切……うん、雷切にしよう。先に決めとかないと姉さんに可愛い名前を付けられてしまうからな。

姉さんのグランドリオンはかっていたとされるカエルの勇者が使った聖剣の名前を使っている。

それぞれ2つの小剣に分割することが出来て、この状態では魔法力が制限される。つ

まり普段使用する場合にはこの状態にすることで、姉さんの魔法力の暴走による二次被害を無くせるのだ。

そして、4月の事件の時のように強敵が現れた際には融合して両手剣状態になり、真の性能を発揮するという寸法だ。まさに男のロマンと言える。姉さん美少女女だけど。

この出力制限や、リミッターの役割をレイジングハートやバルディッシュから参考にした専用AI、グランとリオンにゆだねるといふ訳だ。まあ、本来グランとリオンは風の精霊らしく、いたずら好きな性格だったらしいが、そこまでの再現は出来ていない。

しばらくは実際に姉さんと共に生活し、いくらか実戦訓練を行いながらAIの学習をしていく予定だ。

俺の刀はCADの側面もあるが、ワイヤーを内蔵している以外はちよつとした刻印を仕掛ける程度でひたすらよく切れ、頑丈な刀にするつもりだ。まだガンダリウム合金じゃなくて既存の金属で作成しているから姉さんも俺のも設計ほどの強度は無いが、ある程度精製出来たらガンダリウム合金で作って直す予定だ。

そして専用CADはこれまで通り、ブレスレット型の汎用CADに音声入力式のネットワーク型CADを併用して使っていくつもりだ。

どちらも俺の自作で、腕輪型は黒をベースに金のラインが少し入った程度のシンプルなデザインで、達也のシルバーホーンからもじって姉さんがネーミングした『金の角』と

名付けられた。なるべく名称は開示しないようにしようと思った。

ネットワークス型は最初妹様に作っていたので、雪の結晶の形をしたフレイムに、蒼の宝石を埋め込んだシンブルなデザインにしてある。なぜか妹様とお揃いになってしまったが、こちらのネーミングは妹様自らが『雪華』と名付けた。俺に似合わなすぎて泣ける。

緊急発動用に特化型並みの速度を発動できるようにするのに大分苦労したが、そのおかげでなかなかのものが仕上がったと満足している。

満足してるよね？もうちょっとなんとかならない？って顔してないよね？

まだ完成度はどれも70〜80%というところで、想定している性能は発揮できないが、それでもこれまでよりもはるかにマシンになったので、この調子でテスト使用していくつもりだ。

こうして俺は今日話した九校戦の事などすっかり忘れて、というか、意識を向けないようにして研究に没頭していくのであった。

九校戦編・・・前半。つまり学校の話

ハチ、九校戦に出たくないでござる

最近、途轍もなくメンドクサイ事が起きている。

勘弁して欲しい、何度でも言うが俺にはやることがあるんだ、だから・・・

「はあ・・・柱の陰からこつちをチラチラ見るのやめてもらえませんかねえ？」

俺がそう言うと、反応を返したのが嬉しかったのかニコニコしながら柱の陰から生徒会長様が姿を現した。

まあ、知ってたんだけどね？かれこれ30分くらい俺をストーキングしてたし。そもそも今日だけじゃないし。

一度は全力で逃げて見たけど、この生徒会長様はなんのためらいもなく忍法のぞき見の術を使ってすぐに俺を発見するのだ。

それからはもう逃げるだけ無駄なので、しばらく無視していた。だが、流石に生徒会長を無視し続ける訳にもいかなないので仕方なく、ほんとうに仕方なく声を掛けたのだ。

決してチラチラしていたのが可愛くて放置していたわけでは無い、ついでに言うとう無視すぎて泣きそうになってた事も関係ない。まあ俺が声を掛けた瞬間笑顔に早変わ

りしてたけどき……。可愛いからってそういうのは卑怯だと思います……。

「あはは、みつかつちやつたか〜♪」

「それで？要件はなんですか？」

みつかつちやつたか〜♪じゃねえよ、可愛いわ！

じゃなくて、さんざつぱらチラ見したり、ストーキングしといて何言ってるんだって話。

ぶつちやつて要件はわかっているけど、一応聞いてみる。このやり取りももう何度目だか……。

こんな小柄で出るところは出てるただの美少女にしか見えない人でも先輩だし、生徒会長だし、なにより七草だし。これ以上無視していろいろと問題になるのは避けたいのだ。

だから、十分に可愛らしいからモジモジしながら頬を染めるのはやめてもらえませんかねえ？

「あ、あのね……。？」

「なんです？」

コイツ、絶対わかってやってんだろ……。こんな人目のある学校の廊下でモジモジだすとか絶対正気じゃねえよ……。絶対この後いろいろ噂されるやつやん……。

「お願いがあるんだけど……。？」

「……………」

これ、絶対断れないやつー!!
いい加減めんどくさくて適当なタイミングで声かけたけど、まったく人気がない訳でもない。

つまり、ここでモジモジ可愛らしくしてる生徒会長様のお断りを断れば、今後俺の学校生活は生徒会長様のファンたちから狙われ続ける事になる。それは、大変メンドクサイ。

だから、そんなあれこれの状況を加味した完璧な作戦と言えるこの生徒会長様の行動に俺の敗北は必至と言えるかもしれない。

「九校戦、出てもらえないかしら?」

だから、俺はこの希望が通ると確信しているだろう生徒会長様にこうなのだ。

「すみません、実家の稼業がありますので」

それだけ言っただけでサッサと逃げる。

生徒会長様のファンと思いき人達からいろいろ言われるのが背中から聞こえるが、気にしないキニシナイ。

なんなら生徒会長様の舌打ちも聞こえたが、キニシナイ。

ふっ……甘いな。

妹様と一緒に登校したり、さらには北山、天使光井と一緒に昼飯食ったりして俺が、今更その程度の視線でどうこうなるとでも思っているのであらうか？

すでに普段の体育の授業じゃ俺は一人でハブられてるし、実技の授業でも同上だ。なんなら事故に見せかけてボールが飛んで来たり、魔法が飛んで来たりも日常茶飯事。

いまさらその対象が学年全体に拡散して男子だけでなく女子からも恨まれる事になろうと、大した問題じゃない。いや、すげえメンドクサイけど。正直これまでとは比べ物にならない程デンジャァーだけど……。

でもしょうがないのだ……会社からクソ納期で仕事振られてるし、本家のゴスロリ様からもなぜか仕事振られるし、なんならグレイがなぜか滞在し続けていて、ロードのクソポンコツ魔術師からも厄介事を押し付けられてるんだぞ？どう考えても九校戦とかいうお祭りに参加している時間なんて無いのだ。

無いのだ……と言ったらね……。

「そつか……そうだよね……ごめんね？仕事なら仕方ないよね……え、えへへ」
夜、妹様から生徒会長様からの要請をなぜ断ったのか聞かれたのでそう答えたら、そ

れを聞いた姉さんが寂しそうにそういつて来たもんだから事態は急変した。

妹様が姉さんに抱き付くと、姉さんは妹様を抱きしめ返してからその頭を撫で始める。

「九校戦つて、お祭りでしょ？ハチと深雪と達也と一緒に参加したかつたあつて思つてただけど・・・仕方ないよね・・・」

そう言つて寂しそうに微笑みながら妹様の頭を撫でる姉さん、妹様からの責めるような視線がイタイつす・・・。

こ、心がイタイ!!!

俺だつて、俺だつて姉さんとお祭り行きてえよ!!決まつてんだろ!!

そんな責めるような視線向けられたつて無理なもんは無理なんだよ!!!現状で納期どれだけ押ししてると思つてる!?

ゴスロリ様と通信するたんびにすげえ良い笑顔のゴスロリ様の背景に“夜”が顕現してんだぞ!?!なんであのゴスロリ様は俺に仕事振つてくんのか俺が知りたいんだけど!?!俺よりも優秀な奴なんていくらでもいるだろうが!!

会社の納期も押しまくりなんだぞ!?!

それに、それらが奇跡的にどうにかなつたとして、最大の問題があるだろうがよ・・・。そもそも姉さんが九校戦に参加するのは非常に難しいという事だ。

確かに魔法力だけで言えば妹様をも凌駕する姉さんが参加すれば、優勝するのは難しくないだろう。そう、魔法力が制御出来れば・・・だが。

最近では何とかそれなりに制御できるようになって来た姉さんだが、ちよつと調子に乗ると、すぐに暴発させてしまう。

そんな姉さんが九校戦に参加してみろ、会場が吹き飛ぶのが目に見えるだろうか？

それすらも万が一なんとか出来たとして、何よりも二科生の姉さんと達也が参加するのは非常に問題が多い。そんな事通るわけが無いのだ。もちろんそんな事この場で言える訳ないけれども。

それからいろいろと話してなんとかその日は乗り越えたが、このままじゃマズイ。

「という訳なんだがたつえもん」

「そうか、がんばれ」

という訳で困ったときのたつえもん聞いてみたけど案の定、なげやりでやんの。

おまえわかってんの？これ他人事じゃないかね？

わかってないでしょ？絶対妹様お前を出させようとするよ？なんなら俺が巻き込むよ？

飛行デバイスも大詰めのこのタイミングでぶっこむよ？わかってんの？

そんな意思を込めて睨んでみるけど、コイツ・・・妹様に要請されたら断らないから

意味無いんだったわ。

くそう・・・。

そんなこんなでこの日は終わった。

んで、なんやかんやとごまかしながら過ごしていたら定期テストのときは来た。

毎日のように頭から煙を出しながら必死に勉強する姉さんを兄妹全員でフォローしてなんとか赤点を取らないように努力してきた。

毎日少しづつゲツソリしていく姉さんの姿に俺も妹様も何度止めようとしたか覚えていないが、それでも必死に赤点を回避しようとしている姉さんに全俺が泣いている。ぜひとも赤点は回避して欲しいものだ。

そうしてテストを迎える当日。

九校戦とか絶対に参加したくないから今回もテストは実技も筆記も適当にやろうと心に決めながら学校に向かうと、そこにはなぜか天使光井と天使柴田がいた。

今日は素敵な一日になるかもしれないと思いつながら声を掛ける。

「おはよう、ほのか、雫、美月」

「おっす」

俺と妹様が声を掛けると姉さん、達也も続いて朝の挨拶をする。

天使達は朝から天上の笑みを浮かべながら俺達に伝えてくれる。

「おはようございます」

「おはよ」

「おはようございます。今日はテストですね」

天使光井、北山に続いて天使柴田が挨拶と一緒に軽快に会話を回し始める、さすが天使、気遣いが素晴らしいね。

「が、がんばるよ・・・!!」

すると、今日に向けて必死に勉強してきた姉さんが緊張の表情をしながら決意をあらわにする。

姉さんなら大丈夫さ！的な感じで俺と妹様で懸命に応援する。姉さんの緊張が天使達の微笑みと俺達の応援で少し和らいだようだ。

俺がそうして安心していると、いつの間にか天使柴田がこちらを見ていた。・・・好き。・・・おっと、心の声が漏れてしまった。

「今回のテストはどうですか？」

ニコニコしながら俺に聞いてくる天使の微笑み。

だが、まってほしい。・・・あれ？俺、こんな純粋な笑顔向けて

くる相手に九校戦でたくないから手を抜きまくる予定つす。つていうの？無理くね？

「ん、まあ、そこそこ・・・かな？」

「そうなんですか！さすがハチさんですね」

玉虫色な答えをすると、まったく疑っていないのか純度100%の笑顔を向けて感心している天使様。あれ？俺浄化されそう・・・光がさ・・・こう、ぶわあーっつて・・・。

「あら？九校戦でたくないからテストは適当にやるつて言つてなかつたかしら？」

「ええ?!?!」

朝から俺が浄化されそうになっていると、妹様がそんな爆弾を放り投げて来た。

おまつ！可愛いからつてやつて良い事と悪いことがあんだろうがよお！

すると、天使光井が可愛らしく驚いて（可愛い）、先ほどまで微笑んでいた天使柴田がちよつと怒つてます、つて感じで頬を膨らませていた（可愛い）。

そんな可愛さに危うくほっこりしそうになる表情筋を必死にコントロールしている
と、俺に距離を詰めて来た天使達がすぐ目の前まで来ていた。

「ハチさん、ちゃんとやらないとダメですよ！」

「そうです、ハチさん。はじめにやらないとメッ！ですよ？」

と2人の天使にそんな事を言われたらまじめにやるしかない訳でして、仕方が無いので俺は今回のテストをマジメに受ける事にした。

べ、別に、決している点とって天使達に褒められたいからとかじゃないんだからね？
単に妹様に凍らされるのが嫌なだけなんだからねっ！そんなツンデレを心の中でして
から天使柴田と姉さん、達也と別れて俺と妹様、天使光井に北山は本日のテストを受け
るべくA組に向かうのであった。

マジでまじめにやらないとダメかな？ダメ？デスヨネー・・・はあ。

ハチ、九校戦の練習に付き合う・・・？

その日、第一高校全体に衝撃が走った。

先日の定期試験の結果が出たのだ。

そして、試験優秀者が学内ネットで発表されたその内容が衝撃的だった。

総合成績 優秀者

1位 1—A 司波深雪 1567点

2位 1—A ハチ 1443点

3位 1—A 光井ほのか 1262点

総合成績は順当な結果になった。だが、この先に問題があったのだ。

いや、俺だけ名前に突っ込みどころがあるが、そこは気にしてはいけない。

実技の結果は・・・

実技成績

1位 1—A 司波深雪 1135点

2位 1—A ハチ 999点

3位 1—E シズ 900点

と、まさかの名前2文字が2人になったのだ・・・では無くて、トップスリーに二科生がランクインしたのだ。

さらに学科、つまり理論の点数においても・・・

1位 1-E 司波達也 490点

2位 1-A ハチ 444点

3位 1-A 司波深雪 420点

とまさかのトップに二科生がランクインする事となったのだ。

まさかのだいたい兄妹が抑えるという暴挙、その中で総合で天使光井がランクインしているのが光る。光井だけに。

さすがは天使である。妹様や姉さん、達也がある意味いい感じに目立っている中でもひとときわ輝いて見える。後でケーキでも進呈しておこう。え？違う？

まあ、ネタばらしをすると。

まず当日に天使のエールをもらった俺は、やる気マックスオリックスになった。

なので実技の試験を入試の時と同様に第一の封印を解除して臨んだのだ。入試時は試作だったが、試験時には8割完成していた封印術式の為、4月の時よりも使える演算領域やサイオンが増えた事により妹様に匹敵する結果となったのだ。

そして、問題の姉さんだが、入学してからこれまで、いくつもの学校のCADを破壊

し続けていた。それにより、ついに壊れない限界値を把握したのである。もちろん試験に向けて姉さんが努力した部分も大きいし、試験前に姉さん用の封印術式がある程度完成したことにより、割と妹様くらいまで干渉力を抑え込む事に成功したために、まさかの実技3位となったのである。ちなみに理論は赤点ギリギリだった。

そして、達也は・・・説明いらないうね？ トーラスシルバーだよ？ 誰にも言っていないけど。アイツ隠す気あんの？ 調べてくれない普通に理論やつてるからいつかバレるんじゃないかと心配なんすけど？

妹様？ こっちも説明いる？ いや、理論で俺に抜かれてめっちゃ怖い目で見られたけどさ・・・なんでお兄様の下にハチがいるのかしらって言われたってさ・・・。変に言い訳するとめっちゃ凍らされるからなんも言わなかったけども・・・最近の妹様はちよつとバイオレンス過ぎませんかねえ？

別にお前の愛するお兄様を取ったりしないよ？ って言ってやろうかなあ？ どのような結果が見えるから言わんけど・・・照れ隠しで凍らされたくは無いのだ。

そう考えるとあれだ、チート集団に普通に噛みこんできた天使はスバラシイという事だな。うん。

やはりここはケーキを進呈しよう（2回目）

という訳で、俺と、姉さん、達也は生徒指導室に呼ばれて3人そろって疑われている

訳です。びえん。

達也は実技の試験を手を抜いてたんじやないのかと疑われ。

姉さんもずるしたんじやないかと疑われ

俺は普段からまじめにやりなさいと怒られた。

俺だけ確定な件に関して・・・びえん。

いつも魔法実技の授業を適当にノルマだけこなしてるのそんなに根に持つてたんすね、先生。名前知らないけど、ゴメンよ先生。今回はたまたま天使のエールがあつたらまじめにやったけど、次からはちゃんと手を抜くよ先生。

姉さんは干渉力強いのが知つてたでしょ？ いっぱい練習したんすよ！ いっぱい機材も壊したけど。

そう言つて一生懸命説得した。先生もなつとくしてた。九校戦に出たいって言つた姉さんい困つた顔してたけど。

達也？ 説教に対してがんばりまゝすつて適当に伝えてる新人社員みたいな対応してた。まったく感情籠つてないもんね。転校まで進められるつてどんだけやねん。

ごめんね？ 迷惑かけて、先生の頭頂部が後退していかないように、俺、いのつてるよ。頭張つてね？

そんな感じで俺が先生の頭頂部にお祈りしている間に先生のお話は終わったので俺

達兄妹は生徒指導室を退出した。心なしか先生が疲れた顔してたような気がしたけど気のせい気のせい。

そう思つて廊下を俺と姉さん達也で歩きだすと、すぐ先に千葉や西城、天使柴田に天使光井、北山がいた。

どうしたん？つて顔で見ると、なんと、生徒指導室に呼ばれた俺達を心配して来てくれたようだ。なんていい奴らなんだろうか。

心配そうな天使光井と天使柴田の安堵した表情に全俺が嬉しくて泣いた。

とりあえず、感謝の気持ちを込めて俺と達也でカフェテリアで全員に飲み物を奢る事にした。天使達と北山には俺から追加でケーキも献上した。ついでに千葉が文句言ってきたのでしぶしぶくれてやった。

すぐくなくとくいつてない顔で「ありがと・・・」と言つた千葉にこいつやつぱりツンデレか・・・と思つたが、言わないでおいた。つま先で蹴られたけど。

それからなんだかんだで九校戦の話になつて、北山が九校戦マニアだという事が全員にも知れ渡り、今年は参加する側だねつて天使柴田が言つて、北山が嬉しそうにならずいて終わった。

実技試験優秀者は九校戦に参加できるというくだりで姉さんの瞳が輝いていたが、どうしよう・・・。これどうなるのん？誰か教えて!?

そんでその夜。

ハゲの寺にて兄妹全員集合して妹様の九校戦の訓練を行っていた。

ハゲが忍術で夜空に光をとまずと、それを確認した俺と妹様が飛び上がる。俺と妹様が。

発動速度は圧倒的に俺が先手を取るが、その後の飛翔速度は妹様に軍配が上がる。が、それは純粹な魔法のみであった場合である。

「ほいつ」

「くっ！」

当然、身体能力も圧倒的に俺が上なので、脚力でもって上昇速度を上乗せして飛び上がればあら不思議。

超速で飛びあげる閃光のハチウエイの爆誕である。

ぶつちやけ完成まじかの飛行術式を使われても対抗できる自身があるわ。

飛び上がった俺はそのまま空中に空気を圧縮した足場を複数作成してそこを足場に飛び回る。

「忍法、ピンボールの術！」

「あ・・・もうっ！」

調子に乗ってピンボールを使って片っ端から光の塊を叩きまわっていたら、妹様が怒ったでゴザル。

反省した俺はそのまま地面に着陸すると、そのままの勢いで流れるように土下座をする。一瞬でも迷わない、これが俺の男の生きざまと言える。泣きたい。

「ごめんなさい、調子に乗りました」

「ハチ、流石に一年の、いや、高校の大会でそこまでの動きをする相手は想定する必要はないぞ」

まったくその通りで。反省してます。

ちよつとぐぬつてる妹様が可愛くてやりすぎてしまった感が否めないね。普段の仕返しのな面も否定できない。でもグヌつてる妹様が可愛らしいのが一番の理由。

「悔しいけれど、今の私ではお姉さまにもハチにも勝てそうにないわね・・・」

「そんなことないよ、だんだん早くなってきてるし、もう少しだよ」

「お姉さま・・・」

妹様はそういつて姉さんに抱き付いて撫でられているが、そろそろ聞いていいかな？

「なあ、そもそもなんで男の俺がミラージの練習してんの？」

そこに尽きるよね。いや、身体能力にちよつと魔法乗っけるだけでそこその成績残せるから魔法力に余裕の無い俺に相性の良い種目ではあるんだけどさ……。

姉さんも同様で、唯一周辺に被害を出さなそうな種目で、奇跡的に九校戦に参加できる可能性が浮上している昨今においては姉さんが妹様の練習に付き合うのは理にかなっているけど、俺は違うでしょ、違うよね？なんかヒラヒラしたの着せられて参加とかやだよ？つかキモイでしょ。

「深雪の経験を積むのに対戦相手が必要だったからだ」

そうきっぱりと言う達也。え？いる？妹様の魔法力なら一年相手なら練習いらないでしょ？そう顔に出ていたのか、達也の後を妹様が捕捉した。

「今はそうだけれど、今後はこれまでように魔法力だけで押し切れる相手ばかりとはいかないでしょう？私もハチやお兄様のように手札を増やしたいのよ」

「なるほど……」

理にかなっている……。確かに。

そう頷いていると、妹様がそれに……と続ける、え？まだあんの？

「あなた、会長からの九校戦の参加要請断っているみたいじゃない？私に相談されたわよ」

え？そんなんコイツに相談してたの？あの御中は……妹様に命令されたら断り切れ

ないじゃんよ・・・。

「まあな・・・本家の仕事やら会社の仕事やらロードからの仕事やら俺と姉さんのCAD作成とやる事があんだよ・・・それに正直今の制限が掛かった状態じゃ予選突破したら魔法力が尽きるだろうから断ってんだよ」

「ああ、そういう事なのね・・・」

納得はしてないけど、理解はしたって顔の妹様。やめてよね、マジで。ガンプラも作りたいし、絶対に参加したくないからね？

お前その顔絶対俺を参加させるつもりだろ。しつてんだぞ、姉さんと達也も巻き込もうとしてんの、だって、姉さんの目がめっちゃキラキラしてるもん。

「私も九校戦出たいんだ」

「はい！お姉さま、一緒に参加しましょう！」

そう言って手を握り合う妹様と姉さん。俺と達也はもうなんとなく未来が見えてるけれど、なんとか回避できないもんかなあ・・・って思ってたその日の訓練は終わった。

え？合法ロリはって？いたよ？なんか達也が黒い笑顔でギブアンドテイクだって握手して終わった。

それにしても合法爆乳ロリの教師がライダースーツっていったいどこを目指してるんだらうか？って思ったのは俺だけなのだらうか？

ハチ、外堀を埋められ始める

「はあ……だつる……」

昨日は微妙な時間に寝たので眠いぜ……。

結局ロリ巨乳先生との会合の後はもう一度練習つて感じじやなくなったので帰宅した。

家に帰ってから寝るまでの間に試作術式用のデバイスを作ったり、ガンダリウム合金を精製したり過ごしていたら結構な時間になってしまった。

その為、現在の俺は眠気を隠す気もないくらいおもしろくそ欠伸していたりする。

授業中ではあるが、誰も俺の事等気にしておらず、ボールに夢中になっていた。

「うおー……!!」

とうるさく叫びながらモブ崎が強引なドリブル突破をしているのを見て、うざ……と
か思っている現在である。

レッグボール……フットボールのような超次元サッカーを体育の授業で行っていて、
いまもモブ崎くんが気合十分にドリブルしている。

女子はハイポストバスケだかなんだかをやっているらしい。

普段のA組男子諸君ならこういう時には素敵なチームプレイを發揮して俺をハブにしてくれるのだが、今日はなぜかキーパーをさせられている。

いつも深雪や天使光井、北山と一緒に俺に嫉妬と言う名の殺気を向けている諸君が、こうして俺もチームプレイに参加させてくれるなんて感謝の気持ちで涙が出るね。

今もやる気の無いデイフェンス陣を気合十分に叫びながら突貫してくるモブ崎を見ながらそう思う。

「死ねえー！！！！」

「それシュート放つときに言うのおかしいだろ・・・」

十分な助走と勢いと、嫉妬の気持ちと殺気とかいろいろんな感情を込めただろうモブ崎君のドライブシュートを俺は無駄にボールを使つて三角飛びをしながらキャッチする。まだまだだね・・・。

「ちくしょー！！！！」

モブ崎が心底悔しそうな感じで両手、両膝をつく。

魔法を使わずに身体能力のみで俺の守る絶対守護領域を侵略しようなど片腹いたいわ。

俺は適当にやる気なさそうな感じのオフENS陣にボールを放り投げてまたもや適当な体勢でゴールを守つてる風を演出する。

やる気がないとはいえ、モブごときにゴールされるのは俺のプライドが許さんので、とりあえずはそれなりにまじめにやるのだ。

まあでも、あれだ……。

「ふぁ……ねむ……」

こんなポカポカ陽気の日は昼寝がしたいものである。

「くそっ!!バカにしゃがって!!!」

おっと、聞こえてたらしい、申し訳ないね。

それから試合時間が終了するまで俺の守るゴールが揺らされることは無かった。

それから少したち、試合が終わった後の残り時間は他の試合を見つつの休憩時間である。

「ふぁぁ……いい天気だなぁ……」

A組にも、合同で体育をしているB組にも会話するようなクラスメイトのいない俺は、試合が真つ先に終わったのを良い事に木陰で寝そべって休憩という名の日向ぼっことしゃれこんでいる。まさに口ハス。

思わず瞼を閉じて昼寝でもするかな・・・とうつらうつらしていると、頭上に気配を感じた。

「やっほー」

「まだ授業中ですよ？」

敵意を感じなかったのですぐそばに、つてか声を掛ける寸前まで気づかなかったが、北山と天使光井が来ていたようだ。

目を開けると眠っていた俺の頭上で前屈みになりながら北山と天使光井がのぞき込んでいた。

「ん・・・おう・・・おう？」

目を開けたら目の前に天使がいた件について。

前かがみになっている為、天使の双丘がやたら強調されて俺の目の前でプルンとしている。

いろんな意味でビツクリしてそれ以上声に出せない俺を見て天使が微笑んでいる。

「ふふ、すみません。ビツクリさせちゃいましたか？」

微笑む天使光井に見惚れつつも、それを隠すようにそっぽを向いていや、大丈夫だと答えて体を起こした。

ちよつとばかり顔が熱をもっている気がするが、陽気のせいだと言い訳をしておく。

すると、北山と天使光井が俺の両となりにも腰を下ろした。

すぐ近くから感じる天使の癒しオーラにここはもしかして天国なんでは？という思いがこみ上げてくる。ほら、とても良い香りがするし、なんだかポカポカしてきて……なんだか眠くなつて来たよ……パトラッシュ……。

そうしてまたもや意識が天に召されようとしていると、北山がすごいね、と話しかけてきた。

ん？なにが？つて顔をしていると。

「あんなにシユート打たれたのに1点も取られなかったから、すごいね」

「そうですよね！も、もり……崎君？があんなにいっぱい打ってるのにすごいですね！」
どうやらさっきの試合を見ていたらしい。よせやい、照れるじゃねえか。

つて言うか、目の前で目をキラキラさせながら両手でぐつとガッツポーズして胸を寄せるのやめて、視線が吸い寄せられるから。もちろん言えないけど。

「サンキュな。まあ、いろいろと訓練してるからあれくらいはな」

それよりも、あんなだけポコスカ撃たれてるデیفエンダー陣もすごいと思うの。いくら俺が憎いからつてお前らの大好きな妹様も見てる中であんなだけ手を抜いてるとかね、妹様の好感度はダダ下がりよ？もともとあつたかどうかどうかも怪しいけど。

「4月の時の動きも訓練しているから？」

「そういえば、私と零抱えて走ったり、なんか見えないくらい早く動くおじさんとも戦ってましたもんね」

そう言つて部活勧誘で襲われてたところを逃げた時や暗殺拳の使い手と戦つた時の事を思い出したのか、天使は「あの時は助けてくれてありがとうございます」と頭を下げて来た。

「そうやって感謝されるのも何度目だ・・・？」

天使に感謝されて嬉しいのだが、もう何度も感謝してもらつてゐる。まったく天使は可愛らしく微笑んでいてくれるだけでそれで充分だというのに。律儀なもんだ。

むしろいつも俺を癒してくれてこちらが感謝したいくらいだというのに。

「それで、相談があるんですけど・・・」

「いいよ」

それから少しして天使がモジモジしながら俺に相談がある。と言われたのでとりあえず即答しておいた。

「まだ内容言つてないよ？」

北山が突つ込むのでそう言えばそうだったな、と思つて内容を聞いてみる事にした。

「九校戦の練習に付き合つて欲しいの」

「まだ正式に決まつてないんですけど、私がミラージパットとバトルボード、零がアイス

ピラーズブレイクとスピードシューティングになるだろうって言われてて・・・」

「2人とも2種目か、すげえな」

女子5種目の内、参加が各3人まで。つまり参加する席は15だ。

その中で新人戦に参加する1年10人の内5人が2種目に参加し、残り5人が1種目のみの参加となる。

妹様がおそらくミラージュとアイスピラーに参加だろうからそこから考えればこの2人がどれだけ優秀かわかるってもんだ、まあ、天使だし、当然か。

え？俺？未だに生徒会長様から打診されてるの拒否ってますがなにか？

そう思いつつ、素直に2人に関心すると、天使が頬を染めて恥ずかしがってる。結婚しよ？

「そ、そんな・・・私なんてまだまだで・・・どっちも体を動かす競技なんですけど、私自身無くて・・・」

「私も、今年の新人戦は3校に気になる選手が出るし、なにより深雪に勝ちたいから」

だから練習に付き合ってください。そう真剣な表情でお願いしてくる2人に俺は当然のように迷うことなくうなずくのだった。

そ・れ・か・ら。

放課後。俺は生徒会長様に呼び出されていた。

ただの美少女からの呼び出しならば嘘告白か、壺を買わされるだけだろうから無視をするのだが。

俺を呼び出したのはスーパー美少女にしてCV、花澤香〇にして十支族の七草家の長女にして小悪魔系な生徒会長様である。

そう考えると属性てんこ盛りだが、そこじゃない。

どうせいつものように九校戦の勧誘だろうが、無視するわけにもいかないので、仕方なく向かっていた。

生徒会室に着いた俺はノックをして入室する。一応俺も庶務枠で生徒会だが、女性ばかりの生徒会には入りづらい。え？KY先輩はつて？そういえばいたなあ・・・ほとんど見ないから忘れてたよ。

「失礼します」

一応しつかりと一声かけて入室する。

中に入ると生徒会長様とクールビューティー先輩がいるではないか。

「そこに座って頂戴」

敵かな雰囲気をだそうとしているのか生徒会長様が俺に司令官のポーズをしながら視線でソファを見やる。

雰囲気だそうとしてるんだろけれど、この人がやるとただ可愛いだけなんだが、と思ったが言わないで置く。本人はいたってマジメっぽいからな。

「ういっす」

と一声かけてソファに座るとクールビューティー先輩が紅茶を出してくれたのでまともやういっすと答える。語彙が死んでるぜ。

「さて、ハチ君。何か私に言うことがあるんじゃないですか？」

さて、今日は何を怒られるのだろうか？と思っていたら生徒会長様が聞いて来たのはそんな事だった。

え？言うこと……？えーと……。

「……今日も可愛いよ？」

「ありがとう。でもそうではないですよね？」

ありがとうと言いながらニコリともしない件について。

ちよつとゾクゾクしたのは内緒である。

っていうかなに？何しでかしたのん？俺は？

俺が本当に何を言わなければいけないのか解らないと察したクールビューティー先輩がひとつため息をついて答えてくれた。

「まずはテストの件です」

「テスト・・・？まずは・・・？」

どういう事？

そうすると生徒会長様の限界が来たのかプンスコしながら語りだした。

「あのねえ！4月のはんぞー君との模擬戦の時に魔法あんまり使えないって言ってたじゃない！なのになんのよ！これは!!」

そう言つてプンスコした生徒会長様が見せてきたのは前回のテストの実技の結果である。

「あ・・・」

そこには試験であんまり魔法を使えないなら取れないであろう点数がありましたて・・・。

「それに、理論も達也君に迫る内容だし！」

「あ・・・」

これまではあまり魔法を使えないからせめて1種目だけでも出て欲しいという感じだったのが、実は俺がバンバン使えるのが判明して今までの気遣い返してって事らしい。

「それに、私があんなに頼んでも断つたのに、光井さんと北山さんの練習にはひとつ返事で快諾してるし・・・」

そう言つてジト目を向けてくる生徒会長様、ゾクゾクするね。

それからあーだこーだと文句言つてくる生徒会長様をなだめてごまかしてその日は何とか乗り切る事に成功したが、これはもう無理ではなからうかと諦めが入り始めてきってしまう。

はあ、明日から憂鬱だなあ・・・。

シズ 九校戦を運動会と同列に考える

「九校戦、出たいなあ……」

今日は午前の授業で解らないところがあつたので生徒会室で達也に教えてもらいながらお昼を食べていた。

今現在生徒会室には生徒会長の真由美さんと深雪、あーちゃんさんとりんちゃんさん、それに風紀委員長の摩利さんに深雪と達也、それに私で、私は達也と深雪に挟まれながら早々にお昼を食べて達也に勉強を教わっている。ちなみにハチは食堂で食べるみたい。

その中で真由美さんが九校戦のメンバーが揃わない、ハチ君が参加してくれないと言っていたので、思わず以前から思っていたことが口に出ってしまった。

「え!? えーと、そのおー……」

そうすると、それを聞いていたあーちゃんさんが申し訳なさそうな感じでおどおどしている。

うーん、やっぱり二科生だと参加ダメなのかなあ?

そう思っていると、深雪が私の手を握って嬉しそうに微笑んだ。

「お姉様！是非出ましょう!!」

「うん、出たいんだけど・・・」

そうしてチラッと真由美さんを見ると、真由美さんはうぐん・・・と悩んでいた。

「私としては出て欲しいんだけど・・・シズさん、魔法制御できる?」

どうやら真由美さん的には私の参加は歓迎してくれるみたい。でも問題になるのが私が魔法を制御しきれるかどうかのようだ。

確かに私はちよつとだけ、ほんのちよつとだけ魔法の制御が苦手だけれど、それも問題ない。

私は自身満々にフンス!と頷く。

「大丈夫!!」

ビシ!つと、グツ!つとぴーすすると、真由美さんと摩利さんがなにやら疑わしいものを見る目でこちらを見ていた。

「・・・ほんとう?」

「大丈夫です!!」

「以前にもそういつて実習室のCADを破壊したそうだが?」

「うぐつ・・・だ、じょうぶです!」

ほんとうにござるか?って顔をしている真由美さんと摩利さんに私はそれでも大

丈夫だとあびるする。

どうしても出たい。

だって、これは私がむこうにいた時にみんなから聞いた、運動会なんだから！

聞いていた話とは内容とか種目がいろいろ違うけど、聞いた話を総合して考えれば間違いないはず。

ユウキも学校によって名称がちがう事はよくあった、って言ってたし。

だから魔法の学校がいっぱい集まって魔法の技能を競うってことはすなわち運動会だと思う。

運命のいたずらか、もう一度こちらの世界に戻ってこれて、しかも学生として過ごせるのなら、聞いていた青春の代表格である、運動会、文化祭、部活は参加したい。あいくと部活は参加できなかったけど、今度新しい部活を作ろうとハチと深雪に相談してからの、これもしつかりと達成したい。

でもまずは目の前に迫って来ている運動会、じゃなくて九校戦だ。

出たい。すごく出たい。

そんな気持ちを込めて真由美さんを見つめると、真由美さんは頬を染めながらコホンとひとつ咳を放つ。

「そうですね、いまだ選手もハチ君を筆頭に決まりきっていませんからね、まあそれ以上

にエンジニア不足が急務なのですが……」

そう言つてため息をつく真由美さん。

すると達也と深雪が何かを思いついたのか、そういうえば、とつぶやいた。それに反応するようにみんなが視線を向ける。

「エンジニアにはあいつに声を掛けてみてはどうですか?」

「あいつてハチ君? CADの調整も出来るの?」

達也の言葉に真由美さんが希望が見えた! っつて表情で見上げて聞いてくると、今度は深雪がうなずいた。

「はい、お姉様のCADはハチが一から作成して、私のはお兄様に調整してもらつています」

深雪のは達也が、私のはハチがそれぞれ担当しているんだよね。

ハチと達也以外のしーえーでいーだとなぜかすぐに爆発してしまう不思議。

燃やすだけならいらないけど、運動会では必要みたい。

「一からですか!?!」

おどろくあーちゃんさんに深雪が笑顔ではいと頷く。

すぐさまあーちゃんさんの顔がグルン!!とこちらを向いて見せて下さい!!とキラキラした顔して聞かれたので私は放課後にぐらんどりおんを持つてくることを約束した。

私は風紀委員でも生徒会でもないから持ち込んだらだめなんだよ。

そう言うとおーちゃんは約束ですよ！と嬉しそうにしていた。

すると、今度は真由美さんが、ハチ君だけでなく達也君も出来るのね・・・盲点だったわ!!と勢いよく立ち上がった。盲点多くないかなあ？って思ったのは私だけ？

それを聞いた深雪は嬉しそうにキラキラした目で真由美さんを見ているが、達也はずい事になった、という表情をしていた。

「俺はともかく、ハチならシズとほのか、雫、美月に九校戦の参加を依頼させればいいと思いますよ」

「そうですね、ハチ君にはそうしてもらいましょう。深雪さんも達也君に調整してもらいたいですよね？」

真由美さんがニコリと微笑むとそれを理解した深雪が達也に向かって祈るような表情と姿勢になり、お願いをしたことで情勢は決定していた。

それから放課後。

深雪が連れて来てくれた雫さんとほのかさん、それと達也が美月さんを入れて来たので合流した私達はその足で真由美さんの待つ中庭に集まった。

そこはハチが大好きなマツ缶を飲んでいるお気に入りの場所で、そこに真由美さんが突撃して、そこに私達が集合したところだった。

「ハチ君、九校戦に参加してもらえませんか？」

私達を確認した真由美さんがハチにそういつて微笑む。

ハチも私達に視線を向けると、少しバツがわるそうにしながら断ろうとしていた。なので当初の予定通りに行動する事にした。

「すみませんが・・・」「ハチさん、九校戦に参加しましょう!!」

まずは光井さんがハチの言葉にかぶせるように声を上げる。笑顔でハチの手を握るほのかさんに、ハチの頬が染まる。でもまだ諦めてないみたい。

「あー・・・仕事がいそ「九校戦参加しよ?」

あきらめないハチに今度は雫さんもかぶせる。

ジトーつとした目で見つめられて冷や汗をかきはじめるハチ。ぐぬぬってしてる。

「その・・・もうしわけ「ハチ?一緒に参加しよ?」

ついでに私も参戦するよ。

いつもお願いするときのように上目づかいで見つめると、ハチの冷や汗が加速している。あとちよつとだね。

「えーつとその・・・」「ハチさん?ダメですか?」・・・ダメでないです」

そして美月さんが祈るような姿勢で声を掛けるとついにハチは観念したのかうなずいた。

それを見たみんなが嬉しそうしていると、真由美さんが一歩前に出て最終確認をす
る。

「それでは、ハチ君、参加してくれますか?」

「……………はい」

随分と返答までに時間が空いたけれど、ついにハチはうなずいた。

それを聞いた私達は互いに抱き合いながら喜んだ。ハチはちよつと疲れたような表情だったけれど、光井さんになんばりましようね!と声を掛けられて、美月さんに頑張ってください、私もお手伝いはしますから何でも言ってくださいね?と言われて元気になっていた。ふふ。

「それではこの後ハチ君の選手とエンジニアのエントリーと、達也君のエンジニアとしての参加、シズさんの選手としての参加を発表しに行きましょう」

そう言つて真由美さんがポンと手を叩くと、嬉しそうに微笑んでいた。

これで参加選手が全てそろつて、エンジニアも数が揃つたみたいで嬉しいみたい。すると、それを聞いたハチが信じられない事を聞いたつて顔で驚いている。たぶん選手だけならまあいいかなつて思つてたんだろうなあ……。

これで選手として2種目参加でエンジニアもやってもらうつもりって言ったら逃げそうだなあ・・・。

そう思った私は美月さんとはのかさんにこそつと伝えてそれぞれハチを確保してもらう事にした。

「頑張りましょうね！ハチさん!!」

「頑張ってくださいね」

そう言つて微笑みながらほのかさんがハチの右腕を、美月さんが左腕を抱えるように確保すると、ハチはすごい声を上げてびっくりしていた。

それから私と深雪、雫さんで囲むようにしてから先導する真由美さんの後に続いていった。

ハチ、ただ見守るだけでいたかった。

「えーなにこれすつごくめんどくさいんですけど・・・」

「達也さんとシズさんの事なにも知らないのに・・・」

「ひどいですね・・・」

こんばんわ。

天使達に連行されてたどりついた先での問答を見ていた俺と天使光井に天使柴田のつぶやきでした。

なにがおきたかって？

- 1、生徒会長様が俺と達也、姉さんの九校戦参加を発表する
- 2、ウイードが参加とか訳ワカメ！ってブルームさん達大激怒
- 3、そもそも俺参加したくないなあ・・・でも帰れない
- 4、とりあえずやって見せればよくね？
- 5、そんなっ危険です!!↑今ココ。

それで、それを見ていた俺の第一声が上のやつ。

まあさ、教えてないから仕方ないけど、危険です！って言われてた人トラスシルバーの中の人だからね？

ループキャストで魔法のあれこれ10年くらい進ませたって言われてる天才エンジニアだからね？

なんなら今度飛行術式まで公開する予定の達也、いや達也さん・・・達也様だよ？

そんな達也様相手に、ウイードだブルームだってわめいてる九校戦に参加予定であるう先輩方が滑稽で、アホらしく思えるのは俺だけですかね？

となりで悲しんだり、憤りを感じている天使様達の優しさの半分、いや三分の一でもいいからこいつらに分け与えてやりたいわ。伝わらないだろうけど。純情な感情がからまわりしてるわー。

それを見ている妹様は激おこで噴火寸前だったので、それを察した市原先輩が連れ出してくれていた。いやあ、この部屋が冷凍室にならなくて良かったですな。俺も凍らされる前で助かりました！マジで！！

ちなみに騒動の原因、てか、対象である達也と姉さんは2人ともまったく気にして無いか姉さんはニコニコして、達也は無表情で座っている。俺？天使達に未だ確保されてますが何か？具体的に3、のところでちよろつと帰ろうかな・・・って思った瞬間に確保されてそれ以降このままですよ。嬉しいけど、周りからの嫉妬の視線がイタイっ

ス。

そんなこんなで実際に試してみればいいじゃない。という結論に至るまで実に無駄に30分くらいキャンキャン騒いでた先輩達には感謝の言葉を贈ろう。

天使とのふれあいタイム最高でした、と。

「それでは、九校戦で実際に使う車載型調整機で桐原君のCADを競技用のものにコピーし、即時使用可能な状態にして下さい」

「どうやらブランシユの件で一緒に行っていたあんちゃんは桐原先輩と言うらしい。今更の発覚である。」

それにしても、生徒会長様の今の課題だが・・・

「コピーねえ・・・この学校のエンジニア不足は本当に深刻なんだな・・・」
「?どういう事ですか?」

達也への課題を聞いて思わずつぶやいた俺の言葉を拾っていた天使光井が、いまだ俺の手を確保した状態で俺に首をかしげながら聞いて来た。可愛い。

「そうだな・・・たぶん見てればわかるぞ」

「?!わかりました」

はい、可愛い。良くわからないけどわかりました。ってめっちゃ顔に書いてある天使のなんとプリチーな事か。

もうこれだけで今日は満足だわ。明日からってか今日から鬼のようなスケジュールが待ってるけど、このプリチーな顔が見れるなら俺、これからも頑張れるわ（死亡フラグ）

それから達也は一応生徒会長様にそのままコピーはお勧めしませんぜって話したけど、生徒会長様も理解していないみたいで首をかたむけていた。あざといあざとい。

そんなあざと生徒会長をスルーしてしようがねえなあって感じて達也がマニュアル調整を始めると、まあ予想どおり、ほとんどのやつらが気づいていない。

せいぜい中条先輩とおかつば先輩くらいか？他のやつらは全員何やってんだこいつって顔してるよ。これもうだめじゃね？

ちなみに姉さんは俺と天使達の横で達也のタイピングの真似をして手をわきわきさせた。かわいい。

でも絶対に触らないでね？割とシャレにならないから。

そうしてコピーという名の完全マニュアル調整を終えたCADを装着した桐原先輩は、なぜかこのタイピングで高周波ブレードを発動させた。

おい、やかましいわ！それ使うなら事前に一言いえってーの！天使達がビクつとして俺の腕を抱きしめるもんだからすげえ声が出そうになつたじゃねえか。

ありがとー！

俺が脳内でそんな事を思っている間にも話は続いていく。

「感触はどうだ？」

「問題ありませんね、まったく違和感ありません」

どうみても高校生に見えない十文字先輩の質問に桐原先輩が答える。まあ当然だね。と俺が思うのとは別に、周りの自称エンジニア（笑）達はそうは思わなかったように。

曰く、一応の技術はあるけど登校の代表レベルとは言えないとか言い出して、笑いそうになつたわ。

そりゃね、今のやってた内容理解できないメンツのレベルじゃ達也の足元にも及ばないもんねって言いたくなつたわ。いや、すげえ顔がびくびくして天使柴田にめっちゃ心配されたけど。

んで、次の人が仕上がりも時間も平凡だしとか言い出して。おいおい、CADのコピーに一体何を期待してたんだこいつはってまたもや突っ込みそうになつてしまった。隣で姉さんがなるほど……って神妙な顔してうなずいていたけどたぶん理解できなく

てそれっぽい反応してるだけだと思った。

そこから中条先輩がめつちや達也をプッシュして、否定派の人達が出来上がりが平凡じゃ意味なくね？って言うね、もうね。コピーしろって言ったのになんたる事か、意味わからんね。あれか？即時使用できるようにつてところに様々な意味が含まれてたのか？もしそうなら逆にこんなすぐ出来る訳ないだろうが、達也以外には。

なので、いい加減あほらしいつてか笑いをこらえるのが限界になつて来たので、俺は天使達を引き連れて生徒会長様の元に向かつてこそつと聞いてみる事にした。

「あのーすみません」

「どうしたの？ハチ君?」

達也のやった事がよくわかっていたない生徒会長様にこそつと教える事にした。

「今達也のやった事が理解できない人達はエンジニアですよ？そんなんで九校戦大丈夫です？」

俺がそう質問をすると、なぜか部屋が静寂に包まれてしまった。なぜじゃねえか、てへぺろ。

すると、さつきまで達也をデイスリまくつてた先輩たちが今度は俺に矛先を向けてきたようで、キャンキャン騒ぐこと騒ぐこと。

しょうがないので俺は言つてやる事にしたのだ。

「まあ落ち着いてください。副会長が言っていました、魔法師たるもの冷静に、ですよ」俺がそう言ったら生徒会長様のツボに入ったらしく、笑いをこらえてたの以外は、ほとんどの人と副会長もまじって騒ぐこと騒ぐこと。

こりやあもう駄目かもしれんね。俺が悪いんだけど。

まあそれよりも、本題に戻ろう。

「なら、生徒会長、今の達也がやった事が理解できない先輩方に実際に桐原先輩のCADをコピーさせてみて下さい」

「どういう事なの？」

さっさと終わらせるために俺が生徒会長様に提案すると、理解できないのか首をかしげる。今日の生徒会長様はそれ多いね。あざと可愛いけど。

「まあ、やらせてみればわかりますよ。一校のエンジニア不足がどれほど深刻か」

「理由になっていないけれど、わかりました」

それからきんきん喚いてた先輩方2人に桐原先輩とついでに十文字先輩のCADをそれぞれコピーしてもらおう事に。

ドヤ顔してCADをコピーした先輩方は喚くだけあつてすばやく、それこそ達也よりも随分早くコピーを完了させていた。コピーだけ。

では、実際に試して貰った先輩方の感想です。どぞー。

「発動がにぶい」

「使いづらい」

でした。

「そんなバカな!!」

と驚く先輩方。何を驚く理由があるんですかね？

そう思っていると、生徒会長様がどういう事？って顔で見ているので説明する事にした。

「そりゃあ競技用のCADよりハイスペックなCADを使ってるんですから、当然、何もしないでコピーすればそうなりますよね？」

俺がそう言うのと、生徒会長様もなるほど！って顔してから、あれ？という表情をしていた。可愛い。

「当然なの？達也君もコピーしただけよね？」

「当然ですよ？達也はそのスペックの差分をマニュアルで調整したんですよ。」

「ハチ君も出来るの？」

「まあ達也より時間はかかりますが、当然出来ますよ？」

俺と生徒会長様の会話ですべてが決した。おめでとう達也。たぶんぜんぜん喜んで無いだろうけど一応心の中で祝つとくよ。

さて、随分時間かかったけど次は姉さんのターンだ。

「それで、シズさんはどの競技なら大丈夫なのかしら？」

外に移動した九校戦メンバー達は今度は姉さんの参加の可否について協議するようだ。

あざと生徒会長様が俺の方を見てあざとく首を傾げながらあざとく聞いてくるので俺は姉さんに可能な種目を考える。

「そうですね、ミラージ、クラウドボールあたりなら優勝狙えると思いますよ？アイスピーラーは事故が起きなければいけますね」

「本当にござるかー？」

とあざとく聞いて来た生徒会長様。

とりあえずやってみればいんでない？

それからしばらくして・・・

「もうシズさんに本線出場してもらおうかしら・・・」
「それはやめて下さい」

そんな生徒会長様と俺のやり取りがあったとき。

だって、ねえ？本線レベル相手だと姉さんやる気出して周辺に被害であるかもやん？そんなんだめでしょ？

ちなみに何があったか聞く？

まずミラージとクラウドボールは身体技能だけで1年の代表内定していたなんとかさんを圧倒したり、ほにやらら君を圧倒していたりして。とにかく圧倒的だった。身体技能だけで。

一応魔法使ってる感出すために姉さんには偽装用の魔法を使ってもらってたけど。とりあえず光るだけ、とか。炎っぽいオーラ出したりとか。

全国魔法科高校の大会でまさかの身体技能のみで挑戦する姉さんに俺は驚愕をとおりこして感動すら覚えるね。

んで、アイスピラーは達也のエンジニア参戦と姉さんの活躍にテンションマックスな深雪にさっと氷作ってもらった（この時点で張り切ってる妹様に先輩方どんびきしてた）。

んで、1年生の男子内定選手のほにやらら君となにがし君、名前知らん。2人を相手

に圧殺していた。つか自分の魔法で自陣のピラーも半分くらい蹴散らしてたけど、圧殺していた。

とりあえず圧倒的すぎて相手が可愛そうなレベルだった。

でもさすがに二科生の姉さんが2種目参加はあれなので、クラウドボールに参加してもらおう方針らしい。おめでどう姉さん。

ちなみに、俺は2種目参加とエンジニアとしての参加がさらつと承認されてしまった……。

姉さんと達也の陰に隠れて誰も突っ込んでこなかったけど、1年に2種目参加とエンジニアもさせるとか鬼でない？って泣きそうになりながら生徒会長様に訴えた。

そしたらさすがに男泣きはこたえたのか、流石の生徒会長も折れてくれて、天使達の援護もあつてなんとか1種目に減らして貰えた。

種目なににする？って聞かれたので簡単なクラウドボールでいいですよって言ったらめつちや変な目で見られたけど、姉さんと同じならいろいろ楽なんだからしょうがないよね！

どうせ姉さんのCADは俺か達也じゃないと出来ないんだから、種目くらい合わせますよ。

こうして俺の社畜な日々々に九校戦に向けての日々が加わるのであった。ぴえん。

ハチ、天使達の練習に付き合う。

― 夜 ―

「さて、じゃあ行くかー」

「はいっ!」

という訳でなんの因果か、いや確定路線か? 九校戦とかいうめんどくさいイベントに巻き込まれた今日だが、本日のメインイベントはこれからとも言えなくもない。

「それで、今日はどこ行くんだ?」

「はい、師匠からの話では横浜の方ではぐれの魔術師が密航した可能性があるそうです」
「わかった」

そんな感じで学校から帰ってみんなで夕食を食べた後、俺とグレイはへっぽこロードからの依頼をこなすべく夜の街へと繰り出す事にした。

九校戦とかいうクソメンドイイベントに巻き込まれた以上、これまでのようにタスクをため込むわけには行かないのだ。

なので本日の俺は本気の本気モードである。

「俺も行った方がいいか?」

俺のクソみたいな状況を理解している心の友ってか達也がそんな素敵な事を言っている。

俺としては土下座してでもお願いしたいところだが、後ろの妹様がめっちゃ達也に甘えたような顔しているのでだいじぶ!!と答えて家を出発したのが少し前の話。

ちなみに姉さんも行くのか?と尋ねてくれていたのだが、姉さんは魔法力が制御出来ないで横浜とかの街中とか繁華街的なところでの探索ってか搜索には向かないってか万が一戦闘になったときの被害がシャレにならないので待機してもらっている。

だから、頼むから、今日は、今日こそは、こっちのタスクくらいは片付ける!!
そんな意気込みの元、俺とグレイは夜の街に繰り出したのであった。

チュン・・・チュン・・・

「朝・・・ですね・・・」

「朝・・・だな・・・」

決して朝チュンではない。無いのだ。色っぽいイベントはなく、ひたすら殺伐としたイベントが続いた夜が明けた。

「とりあえず、帰るか……」

「はい……すみません、拙がもう少し役に立てれば……」

「いや、今回はしようがないだろ……」

結局、一晩中探し回った結果、それっぽい形跡は発見したものの、はぐれ魔術師を見つかる事は出来なかった。

しかし、まったく何も成果が無かったわけでもないのがクソなどところである。

「それにしてもメンドイ事になったもんだ……」

「はい……ハチさん、大丈夫ですか？」

そんな心配そうな表情のグレイが問いかけてくる。大丈夫とはいったいどれの事になるのだろうか……体調的な事なのか、今回たまたま遭遇して取り逃がした犯罪組織の事か……はたまたまりにたまった仕事の事か……。

「わからん、だが、今回の魔術師に関しては完全に手上げだな……完全に痕跡がここで途絶えている」

「はい……いったい何が目的なのでしょう……」

ああ、ほわいだにととって奴ね……ポンコツロードの良く口にする事なのでグレイも考えているのだろう。

まあ、このタイミングで他の犯罪組織もいたって事は、あれだろ……。

「まあ、十中八九ノーヘッドドラゴンがらみだろうなあ・・・」

「ノーヘッドドラゴン・・・」

だって、ねえ・・・？さっきのアイツら明らかにあっち方面の国籍ってか魔法使ってたしなあ・・・。

「まあ、国際的な犯罪組織が絡んできた以上、俺達に出来る事は少ない、後で達也経由で軍にでも情報流しとくわ」

「そうですね・・・」

それから俺とグレイは家に帰り、グレイはロードに報告、俺はそのまま姉さんと共に学校に向かった。

達也はいまだハゲのところで訓練していて、妹様が家にいたが、当然後で達也と登校するので俺達だけで向かう。

それにしても・・・

「ハチ、大丈夫？」

「ああ、多少眠いが大丈夫だ」

まさかのデスマーチ一日目から失敗と、徹夜になるとは・・・この先が思いやられる。幸いと言っていいのかあれだが、とりあえずロードの件に関しては続報待ちという事

だろうか。現状ひとつ目のタスクは棚上げ状態である。後が怖い。

後は今日の夜に四葉からの依頼をか雑用を片付けて、その後会社の別の仕事を片して、合間に天使達の訓練を手伝いながら俺と姉さんのCADを完成させれば良いだけだ。

死ぬわ。

でもやるしかない。ゴスロリ様は怖いし、会社の仕事も納期めっちゃせまってるし……ぶっちゃけ俺がやる必要あんま感じないけどやるしかない。

ねえ、会社のユニット開発とかもう俺いらなくない？ダメ？ダメですか？他にもゴスロリ様の相手ってか仕事はゴスロリ仲間の幼女に任せれば良くない？なんで俺なの？

そんな事を考えていると学校に着いた。この結論は夜にでも早速部長とゴスロリ様に掛け合ってみよう。うん。

俺と姉さんは共に学校へと歩いていき、そのまま天使達との約束の地へと向かう。

「おはよう」

「おはようございます、今日から宜しくお願いします」

俺と姉さんが到着するとそこにはすでに北山と天使光井が待機していた。

北山と天使の挨拶に俺達も返すと、早速九校戦に向けての練習内容の確認をする。

「それじゃあ九校戦に向けての練習はじめるか」

「よろしくお願いします」

「よ、よろしくお願いします!!」

とりあえず、2人の競技がそれぞれジャンルが違うのであれではあるが、最低限体力はいるよね。という事でランニングから始める事にした。

それにしてもだね・・・

「なんでお前らもいんの?」

「まあまあいいじゃねえか」

「面白そうだったから」

「おはようございます、ハチさん」

という感じでなぜか西城、千葉、天使柴田と一緒に訓練つてか練習にまじる事になった。

いや、天使柴田は大歓迎なんだけどね。うん、朝からテンション上がって来たわ。

と、予想外の参加者も増えたけれどやる事は変わらない訳で、とりあえずみんなでランニングを始める事に。

俺のミツシヨンは天使光井と北山の練習の補佐のため、基本2人に付きながら一緒にランニングをしているのだが、天使柴田も天使光井と同じくあまり運動が得意ではないようで、2人とも超スローペースで走っている、北山はペースこそ合わせているものの

余裕そうだ。

千葉と西城は超余裕そうなのでそれぞれ重りを付けて天使達の10倍走るように告げておいた。

それでも駆けぬけていく2人を見送り、天使達と北山とランニングをしているのだが、問題が発生した。

これはゆゆしき問題である。

多少余裕のある北山はいいとして、問題は天使達である。

2人ともあまり運動は得意ではないようで、まだ走り始めたばかりだというのにすでに息が上がり始めていて、ちよつと頬が染まっていて、それでいて2人とも立派なものを持っているわけで・・・後はわかるだろう？

若干北山から冷たい視線を感じているが、俺も天使達をそんな眼で見る訳にはいかな
い為必死に逸らす。

しかし、天使達はそれどころではないようで、

「はあ・・・はあ・・・ま、まってえ〜」

「ふう・・・ふう・・・は、早いですう〜」

とどこか色気を感じるような声でそんな事を言われる訳で、ええ。・・・わかるだろ？

天使達をそんな眼で見る訳にはいかないのにと俺の中の白い奴と黒い奴がめっちゃバトルするわけですよ。ええ。

「なんで雫はそんなにはやいのおー」

泣きそうになりながら少しずつ置いてかれてある北山にそう告げる天使光井だが、言うほど早くないけどね?と思ってしまうが、当然そこは黙っておく。

すると、北山はチラリと天使光井の胸部を見て、それから天使柴田の胸部を見て、それから自分のを見ていた。

「私はほのかと違って余計なもの、ついてないから」

「よ、余計なものって・・・」

北山のセリフに一瞬で赤くなる天使光井が可愛すぎる件について。

「じゃあね」

「な、なあんでよおおー!!しずくうー!!」

そう言つてペースを上げる北山、泣きながら北山においてかれる天使光井を見て、なんかアクア様みたいだなんてちよつと思つたけど、流石にそんな事言える訳もないので、ちよつとしたアドバイスをする事にした。

「その、だな・・・光井と柴田はちよつと走るフォームが良くないかもしれん」

「「そうなんですか?」」

俺のそのセリフに2人そろって首を傾げる。可愛すぎか!!

まあ立派なもの持つてるからね、フォームが悪くなるのはしようがないっちゃしょうがないけど、流石にそこにはコメントできないし、そもそも体力の無さが一番の問題ではあるが、そこはこれから付けて行けばいい。なので、まずはフォームを改善して、体力をつけて行こう。うん。

それから少し走っては2人のフォームを修正して、また走っては再度修正を繰り返す事しばらく。

これは新しい修行なのでは?と思いはじめてきたところで2人の体力が限界に見えたのでランニングを終了した。

視線がある一点に集中しそうになるのを逸らすのは大変だったぜ・・・しかも天使達は自分の魅力に無自覚なのかただ単に集中して気づいてなかったのか、俺が視線を逸らすと「ちゃんと見て下さい!」って言うってくるんだぜ?

もうヤバいったら無いよね。よく俺耐えたと思うわ。俺はいったい何を鍛えているんであろうか?

それから北山はスピードシューティングの練習をするべく姉さんの投げた球に魔法を掛ける練習を始める。とりあえず戦方が決まってるので反応速度と発動速度を上げる練習だ。問題は姉さんの投げる球が速すぎて最初まったく北山が反応できなかつ

たことくらいであろうか、すぐに調整したようだが。

天使光井には妹様と同じくミラーズの練習に付き合う事にした。光への感応がいいのか俺とほぼ同じくらいの速さで反応するが、流石に発動速度がまだまだだし、飛んだあとの体の使いかたもまだまだなのでこれからだろう。

千葉と西城はせっかくなので2人でクラウドボールの練習をしていた。いや、なんか打ち合ってる球の威力がおかしい事になっているが・・・案外あいつらも鍛えればどれかの種目はそこそこ出来るんでは？ちよつと思つてしまった。

そうこうして記念すべき？初日の早朝訓練は終了した。

「ほい、それじゃあ朝練はここまでな」

「はあ・・・はあ・・・ありがとう・・・」

「ふう・・・ふう・・・ございませう・・・」

北山と天使光井が一生懸命息を整えようとしながら感謝してくれた。

へへ、その言葉が聞けただけでも十分さあ・・・。

「やつぱりハチさんはすごいですね！えへへ」

そう言つて微笑んでくれる天使に俺はもう絶対に天使を優勝させようと心に決めたのは言うまでもないだろう？

それから

放課後まで俺がすべての授業を寝て過ごしたのも言うまでもないだろう？ねえ？

昼に妹様に凍らされながら起こされ、放課後に妹様に再度凍らされたのも言うまでもないだろう？

ハチ、仕事を減らして仕事を得る

朝から俺の精神力が試されてから放課後。

私のCADの調整はハチ君にお願いしますね

あざと生徒会長こと、七草生徒会長様が、そんな爆弾発言をした事から本日の生徒会が始まった。

俺が全ての授業を寝て過ごして放課後を迎えたそばからこれだもの・・・あんた自分の魅力理解してるでしょ??

あんたのファンに後ろから刺されるのは俺なんだぞ!!それがなぜわからない!?

そんな視線を向けても生徒会長様はニコニコと微笑むばかり、ちよつと、いやすげえ可愛いからって調子に乗ってるでしょ?このあざと生徒会長様は。

そんな態度取つてるとあれだよ?CADの調整に必要ですって言つてエロい事すんぞコラ。

うちの妹様なんて何も言つてないのに達也の前で下着姿になんだからなおい。わかつてんの??俺が調整する時はバッチリ服着てるけど。

クオリティ上げるために必要だつていつて脱がすぞコラ。そのわがままボディ穴が

開くほどガン見すんぞコラ。

ま、そんな事できんけどね。

それからすつごい嫌なんですけど？って感じで一生懸命説得したけど、じゃあ十文字君と私と摩利、だれがいい？って言われて、渋々生徒会長様の調整担当になる事に……その選択肢絶対おかしいよね？って思ったのは俺だけではないと思う。

「いや、そもそもなんで1年の俺にそんな大役やらせようとしてんですか？」

そこでビクビクしてるCADオタとかこないだのおかつば先輩とかいるでしょ？そんな視線を向けるけれど、生徒会長様はニコニコ笑顔を崩さない。

「だって、その方が面白s……確実に勝利出来るでしょう？」

いま、バツチリ面白そうって言ってた件について。

もうそこまで言ったら言い直した意味ないよう……つまり何？俺で遊ぶ気マンマンなの？なにそのニヤニヤ顔。美少女はどんな表情も絵になるからって調子に乗ってるでしょ？その立派な胸揉むよ？

もちろんやらんけど……ああ、ダメだ、朝から天使達に精神修行させられたせいかさつきから思考がヤバイ。どうしよう、まだデスマーチ1日目なのにすでに結構精神に來てるんですけど……。

目を閉じると今でも魅惑の果実がたゆんたゆんしている映像が……っていかんいかん!!

「まあ、ハチ君の負担も考えて、出場種目のクラウドボールと達也君の補佐、って感じでやってもらおうと思っっているの」

なるほど……つまり、九校戦において俺は天使光井の専属担当にはなれないという事でオケ?

やる気が最高に無くなって来たんですけど……。

天使との触れ合いがあるから受けたようなもので、別にあざと生徒会長様とかその他の奴らの担当しかりしないってなら超やる気出ないよ?

そんなこんなでこの日の生徒会は終わったのであった。ちなみに明日は発足式らしい。超出たくない件について。

その夜。

俺はとりあえず会社の部長に電話していた。

「ええ、ですから、九校戦に出なくてはいけなくなりまして、ええ。その通りです。ユニツトはどうする、ですか?それはもう俺がいなくても問題ないでしょう?困る?い

え、そう言われても、こちらも時間が無くてすね・・・時間が無いなら作ればいいつて・・・部長、今のご時世その発言はいろいろとアウトですよ。ですから出来ない・・・出来る出来ないじゃなくてやるんだじゃないでしょ・・・どこブラックですか・・・ですから・・・」

そんな感じで部長とのやり取りは進み、結局完全に降りる事は出来ないものの、少しタスクを減らして貰う事が出来たのでとりあえずヨシとしよう。

「とりあえず会社のユニット用換装、変形システムについてはまた後で考えるところとして、次はゴスロリ様に連絡するか・・・」

気が重いなあ・・・。

日本でもつとも力のある魔法師の家系の当主だけ？

なんでたかだか妹様のガーディアンの俺が直通回線を持っていて、且つ直接仕事の依頼をされているのか理解が出来ないんだが・・・それでも、九校戦までのデスマーチを乗り切る為にも少しでも業務を減らす為の交渉をするのは必然なのだ。

そう考え直して今度は四葉のゴスロリ様直通の回線をコールする。

『あら、どうしましたか？ハチさん』

少しのコールの後、まさかの葉山氏を飛ばしていきなりゴスロリ様が出てきてい
るうー！！

そんな驚きを必死に隠しながら今回の事について報告、というか相談をする。

「ええ、実は折り入ってお願いがありまして・・・」

『却下です』

「ええ・・・」

まさかの何も要件を言わせてもらえず却下されてしまった・・・そう思っていると、クスと笑うゴスロリ様。

『冗談ですよ、お願いと言うのは、九校戦に関する事ですか?』

「・・・そうです」

冗談が笑えないんだよなあ・・・そしてこちらの要件を言わずとも理解している事に關してももう何も突っ込めないよ・・・。

「会社の仕事の納期と、ロードからの依頼、そして当主の調査依頼及びユニット開発と業務が重複している状況ですので、流石に他のエージェントにせめて調査依頼だけでも担当してもらいたいんですけど?」

『そうですねえ・・・』

どう考えてもこれ業務量おかしいよね?ひとつの体で出来る事じゃないよ?

そんな気持ちを含めて聞いてみる。

ゴスロリ様は手をあごに当ててふんむと考える姿勢をとる。

豊満な胸が寄せられる瞬間に思わず視線が吸い寄せられそうになり、慌てて天使達を思い浮かべようとするも、朝のたゆんたゆんが浮かんで余計に惑わされていると、ゴスロリ様の考えもまとまったようだ。

『いいでしょう、ロードの依頼の継続調査はこちらで引き受けましょう。こちらの調査依頼のノーヘッドドラゴンの件もどうやら関与しているようですしね』

「あざとす」

よかった。

ゴスロリ様からノーヘッドドラゴンってか横浜あたりで最近国際犯罪組織の動きが活発化しているから捜査しろって言われて、それ調べてたらノーヘッドドラゴンが当たって、それからロードの依頼で魔術師追ってたらノーヘッドドラゴンと合流したって事で、見事にタスクが合致して、問題がメンドクサイ方面に加速しているのだ。

もうこれだけで超メンドイ。

こんなもん、九校戦の準備しながら合間で対応できるわけが無いのだ。そこらへんはさすがのゴスロリ様も理解してくれたようだ。よかったよかった。

『ただし、会社の方と合同で製作している飛行ユニット、こちらは通常通りお願いしますね』

「そつちももう俺に出来る事あんま無いんですが・・・」

『お願いしますね』

「・・・ういっす」

そう、俺が務めている会社は、こちらも四葉のゴスロリ様の息のかかった会社で、現在開発中の飛行ユニットもこちらで開発している。

達也の飛行魔法が完成すれば必要ないように思えるが、なんだかんだで飛行に魔法力を使わずに飛べるのは大きいし、長距離の移動も可能になるし、そのまま戦闘も可能となかなかコストはかかるものの、その性能はこれまでの戦闘ユニットとは一線を画したものになっている。

その為、会社、四葉、軍とみつつの組織から早く作れよコラって言われている現在の俺。

まじ胃に穴が開きそう。

この会社、俺が飛行ユニットの設計図を書きながら個人的に作っていたらどこから嗅ぎつけて来たのかゴスロリ様が四葉用に作れよって言い出して、その為に適当なペーパーカンパニーを作ったと思ったら、それが実はけっこうガチな技術者の巣窟になって、今に至っていたりして。

まあおかげで俺のガンダム作りの為のあれこれも手伝ってもらっているのだが、その一歩として開発し、完成間近まで来ているのが飛行ユニットという訳だ。

え？会社の名前？聞く？

s i z u と h a t i の会社、それを姉さん的におしやれに言つて、S & Hカンパニーという。S & Hと略されることが多いこの会社は俺が発端だけど、姉さんの為のCAD作りもしているのでそうなった。

いろいろな変態的技術者なんかも集めて作った会社の為、いまではよくわからない分野に異様に研ぎ澄まされたよくわからない会社として一部のコアユーザーから人気である。

そんな会社でこないだまでやたらと頑強な姉さん用のCADを作ったり、今回のように飛行ユニットを作ったりしているわけだ。

ライフルの直撃にも耐える強度つてCADに求められてるのかと思うが、姉さんに限つては耐熱と耐衝撃が必須なので作つたらやたらとバカ売れした。

んで、当然その会社の中には俺よりも優秀な人間なんて、5万はいないけど、たくさんいる訳で、やっぱり俺いらないかね？って思うけどそうもいかないようだ。

そう思っている間にもゴスロリ様との話は進む。

『ではノーヘッドドラゴンに関しての調査はこちらで進めますが、実働が必要になった場合はハチさんとグレイさんにも出てもらいますので宜しくお願いしますね』

「え……ういっす」

戦闘担当いくらでもいるでしょー!?と思うものの、魔術師とか古式とか出てこられると対応できる魔法師はぐんと少なくなるからしやーなしだな。俺も実際得意じゃないけどね、グレイがいるからなんとかなるっしょ。

そう思つてうなずくと、ゴスロリ様がそう言えば、とポンと手を叩いた。

『新しい素材、金属を作ったそうすね、とても上部で軽いんだとか』

ガンダリウム合金の事ね、達也には伝えたけど、まだ軍と本家には伝えてなかったんだよなあ。

「まだ試作段階つすけど、姉さんのパワーにも耐えれそうではありません」

『それは大量生産可能ですか?』

ほらね?こうなると思つたもん。これ以上仕事は増やしたくないのだ。

「無理ですな、姉さんの魔法力をもつてしても一日に精製出来る量はごくわずかですし、深雪レベルでギリギリ精製可能なレベルなんで、現時点でもCADのカバーとして、とか、俺と姉さんの刀のコーティング的な感じでしか使えないっす」

『そうですか・・・残念ですな・・・死ぬま・・・死ぬ気で作つたとしてどのくらい出来るのかしら?』

死ぬまでつて・・・止めてよねー、この人が言うのと冗談に聞こえないんだからさー、ちよつとちびりそうだったやん。

「いろいろあるんで、大した量はできないっす……」
『そうですか……残念ですね……本当に残念です』

ねえ？そのいじめられなくて残念みたいな空気をやめて？ギリギリまでこつちを追い込もうとするその姿勢良くないと思うの。

とりあえず、ガンダリウム合金に関しては軍にもしばらく非公開という事になった。

まああつちにはハッキングマスターがいるからばれてそうではあるけど、まあせいぜい超頑丈な素材くらいに思ってるでしょ、ダイジョーブダイジョーブ。

それからちよいちよいと仕事の話して、ゴスロリ様用のCADをガンダリウム合金で作るようにと指示をされて通信が終わった。

仕事を減らして新しい仕事を獲得するというくそつたれな結果になったが、何とか並行して進められる案件なのでよしとしよう、うん。

とりあえず、報告と相談が終わったので、俺はその後、飛行ユニットの図面を引っ張り出してからあれこれとオプションを作ったり、九校戦に向けて姉さん用の魔法式を組んだりしていると、いつの間にか意識を失って、朝起こしに来た妹様に冷たく（物理的に）されながら起こされてまた新しい1日が始まった。

……この生活、九校戦始まるまで続くのかなあ……？天使とたわむれてるだけじゃダメ？ダメですか……。

や
だ
な
あ
・
・
・
・
・
・
は
あ
。

ハチ、天国に行く・・・？

つ、つかれた・・・眠い・・・。

あれから発足式でクソメンドイ時間を過ごしたり、達也が飛行術式を完成させたり、会社と本家からの仕事を死ぬ気でやっつけたりしつつ、朝練で天使光井と北山に訓練をついたり、そこになぜか参戦してる千葉と西城、それに天使柴田と非常に濃厚な日々を過ごしている。

天使柴田は大歓迎だけれど、なんで西城と千葉も参加してるんですかねえ？と聞いてみたら。

「楽しそうだから」

とすげえ良い笑顔で答えられて、思わず殴りたくなつたのは仕方ないと思うの。

発足式が終わって、正式に天使光井がミラージとバトルボード、北山がスピードシューティングとアイスピラー。姉さんがクラウドボールで俺も同じくクラウドボール。ついでに妹様がアイスピラーとミラージに参戦する事が決定したのが忙しさを加速させていた。

んで、エンジニアに関して達也が主に1年の女子のミラージとアイスピラー、ス

ピードシューティングを担当。

俺が達也のサブと生徒会長様のメインエンジニアと1年と本線の女子のクラウド、それと1年の女子バトルボードを担当する事になった。

最初はクラウドと生徒会長様の担当だけだったのだが、意地でも天使光井のエンジニアをしたかったのでバトルボードの担当に立候補した。

いろんな人達からすげえ反対されまくったし、タイミングによつてはクラウドとかぶりそうではあったが意地でもゆずらなかつた。

出来ないなら参加しない。つて生徒会長様に言ったところでようやく納得してもらった。まったく、天使とのふれあいが極端に少ないんだからそれくらいの癒しは欲しいものである。

そのせいで最初はクラウドの1年女子と生徒会長様だけだったのが、なぜか本線女子も全員俺が見るというクソみたいな展開が始まったがそれはもう容認するしかあるまい。生徒会長様の笑顔がどSの目になっていたけどキニシナイ。

まあ一応クラウドは試合数が多いので副担当がいるのだが、あれこれ言い過ぎたせいで超目の敵にされてる昨今。果たして俺が副担当と連携を取れる日は来るのだろうか？いや、正直うちのレベルのエンジニアだと逆に邪魔になってしまいうらいな方が助かるという考え方もあるが、あ、あーちゃん先輩とおかつば先輩は別ね、大歓迎。

元々担当する予定だった木下だか石田だかという男子エンジニアからすごい睨まれてるんだけどもあれでしょ？お前ら折角の女子との触れ合いタイムを俺に奪われて嫉妬してんだろ？この変態どもめ!!（ブーメラン）

そうして朝は天使光井と北山、それと天使柴田とおまけの自主練に付きあつて、学校の授業は寝て過ごして、放課後はちよつと生徒会の仕事をしてから九校戦出場選手の練習に参加して、夜は会社と本家からの仕事をこなしたり、俺と姉さんのCADを製作したり、達也の作成した飛行術式のテストをしたりと過ごしているうちにだんだんと九校戦が近づいて来ていた。

ついでに放課後の練習では気合を入れすぎた姉さんの打球に吹き飛ばされた選手の介抱をしたり、俺がエンジニアを担当する選手の練習を確認したり、姉さんに吹き飛ばされた選手を解放したり、天使光井と北山の戦術の確認をしたり、姉さんに吹き飛ばされた選手を介抱したりと超大変だった。

つまり、あれである。

「し、死ぬほど眠い……」

流石に俺も限界である。学校の授業を全て寝て過ごしているとはいえ、完璧に疲労が取れるわけでは無いし、そもそも休憩時間の度に天使達&妹様の相手をしていたりでしつかりと休めないし、夜はそもそも夜が更けて、その後太陽が昇るまで仕事をしてい

る事が多いのもうね、平均の睡眠時間が3時間くらいの生活を続けてるのもう死にそう。

達也も似たような生活してるくせになんであいつは平気なんだよ？おかしくない？

「大丈夫ですか？」

世の不条理に心の中で文句を言いまくっていると、そんな声が聞こえたので振り向くと放課後の練習の差し入れを持って来てくれていたであろう天使柴田が心配そうにしていた。

「あ、ああ・・・ちよつと眠いけど大丈夫だ」

「そうですか？それならいいんですけど・・・隣、失礼しますね？」

俺の返事に本当かよ？って視線で、心配そうに見つめてくる天使はそれでも追及することなく俺の隣にすわった。

こぶしひとつ分のスペースを開けて隣に座る天使柴田。

すると、まるで天使を祝福するかのように優しいそよ風が天使の髪を揺らす。そつと乱れそうになる髪を耳に掛ける仕草に思わずドキリとしてしまうが、天使柴田のキュートさはいまさらなので慌てず騒がずしっかりと脳内メモリに記憶しておく。

次いでにそよ風と共にかぐわしい香りも運ばれて来て、思わず鼻呼吸を意識してしまうが、これも仕方無いと思うのん。

そうして俺の中の煩惱と激しい戦いをしてると、天使柴田がこちらに首を傾げながら視線を向けてくる。ちゆき。

「ハチさん、九校戦の方はどうですか？」

「あー・・・姉さんの練習相手がいなくなつたな」

「そ、そうですか・・・」

張り切つて打球を打つと相手が吹っ飛ぶからね。

最後の方は剣道部の桐原先輩が粘つてたけどそれも先ほど吹き飛ばされて保険室に運ばれ、ついに姉さんの練習に付き合える人が居なくなつてしまつたのだ。

正確に言えば、俺と生徒会長様は姉さんの打球に対処可能なのだが、俺も生徒会長様も練習に付きつきり、という訳にはいかないのだ。

今現在は手加減して打球を打つたり、左手でやつたりしてなんとか練習しているが、姉さんだけ練習のベクトルがずれまくっている昨今である。

まあ他の人達がテニスやつてる中で姉さんだけテニスやつてる以上仕方ないと言えなくもないか。似てるけど違う競技だもんね、あれ。

そんな事を話すと天使柴田もさすがに苦笑いをしている。

「ハチさんの調子はどうですか？」

「多少眠いが、特に問題はないな・・・」

まったく競技の練習はしてないけどね!! たまに姉さんの練習相手になるくらいは流石にしているが、エンジニアの担当が地味に多くてぶつちやけ練習に時間を割けないのだ。

だが、正直優勝したいわけでもないのでもあいいかと思ってる。CADの調整に多少てこずってはいるが、それも許容範囲なので、特に問題らしい問題はないと言えるだろう。

そんな事を話すと、天使柴田はジトツとした目をこちらに向けていた。え? なに? 「ハチさん、無理してませんか?」

ジト目から心配そうな表情になりつつ、そう問いかけてくる天使柴田。その優しさだけで俺は十分さ。

「多少眠いが、仕事だからな、これくらいなら問題ないさ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そう答えると天使柴田は心配そうな眼はそのままに、じつとこちらを見つめている。

そのまま俺も、天使柴田も無言のまま、ただ見つめあうだけの時間が経過していく。あの、天使柴田の可愛らしい顔を見続けていられるのは嬉しいのだが、そうも見つめられると照れると言いますか:。

あまりにも天使柴田が見つめてくるので思わず目を逸らしてしまう。

「やつぱり・・・ハチさん、嘘をついてますね？」

いや、今のは嘘をついたのが気まずくて目を逸らしたのではなくて、天使と見つめ合うのが恥ずかしくて逸らしただけなんだが・・・と説明したいのだが、当然そんな事言ったら通報されるかよくて妹様に冷凍処分されてしまうのは目に見えているので、どうしたものかと思つていると、天使柴田の中ではどんどん話が進んで行つてしまう。

「ハチさん、無理はしないで下さい・・・」

「む、無理はしてない・・・ぞ？」

うるんだ目で見つめられたので、思わず返答がどもつてしまったのが、天使にはますます無理を隠そうとしているように映つたようで・・・。

「私から光井さんと北山さんと深雪さんには連絡しておきますから今は休んで下さい」

「いや・・・だから、だな・・・」

あまりにも心配そうな天使柴田に大丈夫だと言おうとするが、その言葉も天使に両手を握られた事で口からでなくなつてしまう。

そうこうしている間にも天使は妹様達への連絡を終えたらしく、今度は保険室を確保しようとしたようだが、あいにくと姉さんによつてけが人が大量発生している為保健室は満員だった。

てか、あの先生苦手やし、ただの寝不足で保健室は無理なので、これで安心である。

そう思っていた時期が俺にもありました。

「保険室は満室ですか・・・なら、ハチさん、失礼しますね？」

これで諦めてくれるかな？と思つて油断している俺の頭をそつと両手で抑えた天使柴田はそのまま俺の頭を自身の膝の上に乗せて、いわゆる膝枕の状態に・・・つて、ふぁ!?

「てn・・・し、柴田!?!何を!?!」

俺の頭の下には天使柴田の至高のお膝様があつて、そこに俺のようなゴミクズの頭が乗つていて、そこで、思わず天使柴田に問いかけようとする、魅惑の山脈がそびえていて、つてか天使柴田の顔が見えないし、下から見るととんでもない事になつてるんですが・・・。

「ベツトが空いて無いようなので、今はこちらで我慢してくださいね？」

いや、我慢とかとんでもない。ベツトか天使の膝枕かと選択肢を出されたら天使を選ぶに決まつてる。そうではなくてですねえ・・・。

そう言おうと思つたけど、声からして本当に心配してくれているのであろう事はよくわかるので、跳ねのける事など出来る訳がないわけで・・・そう思つてみると、天使の御手が俺の頭に乗せられて優しく撫でられるともう、ここは天国なのではと言うほどの幸福感と安心感が訪れる。

「ふふ・・・大丈夫ですから、今は休んで下さい」

迷惑だろうから、と断ろうとしたらそう言っただけで先回りされてしまい、これまでの激務からの寝不足もあつて、俺はすぐに意識を手放してしまうのであつた。

その後、完全にリフレッシュして元氣100倍になつた俺はなぜか妹様に冷却されるものの、そんな事などものともせず九校戦の準備と会社の仕事を精力的にこなしていくのであつた。

九校戦、開幕・・・!!

ハチ、九校戦の会場に向かう。

カタカタ・・・カタカタ・・・

薄暗い室内にキーボードを叩く音が静かにひびく。

「ふへ・・・ふへへ・・・」

訂正、キーボードの音と共に気持ちの悪い声もしていた。俺の声だ。でもそんな事も気にならない。

「ふへへ・・・これで、これで・・・」

声の主はぼさぼさの髪にはつきりとした隈を目にこさえて腐ったようなまなざしで画面を見つめてキーボードを叩いていた。俺である。

気持ちの悪い声で笑う姿に知らない人が見たら恐怖を感じることは間違いないが、幸いにもこの部屋には声の主である俺以外には人が居なかった。

なのでぶつぶつ呟いても問題ないのだ。

「これで・・・デスマーチも・・・・・・終わりだあ!!」

カタカタ・・・・・・ツタアーーーーン!!

叫ぶと同時にエンターを意識高めに叩くと画面には完了の文字が浮かぶ。

「終わった………やつと……終わったぞ……」

万感の思いを込めて小さくつぶやく。

明日から九校戦が始まる。正確には明日は移動日だが。

絶対に間に合わないだろうと誰もが思っていた。もちろん自分も思っていた。

でも、それもここまでだ。

「終わったぞお———!!!」

人間、やろうと思えば何でもできる。どんなに無理に見えても死ぬ気でやればなんとかなる。

そう思えた期間だった。もう思いたくないけど。

ホントに、もうこれっきりでお願いしますね（懇願）

そんな俺の歓喜の声を聴いて姉さんとグレイが部屋にやって来た。

「お疲れ様、ハチ。お仕事終わったの？」

「ああ……やつとおわったぜ……」

「お疲れ様です、ハチさん。コーヒーどうぞ」

晴れやかに微笑む姉さんと労いながらもそつとコーヒーを差し出しながらやわらかに微笑むグレイにやつと終わったのだと安堵する。

「ああ……甘い。やはりコーヒーは甘くないとな……」

「ふふ、お疲れ様です、片付けは拙がしておきますね？ハチさんは休んでください」

聖母のような微笑みを浮かべるグレイが、メイドさんのようなのかいがいしくお世話をしてくれて、おれあもう、感無量だよ……。

そう思いながら、ここはグレイの提案に甘えようと思い体を立ち上がらせる。

「すまん、助かる。風呂入って寝るから明日の出発前に起こして”プルルル”……」
起こしてくれ、そう言おうとした。それまで寝るから、と。

そう言おうとしたら俺の端末が無慈悲にも着信を告げ始めた。

すごく嫌だが、チラリと見るとゴスロリ様からの着信だと表示されている。

絶対に出たくない。今仕事が終わったばかりだもの。

ここで出たら絶対に仕事を増やされるに決まっている。絶対にだ！でも俺は寝たい。

かれこれ起き続けて何日目か……しつかりと考えたくない程に徹夜が続いているんだぜ？だが、ここで出ないという選択肢もあり得ないのだ。ここで出なかつたらさらにひどい仕事を振られるのだ。ソースは俺。

「……ハイ」

『ああ、やっと出ましたねハチさん』

しづしづ出るとそこにはいつものように楽しそうに微笑むゴスロリ様のお姿がある。

ええ、今日もエロい谷間ですね、そんな事を言ったら明日の俺がどうなってるかなど考えたくもないので言わないが、ようやっと仕事が終わったこのタイミングでは聞きたくない声ではあった。

でもそんな気持ちを込めてさーせんとりあえず謝っておく。社畜はとりあえず謝るのだ。

『そろそろ仕事が終わったころだと思うのだけれど』

なんで知ってるのお・・・？

さっき仕事が終わったばかりでどこにも連絡してないのに、終わった瞬間に連絡するとかおかしいよねえ？

なんと答えたものかと冷や汗をかきまくっていると、ゴスロリ様はいつものように微笑みながら手を合わせた。

『それで、追加の仕事の話です』

どうやら俺はまだ寝れないようだ。

こうして九校戦前日の夜は更けていくのであった。

九校戦当日

現在俺はバイクの後ろにグレイをのせて九校戦の会場に向かっているところだ。

「はあ・・・まさか自力で会場に行くことになるうとは・・・」

「すみませんハチさん。拙のせいで・・・」

「いや、グレイのせいではないから気にするな」

しゅんと謝るグレイに俺は気にするなど慰める。

悪いのは俺にこんなタイムミングで仕事を振るゴスロリ様だから。もちろん言えんけど。

「でも・・・」

それでもしゅんとしてしまいうグレイ。心なしか頭に犬の耳のようなものが見えて、それがしなだれているような幻視をしてしまうが、そろそろ俺の頭も限界なのだろうか？

そんなことを考えながら俺はバイクを走らせる。

ホントはバスでのんびり行く予定だったのだけど、集合時間に仕事か、てか敵の殲滅が終わらなかつたのだ。

どうやら俺以外にも遅刻者がいたらしいのだが、無慈悲にも俺は待つてもらえなかつた。どうやらヘイトをあげすぎたかもしれないね。

そうこうしていると、ようやく1校のバスに追い付いたのだが、なんかその前方から車が跳び跳ねるのが見えたので、サクッと1校のバスを抜いて、反対車線に飛び出そうとするのを全力で弾き返しておく。

それから俺はさっさと会場に到着して出来るだけ睡眠時間を確保するべく、やたらと視線が飛んでくる1校のバスをほっといて現地に向かった。

決して事故処理がメンドイとかでは無いのだ。眠いのだけなのだ。

だからスマンが達也よ、後は頼んだぜ・・・。

おっと、それとグレイにもフォローを入れないとだな、なぜか俺達と同じホテルに宿泊する事になっているグレイにちよっとしたお願いをする事にした。

「それと、頼みがあるんだが」

「はい！拙に出来ることならなんでも言ってください」

なんでもするとは言っていない、ってやつだね？俺知ってる。

それでもちよっとドキリとしてしまうのはしょうが無いと思うの。

「向こうに着いたら寝るから達也達が来たら起こしてほしい。それと、九校戦中に姉さんが無茶しそうになったら止めてくれ」

「はい、達也さんが来たら起こしますね。でも、シズさんを止めるのは拙にはちよっと難しいかと・・・」

だよね。俺にも無理だもん。

「まあ、できる限りで頼む。正直グレイしか頼りに出来ない」

俺にも妹様にも無理。かろうじて達也なら何とか出来るけど、流石に大っぴらになんとか出来るところを見せる訳にもいかないからな。なので現状唯一対抗手段のあるグレイに頼るしかないのだ。

神話級の宝具を持つグレイでも止めるのに苦労するとか姉さんのヤバさがよくわかるね。

俺のセリフにさつきまで落ち込んでいたであろうグレイは俺の腰に回している手にギョツと力を入れる。

「わかりました！拙にお任せください!!」

「ああ、頼む」

「はいっ!!」

それから高速をバイクで疾走する事しばらく、俺とグレイはようやく九校戦が開催される会場のホテルに着いた。

俺とグレイは駐車場にバイクを止めて、先にホテルにインしようと入口をくぐる。

「あ、あれは・・・!!」

すると俺の目に衝撃的なものが飛び込んできた。

「あら？ハチさん？もう着いたんですか？」

「あ、やつほーハチ君」

そう、俺の目の前には夏を意識しているのか、とても涼し気で、いや、ちよつと大胆すぎやしないかね？と心配になるような天使柴田の可愛らしい私服姿が飛び込んでいたのだ。あとついでに千葉。

俺に気づいた天使がどこか嬉しそうな顔で俺にペコリとしてから微笑んでくれて、俺の体力ゲージも回復するつてもんですよ。

それから 그레이 とは二回目の天使柴田と、 그레이 とは初見の千葉に 그레이 を紹介して、一緒にバイクに乗って来たんだ、と説明した。なぜかちよつと天使柴田が面白くなさそうな表情をしていたのでどうしたのかと視線を向けるとそれに気づいた天使はすぐに微笑んだ。カワイイ。

ペコリとお辞儀する夏場でもフードを外さない 그레이 とペコリとお辞儀する大胆な夏色ファッションの天使柴田。

うん、2人を見ていると季節感がわからなくなってくんね。

それから千葉家の力でホテルを借りた千葉にロードの力でなんとかねじ込んだ 그레이 の説明をして、それからとても可愛らしいけど、やたらと大胆な天使柴田に上着を着るように話してから俺は達也達が来るまで部屋で眠る事にしたのだった。

それから部屋に入って速攻で眠る俺。

グレイには先ほどお願いしたし、これで久方ぶりの睡眠だぜイエイ。

それから意識を手放してしばらくすると、ユサユサと優しく揺さぶられた。

「ハチさん、ハチさん、起きて下さい」

「う〜ん．．．あと、10分．．．」

ユサユサ．．．ユサユサ．．．と優しく揺さぶられて、グレイの優しい声が聞こえて．．．

この幸せにもう少し包まれていたい．．．。

「はい、わかりました。ではもう10分したらもう一度起こしますね」

まさかの一発了承。

さすが優しいさのグレイさんだぜ．．．では遠慮なく眠ると．．．「ハチ．．．？」．．．

うん、起きよう。

そういうえばこの後なんかの会とやらで全員参加のなんちやらがあるんやった。うん、

起きないとダヨネ。

決して妹様の冷たい声が聞こえて怖くて起きたわけでは無いんだかねっ！

「．．．おはよう」

「おはようハチ。それで？さっきのはなにかしら？」

すでに冷たくなりはじめている布団をさっとはねのけて起き上がり、俺的イケメンスマイルを浮かべ妹様に起床の挨拶をする。ニコ

すると、妹様も万人が惚れるかのような微笑みを浮かべて俺に挨拶を返してくれる。俺の背中中は冷や汗でびっしりである。だって、この妹様の目、全然笑ってないのだもの……。

そんな俺と妹様の状況を横から見ているグレイはめっちゃアワッていて、それはそれで可愛らしいのだけれども。当然今は妹様のご機嫌とりが最優先である。

「いや、本当にすみませんでした。何分、先を急いでいたものでして……」

「はい、すみませんでした」

もうそつこうで土下座ですよ、土下座！

それからひたすら謝り倒して、なにか今度お願いを聞くとという事を約束して何とか機嫌を直した妹様と俺はなんちゃら会というやつに参加するべく部屋を後にした。

ちなみにグレイは部屋で待機してようだ。まあね、九校戦には関係ないもんね。

ハチ、調子に乗る

ねむねむな瞳を妹様に良い感じにぱっちりさせられた俺が連れてこられたこの会場だか……。

「人が……多い……視線もうざいし。あと人が多い」
「あきらめなさい」

妹様にながちりとアームをロックさせられて引きずられて歩くどうも、ハチでえす。神がかった美貌を持つ妹様は会場に入るとそれはもう視線がとんでくるわくるわでもうね。さつすがー！

しかも妹様自身はもうそんな視線を向けられる事に慣れすぎてるので一ミリも気にしてない訳です。

万が一良からぬ事を考えている奴がいても達也がいるから大丈夫！つていう気持ちがあるもんだからホントにかけらも気にしてないの。すごいよね？

んで、俺はと言うと、妹様の連れつて事で注目されるのは死ぬほど気になるし、嫌なもんで、今すぐ帰りたい気持ちを含めてつぶやくも、当然のように妹様に却下されるといふね。まあわかってたけど。

しかも視線のほとんどが殺気とか嫉妬とかそういう怨念の類だもんね、ぶっちゃけただ注目されるよりメンドクサイけど、慣れてきているのも事実なのが俺の日常の悲しいところである。

妹様とはもちろん、姉さんと歩いててもそうだし、なんなら2人に挟まれて歩く時もあるし、最近だと天使達にグレイも加わって、そこを面白がって生徒会長様が参入してきたりとね……。

最近はもう一人で校内を歩いていても飛んでくる視線の嵐よ。俺にどうすればと……。

そんな事を嘆いているといつの間にか姉さんと達也と合流。その後妹様は天使光井と北山に連れられて他の参加者たちの元へと歩いて行った。

俺はそのまま姉さんと達也と一緒に千葉や千葉に連れてこられた吉田と会話したりしなかったりして過ごし、それから周りに人が少なくなつたのを確認したのを機に、グレイと追つてたゴスロリ様からの仕事内容の情報交換を達也としたりしていた。

とりあえず、魔術師が犯罪組織と組んで九校戦にちよつかい出してくるだろうという事で合意。絶対にメンドクサイ案件である。

それから謎の金髪美少女が姉さんに挨拶したかと思つたら名前聞いた瞬間ケンカ売ってきて、その後妹様にもおんなじ事をしていただけ、あれはいったい何だったの

だろうか？

エリート（笑）の仲間かな？入学当初のモブ崎のエリートムーブとなんかおんなじ匂いがするというかね……。まあいいか。

そうこう過ごしていると九島閣下とやらの挨拶があるとの事。ほう、閣下とな？

あいにく知らない人なので姉さんと一緒にチラリと達也を見ると解説してくれる。

「日本で一番魔法がうまい人だ」

「そうなんだ、すごいね！」

さすがの達也さんである。姉さんにもわかりやすい完璧な説明である。

しかし、達也さんよ。俺も忘れがちだが、姉さんはちよつと理系が苦手で、やたらと魔法力が強すぎているせいでポンコツっぽい雰囲気になりつつあるが、おバカさんではないぞ？もつとちゃんと言明してもいいのよ？

そう持つては見たが、そんなに興味もないのでまあいいか、と考え直しておいた。

すると、閣下が登場する前に会場の照明が消える。

「んん？」

姉さんがもによつとした声を上げるとすぐに照明が再点灯する。すると舞台の上に美女がたつていた。アレが閣下？

もちろんそんな訳ないのでして。

「姉さん、NTD起動」

「わかった。術式起動。．．．えぬていーでいー発動」

俺の指示に姉さんも即座に反応して術式を起動する。

姉さんの魔法の発動により姉さんがユニコーンのように赤色に発光しつつ、粒子を放出する。当然あの音楽が俺の脳内で再生される。

その間に俺と達也はそれぞれ天使光井と北山、妹様を守るような位置に素早く移動する。

閣下が来るかと思いきや美女が現れた、そしたら今度は姉さんが発光し始めて会場内がプチパニックになっているが、姉さんの魔法により会場全体に掛けられた魔法は解けていた。つまり

「あれが．．．」

「ああ、そのようだな」

九島閣下とやらが非常に楽しそうな表情でこちらを見ていた。

「これは、あれだな．．．」

「どうやらそのようだな」

どうやら俺達、というかこの会場の参加者達は試されていたようだ．．．。

くそ、こんな事なら参加しなければよかった（無理）妹様が連れてこなければ、こん

なイタイ奴を見るような視線に晒されずにすんだのに……!

そんな後悔をしつつ、その後は適当に閣下の悪ふざけゴメンちよ的な話を聞いて、可能な限りすばやくその場を退避した。

へへ……また黒歴史を作っちまったぜ……。

それから達也はCADの調整機器の確認のためにトレーラーに向かい、俺は明日早速出場種目のある生徒会長様のCADを確認するために生徒会長様の部屋に招かれていた。

どうやら姉さんは妹様と一緒に風呂に行くようだ。他の参加選手とも打ち解けたようだなによりである。

しかしだ……ちよっと待って欲しい。

なんで俺、生徒会長様の部屋に来てんのお??おかしな??

「いらっしや〜い♪」

って感じでドアを開ける生徒会長様がすでにパジャマだった件について。

眠気が一瞬で飛んでったやんけ……。そんで、なんとか冷静であろうとしつつ部屋

に入るとりんちゃん先輩にあーちゃん先輩もパジャマだったのだが・・・。

おかしいな・・・明日出場のある生徒会長様とCADの最終確認をするまでなら理解できるんだが、なぜ部屋に呼ばれて女子会してる風な状況で俺は満面の笑みで部屋に入られているのであろうか？

「あのですね・・・」

「どうしたの？」

ニヨニヨ笑いながら俺の顔を見ている生徒会長様。確実に俺の童貞心を弄んで楽しんでる顔である。

明日から九校戦開幕で、なんならトップバッターで、優勝確実とか各方面からプレッシャーをバンバン掛けられているというのに、まことのんきなものである。

まあそういう事ならこちらも容赦はしない。いいだろう、戦争だ。

「ちようどよかった、これからCADの最終調整をしますね」

「ふふ、よろしくね？」

そう言つてニコニコしている生徒会長様に俺もニコリと笑顔で返す。

「では、脱いで下さい」

「・・・え？」

俺の続く一言に生徒会長様のみならず、部屋の空気が凍る。

「生徒会長の九校戦に掛ける熱意は理解しました。そのような薄着でこちらでまっついているという事は、今まで以上の精度での調整を希望するという事でしょうか？」

「いえ、あの……」

顔を真っ赤にして今更恥ずかしくなっている生徒会長様に俺は言葉を畳みかける。

「さすがに同年代の女性にそこまでの覚悟があるとは思っても居ませんでした。当然こちらから言えるような事でもないですからね。でも生徒会長がそこまでの覚悟を示したのなら俺もエンジニアとして最大限できるだけの事はしますよ。任せて下さい、衣類の無い状態で再調整するならばさらに5%は発動速度を上げて見せますよ」

「いえ、あの……え、ホントに!?!」

俺が怒涛の説明をすると、どんどん真っ赤になつていく生徒会長様。

ほっほっほっほと内心で笑いながら普段からかわかれている鬱憤を晴らしまくる。調子に乗っているいろいろ言う、最後の俺の発言で生徒会長様の反応が激変した。あれー？

「ハチ君、本当い衣類なしで調整すればそんなに上昇するの?」

その瞳には先ほどまでの羞恥がとんとなりを潜めて真剣な表情でこちらを見ている生徒会長様がいた。

完全に羞恥が消えたわけでは無いようで、ほんのりと頬を染めているが、それがまた

パジャマ姿の魅力を増加させていて……ぶっちゃけると、エロい。そんなこともろん言えんけど。

「ええ、まあ……普段の手のひらだけの奴と、全身スキャンするのでは精度が全く違いますからね……」

いきおいに押されて思わず正直に答えてしまう。

すると生徒会長様はふんむと考え始める。あの、正面にたつたまま考え始めるのはちよつと……身長差から魅惑の谷間がぼつちり見えてて、心臓に死ぬほど悪いのですが……。

「現状でも大丈夫だと思うけれど、より確実にしたいものね……」

ぼつりとつぶやいて、一人ウンウンと頷く生徒会長様。

そして顔を上げてこちらを見る瞳には覚悟完了の文字が見えた。

あ、これあかん奴や……。

「ハチ君、お願いしてもいいかしら……?」

ちよつと、かなり頬を染めて、つていうか真っ赤にしながらこちらを見上げてくる生徒会長様に俺のハートがドキンと跳ね上がる。

心臓の鼓動がとんでもない事になっているが、そろそろこちらでも覚悟を持って答えねばなるまい。

「生徒会長……」

「ハチ君……」

見つめ合う俺と生徒会長様、羞恥心を責任感で打ち消している生徒会長様には申し訳ないが……。

「冗談です」

「よろしくおねが……ほえ？」

俺の言葉に呆ける生徒会長様。美少女はどんな表情でも可愛らしいものだとよくわかるね。

「ですから……冗談です」

「え……え!?!」

「正確に言うと、全身スキャンすれば効率上がるのは事実です」

「じゃあ……」

なんでそんな脱ぎたがるの……??そう思ってしまうのは俺の心が汚れているからだろうか……。

「ここにはその設備がないっす」

「……」

あとついでに生徒会長様を脱がす度胸がそもそもありません!とはさすがに言わな

かったけど、てへぺろって感じで言った事で、からかわれていた事に気づいたのである。生徒会長様がプルプルしながらうつむいた。

やっべ……やりすぎた……？

「あ、あの……生徒会長……？ さえぐさせんぱ……い？ もしも……し？」

「ハチ君の……エッチ」

「ぐほおっ!!」

顔を真っ赤にして涙目で見上げながらそう言ってくる生徒会長様に俺はいろんな意味で撃墜されてしまうのであった。

それからしばらく生徒会長様にひたすら謝り倒して土下座して、今度なんでもいう事を聞くと約束させられた。一体何をさせられるのか今から恐怖しかないが、仕方が無いのだ。

その後は普通に生徒会長様のCADをチェックして問題ない事を確認して、あれこれと話に付き合わされたのであった。

いや、あんた明日の一発目からでしょうが、さっさと寝ろよ。

ハチ、生徒会長様の担当をする

九校戦初日が始まった。最初の種目はスピードシューティングだ。

「それじゃあ、今日はよろしくねっ!!」

「ふあい」

やる気マックスオリックスな表情で瞳を輝かせんばかりに活力をみなぎらせる生徒会長様が満面の笑顔で胸の前で両手をぐつと力を込めている。

その表情はとても魅力的だとは思うし、寄せられたおっぱいが素敵な感じになっていくし、なんならいつも妹様に見慣れている俺ですらドキリとするところもあるのだが、それはそれ、これはこれ。である。俺は眠気を我慢しながら気の無い返事を返す。

「もうっ！もっとしつかり応援してくれてもいいじゃないっ！」

「はあ・・・さーしえん・・・」

俺の反応がよっぽど気に食わないのか今度は両手を腰に当てて、頬を膨らませて怒っています、と言わんばかりだ。

俺の反応が悪いのが原因なのは理解しているが、それにしてもこの生徒会長様は九校戦第一試合で優勝間違いないとか言われている事にまったくプレッシャーなど感じて

いない様子である。

「さすがにここ何日も徹夜に近い状態が続いているので、流石に眠いっす・・・」

「あら？ そうなの？ やっぱバトルボードは・・・」

「いや、まったくもって問題ないっす！ 会長、一発ドカンとかましてやってください!!」
暗に昨日あんたが寝かせてくれないせいだよって言う感じで軽くジト目で言うところしい事を言ってくるので食い気味に訂正しておく。

「あらそう？ よろしくね？」

「ういっすー」

この生徒会長様、九校戦の参加を俺が断りまくっていたのを根に持っているのか、事ある毎に天使達を利用してきやがる。

間違いなく達也か妹様の指金ではあろうが、俺が意地でも天使光井の担当をやらうとしたのを見ていたこのあざと会長様は事ある毎に俺を担当から外すような雰囲気醸し出して俺が慌てるのを見て楽しんでいるようなのだ。

今もすげえ楽しそうにこっちを見ているしな。調子にのつてるとそのわがままおっぱい揉むよ？ こねくり回すよ？ ……勿論そんな度胸は無いので、軽くジト目を向けるくらいしか出来ないのだが……。

それにしても……。

「すげえ人気ですね？さすが美少女生徒会長にして十師族の直系にして九校戦2連覇中の人気ナンバーワン選手ってところですかね」

あとあざとランキングでもナンバーワン。もちろん言えんけど。

「そう？アリガト♪」

「ああ、あとはエルフィンスナイパー・・・でしたっけ？」

厨二っぽいネーミングだね。たぶんこの九校戦が終わったら妹様と姉さんにも付きそうだけれども。あとは何だっけ、カーディナル・・・ジョン？とか？よりにもよってプリンスって呼ばれている恥ずかしい奴もいるらしい。俺がそんな呼ばれ方したら家から出れんね。

そう思っていると、やはり厨二ネーミングはお気に召していないのか、生徒会長様が苦い顔をしていた。

「それね・・・応援してくれているのは嬉しいのだけれど・・・」

「厨二っぽくて恥ずかしいですか？」

「ええ・・・」

「まあ、あれですよ、あれ・・・ええと・・・ふあいと？」

「もう少しちゃんと励ましてくれないかしら!？」

やっぱり生徒会長様も恥ずかしいようだ。だよね？

まあたぶん妹様もスノークイーン的な名前が付くだろうし、姉さんなんかすでに学校で爆炎の支配者って言われてるしね、大丈夫大丈夫ってうまい事言ってフォローしようと思っただけ、特に何も浮かばなかったので適当になってしまった。

生徒会長様から突っ込みが入るが、そこは勘弁してほしい。俺に社交性を求められても困るのだ。

すると、何がおかしかったのか、生徒会長様がぐすくすと笑い始めた。

「ふふ．．．」

「なんすか？いきなり笑われるとちよつと傷つくんですが？」

急にこつちを見ながらぐすくすと笑われると何やらかしたか不安になるよね？ズボンのチャックとか寝ぐせとか、あと背中になんか張られたりとか？ちがうか？

「ふふ．．．ごめんさい。そうじゃないの」

そうじゃないといいながらもぐすくすと笑われている件について．．．揉むよ？

「ふふ、やっぱりハチ君と話すのは楽しいわね。弟がいるってこんな感じなのかしら？」
「その質問には俺の持つソースは役に立てそうもありませんね．．．」

達也を普通の兄弟の参考にしてはイケナイ。なんの参考にもならないからね。一応義兄って事になるから俺にも弟はいない。この生徒会長様の質問に応えるには姉さんを連れてくる必要があるな。それでもソースが俺と達也なのでやはり参考にならない

だろうが。

「ふふ、そうね。ほら、達也君もハチ君も私に対して遠慮がないじゃない?」

「ソウデスカネエ・・・?」

冷や汗をかきながら思わずカタコトでごまかしておく。

確かに、冷静に考えると俺ってば十師族の直系様に対して割と遠慮なく言っていたっていうか要請断りまくってたような・・・これ相手が相手だったら結構ヤバタンだった?
?

今回は笑顔なのでセーフ?セーフだよね?アウト?どうなん??

「だから、とつても楽しいのよ?」

「そうですか・・・」

とても楽しそうにしているのでセーフって事で。って言うか今俺がビビってるのもからかって楽しんだようだ。まあ楽しんでくれて何より?

「あ、でもこないだみたいのはやめてね?」

そう言つてウインクしてから行つてくるわねと試合位置に向かう生徒会長様に俺は心の中で解りました、サー!と返事しておく。

っていうか、あんたこれから試合だつてのにホント余裕ですね。

まあ飛んでくる的を当てるだけなんてこの人からしたらお遊戯みたいなもんだらう

から緊張のしようも無いんだろうけどさあ……。

それからおおかたの予想通り、パーフェクトで終わる生徒会長様。楽シヨっすね。
ニコニコ笑顔で戻ってくる生徒会長様に俺はタオルを差し出す。

「さすがっすね」

「アリガト♪」

この程度この人からすれば兎戯にも等しいんだろうが、それでも知覚魔法を併用しつつ遠距離魔法での確に打ち抜くという行為を5分間も続けていれば汗くらい掻くというというものだ。

俺の差し出すタオルを嬉しそうに受け取ってしっとりと汗ばんだ顔を拭く仕草がみように色っぽいのは気にしないようにする。

そのまま俺と生徒会長様は控室に向かう。

「まあさすがに予選程度で足をすくわれることは無いっすね」

「ふふ、そうね」

控室に着くと、生徒会長様はイスに座ってふう、と一息ついた。

水分補給も大事なので俺はそのままスポーツ飲料も差し出しておく。

「ふふ、ありがとね？本当に助かるわ」

「これも仕事なんで」

輝くような笑顔で感謝されても照れるつついの。俺はふいつと視線を外して頭をガシガシとしてしまう。童貞かつつの。童貞だよ。

そんな俺の態度がお気に召したのかさらに楽しそうにくすくすし始める。

俺はそんな空気が恥ずかしいので、空気を換えるべく生徒会長様の使っていたCADを手を取った。

「とりあえず、次の試合まで時間ありますけどどうします？俺は念のためコイツを調整しておきますけど？」

「そうね……」

俺の問いかけに生徒会長様が考えるようなしぐさをする。

「この後、バトルボードの予選もありますが」

「時間的には難しいでしょうね……」

達也達は生徒会長様の決勝トーナメントまでバトルボードの応援に行くようだ。

スピードシューティングの他の参加選手には見向きもしないのが流石と言わざるをえないだろう。

ついでに言うバトルボードの予選の後、どうやら達也は軍の御中達に呼ばれているようで、お前も来るか？と聞かれたが当然のように断っておいた。

俺が生徒会長様の担当をしているのを知っていて聞いて聞いてくる達也の性格の悪さが伺えるぜ。

そんな事を考えていると生徒会長様も考えがまとまったようだ。といっても大して選択肢があるわけでは無いのだが。

「そうね、昨日は私もあまり休めなかったし、次の試合まで休んでいようかしら？」
「わかりました」

それじゃあそれまでCAD調整して、俺も少し休憩していますね。そう言おうとした。

しかし、生徒会長様が俺の横に座ったかと思うとそのまま横になって俺の膝に頭を乗せてきおった。あぶなくビックリしすぎてCAD放り投げるとこだったわ。

横になる時にふわりと香る香水の香りと膝に感じるかすかな重み、さらりと流れる艶やかな髪に俺の心臓がドキリとビートを刻む。ほんとこの人心臓に悪いわあ……。

「あの一、生徒会長？」

「ごめんなさい、少しだけ、このまま休ませてくれないかしら……？」

またいつのものようにからかっているのかと思つて突つ込もうとした。

そう思つて膝の上に頭を乗せている生徒会長様を見ると、予想に反して真剣な表情でこちらを見てくるではないか。

その表情はまるで、プレッシャーをまったく感じさせなかったこれまでとは違って、少し弱気になっているようだ。

涙目になりそうな、不安を押し殺したような表情でこちらを見上げて来ていた。

当然、そんな表情でお願いされてノーと言えるほどクズになつたつもりは無い訳ですて……。

「はあ、しょうがないですね……」

「ふふ、ありがと。じゃあ少しだけ休むわね?」

「はいはい……」

俺が許可すると、生徒会長様は心底嬉しそうに微笑みながら目をつぶり始める。

でもさ、ちよつと硬いわね……とか、頭を撫でるとか出来ないのかしら?とか注文が多くないですかねえ?

仕方ないのでなぜかある横になれるほど長いソファに移動して、俺の膝の上にタオルを引いて、それからなぜか生徒会長様が持つていたアロマを焚いて改めて俺の膝の上の頭を乗せて俺に頭を撫でさせながら眠り始めた。

いや、ホント注文多いし、ソファやらアロマやら準備するくらいならベット持つてきてそこで寝ろよとツツコミたくなるが、まあきつとプレッシャーがあつたのだろう。だから、これくらいで少しでも生徒会長様の心が軽くなるのならまあ良いかとそう思う事

にした。

ふう、まったくやれやれだぜ。

「動かないで」

「……………はい」

……………こんのママ……………。

ハチ、生徒会長様の担当をする2

生徒会長様が優勝した。

あざと選手権ではない、スピードシューティングでだ。いやー、めでてーつす。

準々決勝から対戦形式での撃ち合いになったとは言え、たかだか高校生程度では生徒会長様の相手には役不足と言わざるおえまい、役者不足だったかな？まあどっちでもいいか。

CADは俺が調整したとはいえ、ほぼほぼ生徒会長様がご自身で調整していたのちよろつと手を加えたくらいでほとんど俺の仕事は無く、試合も無双状態で完勝したらしい。

それはもう対戦相手が可哀想に思えるくらい圧倒していたらしい。

一校のテント内でも幸先の良いスタートだと言やんやんやお祝いムードになっているそうだ。

……さつきから俺がらしい、だのだそうだ、と言っているがそれがなぜかわかるかい？

お前生徒会長様のエンジニアやってたんやろ？ってそう思うだろう？それなのになぜらしいのだそうだ、と言っているかと言うとだね。

「ハチ、ちゃんと話を聞いているのかしら？」

「はい、すみません……」

妹様に土下座させられてる事から察してくれい……。

え？無理？ちゃんと説明しろって？

ふう……やれやれ……しょうがねえなあ……そこまで言うなら説明するのもやぶさかでもない。

……だが、聞いてから、後悔しても知らないぜ？

……それでも、聞かない？

……へっ……オーケイ。そこまで言うなら話そうか。

あれはそう、生徒会長様の試合中にだな……。

「まったく、折角会長がハチを指名してくれたというのに、試合中にその担当が居眠りするなんて……ちゃんと反省しているのかしら？」

「返す言葉もありません……」

てへ。

いろいろ引つ張って見たけどただそれだけなんだぜ？……ワイルドだろお？

まあ脳内でそんな事を考えているのも仕方が無いのだけぞ？

だって、生徒会長様がスピードシューティングで優勝してからかれこれ2時間、その間ずっと俺は妹様に正座させられて説教されているのだから．．．。ぴえん。

最初は普通に説教されてたのにもうだいたい前から俺の普段の態度とか普段の愚痴とかもう最初の内容まったく関係なくなってるんだもの．．．それでやつとさつき元の話に戻って来たところ。

信じられる？まだまだ話したりないって顔してるんだぜ？この妹様ってば。

当事者の生徒会長様ってば優勝した後、疲れたわーって言いながらそのままテントの方に行つて、でも俺の端末にしつかりと居眠りの件でお話がありますって連絡があったもんだからもうね。

はあ、後で行くの怖いなあ．．．何言われんだろなあー．．．。

「まったく、明日も会長の担当があるのに．．．」

「いや、だがな．．．俺も仕事やらでここ最近ほとんど寝てないんだが．．．」

とりあえず言い訳くらいはさせて欲しいのだが．．．お前らのおば様から仕事無茶ぶりされたからなんだけれど？と視線だけで訴えて見る。達也も妹様もゴスロリ様嫌いだからヘイトあつちに行つてくんないかな．．．。

もう正座のし過ぎで足の感覚全くないんだけど．．．。

そもそも俺だって意識を保とうと頑張つてはいたんだ、でも、最後には意識を失うレベルで飛んでしまつてね・・・。

だから許してよ、マイシスター！とそんな感じで見つめると、妹様がヤレヤレという感じのため息をついた。

あきれた感じのため息をついても絵になるよね、マイシスターは。

「それもわかつているわ。それでも、ハチは会長とお姉さまの担当なのだから・・・」
ああ、また始まつてしまった・・・。

またもやつらつらとしゃべり始めるマイシスターに俺の意識も限界を迎え始めていた。

しばらくは頑張つたのだが、・・・もう・・・無理・・・そのまま俺の意識は再びブラックアウトするのであった。

「ハイよー」

あれ？なにしてたっけ・・・？

目が覚めたなう、変な声がでたなう、現状把握中なう。

「あ、起きた？」

「・・・姉さん？」

ようやく俺の灰色の脳細胞が活動を再開する。

どうやら俺はベッドに寝かされていたようだ。ベッドの横には椅子にすわりながらこちらを見つめる姉さんの姿があった。それだけで絵になる姉さん。思わず視線が固定されちゃうね。

ああ、そういうえば妹様の説教の最中に意識が飛んだんだっけか・・・。やつべ、後でまた説教コースかしらんと戦々恐々としていると、姉さんが俺のおでこに手を当てて体調を気づかっってきた。

「ハチ、気分はどう？まだ調子悪いかな？」

「いや、少し眠れたおかげで大分回復した。あんがとな、姉さん」

心配そうな瞳で至近距離から見つめてくるもんだからちよいと照れてしまうぜ。

妹様ばかりが注目されているけれども、姉さんも妹様に匹敵するほどの美貌を持っているからそんな至近距離から心配そうに見つめられると心臓にいくくない。

「それは良かった。ごはんはいる？持ってこようか？」

「ああ、そうだなあ・・・」

どうすつぺかなあ・・・と考えていると、そのころになつてようやく、俺のベッドの

横、つまり姉さんの隣にもう一人いる事に気づいた。

「んう・・・ハチ、もつとしつかりしなさい・・・」

「眠つてても説教すんのかよ・・・」

そのもう一人、妹様はどうやら眠ってしまったているらしく、寝言を・・・寝言だよね？を小さくつぶやいていた。夢の中でも説教するつてどんだけやねん・・・。いつもごめんね？

「深雪もハチの事、心配してたんだよ」

「ええ・・・？」

姉さんがクスクスと微笑みながら話してくれるがさすがに信じられないでゴザル・・・。

まあでも、こうしてここにいる以上ある程度心配はしてくれたのか・・・？まあ、説教を短くしてくれればこうはならなかったのであれではあるが・・・。これがマツチポンプってやつか・・・？

「まあ、とりあえずわかった。そう言えば、今何時だ？」

「えつと、今は夜の10時くらいかな？」

ふむ、思ったよりも眠れたようだ、これならなんとかなるかな？

「了解、これから明日の試合の準備するわ、姉さん、すまないが後で軽くつまめるものだ

け部屋に持ってきてくれるか？」

「ふふ、わかった。後で届けるね？あと、準備の件は達也には先に言ってるよ」
「助かる」

さすが姉さん、後で達也に手伝ってもらおうと思っていたが、手間が省けたぜ。

そうと決まれば早速行動するかね。あんま仕事したくないけど、あんまり適当こいて
妹様がまた怒ってもあれだし、天使達も悲しんじまうもんな。

俺は妹様をおこさないようにゆつくりとベッドから出て、変わりに妹様を寝かせる。

「んじゃあ行ってくる。とりあえず食うもんは深雪が起きてからでいいから」

「ふふ、ハチはやっぱ優しいね」

優しい訳じゃないやい、ただ単に妹様をおこしてまた説教されたくないだけだ。そ
う言い訳しても姉さんはクスクスと微笑むばかり。

気恥ずかしくなつて来た俺はんじやあ行ってくる。と姉さんに伝え、姉さんがいつて
らっしやいと見送ってもらい部屋を出ていく。

「さて、状況を確認して、明日のクラウドの出場選手の最新のデータをチェックして、C
ADの確認して・・・達也はどのくらいやってくれたんだ？」

そうして、九校戦初日が終わった。

なんとか達也が半分以上の確認項目を消化してくれていたので俺もすぐに作業を終える事が出来た。

それから妹様と姉さんが俺と達也に夜食を持ってきてくれて、達也と妹様が兄妹らしからぬやり取りをしていたが、まあそれはいいだろう。

生徒会長様が絡んでくるかと思っていたが、なんだかんだで今日競技をやっていたし、昨日もあんま寝てないようで、想定よりはるかにさつくりと解放された。

んで、2日目が始まった。

「さて、ハチ君、達也君、今日はよろしくね？」

「ういっす」

「わかりました」

今日も一発目から生徒会長様のターンだ。

笑顔で宜しくと言っていているけれど、目がお前今日も寝たらわかかってんだろうなって言ってる。もう昨日とはいろんな意味で気迫が違うね。こわい

達也はひょうひょうとしていいるからコイツに任せて俺は他の人のところへ行こうかなっ

て思ったたら、がっしりと、しつかりと俺のブルゾンを掴んでいる生徒会長様、その手はしつかりとつかんでおり、そこからも逃がさねえぞという気迫が伝わってくる。

いや、その気迫試合に向けるよと思うが、昨日同様にたかがテニスの発展版の試合程度でこの生徒会長様が敗北するわけもないのでなんともいえない。

「今日は、今日こそはよろしくね?」

「ハイ、ヨロシクオネガイシマス・・・」

うん、今日も居眠りしたら本格的にどうなるかわからんね・・・。

俺はちろりと達也の方を見る。

するとそこにはしつかりと生徒会長様に確保されている達也の姿が。

「達也君もよろしくね?」

「はぁ・・・」

諦めよう・・・。

だな・・・。

そんな感じで達也と視線で会話する。大魔王様からは逃れられないのだ。

ハチ、モテ期が到来する・・・？

「圧倒的じゃないか・・・」

「そうだな、相手には気の毒だが、高校生レベルでは会長の相手は厳しいようだ」

俺と達也がコート横で見守る中、我らが生徒会長様から魔王にジョブチェンジしたあとと生徒会長こと七草先輩が圧倒的なまでの差で相手を蹂躪していた。

相手が必死こいて特化型のCADをボールに向けて魔法でボールを打つてもネットから魔王様のコートに10cmほど侵入したあたりで倍速にして返球するという鉄壁っぷり。

相手も魔王様も魔法のみでの試合の為、魔法力の差があらゆるまでに試合内容に反映されてしまっている。

「しっかし、さすがは十師族って言うべきか？低反発ボールでここまで確実に返球するとか深雪でも難しいだろ」

「そうだな、魔法の資質の差もあるだろうが、見事なものだ」

練習の時にも思ったが、確実に高校生の大会に出ていいレベルじゃないと思うの。

だって、相手はもうあとの事なんか考えずに全力で魔法を行使しているのに、魔王

様ってば汗ひとつ掻かずに静かにコートの中真ん中に佇んで圧倒しているのだもの・・・。
いや、ほんとにね、温度差がひどいの。

相手も魔法のみだけど、照準を簡略化する為に必死こいてボールに向けてCADを構えるのに対して、魔王さまはコートの中央に立ち、静かに、祈るようにCADをかまえるだけ。

必至こいて駆けまわる相手と静かに、静謐な空気すら感じさせる魔王様。

それでいて点差は未だ魔王様が失点無しときたら相手も必死になるというもの。

勝てないまでも、せめて一太刀は、という思いが表情からうかがえる、それほどの覚悟をもって挑んでも1点すら奪えない。これが

「これが、十師族・・・」

「ああ、姉さんの練習相手に唯一なれただけのことはあるな」

ほぼ身体能力でのみ挑む姉さんだが、その圧倒的なまでの身体能力により素の力でボールを打っただけで相手が吹っ飛んでいた。最初見た時は意味がわからなかった。

魔法で返そうとしてもよほどの干渉力がないと無理という生きるチート。それが姉さんだった。

男子の優勝候補の剣道先輩はうかつにも姉さんのボールを身体能力のみで打ち返そうとして吹き飛ばされ危うく出場できなくなるところだったとか。他の選手も姉さん

の打球を返せるほどの干渉力が無く、数少ない試合になったのが魔王様ともう一人の先輩だけだった。

低反発ボールを身体能力だけで相手を吹き飛ばす姉さんもあれだが、その打球を魔法力できつちり返し返すのは流石十師族といえる。

そんな事を考えている間にも第一セットが終わったようだ。

相手選手が泣きそうな顔でベンチにうずくまるのに対して魔王様は余裕の表情でこちらに歩いてくる。

「お疲れっす」

「お疲れさまでした」

俺がタオル、達也がドリンクを魔王様に渡す。・・・なんで俺ら二人で魔王様の介護してるんだ？今更だけど。

そんな事を思っていると、魔王様が俺からタオルを受けとり、ちよつとびくつきながら達也からドリンクを受け取っていた。

（おい、視てたのか？）

（ああ、どうやら気づかれていたようだ）

普通なら気づかないだろうが、今回は至近から集中して達也が魔王様を視ていたせいで気づかれましたよ。それでも俺達は何事もなかったように接するのだが。

そう思っていたのは魔王様も同じようで、平静を装いつつ、腰に手を立てて頬を膨らませる。

「お疲れ様でしたって、まだ試合は終わっていないのよ、気を抜いちやダメ」

気を抜くなつて俺らに言われてもどうしようもないのだが、そんな事を思つてもいちいち突つ込むわけが無い。

プンスコあざとアピールしているのか素なのか解らない魔王様はこんな時でもいつもどおりなようだ。

「いや、もう終わりですよ」

「えっ?」

きよとん、とする魔王様に俺と達也は説明する、あんた、やりすぎたんだよ・・・的な感じで。

すると魔王様はほえろつて感じで俺と達也を見てくる。なにその可愛い表情・・・。「見ていただけでそこまでわかるものなの?」

「キチンと見ていればわかりますよ」

「後半はペースが明らかに低下してたんで」

俺達が説明すると、ちょうど相手側から棄権の旨の放送があった。

それを聞いた魔王様が呆けた表情で突つ立てんのはなかなかレアだったとだけ言っ

ておこう。

「んじやあ俺達は他の選手のとこ行ってきます」

「会長は次の試合まで休んでいて下さい」

「・・・ええ、わかったわ。よろしくね・・・」

それから俺と達也はわかれてそれぞれの担当の元に向かう。

いうてもどちらも自分でCADの調整が出来る先輩達なので俺も達也も一応の念のためいる、という部分が大多数を占めるのだが。

そして俺が担当するのが光の加減で紫にも見える長い黒髪をツインテールにしている容姿端麗な3年の先輩だ。

まあ、魔法師で九校戦の代表になるほどの魔法力があるのだからある程度容姿端麗なのは当たり前とも言えるが、それでもこの先輩もまた十師族ほどではないにしろ注目されているのは間違いない。

「調子はどうですか？天々座先輩」

俺がそう質問すると、先輩は聞き分けのない弟を叱るような表情でこちらに人差し指を向けてくる。

「おい、いい加減苗字で呼ぶのをやめろ。私の事はリゼでいいっていつも言ってるだろうが」

「その件につきましては後日持ち帰って前向きに検討します」

「それいつも言ってるが、結局ダメな奴だろう!?!どうして名前で呼ぶのがダメなんだ!?!」
先輩はそう言つてぷりぷりと可愛らしく怒っているが、名前で呼ぶとかなんか恥ずかしいじゃん・・・? ねえ?

そう言っているのに決して譲つてはくれないこの先輩。かなりの有力選手らしく、魔王様がいなければ優勝間違いなしとまで言われているそうだ。

そんな先輩だが天々座という苗字で呼ばれるのが嫌らしく、会うたびにこのやり取りをしているのだ。

女子を下の名前で呼ぶとか妹様くらいにしか出来ない俺が先輩の、それもとびきりの美少女で校内にファンクラブもあるような人を下の名前で呼んだらどうなるかなんて考えるまでもなくつてやつだ。いや、まあ今更殺気を飛ばしてくるやからが増えたところでもうあれではあるのだが・・・。

こうやってぷりぷりしている先輩が可愛くてからかってしまうのも理由の一部でもある。もちろん言えないので心に秘めておく。

「そんな事より先輩、CADの確認をお願いします」

「そんな事つてだなあ・・・絶対に呼ばせてやるからな」

「はいはい、優勝したら考えますよ」

俺がそう言うのと優勝かぁ・・・と考え込む先輩。

いや、そんな真剣に考えなくてもいけない？九校戦の間だけちよろつと臨時のエンジニアやってるだけの俺の呼び方とかそんな重要？

「真由美に勝つのはなあ・・・でも、勝てば呼んでくれるんだよね？」

いや、考えるだけですわ・・・そう言いたかったけど、どうやら先輩は本気で魔王様に勝つ気でいるようだ。

真剣なその表情に思わず出かけた言葉を飲み込んでうなずいてしまう。

それを見た先輩は言質はとったぞ？と言わんばかりにやる気に満ち溢れた表情で笑顔を浮かべた。

「ようし！ハチ、行くぞ！打倒真由美だ!! ついてこおーい!!」

「へい」

「声が小さい！行くぞおー!!」

「おー」

こうして、姉さんの練習相手を務めることが出来たもう一人の先輩、天々座理世先輩のクラウドボール初戦が始まった。

「まあ、会長と当たるのは決勝なんですけどね」

「それを先に言えー!!」

いや、だつてねえ？

魔王様ことあざと会長様と試合する気マンマンだったのになんか言いづらいじゃないですかあー？

顔を真っ赤にしながら恥ずかしそうに怒る先輩はめちやくちや可愛かったとだけ伝えておこう。

—— 白熱した試合 ——

「まあ当たり前のように勝つんですけどね・・・」

「ああ、なんとか初戦は抜けたな！」

いやーよかったよかった！と笑う先輩。

煌めく汗が眩しいっす。先輩は剣道先輩と同じようにラケットで試合するスタイルだったので1試合ごとの運動量が多く、それなりの汗をかいているはずなのだが、やたらいい香りをさせながら近くに座るせいで俺の心臓のビートが早まるのを感じる。

それにしてもほとんど失点せずに勝利をしている当たり流石は有力選手の一人に数えられているだけの事はある。汗こそ掻いているもののまだまだ体力的にも魔法力的にも余裕そうだ。

「いやー、実に見事な試合でしたね、流石っス」

「ああ！ありがとう！」

俺が適当にヨイショしてみても純度100%な笑顔で感謝の言葉を告げる先輩。

この先輩邪気がなさすぎい!!妹様とかあざと会長とか達也に慣れた俺からすると心配になるレベルなんだけれど!?!大丈夫か!?

天使達に並ぶレベルで純粋な人がまだいるとは思わなかったよ・・・これ一步間違つてたら先輩も天使呼びしてたかもしれんな・・・。さすが有力選手だぜえ・・・。

その後も試合は進み、達也に担当してもらっていたもう一人の先輩は準決勝で魔王様に敗北し、そして決勝戦がはじまろうとしていた。

それは一校対一校、あざと生徒会長こと魔王七草パイセンVS得意技はCQCという各部活の助っ人で有名な天々座先輩の試合が始まろうとしていた。

ちなみに去年もおんなじカードだったらしい。そんな2人が試合開始前からそれぞれ控室前で火花を飛ばしあっていた。

「行くわよ、ハチ君？」

「どうした?いくぞハチ?」

なぜか俺を挟んでだが・・・意味がわからないよ・・・。

「リゼ？ハチ君は私の担当なのだけけど？」

「私の担当でもあるぞ？それに真由美はスピードシューティングでもう担当してもらっただろう？」

モテ期？モテ期なのん？

2人でそれぞれ俺の右手と左手を確保しながら控室に連れて行こうとしている。おいおい、そんなに引つ張たらブルゾンの袖がだるんだるになっちゃうじゃないか……。2人共もつとしっかりと抱きこむように、具体的に言うとその立派なバストで腕を包むようにしてくれてもいいのよ？そんな事を考える余裕があったのは最初だけだった。

「そもそもリゼは自分でCADを調整できるじゃない！」

「それは真由美もだろう！」

最初は静かに言い合っていたのだが、だんだんヒートアップしていく2人。なにこの状況？試合前なのにすげえ白熱してるし、俺の袖はだるんだるんになるしどこから突っ込めばいいと思う？

達也に援護要請しようと思ったけどこの状況を見越していたのか雲隠れしているしでもうどうすればいいのん？

俺の袖をだるんだるんにしながらキャットファイトをしている2人に挟まれながら悩む俺。

結局どうせ同じ高校だし、前回も同じカードだったしでめんどくさくなったのか、キヤットフアイトに巻き込まれるのがめんどくさくなったのか同じ控室に案内される事になった。

ねえ、絶対めんどくせえなこいつらって思ってたでしょ？そんな視線を大会委員の人から向けられたのはなぜか俺だけだった。納得できないぜえ・・・。

ついでに最後まで2人とも俺の腕を抱え込むようにはしてくれなかった。そして、納得のいかない俺をスルーしてクラウドボールの決勝戦が始まった。

ハチ、黒歴史を刻む!

「……………ニコニコ

「……………グヌヌ

「あ……………その……………なんだ?」

何この状況!?なんで俺ここにいなきやいけないのん!?

右を見ればニコニコ笑顔の魔王様、左を見ればグヌヌつてる先輩。

あ、ちなみに今は決勝戦が終わった直後なのだが、間に挟まれてる場違い感すらある俺ですこんにちわ。

室内の空気は最悪だ、いや、ある意味美少女の汗まじりの香りに包まれて最高ともいえるがもちろんそんな事言えない訳でして。

んで?なんでおれ間にいるのん??…つて担当エンジニアだったからだよバカヤロー!おもわずセルフで突っ込んでしまっぜえ。

なんでこんな状況になってるかというと。あれですよ……………。

「優勝オメデトウ、真由美」グヌヌ……………

「アリガト、リゼ♪あなたも準優勝オメデトウ♪」ニコニコ

「あー・・・その、オメデトー（ぎまっす・・・）」ボソボソ
という訳なのだ。

ニコニコ笑顔の魔王様と涙目でグヌつてる天々座先輩が睨み合っているのだが、なぜか間に俺も居るっていうね・・・。

俺がいる意味がわからないよ・・・。いや、それぞれの担当エンジニアだったんだからって理由は理解できるのだが、それでも納得いかないというか・・・。

そもそも担当って言ったって、魔王様も先輩も自分でCADの調整が出来るので、俺がやったのなんて、ちよろつとゴミとつたりちよろつと調整したくらいなので胸を張って担当ですと言えない状況なのだ。

それなのに、なぜかこの2人の間にポジションニングさせられているっていうね・・・。
イミワカンナイ。

俺がそんな感じで黄昏ている間にも魔王様と先輩のやり取りは続いていたが、細かいところは割愛しておく。

ちなみに試合内容はそれはもうすごい激戦だった。今回はちゃんと見てたのだが、俺も思わず手に汗握る試合内容だった。九校戦の歴史に名を遺すレベルだと思う。

魔王様は魔法オナーのスタイルで、逆加速の魔法、ダブル・バウンドを主体に加速系魔法を使って試合をして、先輩は魔法とラケットのスタイルで先輩の固有魔法、パト

リオットシリーズで魔王に挑んでいた。

女子のクラウドボールは1セット3分、3セットマッチで行うのだが、最終セットにまでもつれ込む白熱した試合だった。

ここまでの試合で無失点だった魔王様もさすがに先輩のパトリオットスマッシュやパトリオットドライブには確実に魔法で返球しきる事が出来なかったのだ。

すると、さすがの魔王様もダブル・バウンドのみでは先輩に勝てないと判断し、他の加速系魔法を使用したことで形勢が魔王様に傾き、そして優勝したのだ。

「それにしてもリゼ?今回は随分必死だったわね?」

「ああ・・・でもまさかパトリオット・インパルスが破られるとは思わなかったよ・・・」
そう、先輩は形勢が魔王様に傾きつつあった時に、いまだ未完成の必殺技を使用したのだ。

その威力はすさまじく、結果一時的に形勢は先輩に有利になったのだが、未完成の技を使用した反動で、徐々に先輩の動きが鈍くなり、そして敗北してしまったのだ。

たしかにあそこでパトリオット・インパルスを使用しなければ、対抗手段のないまま敗北していただろうが、それでも後遺症が出かねない技を選択するほど勝利に貪欲になっていたのだろう。

魔王様はそれが不思議だったようで先輩を見ていた。

「それで? どうしてなの?」

「優勝したらハチに名前でもよんでもらう約束だったんだ・・・」

「んん?・・・え?なんて?」

先輩の返答に思わず聞き返してしまふ魔王様。そう返してしまふのも無理はない。だつて俺もおんなじ事思つたもん・・・。

・・・てかき、え? それなの?? そも、約束もしてないけれど? つて言える雰囲気でもないつていうね・・・。

「だから、優勝したら、ハチに名前でも呼んでもらおうと思つてたんだ!」

「・・・呼んでもらえばいいじゃない・・・?」

恥かしいから嫌つス。これ以上ファンから事故を装つた襲撃を受けるのめんどいっス。

もちろんそんな事言えない訳でして・・・。

「恥ずかしいから嫌だつて言われたんだ・・・」

「ハチ君らしいわね・・・そう言えば私も会長としか呼ばれてないわね・・・」

いや、心の中では魔王様と呼んでますよ? もちろん言えないけれど・・・。

え? それにしてもあんなに必死になつてたのつて、ただ優勝したかつただけじゃなかつたのん?

・・・あれ? これもしかしてあれですか? あれですよね?

俺の時代が来ちゃった系? 来ちゃった系だよね?

いやーでも、いやー! 先輩の気持ちは素直に嬉しいけど、俺には天使という心に決めた幸せの象徴がいるからなあー・・・いやー、困ったなあー。いやー、モテる男はつれーつす!

まあ、でも? 先輩の事は嫌いじゃないし? むしろ好きと言えなくもないというか? 付き合うって言うのもやぶかさでは無いっていうか? あれ? やぶさかだっけ? どっちでもいいか。いやでも、・・・いやー、参ったなあ・・・ははは☆

「折角友達になったのに、苗字で呼ばれるのって寂しいじゃないか・・・」

「・・・ええ、そうね」

ん?・・・あれ?

「何度お願いしても恥ずかしいって言うから、なら優勝したら呼んでくれって約束したんだ」

「ええと・・・それだけ?」

あれあるれえー? おかしいぞおー?

とまどう俺と、俺とおんなじ事を思っていただろ魔王様。

思わず魔王様が先輩に確認しているが・・・。

「いや？もちろん優勝したかった、というか真由美に勝ちたかったから全力でやったぞ？」

「いえ、そうじゃなくて・・・ハチ君が好きなのよね？」

え？そこ聞いちゃいます!?やめて!?

俺の黒歴史に名を刻みそうな事を丁寧に確認しようとするのはヤメテ!!

「??もちろん、友達なんだから好きに決まってるだろ？」

「そう・・・」

・・・べ、別に悲しくなんてないし!?

告白されても天使がいるから断ってたし??べ、別に悲しくなんて無いし?だからその同情の視線向けるの止めてくれませんかねえ?俺のライフがガンガン削られるので、ほんと、やめて。グスン

まあ、でも、あれだ。

ここまで言われたら俺も少しは答えないとだもんな・・・。

だから俺は勘違いしたことを先輩には絶対にばれないようにしよう、魔王様については後日交渉の場を設けるとして。

「はあ、わかりましたよ」

でも、いざ言おうと思うとやっぱり照れてしまう訳でして。俺は頬がいろんな意味で

赤くなるのを抑えきれず、頭をガシガシする。

「リゼ先輩、さっきの最後の技でうで痛めてますよね? 医務室行きますよ!」

「ハチ……私は真由美に勝ってないのに……いいのか?」

良いか悪いかで言えば、今から5分前くらいに時を戻したいレベルで悪いが。ここまで素晴らしい試合をしていた先輩の希望を無下にするほど俺は鬼では無いのだ。

「なんの事ですか? それよりもリゼ先輩、早くいきますよ!」

「あ、ああ!」

「いつてらっしや〜い♪」

大分頬を赤くした俺と、やたら嬉しそうな先輩をニコニコ笑顔で手を振って見送る魔王様がいた。その笑顔は新しいおもちゃをもらった子供のような笑顔で、後の事を考えると恐怖しかなかったが、その辺は今後の俺に期待しよう。

こうして本線での俺の仕事は終わったのであった。

ちなみに、先輩を医務室に送り届けて達也と姉さんのところに行くと、なぜか氷のようなプレッシャーを放つ妹様と、可愛らしく頬を膨らませている天使光井と天使柴田がいて、なぜか俺は全員にデザートを奢る羽目になってしまった。

「てか、これで本線での仕事は終わったと思ってたんだけどなあ・・・」
「あきらめろ」

はあ、とため息をつきながらモニターを眺めると、同じくモニターを眺める達也からはブリザードな返事が返ってくる。

お前、しれつと今回の件に俺巻き込もうとしてるけど、俺はクラウドの決勝戦で俺を見捨てた事、忘れてないからな？

いや、たしかにバトルボードの事故もあれだから調べないとなのは理解できるけども。

「つかなんだこれ？明らかにCADのトラブルにコースには外部からの干渉が入ってね？」

「ああ、明らかに減速と加速の魔法が入れ替わるような細工がされ、水面にも陥没するよな術式が見られるな」

それからいろいろ検証している俺と達也とおかつば先輩にその先輩の婚約者とかいうなんとか先輩のリア充カップル。

それで、スペシャルサンクスとして天使柴田にヨシダも加えて大検討大会が始まる。まあ終始達也のペースで、俺達はそれを聞いたり確認された事に応えるだけなんだけどもね？

最終的にはCADの細工は大会委員会が怪しんでね?というのと、精霊魔法でコース細工されてんじゃね?って事になったので各員気を付けましょうって事になって解散した。

相手の目的はさっぱりだけど、明らかに大会前の犯罪組織やら魔術師が原因だよなあ・・・これは、残りの大会の日数も休めなさそうだなあ・・・そう思いながらその日は終わった。

ハチ、観戦と解説と、それから再びの・・・

九校戦が始まってからこつち、ようやつとちゃんと眠れたどうもハチです。

意識が浮上したような、まだ夢を見ているような、そんなふわふわした状態なう。オフトウンが放してくれない・・・。

そんな事を考えていると、枕元に気配を感じた。

「おはよう、ハチ」

「・・・おふあよう・・・姉しゃん・・・」

まだ寝ぼけつつ、姉さんの癒し系ボイスに俺は半分眠りながら応える。ああ、姉さんの声は癒されるなあ・・・。

「おはようございませす、ハチさん」

「もう朝ですよ？朝ごはんに行きませんか？」

「・・・おふあよう・・・マイエンジェル・・・。あれ？・・・ここは天国？」

姉さんの癒しボイスに加えて天使と天使の声も聞こえる、ああ、そつか、ここが約束の地なんだね・・・。なんで天使の声がするのか若干の疑問もあるが、幸せタイムな俺はすぐにその思考を放棄した。

・・・そう思っていたら、突然の冷気が俺を襲い始める。これ良く知ってるやつうー。
「おはよう、ハチ。お兄様はもう起きているというのにいつまで寝ているのかしら？」

びゅおおお——！と冷気が吹きすさぶようなそんな気配がしたが、そんな事はなく、目をあけると目の前にはおおよそ自然に生まれたものとは思えないほどの美貌を持った妹様が氷の視線で俺を見つめていた。

これ一発で目が覚めるうー。俺の中のいろんな扉が開きそうになるが、これは開いてはいけないやつだ。

「はい、おはようございます！」

それを認識した俺は慌てて飛び起きて妹様と天使達と姉さんに朝の挨拶をする。もちろん開き始めた扉もしめる。

妹様はちよつとあきれたような表情で、天使達と姉さんは笑顔で挨拶を返してくれた。

うん、朝から心臓によろしくないね。

姉さんと天使達で油断させておいて妹様で仕留めるとか鬼のような所業と言わざるおえない。思いつきり目が覚めたじやんか。目覚ましとしてはこれ以上ないほど効果的だけれども。またやって欲しいような、やって欲しくないような・・・、おっと、扉が少し空いてる気配がするね。

うまくいけば朝のまどろみの中で姉さんと天使達のエンジェルボイスを聞きながら二度寝するという最高の時間を迎えられたというのに……もう少し浸らせて欲しかった。

「あれ?・・・そういえばなんでここにいるんだ?」

今更と言えなくもないけれど、なんで俺の部屋にいるのん?ここ達也と俺のツインドったはずなのだが、いつの間に天使のたまり場になったのん?癒されるからもちろん大歓迎なのだが。

「一緒に朝ごはん行きませんか?」

もう一度、そう問いかける天使柴田に勿論俺の答えなんてひとつしかない訳でして。

それから、天使光井と天使柴田、北山（気づいたら居た）、姉さん、妹様と一緒に朝ごはんを食べた。

控えめに言つて死ぬほど目立ってた。美人と美少女と天使の集団と俺だもんね、目立つに決まってる。

グレイと一緒に達也が途中から合流しなかったらヤバかった。ある意味グレイの参

加にさらに注目度が跳ね上がったけど。

でも天使達が可愛らしく食べ物をもぐもぐしている姿を見れたから今日はいい日になるだろうなって、そう思った。

おれが天使達に癒されている間に話は進んでいたらしく、今日はどこの見学に行くかという話になっていた。

といつても昨日は風紀委員長様が妨害にあつてリタイアしたからバトルボードはあれだし、そうなるよ・・・。

「アイスピラーズブレイクが見たい」

ということでは北山の一声で見に行くものが決まった。

クールな表情からは解らないが、九校戦に向ける熱意はこの中で最も高い北山は自身も参加する予定のアイスピラーを見てテンションを上げたいようだ。

まあそれを言うと天使光井のバトルボードは？って話になるのだが、今それを言うと折角緊張が抜けている天使にプレッシャーを与えかねないのでここは黙っているのが吉と言えるだろう。

その後、達也と妹様、北山は参加種目とエンジンアという事で観客席ではなくスタッフ席に行った。

残りのメンバーで観客席に座って観戦する事にした、あれ？もしかして俺、天使一人

占め？

ちなみに千葉と西城、吉田氏はクラウドボールの観戦に行ったようだ。最初天使柴田もそちらに行く予定だったのだが、達也になにかを話しかけられてこちらに来ることにしたようだ。

何を言ったのか解らないが、達也さん流石である。さすおにだ。後でコーヒーでも持つて行ってあげよう。なんか天使2人とグレイを俺と姉さんの監視に付けているような気がしないでもないけど感謝である。

それで、始まるアイスピラーズブレイク。

本戦の女子を観戦しているのだが、なんとと言っても必見なのは優勝候補の千代田先輩だろう。つい最近名前知ったけど。どうもおかっぱ先輩の婚約者らしい。リア充め：おっと、これはもう100年くらい前のセンスだったか？一周まわってまた最近はやり出さないかな？

試合が始まると同時に千代田先輩が放つ魔法でサクツと倒れ始める相手のピラー。その魔法を見て、天使達と姉さんの視線が俺に集まる。

「あれは・・・？」

あれ？これもしかして俺に解説求められてる？一応グレイにも視線を向けて見るが、

グレイも教えて下さいと視線で語っていた。これ断れないやつー。

ふう・・・達也みたいな解説求められても困るよ？それでもいいなら、聞かないか？

「あれは千代田家の必殺魔法、地雷源だな」

「地雷原・・・ですか？」

天使柴田の想像する言葉はたぶん文字が違っていると思われるが、大した問題でもない。俺は説明を続ける。

「有名どころだと、十文字の鉄壁とか、一条の爆裂とか。そんな感じの得意魔法が千代田先輩のここは振動系の地雷源って訳だ。相手は振動を相殺する魔法で対抗しようとしているが、次々と標的を変える千代田先輩に対処出来ないみたいだな」

その後、相手も攻勢に出たが、時すでに遅し、一切の防御をはじめから捨てて攻勢に出ていた先輩にかなうはずもなく、そのまま先輩の勝利で終わった。

「勉強になります」

俺の解説にうんうんと頷いている姉さんだが、姉さんに地雷源は無理じゃないかなあ・・・シンプルに燃やしたほうが・・・って、させないよ？姉さんがこの競技やつたら何が起こるかわからないんだからね？

そう説明すると、姉さんは心底残念そうな表情で仕方ないね・・・ってうなずいてくれた。

天使達も姉さんがやる気になっててちよつと焦っていたようだ。ほつと胸をなでおろしていた。

いやほんと、ここでやったらしやれにならんです、はい。

それから少しして、快勝といえる感じでピースしまくっている千代田先輩の総評に入る。

「まあ、今回は思い切った先輩の勝利だが、やられる前にやれの精神で防御を一切すてるとなると、やりようによつては盤面をひっくり返されるから注意が必要ではあるな」

「そうなんですか？」

俺の説明に不思議そうな顔をしている天使光井。周りを見ても天使柴田もグレイも姉さんも不思議そうな顔をしている。

「やられる前にやれのスタンスだからシンプルに魔法力の勝負になる。戦術的には決して悪くはないが、深雪には勝てないだろうし、振動系の魔法が得意な北山でもやり方次第で勝てると思うぞ？」

「そうなんですか？」

「へえ〜そうなんですね！」

俺の解説にニコニコ微笑んで感心してる天使達の笑顔と言ったらもう・・・癒される。(この上なしだわ。

ちなみに姉さんなら1分かからずに自陣含めて爆砕するからいろんな意味で勝負にならない。

さて、千代田先輩の観戦が終わり、次の試合まで時間が出来たので俺達は少し早いけど昼食をとることにした。

会場を後にした俺達はそのままた外に出ている屋台で軽食をいくつか購入して食事をすることにした。姉さんも祭りの雰囲気を楽しんでいるようで何よりである。

「おっと、飲み物忘れたな、買ってくるわ」

「あ、ハチさん、拙も行きます！」

俺がそう言って立ち上がるとグレイも飲みものを買いに行くことになった。

ついでにみんなの分も買ってこると言っていて俺とグレイが席を離れて飲み物を買うに行くことにした。

「それにしても、すごい人ですね・・・」

「ああ、人が多いな・・・ほんと多い・・・あと暑い」

「ふふ、そうですね、日本の夏は大変です」

そんな話をしながら売店で飲み物を買う俺とグレイ。俺は人見知りつかボツチだし？グレイも人前で顔を晒すのが苦手なのでこの祭りのようなにぎやかな空気は精神的につらい。

・・・なんで俺、この大会に参加してんだろ・・・一瞬本気で帰ろうかなって思ってしまうが、そうすると姉さんや天使達が悲しんでしまうだろうことは火を見るよりも明らかだ。どうにも思考がネガティブになるな・・・。

横を見ると、グレイはこの気温の中でも顔を晒さないようにいつものマント？ ケープ？ をかぶっている。夏使用で涼し気な素材を使用しており、日差しを遮るから意外と涼しいらしい。

そんなグレイの説明に俺はいろんな意味で感心しながら天使達と姉さんが待つベンチに向かうとそこには2人の天使と姉さんとは別にさらにもう3人いた。その3人はなにやら天使達に話しかけているようだが・・・。

それは達也と妹様でも、千葉や西城達でもなかった・・・あれは・・・！！

その3人を認識した俺は即座に全力の縮地を行い天使達と姉さんを守るように立ちふさがりながら小太刀型のCADを構える。

「なぜあんたらがいる・・・？」

「あら？ いちやいけないのかしら？」

俺が殺気を放ちながら真ん中の女を睨むが、相手はにこやかに、なぜ睨まれているのかわからないと言った表情で微笑んでいた。

それがまた、俺の勘に触るつたらもうね。

「答えろ、なぜここにいる？またてんす・・・柴田と光井を狙っているのか・・・」

俺の再度の問いかけにもただニコニコと微笑むだけの女。

・・・いいぜ、そっちがその気ならやってやる。ここでやり合うと後が死ぬほど大変な事になるだろうがもう許せん。

俺の天使達を一度ならず二度までも狙うとは、たとえ神が許しても俺が許さん。絶ゆるだわ。

俺がそうして決意を込めてCADにサイオンを流し込もうとすると、前後から静止の声がかかった。

「すつつぶ、ハチ」

「誤解だ、少年」

後ろから姉さんの、前からは女の横にいた男から静止の声が掛かった。

こいつらはあのテロリストどもに便乗して天使光井と天使柴田を狙っていた魔術師の女と、その女の横にいたスーツ姿の暗殺拳の使い手だ。

ちなみに、中心に魔術師の女、その左右に魔術師の男と、暗殺拳のスーツの三人がいた。

ぶつちやけ魔術師の女は普通の洋服を着ていて、すげえ美人だし、魔術師の男もクー

ルな白髪のイケメンだし、スーツの男は普通のおっさんにしか見えないしでなんとでもバランスの悪い、不思議な集団に見える。

それがなぜ、この場において、天使と姉さんに声を掛けて来ていたのだろうか？不思議に思うものの、相手からも、姉さんからも緊張感が感じられない。

「どういう事だ？姉さん？」

「え〜つと、そうだなあ・・・」

俺が魔術師の女達から視線を外さずに聞くと、姉さんからもどう答えたものやらって感じの声が返ってくる・・・俺はそれを聞いて、また女達に視線で問いかけると、魔術師の女は当然の事だと言うように微笑んだ。

「可愛らしいお嬢さんがいたからナンパしてたのよ」

「・・・・・・は？」

「ナンパよ」

いや、聞こえなかった訳じゃない・・・理解出来なかったただけだ・・・。どういう事だっただよ・・・？

ハチ、めんどくさい事に巻き込まれる

なんかいろいろ突っ込みどころのある事をのたまった魔術師の女にあっけにとられていた俺だが、天使光井がちよいちよいと可愛らしく俺の袖をつまんできた。カワユス。

「ハチさん、場所を変えませんか？」

「……そうだな」

少し頬を染めながら、どこか恥ずかしそうに、可愛らしく上目遣いで俺にそう訴えてくる天使がいた。

思わず抱きしめてしまいたくなくなってしまったのは仕方がないと思う。ちよつと不安そうに、とうか恥ずかしそうにしている天使を「大丈夫だよ」って言いながら抱きしめて安心させたい。

・・・うん。安心させられるわけが無いよね・・・はは、笑えるだろ？イケメンならまだしも、目以外はそこそこ整ってるレベルの俺が抱きしめたらもうね・・・。

天使の優しさからして訴えられる事は無いけど、今後は俺に微笑みかけてくれないだろうことはわかり切っている。

だから俺は抱きしめたいという気持ち在必死に抑え込んで、それで、いい加減周りからの注目を集めすぎていたこの状況から脱するために移動する事にした。

美人と美少女のオンパレードに、嫌悪なムード漂ってれば注目されるに決まってるもんね。

天使柴田と天使光井を守るように俺と姉さん、 그레이が魔術師の女と男と暗殺拳のおっさんから守るようにしながら移動した。

しかし、こいつらの目的はなんだ・・・？ さつきからニコニコと微笑みながら俺達について来ているし、ちよいちよい 그레이と姉さんにも「可愛い服に興味はないかしら？」とかめっちゃや気になる事を聞いてるし。もう少し詳しく・・・、いやいや、いかんいかん。

4月の時には敵対していたというのに、現在はまったくこちらを警戒していないかのよう気楽にしているのはなんだ？

てつきり横浜の魔術師の件でこいつらが犯罪組織とつながったのかと思っただけどうも違うっぽい気がするな。

そういう考えながら、でも警戒はきらずに移動して、ようやく人通りのいない、演習場のひとつに着いた。

この辺は九校戦の会場もそうだが、訓練場や軍の施設なんかもあって、こういうところ

ろは結構あったりするのだ。

あとたぶんだけど、魔術師の男のほうか女の方が人払いの結界を張った気がする。なんか天使柴田がちょっと反応してたし。

だから俺は警戒しつつ、こっそりと天使柴田に聞いてみた。

「柴田、なにか気づいたのか？」

「ええ……あの、何かに覆われている、というか……」

俺が小声で聞くと、天使柴田もアイツらに聞こえないように俺に近づいて、耳元で囁く。

こんな時になんだが、あれだね、やはり天使柴田の豊穣の恵みとも言うべき奇跡の実はすごい。ちょっと囁く程度の接近でふにょんと来るんだもの、しかもそこから天使の囁きが来るのだから、こんな状況でなかったら小一時間程楽しみたい所存である。

まあ、それはまた今度の機会にして、やはりか……どうもやられたと巧妙に、隠蔽しながら展開しているようで、俺もほとんど気づけなかったし、天使柴田も正確に把握できていないようだ。

「結界……?」

「あら気づいたの?……流石は爆炎の支配者ってところかしら?」

姉さんも自信なさそうだが気づいたみたいだ。

魔術師の女も気づかれるとは思っていなかったようで、素直に関心している。

それから少しして目的地についた俺達と魔術師の女達は少しの距離を置いて向かい合う。

「それで、お前たちの目的はなんだ？またこいつらを狙うつもりか？」

「いいえ．．．その子達に興味があるのは事実だけれど、今回は違うわ」

俺の問いかけに女はクスクスと微笑みながら否定してきた。ん？否定しているよね？やっぱり狙ってね？違う？

「今回の私達の目的は、そうね．．．あなた達と取引がしたかったの」

「断る」

断るに決まってるやろ。天使達を狙い、意味不明なほどに巨大な魔術師の工房を地下に作成しているこいつら相手に取引きとか意味わからんわ。

「あら、残念ね、断るの？」

「当たり前だろう」

当然だよなあ？そう思つて姉さんとグレイと天使達の方を見ると、そろいもそろつて顔が「え？断るの？」って書いてあつた。

この娘達つてば素直で良い娘すぎい!!もう少し疑つてもいいと思うのだけれど!!いや、その素直で優しくて疑う事をしらないところに日々癒されているのだけれどね？俺

はちよつとこの娘達の将来が心配になって来たよ!?やはり俺が守らないと(使命感)

「お前たちはこいつらを狙った。それだけで断る理由としては十分だろう」

「そう．．．でもいいのかしら?」

俺が至極当然な事を言うのと、後ろで小さく「確かに．．．」という声が聞こえた。誰かは言わないけど後でしつかりと全員に危機意識について入念に確認しておこう。そう思った。

そんな俺の言葉に女も予想はしていたようで、でも、後悔してもしらないよ?つて表情で意味深な事をいつて来た。

その表情と気配に俺は思わず小太刀型のCADを構える。こんな事なら護身用じゃなくて戦闘用の持つてくれば良かった．．．。後悔しそうになるが、そういうのは後廻しである。

「本当にいいの．．．ここで取引に応じないと後悔するわよ?」

「．．．．．．．．．．」

相手の言葉に俺は無言で先を促す。場を緊張感が包み込むのがわかる。一触即発の状態になった。手に持つCADに力が入る。

「このまま私達と取引をしないというのなら．．．何をしでかすかわからないわよ?．．．．．．．．．．私が」

お前かよつ！思わず突つ込んでしまいそうになった。なんだこいつ？

そんな俺の視線に気づいたのか、女は饒舌に話し始めた。

「だって、こんなに可愛らしいお嬢さんがこんなにくささんいるのよ？何人かはお持ち帰りしてもいいじゃない？」

「良い訳あるかつ！」

「なら取り引きをしましょう」

これももう取り引きじゃないよお・・・完全に脅迫されてるよう。天使達を守りながらコイツらと戦闘するとか無理ゲーだし、これほとんど詰んでるくね・・・？

どうすつぺかなあ・・・と考えていると、姉さんが口を開いた。

「いよいよ」

「姉さん？」

「ハチ、取り引きに応じよう」

まあ、そうなるよなあ・・・しゃーなしかなあ。

それから、試合が始まる時間になったので俺たちは戻ることにして、話はまた後日と言う事になった。

取り敢えず暫くは大人しくしているようにと天使達を狙うのは止めるようにと約束させてその場は解散となった。

「うーん、信用しても良いのだろうか」

「大丈夫だよ、ハチ」

「そうですよ、ハチさん。あまり邪悪なオーラは見えませんでしたし」

まあ、姉さんと天使柴田がそう言うのなら大丈夫だろうけど、ちやつかり天使達と連絡先を交換しようとしていたのが油断できないというかね……。もちろん阻止したけど。

すつと意味深な微笑み浮かべてきたし。

そんな事を考えながら会場にもどつて午後の試合を観戦することにした。

それからしばらく試合を観戦して過ごした。

「千代田先輩……大丈夫でしょうか……？」

「心配ですね……」

天使光井と天使柴田が先ほどの試合を見て心配そうな表情をしていた。

心配そうな天使達をそつと抱きしめて慰めたくなる俺ガイル……。じゃなくて、そうじゃなくて、考えるべき事はそこでは無いのだ。

「ハチ……さっきのは……」

「ああ、グレイはどうだ・・・?」

「すみません、先ほどからどうも良くない気配がして・・・」

姉さんも、グレイも先ほどの試合がおかしい事、というよりも先ほどの女とは別の魔術師が絡んでいる事に気づいている。

その結果、千代田先輩はアイスピラースブレイクを優勝する事が出来なかった。

4位でも十分健闘していたと言えるが、優勝候補筆頭として見られていた千代田先輩が準決勝で敗れ、その後の3位決定では棄権をするという事態が発生していたのだ。

最初に異常に気づいたのはやはり天使柴田だった。天使は準決勝で千代田先輩が出てくるなり怪訝そうな表情になり、メガネを外そうとしていた。

これだけ人が居る中で、しかもどんな術式が掛けられているかもわからない状態でそんな危険な事を天使にさせる訳にはいかないので、俺は慌てて天使の手を止めて、メガネを外さないようにしたのだ。

そうすると、天使柴田は泣きそうな表情になりながら「千代田先輩に良くないものが憑いている!」と言ったのだ。

それを聞いて俺もすぐに達也に連絡したが、すでに試合は始まっており、開始当初は千代田先輩も通常通りだったのが試合を止める事が出来なかったのだ。

しかし、通常通りだったのは最初だけで、すぐに異変は始まってしまった。

数本のピラーを倒した時点で千代田先輩は汗だくになっており、中盤になるにつれて苦しそうにして、結果、最後まで試合する事なく千代田先輩の婚約者であるおかつば先輩が棄権を告げて試合は終了した。

そのまま医務室に運ばれた千代田先輩は当然3位決勝戦に出る事は叶わないだろう。

今はまだ準決勝が終わり、おかつば先輩が3位決定戦を棄権するという放送がされた直後で、いまだ決勝戦は行われていないが、試合を観戦している場合ではないという事で俺達は会場を後にして達也達と合流する事になっていた。

『ハチさん？で、電話ですよ？で、出てくださ〜い、で、出ないと怒っちゃいますよ〜？』

「おっと、電話だ」

「あの、ハチさん、やっぱりその着信音変えませんか・・・」

俺の端末から天使光井の声が聞こえたので俺は電話を取る。天使光井が恥ずかしそうに言ってくるが、これだけはたとえ天使のお願いでも答えられないので、俺は電話を取る事で天使の懇願を一旦棚上げする。

ちなみにこれは以前天使柴田と天使光井を守った事や、練習に付き合った際に何かお返しがしたい、何かないか？と天使達に聞かれたので天使の着信ボイスを所望したという訳なのだ。決してこっそり録音したとかでは無いのだ。必死に説得したとはいえ、本

人公認なのだ。（今日の前で懇願されているのはキニシナイ）

その結果、俺の端末は着信やメールの際に妹様、姉さん、天使柴田、天使光井、北山、グレイの音がランダムで着信を告げるといふ神仕様になったのだ。この端末と音声データは俺の家宝だと胸を張って言える。

特に恥ずかしそうに収録していた天使達の可愛らしい事・・・もうたまらんですよ。おかげ様で俺の電話に出る確率が大幅上昇したと会社からも喜びの声が上がっているほどである。まあおかげで仕事が増えたわけだが・・・、あと100回に1回位の確立でゴスロリ様の声が出てくるのはどういう事なのかと問い詰めたい。

びつくりして思わず土下座しちゃうからね・・・なんていつの間にかそんなデータが入ったのかしら？そう思うものの、なぜかブラックボックス化して消せないゴスロリデータ。怖い。

そんな事を考えながら電話に出ると、相手は先ほどの魔術師の女（名をメディアというらしい）からだった。

『協力してくれるかしら？』

「ああ」

『そう、良かったわ、では今日の深夜1時に』

「ああ」

それだけを告げて電話は切れる。

はあ、また仕事が増えた・・・でもこれ放置してたら天使達にも危害が及ぶ可能性がある、やはり放置するわけにはいかないよなあ・・・

そんな事を考えながら正面を見る。

いまだ恥ずかしそうに俺の着信音を変更しないかと説得しようと試みている天使柴田と天使光井がいた。

メンドクサイ事は多い、この後の事を考えると頭がイタイ。

・・・まあでも今は、天使達に癒されながらどうどうとなだめすかして話題を逸らすことに注力しよう。

ハチ、新人戦が始まる！

一校に割り当てられたテント内の空気が悪い。

なんとか天使達をなだめすかして充分に癒やされた俺と天使達がテントに入ったときに思った感想がこれである。ちなみに姉さんとグレイは屋台のグルメツアールに出かけて行った。俺も行きたかったけど、天使達の護衛がいなくなるのはあれなのだ。

んで、テントに入ってそうそうこの空気なもんですから、なんぞ？とは思うものの、その理由は明白だったりして。

あれでしょ？優勝確実う！と思ってた風紀委員長様が事故？によりリタイアして、優勝候補！と思ってた千代田先輩が4位で終わって、んで、そも男子は十文字先輩以外全然活躍してなくてってことでしょ？

男子の方はほとんど接点なかったから知らんけど、女子の方は妨害を受けてるのだが、そこそこ気づいてるのん？

そのような状況を想定していないのか、この眼の前に居る自称作戦スタッフ様は得点が伸び悩んでいる事だけに頭を悩ませているらしい。節穴かつーの。

リンちゃん先輩がいながらこの自称作戦スタッフ様は何を言っているのであろうか

?

残りの試合を優勝すれば安全圏ですわって、真面目な顔して話してるんだけど？バカなの??

え？なにこれ？ツツコミまちななの？こんな時、俺はどんな表情すればいい？

「笑えばいいと思うよ」

んなアホな……。ぎよつとして横を見ると北山がこちらをみながらそんな事を言っていた。あれ？俺の考えてた事聞こえてた？もしかして普段の天使への思いとかも？そんな視線を向けて見ると、北山が「なんとなくそう言わなきゃって思ってた」と答える。へえ……。そんな事あるんですわっ！そう素直に思えないのだけれど……。？

それはそうと、勝てば負けない！って作戦スタツフが言うべきセリフじゃないとおもうのだけれど？優勝以外でこっちの得点増やして三高の得点を減らす事を考えるのがこいつらの仕事じゃないの??

俺の気のせいかしらん??

リンちゃん先輩は女子の結果を怪しんでるっぽいけど、このスタツフ様はまったく妨害を想定していなくて、如何に優勝するかを考えてるだけなんだけれども……。仕事しろ、仕事。

もちろんそんな事を言えない下っ端な俺は黙ってそっすかーってうなずくだけなの

であつた。

天使が真剣な表情で考えてるのを愛でるだけの時間だつたとも言える。

その夜。

なぜか俺は魔王様に呼び出されていた。

夜中に女性の部屋に呼び出されるとかちよつとえつちい想像をしちやいそうだろ？でもさ、俺が呼び出されたのは一校に割り当てられた会議室のひとつなんだぜ？笑えるだろ？そんな想像かけらも出来ないよね。

会議室の前に到着して、バックレようかな……つてちよつと思ひ始めていると、室内からドアを開けられてしまった。

「来たわね、ハチ君。座つて頂戴」

「ういっす」

部屋に入ると魔王様とか風紀委員長様とか十字先輩とか選手団の中心人物的な人たちがいた。ナニコレえ……。なにもしてないはずなのに冷や汗と手の震えが止まらないんだけど。へへ……。へへ……。これが武者ぶるいつて奴か……。(現実逃避)

「ねえ、ハチ君、随分と前からドアの前にいたみたいだけれど、どうして入つて来なかつたのかしらっ？」

「いや……。そのお……」

お前、バックレようとしてたやろ? っていう笑顔が怖い。

やつべー、まじつべーわー……。それからつらつらと魔王様から説教を受け、ついでにいろいろと雑用を言われ、新人戦が始まったらしいと仕事を押し付けられる事を約束させられてしまった。

そうしていると達也と妹様と姉さんもやって来た。なんで俺だけ先に呼ばれてるのぉ……。?

室内に入つて来た達也と姉さんは俺が室内にいた事に気づいていたようだが、妹様は気づいていなかったようで、室内に入り、俺が座っているのを見るなり即座に魔王様達に謝罪を始めた。

「も、申し訳ありません! ハチがなにかしたのでしょうか!?!」

「ねえ? 深雪さんや? なにも聞かずに俺が何かしたていで謝罪するのぉかしくない?」
俺がそう言つて妹様に抗議するも、妹様はまったく聞き入れてくれない。そりゃーちよつと魔王様の試合中に寝ちやつたりもしたけどさー、バックレようともしたよ? でもいつもいつでもなんかしでかしたように思われるのは違くない? 違くないよね? ……なくくない?

それからあれこれと魔王様と妹様が話しあつた結果、先ほどの件が正式に承認されたのであつた。

あれ？これやつぱり俺がなんかした系？あれー？しかも俺の行動の最終決定権が妹様にあるというね・・・知ってたけど。

俺の処遇が決まった事で、今度は魔王様がまじめな空気を作って話始めた。

「実は少し・・・いいえ、少しじゃないわね、大事な相談があつてこちらにきてもらいました」

ん？俺と姉さんも？俺がなんかやらかしたから保護者てきな感じで達也と妹様が呼ばれたんでなくて？もしかしなくてもそつちが本題？

それからりんちゃん先輩が説明した事によると、度重なるアクシデントにより我らが一校とライバル三校の成績がほぼ横並びな状態らしい。

アクシデントってか妨害なんだけれど・・・？

んで、新人戦は本線の半分のポイントだから、新人戦をある程度犠牲にしても本線に戦力を注ぐべきだと判断したようだ。つまり？

「深雪さん、あなたには摩利の代理として本線のミラージパットに出場してもらいます」
あ、達也君には引き続き深雪さんの担当をお願いね。と話す魔王様だが、言い方が確定事項なのですが・・・？

相談つてのはどこ？

「それとハチ君とシズさんにも。シズさんは深雪さんの抜けた新人戦のミラージパット

に出場してもらい、エンジニアをハチ君に担当してもらいます。必然、現状のクラウドボールとの兼任は難しいでしょうからハチ君の担当していたクラウドにはあーちゃんにお願いする事になります」

そんな魔王様の発言に妹様は納得できないようだった。え？俺？仕事が減ってラツキー？みたいな？姉さんの担当と天使の担当だけは死んでも譲らないという俺の熱い思いが通じたのか魔王様もそこは引き続きお願いと言ってたしね。

「しかし、先輩方の中にも一種目しか出場していかない方々がいます、なぜ私か？」

妹様の疑問も当然かも知らんが、俺からしたら当然だよなあ？って感じ。ぶっちゃけ妹様の実力はすでに高校生レベルじゃないもの。

姉さん？そもそも存在自体がファンタジーな人だから、いろんな制限つけて何とか高校生の大会に無理やり参加してるだけだから・・・。

そう思っていたら、魔王様達の理由はもつと残念なものだった。

「ミラージパットには補欠を用意していなかった、それが理由だ」

ドヤ顔の風紀委員長様がそんな事をのたまう。

えー・・・そんな残念な理由なん？なんでこの人ドヤ顔なの？

俺があきれてる間に達也がお前の妹なら優勝できるやろ？って乗せられて妹様の出場が決まるのであった。

「それと、シズさんは……」

「出ます」

魔王様が姉さんの方に視線を向けると、姉さんは二つ返事で答えていた。

姉さんが試合に出たがっていたのは知っていたので魔王様もそこは想定通りだったのだろう。だが、姉さんの雰囲気が変わった。

それはまるで数多の戦場を駆け抜けたかのような、あるいは英雄と呼ばれるような、そんな不思議なオーラを放ちながら姉さんは参加を決意していた。

「……そう、よろしくお願いします。ハチ君もよろしくね？」

「ういっす」

そうして、俺達は会議室から退出するのであった。

「ハチ、シズ」

「わかってる」

「大丈夫」

達也が俺と姉さんに言いたい事は理解している。

妨害工作が妹様に行かないようにこれまでに以上に対策する必要がある。

妹様だけじゃない、おそらくは天使達に北山にも及ぶ可能性がある。いや、間違いなくあるだろう。

これまでの妨害で解った、この妨害主は一校を優勝させないようにしている。

そして、これは犯罪組織が絡んでくるのもおそらく間違いないだろう。つまりあれだ。本家案件を俺達でなんとかしないとなわけだ。がつてむ！

とりあえずあれだ。明日からはこれまで以上に天使達を付きつきりですっかり守らないとだな！うん！付きつきりで！！

ー大会4日目ー

ここからは本線は一旦休みになり、一年生だけで勝敗が問われる新人戦が始まる。

日程はえーと・・・？

「新人戦初日がスピードシューティングとバトルボード予選。明日がクラウドボールとアイスピラーズブレイクの予選、それから・・・」

日程は何だっけ？とつぶやいた俺につらつらと流暢に説明してくれる九校戦スキーマな北山。君ほんとに九校戦の事になるとしやべるね。目もキラキラしてるし。

まあそりやそうか、今日から夢にまで見た九校戦に自身も参加出来るんだからそりやテンションも上がるよな。

朝から俺をほんわかさせてくれるのはどうやら天使達だけでは無いようだ。へへ、今

日も良い一日になりそうだけ。

「ハチ、俺は零の担当でスピードシューティングを見る」

「ああ、俺はバトルボードを担当する」

達也と俺がそれぞれ確認しあう。本来なら俺は達也のサブで一緒にスピードシューティングを見る必要があるが、俺は俺で天使光井の、天使光井のためだけにエンジンニアを担当している。なので、妨害に対する護衛としてもエンジンニアとしても俺と達也はそれぞれの種目を見る必要がある。

それと……

「ねえ？そこのあなた、可愛いわね。お名前はなんていうの？可愛い服に興味はないかしら？」

俺の視界の端っことではあはあしながら一校の生徒に声を掛けまくっているあの変態（魔術師の女）不審者さんをなんとかしないとだな。

俺達の本当の戦いが始まる……！

……嫌な始まり方だなあ。

ハチ、天使光井の担当としてがんがる

変態不審者さんをなんとかした後、今日の予定について確認する事にした。

「今日は北山が午前中にスピードシューティングの予選、光井が午後からバトルボードの予選だったよな？」

「そうですねー！がんばりましょうね！ハチさん!!」

俺が確認すると、天使光井がすでに緊張感満載の表情でめいっぱい頑張ります！というアピールをしている。胸の前に両腕を持ってきてぐっ！としているので天使の豊穣の恵みが強調されている。

思わずそちらに視線を持って行かれそうになると、俺の脇腹に痛みが、良く見ると不機嫌そうな顔で妹様が俺の脇を掴まんでいた。良く見たら姉さんも苦笑いをしていた。

「痛いんだが……」

「ならその下品な視線を何とかしなさい」

……はい、すみませんでした。幸いにして天使光井と天使柴田は気づいていなかったようである。

と、コホン。と咳払いひとつ。

とりあえず、あれだな、いまだ午前の試合すら始まっていないこのタイミングですでに緊張感を持つ天使のまじめさは素敵ではあるのだが、当然そんな状態で試合まで持つわけが無いのだ。

「光井、まだ試合は先なんだ、もう少し力を抜いたほうがいいぞ？」

「は、はい！・・・あ、その、え、えへへ・・・」

俺のセリフに元気いっぱい答えた光井は自分が相当緊張していた事に気づいたのかごまかすようにハニカんでいた。今日も天使には癒されるなあ・・・。可愛すぎてたまらなんだが？

まあ言葉一つで緊張が取れるならだれも苦勞はしない訳で、なのでここはひとつ、あれだな。

「とりあえず最初は北山の試合でも見に行こうか」

「そうですね。雫の応援したいです」

「ほのか、私、がんばるね」

「頑張つてね！雫!!」

にこやかに励まし合う二人、うんうん。

親友ががんばってるところを見れば少しは緊張もほぐれるだろ。

全員からの励ましの声を掛けてもらった北山はいつものように表情の起伏が少ないながらも目を輝かせて達也と共に選手控室へと歩いて行った。

「それじゃあ私達は観客席で応援しようか」

「そうですね！」

姉さんの提案に天使もいつものような可愛らしい笑みで答えるのであった。いやー緊張がとれて良かったつす。

ー 北山の試合 ー

「雫、がんばれー……」ムムム

「雫さん、がんばれー……」ムムム

「頑張ってくださいー……」ムムム

なにこれかわいっ。

北山が試合に臨もうとしている現在。天使光井と姉さんと天使柴田が北山に向かって両手を突き出して念力を送っていた。いやされるわー。

達也のサブとして北山の練習もそれなりに見ていた俺としてはこのスピードシュー

テイニングにおいて、新人戦のレベルで北山に、しかもエンジンアをトールスシルバーがついてるといふ状況で勝てる選手がいるとは思えない。

よって、天使達の応援は杞憂と言えるのだが、可愛いので特に突っ込む事もしない。俺は空気の読める男なのだ。動画はとるけど。

天使達の祈りのおかげ（という事にしとく）で北山は当然のように予選をパーフェクトで終わらせてきつちり、きつかり突破を果たした。

天使光井と天使柴田が俺をサンドするように座っていたので2人が喜びながら俺に抱き付いて来た時には俺、もう今日で死んでもいいかもしれないと本気で思ってしまった。

さてと、北山の予選が無事終わった、次は天使光井の番だなど思ってた。チラリと天使を見る。

「よ、よおし・・・つ、次は私の番ですね・・・き、緊張してきましたあ・・・」
「ヨシヨシ、大丈夫だから」

さつきまで喜んでいた天使はどこかに行ってしまったようだ。

すでに緊張で泣きそうな表情になっていた天使を姉さんがヨシヨシしながら慰めていた。

どうやら早くも緊張がぶり返して来たみたいだ。いまずぐに抱きしめて大丈夫だ

よって嘸きたいところだが、そこは姉さんに任せるとしよう。

「ほのかさん、安心して。ハチがついてるんだから絶対大丈夫だよ」

聖母のような微笑みを浮かべながら天使をヨシヨシしつつ、とんでもない事を言う姉さん。

あれ？ここで俺にプレッシャーかけてくるのん？

そんな自信満々に言う姉さんに天使光井も安心したのか、「そうですよね、ハチさんがいるんだから、大丈夫、大丈夫・・・」となぜか落ち着いてきてらっしやる。

天使柴田も「そうですよ、ハチさんがいますから大丈夫です」と信頼度100%な模様だ。

あれあれー？おかしいぞー？天使達と姉さんからの信頼度が半端ない事になっていくのだけれど・・・？

俺のお腹がプレッシャーでキリキリと痛み始めるが、信頼度マックスな天使達と姉さんに見つめられている以上、俺に出来る事など決まっている。

「おう、任せろー！」

ビシイッ!!と親指を立てて答える俺に天使達も姉さんも安心したようだ。妹様とグレイは同情の視線を向けて来ているので俺の心情を理解しているのだろう。

だが俺も男だ、これで天使光井が良い感じに試合に臨めるのなら俺のポンポンの痛み

なんて、へのへのかっぱさ!!

自信满满々っぽく親指を立てる俺の手を両手で包み込んできた天使光井は信頼度マツクス表情で俺を見つめてくる。惚れそう（惚れてる）

「よろしくお願いしますねっ！ハチさん!!」

「ああ、頑張ろうな」

「はいっ!!」

良かった、俺のポンポンを犠牲にしたおかげか天使光井の笑顔がまた花開いたようだ。これが必要以上に緊張した状態も脱出できるし、試合においても実力どおりに行けるだろう。

ところで、胃薬持ってきてたっけ？

その後北山の試合を見た俺と姉さんにグレイ、天使光井と天使柴田のメンバーでバトルボードの会場に向かう事にした。

ちなみに妹様はスピードシューティングの決勝まで時間がある達也と北山と合流した後西城達と一緒に会場にくるようだ。

俺達は天使光井が緊張してしまわないようにそれぞれ会話しながら控室に入り、時間までわいわいと話していた。

「そろそろ時間だな、どうだ？」

時間が近づいて来たのでこれまで調整していたCADを天使に渡して感触と起動の確認をしてもらおう。

俺の渡したCADにサイオンを流して起動を確認する天使は「つうなずいて俺に笑顔を向けてくれる。」

「はい、問題なさそうですっ！」

「すこしでも違和感があったら言ってくれ、達也ほどじゃないが、俺も出来るだけの事はする」

俺がそう言うのと天使は微笑みながら大丈夫です。と答えてくれる。

「むしろ自分のより使いやすいくらいですよ！」

「そこまで言ってもらえるほどじゃないが、でもサンキュな」

エンジニアとしては喜ぶべき事だろうが、さすがにそこまでの腕ではないのは自覚しているので、天使の優しさによる褒め言葉として受け取っておく。

だって、前聞いたら天使光井は北山と一緒にプロに調整してもらったとか言うのだもの。名前聞いたらあらビックリ、日本でもトップレベルのビッグネームが出てくるのだ。そんなわけで、流石にねえ？

「あつ信じてませんね？ ホントなんですよ？」

俺が額面どおりに受け止めていないのに気づいたのか天使が頬を膨らませているが、ただただ可愛らしいだけなので俺はほっこりしてしまう。

「すまん、さすがにプロと比べられてもな」

「ホントですよ？ 雫ともいつも話してるんです、達也さんに調整してもらったのも、ハチさんに調整してもらったのも普段のより使いやすくていいねって」

「そうなのか？」

「そうなんですっ」

そう言って微笑む天使はどうかやら本心から言っているようだ。もちろん俺も天使が使いやすいようにと普段の数倍、いや数十倍は集中して調整したが、そう言ってもらえると嬉しいもんだ。

そうして話しているうちに時間になったようだ。

多少の緊張もあるだろうが、それでも体が固まるような事はなく、良い緊張感を持っているようだ。

そんな天使に俺達は声を掛ける。

「頑張ってくださいー！」

「ほのかさん、頑張ってくださいね」

「ふぁいとだよー！」

「光井、いつも通りにやれば問題ない。思いっきり楽しんでこい」

グレイ、天使柴田、姉さん、俺が声を掛けると天使光井は満面の笑顔で答えてくれた。「みんな、私、頑張つてきますね！」

そう言つてプルンプルンさせながら駆けだしていく天使。やっぱりあの恰好はちよつと刺激的過ぎるな・・・。

これから頑張ろうとしている天使にそんな事を考えてしまう俺マジうんことか思いながら、せめて天使の笑顔が曇らないようにこの思考は墓場まで持つて行こうと考えながら送り出すのだった。

そこから緊張が取れた天使光井はすごかった。

レース開始と同時に閃光魔法で相手選手達を落水させ、一人ゆうゆうとスタートをきる。

加速からコーナーに向けての減速、そこからの体重移動とコーナー出口からの再加速。どれをとつても新人戦レベルどころか本線においても十分に戦えるレベルの流れのような魔法の使用とボードの操作だ。

はつきり言つて閃光魔法などと言つた小手先の技など無くても新人戦レベルであれば全く問題が無いように見える。

だが、北山や天使自身から聞いていた本番が苦手という事を考慮して今回は安全策を講じたのだ。

当然この閃光作戦が効くのは今回限りであろうが、それを加味しても使った意味はある。

それは天使に自身を持ってもらおうという事だ。

聞くと本番に弱いというのも小学生時代の話だというしな。

ちよつとしたトラウマに近い物なのだろうが、それで実力が十分に出せない可能性もあるし、そうして天使の笑顔が曇ってしまうのは俺としては譲れない。

だから本来ならば予選後に使用した方が良いでしょう閃光作戦を初戦に使う事にしたのだ。

幸い直接の魔法使用はNGだが水面に魔法を使用する分には自由な競技である。

光の魔法に補正のかかっている天使にこれほど有利な種目もそうそうないのではないだろうか？盛りすぎかな？まあ閃光で妨害するならどの競技でも結構良い線いけるだろうな。光の魔法以外にも天使は優秀だし。

そんな事を考えているうちに気づけば天使は相手選手に半周近くの大差をつけてゴールしていた。

ああ、良かった。俺はその笑顔が見たかったんだ。

ゴールした天使が朗らかな笑顔を浮かべているのを見て、俺は安堵した。

たとえ会社やゴスロリ様からいろいろ注文されてアホ程仕事を持つてこられても天使のエンジニアだけは譲れなかったし、手を抜くつもりも無かった。朝練にも放課後の練習にも喜んで参加した。

死にそうなくらい眠かったり疲れたが、それでも天使の笑顔が俺を癒してくれた。そんなここ最近の日々を思い出していると隣にいる姉さんが俺の肩に手を置いて笑顔を見せてきていた。

「良かったね、ハチ」

「ああ・・・」

そう言つて労つてくれる姉さんに俺は静かに応える。天使柴田も 그레이 もおなじように俺を労つてくれた。

試合をしたのは天使光井だし、頑張ったのも天使光井なのだが、それでもこれまでの俺の頑張りを認めてくれる三人にまだ初戦ながらも涙がでそうになったのはここだけの話だ。

さあ、まだ予選だ。新人戦もまだまだ続く、怪しげな妨害もあるから油断は出来ないが、天使達が笑顔でいられるように頑張っていけますかね。

そう決心する俺の目には嬉しそうに、涙目になりながら駆けてくる天使光井が映つて

いた。

ハチ、逃げ場を失う

天使の喜びの抱擁を受けてそのまま天界に飛んでいきそうになった。

あと一歩妹様が俺の脇腹をえぐるのが遅かったら危なかつたかもしれない。

それからの天使は緊張がすっかり解けたのか、楽しそうに予選を戦い、無事に突破を
はたすのであった。

当然それに触発された北山は相手を寄せ付けることなく圧倒的な実力でスピード
シューティングの優勝を果たし、ついでに達也が担当した選手3人が上位を独占したと
いう事で魔王様も大喜び。

さらについてとばかりに俺の背中もバシバシ叩きながらハチ君も宜しくね！と言っ
てくる魔王様からのプレッシャーが。その笑顔に俺のポンポンもキリキリしてきて……
とぼつちりが半端ないっす。

それから姉さんと明日のクラウドボールの準備をしながらその日は終わった。

明日は姉さんと俺のクラウドボールに、妹様と北山がアイスピラーズブレイクだ。

天使光井は明日は出場種目は無いので基本的には俺か姉さん、達也の近くに居るようにし
態不審者さんからの護衛をするので基本的には俺か姉さん、達也の近くに居るようにし

てもらっている。

あまりにも天使がプリチーすぎて一人になった瞬間どこぞのDQNに声を掛けられたりする事も考えられるので絶対に一人にならないようにと念を押ししてある。

あまりにも念を押しすぎて若干引いていたように見えなくてもないが、天使がプリチー過ぎるのでしようがないのである。うん、しようが無いよね？

ただ、達也は妹様のメインガーディアンで、俺とねえさんはサブ的な配置なので、なるべく俺と行動を共にするように話している。俺とね！ここ重要である。

もちろん天使光井だけでなく、天使柴田も今回の一校への妨害には無関係ではあるが、変態不審者さんからの護衛のため、基本的には俺の近くに居るようにと説明している。

これは決して自分の欲望というか、希望的な感じで俺の近くに居るように話しているわけではないので誤解の無いように。ただ、姉さんの魔法は護衛に向かないのと、達也は妹様を優先するから、俺が、そう、俺がメインで天使達の護衛をする必要があるのだ。決して自身の欲望のためではないのだ。

・・・はい嘘です。いろいろ言い訳してなるべく近くにいてもらうようにしました。

だって、そうでもないこんなクソめんどくさいイベントスルーするに決まってるじゃないですかやだー。

ちよつと張り切つてプレイするだけで目を輝かせてすごい！とか頑張つて下さい！とか言つてくれる天使達が居なかつたら今頃家で・・・は妹様に連れ出されて無理としても、そこらでのんびりと観戦してたに決まつてる。間違いない。

なんで会社やロスロリ様から死ぬほど仕事振られているのに、こんなクソ熱い気候の中で運動しなきゃならんのかと小一時間程問い詰める所存だわ。

天使がいるからこそこんなクソめんどくさいイベントに参加しているのだ。そこにさらに天使を狙う変態に一枚を狙うテロリストともうめんどくささが天元突破している。

そんな訳で、様々な事情から、俺が守りやすいように近くに居てもらうようにしているのだ。・・・いるのだ。

幸いにして、今日はアイスピラーズブレイクは予選だけなので、俺と姉さんの試合の合間に北山の応援に天使ともども行くことは可能だろう。

そのためにも俺は適当に何回か勝つたらサイオン切れにより予選敗退的な感じにすれば魔王様からも妹様からもちよつと小言言われる位で済むだろうし、そしたら姉さんの試合に集中できるしで一石二鳥といえる。

そもそも俺は姉さんの魔法力を封印している関係で使用できる魔法が制限されているからな、うん。仕方ない仕方ない。

そんな事を考えながら本日の第1試合に望む姉さんを両サイドに天使を配置し、後方にグレイも完備するという完璧なフォーメーションで準備をしている俺マジ勝ち組。

ちよちよいと調整したCADを姉さんに渡す。両隣で目を輝かせる天使達の視線が気持ちいいです。

「姉さん、どうだ?」

「うん、大丈夫。行けるよハチ」

俺の問いかけにニツコリと微笑む姉さん。

緊張を全く感じさせない微笑みに両サイドの天使達が呆けている。(かわいい)「シズさん、緊張してないんですか?」

思わず、と言った風に天使光井が問いかけると、天使柴田も、ウンウンと不思議そうにうなずいている。

すると、姉さんは微笑みながら答える。

「勿論緊張もあるよ、でもこういうの初めてだから楽しみなんだ」
そう言つて微笑む姉さんは本当に楽しそうだ。

ここ最近物騒な事が続いていたし、姉さんは前からこういうイベント事に興味があつたみたいだからな。楽しみなのだろう。

だからこそ、姉さんには約束してもらわないといけない事がある。

「姉さん、わかっていると思うが、やりすぎないようにな？」

「うん、わかっているよ、ハチ。ありがとう、心配してくれて」

俺の確認に姉さんは嬉しそうに微笑みながら俺の頭を撫でてくる。

くっ！子供扱ひされているみたいで恥ずかしいけど、この笑顔の姉さんの手を振りほどくなんて俺には出来ない・・・！天使達もグレイも微笑ましい目でこちらを見ている・・・くっ！殺せ！

それから俺達は全員でコートまで移動する。

天使達とグレイが部外者じゃないのかって？大丈夫、ちゃんと許可取ってますから。

コート横で軽く準備運動をする姉さんはわくわくが止まらないという表情で、とても楽しそうである。

天使達もグレイもそんな姉さんの準備運動を手伝っている。なにこの美少女軍団・・・姉さんのハーレムかしら？あれ？なんか俺だけ・・・おっと、これ以上余計な事を考えるのはよそう。

そうして準備していると、いよいよ試合の時間になったようだ。

天使達が姉さんの元から俺のいるコートサイドに戻ってくる。コート中央で楽しそうにして相手を待つ姉さん。俺は最後にもう一度だけ声を掛ける事にした。

「姉さん、何度も言うようだが・・・」

「大丈夫だよ、安心して」

俺がもう一度声をかけると姉さんは笑顔で手を振ってくる。うん、リラックスできてるみたいだし、やる気がありすぎて魔法力が暴走する事もなさそうだな。

なら後は……。

「姉さん、精一杯楽しんで来いよ」

「らじやー!」

そう言って微笑みながら敬礼をする姉さんは少しすると「はっ!」と何かに気づいたかのような表情になって慌てて俺の元にかけて来た。なにか問題でもあったのだろうか?

「ハチ、ハチっ!」

「どうした? 姉さん?」

敵か!? でも姉さんの雰囲気はそんな感じではないし、CADの問題でもなさそうだが……。

そんな心配をする俺をよそに、姉さんは能天気な事を口にした。

「今のらじやーって、すごくねいていぶっぽくなかった!」

「……お、おう? そうだな、な? 光井?」

「ええっ!? 私ですか?!? せ、そうですね? 良かったと思います!! 美月さんも 그레이さんも

「そう思いますよね？」

「は、はい！拙も良かったと思いますよ？」

「そ、そうですね！とても自然でした！」

まさかのそんな内容だった。

ちよつと間が空いたりりどもつたりしたが、俺達の答えに姉さんも満足そうである。

それにしても、未だかつてこの九校戦という魔法師にとつての夢の舞台と言われる会場でこんな事を氣にした魔法師はいたのだろうか・・？いや、俺も正直天使の事しか考えてないから人の事言えんのだけでも。

姉さんは1つうなずいて嬉しそうにしている。

「だよねっ！それじゃあ行つてくるね!!」

そう言つて嬉しそうに掛けていく姉さんを見送る俺達。

うん、まあ緊張してないし、変にやる氣に満ち満ちてるよりはよっぽどいいんだけどね？うっかり気合入れすぎで爆発させられたらたまらんし。

とりあえず言える事は1つだな。

「姉さんが可愛すぎて生きるのがツライ!!」

試合結果？んなもん勝つたに決まってるでしょうが。

一切魔法使わないとあれだから自己加速術式っぽい魔法をそれっぽく見えるようにする術式を組んで姉さんのCADに入れて、ついでに姉さんには左手一本でラケットを使うようにしてようやく試合になるようになったのだから。

右手だと相手を吹き飛ばしかねない威力で球を打つからね、流石にね。

いろいろと制限をしたうえで身体能力のみで試合に臨んで普通に勝利する姉さんのファンタジーっぷりには今更ながら流石と言わざるおえまい。

一応試合に負けそうになった時は右手の使用と、他の魔法も使用しても良いと話してあるけれど、まあその出番はそうそう来ないだろうと思っている。

「勝ったよ、ハチ」

「おつかれ、姉さん」

いろいろ制限かけて姉さんには申し訳ないが、それでも楽しそうに俺に勝利の報告をしてくる姉さんに、少しでも楽しんでもらいたいと思うのは弟として当然だよなあ？

「シズさんも勝ちましたし、次はハチさんですね！」

「頑張ってくださいね！ハチさん！」

姉さんの勝利でテンションが上がっている天使達が2人そろって俺を応援してくる。

「お、おう・・・」

ぶっちゃけ2〜3回勝ったら適当な理由つけて負けるつもりであるうんこな俺には

天使達の純度100%な笑顔が眩しすぎた。

試合よりも一校への妨害対策とか天使達の護衛とかあるから試合に集中するつもりなど無かったのだが、この視線はマズイ。

冷や汗を流しながら天使達にどう言い訳しようかと考えていると、天使達がそれぞれ俺の手を取ってにこやかに応援という名の最後通告をしてきた。

「わたし、ハチさんなら優勝できるって信じてます!」

「ハチさん、私も応援してますね? 頑張ってください!」

天使光井と天使柴田の言葉に俺の逃げ道は完全に塞がれてしまった。

俺が護衛と妨害対策で途中で負ける気なのを知っているグレイは同情するような視線を向けて来ているが、最終的には頑張ってくださいと声を掛けて来た。

姉さんも微笑みながら「一緒に優勝しようね」と言ってくるのでもはや俺には選択肢がなかった。

「おう、まかせろっつーの!」

後で聞いた話だと、適当にやって負けるつもりの俺の思考を読んでいた達也が天使達を誘導していたらしい。

おのれえ・・・おぼえてろっつーの。

ハチ、試合に臨む

ついにこの時が来てしまった・・・

「頑張ってくださいね！ハチさん!!」

「私も応援していますね！」

天使2人に目をキラキラされながら応援されている現在。

ついに俺の出番が来てしまっていたのだ。

正直一ミリもやる気なんかないこのクラウドボールとかいう種目に今から出場しなければならぬ。ここまですらキラキラされながら見られると、そんな事言えない訳で。

「おう、まかせろっつーの！」

そう言つてニコリと微笑むくらいしか出来ない俺。

天使達を利用するという達也の悪魔のような策略により無理矢理出場を決められていたこの種目、姉さんと同じなら楽だろうと思つていた。けどよく考えたら俺と姉さんの魔法特性が違いすぎて何も流用できず、さりとて一般的な魔法だと俺の魔法力的に最後まで戦えないので、こらもう途中で魔法力ギレで負けましたーって感じにしようかと

思っていたのだが。

つい先ほど姉さんの試合が終わってさあ次は俺の番だ、適当にある程度やったらサクツと負けようとしていたのを察したのか、またもや達也と妹様に逃げ道を塞がれてしまった。

アイツら天使2人を使えば俺がなんでもやるとでも思ってたんじゃないのか・・・？その通り過ぎて逃げ道が一切ないんすけど？

姉さんとグレイを付けて俺が逃げないようにしてるところに俺の性格をよく理解している事が伺える。うれしくねー。

まあしようがない、天使のキラキラを曇らせる訳にはいかないからな、しようがないのだ。

そう思って俺は天使達が応援しているコートサイドから中央に向かって歩いていく。

チラと視線を向けると一生懸命応援する天使達が、それを見てほんわかして、そして初めて対戦相手に視線を向けると・・・

「や、やあ・・・いい試合をしようね・・・」

骨と皮しかないようなガリガリな男子が今にも死にそうな顔でそれでも懸命に笑顔を浮かべているような表情で挨拶をしてきた。

「お、おい・・・大丈夫なのか？」

「はは・・・だあーいじよーぶさあ・・・」

今にも倒れそうなくらいフラフラしながらそう答える対戦相手。

いやこれ絶対大丈夫じゃないやつー!! さっきからめっちゃプルプルしながら必死に立ってる感じじゃん!

なんでこんなやばげなのが試合に出てるんだ!?

「あの一、あれ絶対やばいと思うんですが?」

俺はそう言つて審判にもいつてみるが、まったく取り合ってもらえずそのまま試合が始まつてしまう。

俺は一旦コートサイドに戻つて、天使達の元に歩いていくと、天使達も対戦相手が心配なようだ。

「あの人、随分と体調が悪そうでしたけど、大丈夫でしょうか・・・?」

「わからん、審判にも相手校にも言ったが、そのままやるそうだ」

「ずいぶん震えていますね・・・」

そうして対戦相手を見てみると、何やらエンジンアらしき奴になにやら飲まされてい

る。

「な、なにか飲まされてますね・・・」

「大丈夫でしょうか・・・震えが激しくなっていますね・・・」

「飲まされている液体がどう見てもまともな色合いをしていなな・・・」

「まずそうだね」

「え、えくくと・・・危険な飲み物でしょうか？」

天使2人の言葉に俺もうなづく。姉さんは気楽に、グレイも怪しんでいるようだ。

そうこうしていると試合開始の時間になった。

「とりあえず行ってくる」

天使達と姉さん、グレイの声援を背に、俺はコートに出る。

魔法師には美少女が多いしイケメンも多い。

特に美少女の多さは特筆するものがあり女子の試合には一年だろうとかなりの観客が来るのだが、男子の、それも無名の一年の試合に興味を持つ人などほとんどいないので、観客席はガランとしている。

むしろ試合にでる俺よりもコートサイドにいる天使達美少女軍団の方が圧倒的に注目されているくらいだ。

俺としてはその方が助かるのでかまわないのだが、それよりも対戦相手は大丈夫なのだろうか？

もう白目剥いてプルプルというよりガタガタ震えているのだが・・・？

そんな状況でもかけからも気にしていないのか、審判は無情にも試合開始を告げてしま

う。

容赦なくボールが吐き出されてきたので、俺は仕方なく普通にボールを相手コートに飛ばすも、相手はまったく変化なく、というか一切反応せずにガタガタ震えている。

本当に大丈夫なんだろうな・・・？そう思いながら試合をしていると、対戦相手がなにやらブツブツ言っているのが聞こえる。

「オ、オクレにいさあ〜ん・・・」

え、なにこれ怖い。

もう試合どころじゃないでしょ？そう思って対戦相手のコートサイドを見るも、向こうはまったく気にしていないようで、ガンガン応援を飛ばしている。

「いけー！キャシャリーーン!!」

「頑張れー！マッスルボディ2ダツシユプラ——ス!!」

薄情すぎないか!?今にも死にそうな仲間に掛ける声じゃないだろ!?あと名前にはつつこまんぞぞ?

そう思っていると、俺のすぐ目の前で、ものすごい魔力が吹き荒れるのを感じた。

「なん・・・だと・・・!?」

その魔力に驚いて視線を向けると先ほどまで骨と皮しかなかったような対戦相手は筋肉の鎧をまとったような、そこらのプロレスラーやうちの年齢詐欺疑惑のある十文字

先輩をはるかに上回るほどに肉体が膨張しているのがわかる。

「いや、誰だよ!？」

さっきまでの本気出したって言われても信じられないのだが!?!どんなドーピングだよ!怪しげなコンソメスープでも飲んだのか!?!つかこんなルール違反だろ!?!

そう思つて審判を見るも、これまた試合続行の判断をしてらつしやる。んなバカな!?!仕方なくまたもや飛んできたボールを相手コートに打ち込むと・・・。

ドゴオオオオオオオオオン
!!!!!!

何かが俺の頬のすぐ横を通りぬけたかと思つたら激しい轟音と共にボールがコートに突き刺さつていた。

「・・・は?？」

「()おおおお・・・」

やたらと吹き荒れる筋肉の圧。

いやこれヤバくね? なんの魔法使つたのかわからんが、パワーだけなら姉さん越えてるんじゃない?

おいおい、初戦から本気出さないとかよ・・・初戦くらい適当にやりたかつたんだが

?

幸い相手はパワーこそあれだが、スピードはそんなでもないようで、ボールコントロールに気を付ければ何とかかなりそうだ。

「それでも、このパワーは脅威だな・・・しようがない」

初戦くらいは封印解除なしで行こうと思っていたが、それだと天使が悲しむような結果になりそうなので俺は気合を入れ直して（最初から無かったと言わないで）封印解除しようとする、相手の気配が急激にしぼんでいくのを感じた。

「おらぁ・・・燃え尽きたよ・・・真っ白な灰にな・・・」

「・・・は？」

対戦相手を見ると、先ほどまでのまるで筋肉の神のような表情で膨大な筋肉の鎧をまとっていた相手が少し前までの骨と皮だけの存在になっていた。いや、むしろ先ほどまでよりも弱っているようにも見える。

「ああ!? マッスルボディ2 ダツシユプラ——ス!!」

「しまった! 漢方マサルダイナミックの効果が!!」

漢方つてレベルの効き方じゃないと思うの。絶対に名前には突っ込まないからな?

結局そのまま相手は対戦不能と判断されて俺の勝利となった。

なんという不完全燃焼なんだ・・・! 本気だそうと気合をいれてたからなおさら残念

感が半端ないのだが！

「お、おめでとうございます！ハチさん」

「初戦突破、おめでとうございます」

ほら、天使達も微妙な表情じゃなかー。

んで、次の対戦相手ときたら・・・。

「見せてもらおうか、一校の魔法師の実力とやらを」

「あ、はい・・・ヨロシクオネガイシマス？」

開始前のあいさつでいきなりそんな事を言ってくるマスクを付けた対戦相手、シヤア（偽）さんって呼んだ方がいいのかしらん？

ご丁寧に髪もパツキンに染めてるようだが、いきなりすぎてちゃんとネタ返せんかったやんけ。

とういかさつききの対戦相手もそうだが、なんで新人戦のクラウド男子はこんなネタ野郎ばつかなんだ？本線は普通だったやん？

そう疑問に思う間にも試合は開始され、ボールがとんできたので俺はラケットの摩擦力を増加させる魔法を最小範囲で使用して、ボールにクソほど回転を掛けて相手コート

に叩き込む。

「ふっ、魔法力の違いが戦力の決定的差ではない事を教えてやろう」

そう言つて打球を変えそうと打ち返してくるが、俺の玉は死ぬほど回転が掛けられていたのでこちらに返る事はなくネットに吸い込まれていく。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

お互いに無言になつてしまった。

どうしよう、いちガンダムファンとしてはシヤアをリスペクトしたいけど、すごい煽りたい。「どう教えてくれるんですかねー？」つて言いたいぜ・・・。

そうして葛藤していると、次のボールが今度は相手側に吐き出されてくる。

「当たらなければどうという事は無い」

シヤア（偽）がそう言つて魔法を使いそれなりの球速で打球を放つてくる。きつと決め球のひとつなのだろう。自信すらうかがえる。

だが、この程度の打球では姉さんの相手をしていた俺には止まって見える。

「ほっ」

相手からの打球を次は別の回転を掛けて返球する。

俺の放つた打球は相手コートに地面に接した瞬間、弾まずに地面すれすれを走ってい

く。シャア（偽）は打球が弾むものだと思っていたのかボールの上側をラケットで空振りしていた。

そうだね、当たらないとどうしようもないよね・・・あぶなくそう言いそうになつてしまった。

その後も・・・

「ええい！一校の魔法師は化け物か!!」

とか

「ララア・・・私を導いてくれ・・・」

とか

「見えるぞ、私にも敵が見える！」

とか。

いや、そんな事言つてないでもうちよつと試合に集中した方がいいんじゃないかな・・・。俺が言える事じゃないけど。

いろいろやつてるけど、こつちほとんど失点ないからね？

そうこうしている内に試合は進んで、いつの間にかマツチポイントになっていた。

最後まで俺の打球に対応しきれずに俺のポイントになり、時間切れのゲームセット、俺の勝利となった。

「ふっ・・・認めたくないものだな、若きゆえの過ちは」

そう言つてクールに去つていくシヤア（偽）。なんだろうこの気持ち、すごい釈然としないぜ。

まあ勝てたから良いけど。この不完全燃焼感がすごい。

さっきの試合といい、どうにも試合に集中できなかつたよ・・・。

グダグダな気持ちになりながらも、自陣のコートサイドを見ると、天使達が笑顔で手を振ってくれているのが見える。

「うん、まあいつか！」

シズ、試合でやらかす。

「ハチさん、シズさん予選突破おめでとうございます！」

パチパチパチと手を叩きながらほのかさん、美月さん、グレイさんが私とハチの予選突破を祝ってくれる。

「ありがとう、みんな」

「サンキュな」

まるで自分の事のように祝ってくれるみんなに私も嬉しくなるね。ハチも照れながら頭をガシガシして感謝の気持ちを伝えていく。照れ隠ししようとしてるハチにちよつとかわいいと思ってしまう。

すると、ほのかさんがほほえみながらそういえば、と思い出すようにハチと私に問いかけて来た。

「クラウドボールは一日ですべての試合をしますけれど、ハチさんもシズさんも体調は大丈夫ですか？」

たしかに、普通の子だと一日でそれなりの試合数をこなすこの競技は大変かもしれない、でも。

「私は問題ないかな？ハチはどう？」

「俺は体力は問題ないが、魔法力はそろそろ第一段階の限定解除が必要になりそうだな」
そんなハチの言葉にほのかさんも美月さんも思うところがあるようで、2人でうなずいていた。

「わかりました！ハチさんが試合に臨めるように、私達がシズさんを見守っていますね
！」

「大丈夫です、エリカちゃん達にも協力してもらいますので安心してくださいね」

うん、ハチの封印が私の魔法力を抑える為だと知ってるから、私が無茶をしたり、やりすぎたりしないように見てくれるのは嬉しい。

本当に優しい子達だ。だけれど、その優しさが今は私の胸にサクサクとささるよ……。
悪意なんて全くない、善意で言ってくれているのはわかってはいるけれどね、優しさが時に傷つける事もあるんだよ？

もちろん、私はお姉ちゃんなのでそんな事は言わないけど。

「ああ、姉さんがやりすぎ無いように見えていてくれ」

ハチも当然のようにならずにお願している事に私のお姉ちゃんとしての誇りが……。

思わず頬を膨らませながらハチの脇腹をツンツンしたのは仕方がないよね。

そう思いながら、顔を赤くしながら困った顔をするハチをみて私は少し溜飲を下げるのだった。

それから何度か試合をこなして、今は準決勝で私の試合の番が来た。

ハチの試合は私の試合の次なので今はほのかさん達と一緒にこーとの横に座って応援してくれている。

予選の時も思ったけれど、これが青春、アオハルというものだよね……。ユウキの言っていたように、学生生活の華、恋愛の次に重要なふあくたーだつて言つてたっけ。

恋愛に関しては、私には幼馴染はいないし、学校には一年中咲いている桜の木もないし、私は見た目ほど若くはないのであきらめている。その分ハチや達也、深雪の恋愛はぜひとも応援したいと思つているのだ。

試合とか部活もアオハルだけれど、結局私は部活に入らなかつたから、これも諦めるしかないかと思つていたんだけど、こうして試合に出れることがとても嬉しかった。二度も世界を渡つたせいとか、魔力が制御できなくなるなんて……。まるで向こうでイフリートを宿した直後みたいだね、ハチがいなかつたら今頃どうなつてたかな？」

思わずそうつぶやいてしまう。

いろいろ制限をしないとアオハルが出来ないのは残念ではあるが、それも仕方がない。いまだこの膨大な魔力を制御できない私が悪いのだから。

その結果、お姉ちゃんとしての尊厳があやぶまれているけれど、ここでいい試合をすればハチもみんなも見直してくれるだろう。うん。

そう考えたらやる気が出て来た。うん！と一人でうなずいていると、ハチから視線が飛んできているのを感じる。

「ふふ、心配してくれてありがとう」

たぶん聞こえてないだろうけど、ハチに向けて微笑みながらそう言ってみる。

大丈夫、ちゃんとやりすぎないようにするから。安心してね。

そう決意をして相手を見ると、たしか懇親会の時に話しかけて来ていた金髪の女の子がいた。

それとたしか前の試合で菜々美さんが負けた相手だ。

「よろしく」

私が微笑みながらそう言って右手を差し出すと、相手も手を握り返してきてくれた。

「あなたを懇親会の時に侮っていた事を正式に謝罪します」

「うん？」

侮ってた？ そうだっけ？

たしかなんぼーずじゃないのか、って言われたくらいだったと思うけれど？よくわからないけれどそのくらいお姉ちゃんである私はまったく気にしてない。

「気にしてないよ」

「そうですか、それではいい試合をしましょう」

「うん、よろしくね」

流石は全国大会だね、すごい気迫だよ。

きつと彼女もハチの見ていたアニメみたいな技を使ってくるのだろう。

「ふふ、楽しみだね」

どうしても微笑むのをやめられない。きつと今の私は自分が思っている以上に舞い上がっているのだろうなあ。

お母さんと一緒に空襲から逃げていたら、いつの間にか向こうの世界にいて、それからたくさん冒険と悲しい事があって、最後にあの子達に会って、ユウキから聞かされる世界がとて眩しくて。

そうして向こうで今度こそ死んでお母さんの元に行けたと思ったら、今私はこうして学生として生きている。

「そうだよ、そう考えたら楽しくてしょうがないのも仕方ないよね？」

うん、そうだよ？あの子達の事はきつと今頃スライムさんがなんとかしてくれてい

る。きっとそうだ。そんな確信すらある。

向こうで思い残した事はもうない。だから私はこの世界で、新しい家族と共に歩んで行こう。

その為にもこういう時にはしっかりと楽しまないとだよね？達也と深雪も頑張ってる。ハチも順調に勝ち進んでいる。だから、お姉ちゃんである私が最初に負けるわけにはいかない。

「だから、ちよつとだけ、本気を出してもいいよね？」（フラグ）

そうつぶやくと同時に試合が開始された。

それと同時に私は胸元にある、ハチが私の為に製作、調整してくれたしーえーでいーに触れる。

「術式起動・・・試合モード」

『術式起動します。試合モード・・・どうぞ』

私の言葉と共に試合用に調整したしーえーでいーが起動する。

「疾風迅炎起動！」

『了解、疾風迅炎発動します』

しーえーでいーの返事と共に私の体を炎が包み込み、背中から羽のように炎が噴出する。

ハチの調整してくれたこの術式は試合用の場合はただ体の周りを炎が包み、背中からも噴き出す事により、非常に派手に見える効果のある魔法だ。

戦闘用だと触れたものを溶かしたり、防御にも使えたりと便利な魔法だが、試合用の今はただ派手で、多少情報強化が掛かっているくらいの効果しかない、あとその気になれば背中での炎でちよつと飛べる。

私は魔法を維持しつつ、飛んできた球を左手に握ったらけつとで相手こーとに打ち込む。

今までの相手ならば反応は出来ても返しきれないくらいの強さで打ったつもりだけれど、相手の金髪さんは問題なく撃ち返してきた。私はそれを見えますます微笑んでしまう。

「やるねー」

「そちらこそー」

それから数秒ごとに球が増え、現在は最大数の9個がこーと内を縦横無尽に飛び回り、それ以上に私と金髪さんが駆け回る。

菜々美さん曰く人間離れたすぴーどで走り回る相手に思わず私も感嘆の声をだしてしまう。

金髪さんからも返すように言葉が返ってくるが、本当にすごい。速度だけなら達也よ

りも速いし、もしかしたらハチでも封印状態だと届かないかもしれない。

私はハチよりも遅いのでその点においては試合用の術式しか使いえない現状では向こうが有利だ。でもパワーは圧倒的に私の方が上。

その為、試合は拮抗しながらも少しずつ私が有利に進んでいく。

「なんとというパワーなの・・・！それでも、私は負けるわけには行かないのよ！」

金髪さんがそう言うと、先ほどまでの速度からさらに加速した。

「すごい、まだ加速するんだ！」

「これでも振り切れない!？」

さらにも加速した金髪さんに私もさらにギアを上げて対応しようとするが・・・。

「うーん、速さはもう試合用じゃあ歯が立たないなあ・・・」

まるで稲妻のような速度で動きまわる金髪さんに少しずつ押され始めてしまう。早すぎるがゆえに動きが単調なため、ある程度反応速度と予測により返球する事が出来ているが、これはなかなか・・・。

それに引き上げられていくように私の気持ちも高揚していく。

そう、左手で打つのがもどかしくなるほどに・・・。

「これで・・・!!」

相手がさらに加速し、さらに打球の威力までも上昇する。これが金髪さんの全力の打

球なのだろう。

試合用の術式と左手ではとても対応しきれない素晴らしい打球だ。

だから私はらけつとをためらわずに右手に持ち替えて、試合用に制限をしている事を忘れて、全力で、そう。全力で打球に飛びつき、打ち返す。全力で打ち返してしまった。

ドゴオオオオオオオン

!!!!

「あ、しまった・・・」

私の放った打球に金髪さんはかろうじて反応していたが、その手に持つらけつとには手にもつところから先が無くなっており、さらにその後方には大きな穴が開いていた。私の打った球がめり込んだ場所だ。

やりすぎてしまった！そう気づいた私は盛大に冷や汗をかいてしまう。

そして、ゆっくり、ゆっくりとハチの方を見ると、ハチは、ハチだけじゃなくて、ハチと一緒に応援をしていたほのかさんや美月さん、グレイさんも全員が両手と口でぼつてんを作っていた。つまり。

『試合終了。一校シズ選手の棄権により三校一色選手決勝進出です！』

ハチのすつぷがかなり私の敗北が決まってしまった。

その後の私は対戦相手の金髪さんにらけつと壊してしまつてごめんなさいと謝つてから、ハチとグレイさん、美月さんにほのかさん達に必死に謝るのであった。

うう、やりすぎてごめんなさい・・・。

こうして私はお姉ちゃんとしての威厳をさらに失ってクラウドボールの挑戦が終わってしまった。

3位決定戦？ハチにやりすぎるからダメって言われたので不戦敗でした。ぐすん。・・・あ、ちがった、ぴえん。

ハチ、準決勝に臨む

姉さんが負けた。

いや、正確に言うとは棄権したのだが、準決勝でクラウドボールの試合を終えた。

だってしようがないじゃんかよー。あの金髪美少女が手加減しながら相手を出来るような強さじゃな無かったのだから。

たしかに姉さんが加減をするのを放棄する可能性は十分にあつたといえる。

それでもある程度の加減はするかと思つたのに、まさかの全力である。

姉さんの放つた打球により相手のラケットがグリップの先から消失し、その後ろにクレーターが出来ていたのだ。これ、相手が姉さんの打球に反応してラケットを合わせてたのは驚いたが、これまでのギャグのように吹き飛ばすのでは無く、殺しかねない。

しかし、相手の実力が姉さんにそこまでの力を出させてしまった以上、テニヌ・：じゃなくてクラウドボールの試合で人死にを出すわけには行かないと判断した俺はとつさにタオルを投げて棄権する事にしたのだ。

姉さんはしょぼんとしているが（かわいい）我ながら英断だったと言わざるを得ない。ないす俺。

正直試合会場の空気がしーしーんとなくなって、相手も腰を抜かしたようにへたりこんでいたりといろいろと大変ではあったが、すべてガン無視して俺達はその場から立ち去ったのだった。

「まあ、すぐに俺の試合で戻ってくるんだけどね……」

今は午後のティータイム中。姉さんはしよぼーんとしているけれど、4位だつて立派に入賞もんである。魔王様も喜んでおられた。

まあ、試合直後はドン引きした目で見て来たし、その後俺のところに来て、すごくイイ笑顔で「ハチ君は大丈夫よね？」と暗にお前もなんか問題起こしたらわかってんだろかな？つて声かけて来て、俺には静かに頷くことしか出来なかつたのだが。

ちなみに妹様と北山の試合もあいだにあつたが、こちらは問題なく勝ち上がっているそう。

本当は天使光井は北山の応援をしたいだろうに、こちらの人員の都合により、俺と姉さんの近くであるこの会場にいなければならないのが申し訳ない。

そんな天使の思いに報いるためにもたとえクソやる気の出ない競技だろうともそれなりの結果を残そうと少しくくらいは思うのである。

まあ、当然、俺がポイント重ねるたんびにすげえ嬉しそうにキラキラした目でこちら

を見てくる天使達の顔が見たいからって言うのがほぼほぼの理由なのだが。知ってた？だよね。

「んじやあ行つてくる」

「頑張つてくださいいね！」

「ふぁいとですよ！ハチさん！」

「拙も応援します！」

「……がんばつてね……」

Oh……俺の言葉に天使達とグレイは元氣良く返してくれたが、絶賛しよぼーん中の姉さんのしよぼーんな返事がいまだに姉さんがしよぼーんとしている事を如実に表してくれている。

若干一名しよぼーんとしているのが気にはなるが、今はフォローする事も難しいので俺はひとまず試合に出る事にした。

「よろしくお願いします」

相手を見ると普通の男子のように見えるが、なんとなくウエーブのかかった髪がどことなく見た事があるような……そんな事を考えながらお互いによろしくと言いながら握手をする。

なんとなく陰湿っぽいというか、なんか……そう、ガンダムの主人公っぽいという

か・・・。

そうして試合は始まった。

さすが準決勝まで勝ち進んだだけにはあつて、一年生とは思えない魔法力である、妹様や十師族の魔王様達にはまったく及ばないが、モブ崎君レベルは優に超えているように思える。

そんな事よりも・・・だ。

どことなく見た事あるなーって思ってたんだが、いや、予感はしてたんだ。

他のそこはいたってまじめに試合が進んで行くのに、やたら俺の参加しているクラウドボールには変なのがいるなあ・・・って思ってたからさ・・・。

ぶつちやけ今回も変なのくるかもしれないなあ・・・って思っていたさ・・・。もしかしたらってレベルではね？

でもさ・・・はあ。

ため息をつきたくなる心境の中で俺はボールを撃ち返しながら相手を見る。

「なんなんだよあんた！偉そうな事ばかり言って！何もできないじゃないか！」

いや、急にそんな事叫ばれてもだな・・・。

「あんなの、人の死に方じゃありませんよ！」

・・・テクノ○レイクしたのかな？ある意味人の死に方っぽいけど・・・。

「助けたい人が居るんです。オードリー・バーン。みんなが、ミネバ・ザビって呼んでる女の子です」

お、おう……そうか。

さきほどどこからこんな感じなのである。つまりあれだ。今回の相手はバナージ（仮）だったわけだ。

しかも会話が脈絡がなく突然言ってくるからこつちもどう対応していいのやら……。しかもやつかいな事に、そんな感じでアレな相手ではあるが、実力は確かなようで。これまでの対戦相手とは違って、俺の消える魔球や、分裂魔球、手塚ゾーンと言ったテニヌの技を駆使するも、まるで本当にニュータイプなのはと思うようにこちらの魔球に対応してくるのだ。正直姉さんですら最初は戸惑っていたというのにびっくりである。

それでも身体技能の差で少しずつこちらのポイントは重ねているので、このまま順調に行けばこちらの勝利は固いのだが、なんとなく嫌な予感がする。

だって、相手はバナージなんだぜ？という事は、あれもやつてくるって事だろ？

そう思っていると、相手の様子が徐々に変化しているのが見える。

「私のたったひとつの望み……可能性の獣……希望の象徴……父さん、母さんゴメン、俺は……行くよ！」

そう言つて赤く発光し始めるバナージ（仮）。NTDを起動させたようだ。わかります。

なかなかの再現度にイチガンダムファンとして思うところがない訳ではないが、流石にこれ以上時間をかけるとこちらも厳しくなるので、そろそろこちらも決めさせてもらう。

「しかたない・・・コール、術式起動」

『ミトメタクナイ!!』

最小限の魔法力の行使のみでここまでやってきたが、流石にここまでの試合で第一段階の封印は解除していた。

だが、バナージ（仮）相手ではそれでも時間がかかりすぎてしまう為、現状妹様から封印解除の認定が下りている第二段階の封印を解くことにした。

「封印術式、第二段階限定解除」

『ハロー！ゲンキー!』

バナージ（仮）は赤く発光し、俺は第二段階解除によりサイオン光をまき散らす。

なんとというか、あれだな。冷静に第三者視点で見るとすげえあれな試合になつてるよね、これ。

「あなたは・・・!」

そんな俺のサイオンにバナージ（仮）も気づいたのか警戒しているようだ。

「違う、これは違うよ、普通じゃない。これは危険な光だ！」

そう言つてさらに苛烈に打球を打ちこんでくるバナージ（仮）。

はたから見たら絶対向こうの方がヤバいと思う。姉さんが一番ヤバいだろうけど。

そこからはもう圧倒的だった。俺が。

封印解除をしたおかげで魔法の選択肢が増えたつてももちろんあるんだけど、だいたい理由は相手が弱体化したからである。

・・・意味がわからん？俺も。

つまり、このバナージ君、姉さんの試合を見て感化されたのかわからんが、魔法によりNTDを再現しようとして無駄な魔法を使っているようで・・・アホかと言いたい。

姉さんのは魔法力がありすぎて他に発散させて事故を起こさないようにしているからで、戦闘用に出力を変えたらすべてを溶かす鎧にも剣にもなる魔法なのだが、ありあまる魔法力を発散させるべくやたら効率悪い術式を使っていたのだ。

んで、このバナージ君だが、おそらく似たような事をしていたと思われる。つまり、NTDつぼく見せたくて発光してただけで特になにか能力が上昇しないという劣化版と思われる。達也みたいにはつと見て全部わかるわけでは無いが、さつきちよろつと術式見た感じだとたぶんそんな感じだと思われる。もしかしたら多少自己加速的な効果

はあるかもだが、目に見えて上昇する感じでもなく誤差の範囲っぽい。

そんな弱体化したバナージ（仮）と早期決着を狙った俺の第二段階限定解除状態では試合になるわけもなく、ここまでの苦戦が嘘のようにあつという間に試合が終わった。当然俺の勝利である。

「やりました・・・やっただんですよ！必死に！その結果がこれなんですよ!!」

試合終了後、なんか相手コートのエンジニアだろうジンネマンっぽいやたらおっさん顔の奴がバナージ（仮）に声を掛けるとバナージ（仮）がそんな事を叫んでた。

いや、言うと思ってたけどさ、必死にはなくね？NTD使ってなければもうちよつと苦戦してたよ？

「これ以上何をどうしろっていうんです！何と戦えって言うんですか!」

とりあえずまじめにやるべきだったと思うの・・・。

こころの中でのツツコミもひと段落したのでふうと一息ついて俺も自分のコートサイドに歩いていくと、笑顔で出迎えてくれるグレイと姉さんに天使光井。

「・・・ん?」

俺の視線の先で出迎えてくれる中には天使柴田がいなくなっていた。

ハチ、天使を探す、んで、正座する

天使柴田がない。

それを認識した俺は体中から冷や汗が出ているのではと思うほどに一瞬で血の気が引いた。

「ね、姉さん・・・？」

「あ、おかえりーハチ。おめでどう」

さつきまでしよぼーんとしていた姉さんだがすでに持ち直してニコニコしているのは嬉しいのだが。それどころではなくて。

「姉さん？し、柴田はどこ行ったんだ？」

天使光井やグレイもおめでどうと言ってくれるのを生返事で返しながらそう問いかける。

「さつきエリカさんと西城君が来て、いっしよに売店の方にハチの飲み物を買に行つたよ」

あ、なーんだ。それなら安心。

てつきりどこぞの変態不審者さんとか、なんだか最近やたらと関与している怪しげな

犯罪組織の魔術師とかとかいるからってつきりね。

「あれ？でももう買いにいって結構経ちますよね？」

「ちよつと行つてくる！」

行つてくりゆ——！！

ばびゆんと飛び出す俺。あ、でも心配させないように一声かけないと。

「姉さんとグレイは光井をたのむう——！」

たのむう——。たのむう——。とエコーさせながら俺は天使柴田を迎えに行くために駆け抜けるのであった。

「まつてろよお——」

俺はばびゆ——んと駆けながら端末を取り出して天使の位置情報を確認する。

え？それストーリーじゃないかって？大丈夫！これ天使達公認だから！！

4月の事件で変なのに絡まれてから護衛の必要性を学んだ俺は天使達を説得してそれぞれを現在地を把握できるようにしたのだ。俺は達也みたいに護衛対象をいつでも感知できるわけではないからな。それを言ったら微妙に達也がドヤ顔してた気がするが気のせいだろう。あの眼、俺も欲しいです。

大丈夫！怪しい事に使うとか、妹様の監視下で無理だし、そもそも天使にそんな事出

来るわけが無いのだ。

イエスエンジェルノータッチって奴やな。

でも天使のプリチーさとか、可愛らしさとか、溢れんばかりの魅力やらでつけ狙ううんこどもが多いのも事実で、実際これで何度か救われたこともあったりして。

そういう訳なので、この天使公認の天使の現在地を教えてくれる通信機能付き神機によると、天使までの距離はすぐそこだった。

「またせたなあー！」

この角を曲がれば天使に会える。そう思うとこの天使のいない時間というのもまるで遠距離恋愛中の彼氏彼女みたいでおつではないか？キモイとか言わないで。

そんな事を考えて角を曲がると、俺の目には数十人の時代錯誤したアンチャンに囲まれているのによたらと好戦的な態度で睨んでいる千葉に西城とそれを少し後ろからオロオロしている天使柴田だった。

いや、天使がオロオロしているのも非常にプリチーコケティッシュではあるが。それよりもなんだあのチンピラは、あんな世紀末な感じの奴らが未だにあんなに生息しているとか信じられないんだけれど？

そんな事を考えながら天使の元に向かうと、なんと千葉と西城の死角から天使に忍びよるアホウがいるではないか！だが！

「させるかよっ」

俺は神速の踏み込みにより加速し、瞬時に天使とアホウの間に立つと、天使をかばいながら天使に手を出そうとしてるアホウの手をはたき落とした。

「ハチさん！」

「すまん、遅くなった」

自分をかばうのが俺だと理解した天使はそれまでのオロオロとした表情から輝くような笑顔になりながら俺の名を口にした。うん、好き。

俺が来た事に気づいた千葉と西城は少し驚いていたようだが、周りの世紀末たちはそれでもかまわんとばかりにこちらに絡んできていた。

「いいからこつちにこいよおー!!」

ラリったように拳を振り上げて数人が殴りかかって来た。

おいおい、マジかよ・・・。

千葉と西城も数人に囲まれながら大立ち回りを始めている。

「きやつー！」

「すまん」

俺と天使を囲んできた世紀末どもを守る為に俺は天使を抱き上げて飛び上がりその包围を上から逃れる。

「あ、あの、ハチさん……?」

世紀末どもが追いかけてくるのを俺はかけらも天使にふれさせるものかよと回避しながら蹴散らしていく。

天使から恥ずかしそうな声が聞こえるが、今は我慢してもらおうしかないのだ。決してどこもかしこも柔らかい天使を下ろしたくないわけでは無いのだ。無いのだ。

「あ、あの……そこは……ひゃんっ」

ないのだ……。

そこから天使を抱えながら世紀末どもを叩きのめす事しばらくしてようやく大会の委員会がやってきたようだ。

おろした天使が顔を真っ赤にしながら両手で胸をかばいながらも、それでも恥ずかしそうに「守ってくれてありがとうございます」と言ってくれて、俺はもしかしたらとんでもない事をしてしまったのではないかと焦ってしまった。

そうこうして色々落ち着いて、姉さん達と合流したおれたちだが、それから少しして、俺は魔王さまに呼び出された。

「ハチくん、何か言いたい事はあるかしら?」

部屋に入るとそこには椅子が一つと魔王様がいた。

ひとつしかない椅子には魔王様が腰かけていて、魔王さまの形の良いヒップが、と考

えるとイスに嫉妬してしまいそうになるが、そんな事を考えている場合ではない。

おかしい、顔は笑っているのに、オーラが黒いというか、怖い。

微笑んでいるはずなのに空気は妹様が放つ冷気のように凍っているし、部屋に入るなり魔王様が自身が腰かける先を無言で見つめていたので俺は考えるよりも先にそこに正座で座っていたんだぜ？何も言われてないのに自然とそうしてたんだ、不思議だろ？

まあ、それよりも、だ。魔王様の視線が怖い。冷や汗が止まらない。

「今日も可愛いですね？」

「アリガトウ、でもそうじゃないわよね？」

少し空気を良くしようと思って見たが、まったくどころかささらに悪化したような気がしたのでゴザル。

「さっきの乱闘の件なのだけれど？」

正直に喋れよ？ちゃんとしゃべらないと魔弾の射手でハチの巣にすんぞ？ハチだけに。と目が言ってるっしやる。

だから俺は試合後天使を探したら世紀末に囲まれている天使を見つけたのでそれを守っただけですと正直に話した。

世紀末共の頭が悪すぎてビビったが、あんなチンピラ世紀末にやられるほど俺はやわではない。頭が狂ったように襲ってこようが天使の一人や二人を守るくらい問題ない。

そんな感じで説明をしたら、俺の頬をかすめるようにドライアイスの弾丸が通りすぎて行った。怖い。

後ろで床に着弾して何かを削っている音が聞こえるがそちらを振り返っている余裕はなかった。

なぜなら……

「ハチくん……?」

あれ? どうしよう……怖いはずなのにゾクゾクしている俺がいるんだが……これはあれだな、妹様に睨まれている時と同じ感じだわ……。

妹様によつて少し開き始めていた俺の中の新しい扉がさらに開き始めている。

氷のような目でこちらを見下ろす魔王様はまさしく魔王様と言える。その美貌と氷の表情とで俺のハートはヤバイ事になっていった。俺はそつと開き始めている扉を抑え込みながら魔王様に土下座する。

「ごめんなさい、でも天使をが襲われていたので仕方なくですね……」

つかその辺監視カメラでもなんでもありませんよ? そしたら俺達が絡まれて襲われてたつてすぐわかるもんだけど?

「カメラの類は故障していたそうよ、だから証人がいないのよ……参ったわね、これじゃあハチくんが失格になるわ」

「あ、それは別に・・・ひえっ・・・なんでもナイデス。コマリマシタネ」

カメラが故障してたとかそんな事あり得るのか？でもあの世紀末どもにそんな事を考える頭があるとも思えないし・・・どういう事だ？

俺はただ天使に群がる世紀末どもを追い払った(ボコボコにした)だけだというのに、なぜこうなるのだろうか？

「うちの学校始まって以来の大問題になりかねないくらい大会委員会から苦情が来ているの」

「なんで俺だけになんですかねえ？世紀末どもは？」

「向こうも苦情を出しているそうだけれど、ハチくんの場合は出場選手だったのが問題ね」

そんな事言われたって・・・天使に世紀末が群がってたら誰だって守るでしょうよ？しょうがなくなる？

なのにここぞとばかりに俺を失格にさせようとしてくるとかひどくない？会場のセキュリティを反省するとかやる事あるじゃん？むしろこつちが謝罪される側だと思うのだけれど？

「とにかく、今回の件でハチくんは失格、ここまでのポイントも無しになりそうなの」

「せやかて工藤」

「・・・怒るわよ?」

「(づ)めんなさい」

正直失格になるのは全然かまわないが、それによって天使が悲しむ顔をしてしまう事が申し訳ない。あと、その後絶対妹様に説教されるだろう未来も見えて、試合はだるいけど、だるいだけだから、差し引きでいうと試合出た方が楽なんだよなあ・・・。「とりあえず大会委員会とは今十文字君が折衝しているわ。なんとか試合には出られるようにするつもりだけれど・・・」

「・・・はい」

「柴田さんを助けようとしていたのは理解しているけれど、もう少し考えて行動するように」

「・・・はい」

まさか俺が姉さんにするみたいな説教をされることになるとは・・・(ひどい)

それから、なんとか十文字先輩とかいう年齢詐欺疑惑のある御中の働きにより俺はなんとか決勝戦に出場出来る事になった。

大会委員会にはなんとあの電子の妖精・・・じゃなくて魔女様がわざわざ監視カメラの映像を復元して提出したらしく、無事に俺の無実が証明されたらしい。ありがたい! あやうく天使が悲しみ、妹様に氷像にされるところだったぜ・・・。

という訳で、何とか決勝戦に出場出来る事になった俺だが、嫌な予感というか、嫌な事というものは続くようで・・・。

「ハアアハツハツハツ……よくぞここまで来たな!! わしが相手になってやろう!!」
「よろしくお願ひします……」

決勝の相手はまさかの東方不敗だった……。年齢詐称疑惑どころじゃないんだが!?!
いいのかよ!?! 九校戦って高校生の大会じゃなかったの!?!

ハチ、暁に死す・・・。

いやあ・・・まさかガンダム会における人類最強となぜかクラウドボールで試合する事になるとは予想すらしなかったですわー・・・。

どうみても高校1年には見えないナイスミドルにしか見えないのだが、特殊メイクか何かだろうか？

というか、マスターアジアが試合に出てて、ドモンカッシュっぽいのがベンチにいるのだが、こいつらの配役はどういう事なんだ？

ぶつちやけ勝つ気なんてなかったし、そんなにやる気事態が無いのだが・・・。そう考えて自分のベンチを見ると・・・。

「ハチさ〜ん！」

と元気に声を上げて手を振っている天使光井に。

「頑張ってください〜い！」

とこちらも懸命に応援している天使柴田。癒されるね。

「ハチ、ふぁいとだよ！」

とぐつと親指を立てる姉さん。がんばりゆ。

「が、頑張つて……いえ、やりすぎないように気を付けて下さい」と応援してくれるグレイ。うん、気を付けるつす。嫌な予感しかないけど、俺、気を付けるよ！（フラグ）

こんなにも応援してくれる人が居るとは、少し前からは想像も出来なかつたぜ……、この胸にたぎる、温かい気持ち……サイコミュの波動を通じて伝わってくるようだ。

そして、何よりも感じるのは、そう……

圧倒的な恐怖。

これである。

天使が応援してくれている。温かい気持ちだが、それ以上の絶対零度によって瞬間冷却されて、先ほどから恐怖で冷や汗が止まらない。

なぜかって？

天使達の後ろから、絶対零度の微笑みを浮かべる白と赤の巫女服をまとった妹様と、生徒会長である、魔王様と風紀委員長様がまるで何かしでかしたらわかってんだろうなって目で見ているからである。

あの妹様と魔王様に挟まれて平然としてる達也の異質感が半端ない。

つか、妹様も魔王様も俺の事信用して無さすぎじゃね？ちよつと天使を守る為に世紀末をボコボコにしただけじゃんよ？それでちよつといるんなどこから怒られたくらいであんな怒んなくても良くね？

妹様も魔王様もちよつと俺に厳しすぎると思うんやけど？

そりやちよつとめんどくせーなって思って練習サボろうとしたり、練習めんどくせーなって思って天使達の練習につきつきりになったり、妹様のミラージの練習相手した時に日ごろの鬱憤を晴らすべくちよつとイジワルしただけじゃん？そりや妹様にはしよつちゆう正座させられたり、凍らされたりしてるし？

九校戦死んでも出たくなかったから魔王様からの参加要請死ぬほど断ってたけどさ、それにしてもひどくね？泣くよ？

「まじめにやらないと、わかっているわね？」

「ハチくん？これ以上問題を起こさないでね？」

俺がいろいろと考えているのを察したのか、妹様と魔王様がそんな事をボソリと言ってきた。結構距離があるのに、大した声量でもないその声が聞こえた不思議。絶対に負けられない戦いがここにはあると思っただね。

相手は十文字先輩をはるかに超える年齢詐称疑惑のある東方不敗である。パチモンではあると思うが、東方不敗の名に恥じないプレッシャーを感じる、ただのなんちゃつてコスプレではない事は明らかである。

「そうとなれば、出し惜しみする理由はない、か」

試合開始までもうすぐ、相手の東方不敗ははーはっはっはーとか笑い続けている。

俺はもう一度、天使達を見て癒されて、妹様と魔王様を見て冷や汗を浮かべてから、封印術式を入力しているネットワークレス型のCADに触れる。

「コール、封印術式起動」

『ミトメタクナイ!!』

音声認識によるCADの術式を起動すると、魔王様が認めてくれないのかしら？と久々に俺のCADへのツツコミが入るが、いつものようにスルーする。

それにしてもさつきからぼつりとつぶやくような声すらはつきり聞こえろとか、魔王様と妹様の声はどうなっているのだろうか？気にしたら負けかな？こんなくだらない

事に魔法使つてんのかな？違反にひっかからないでね？

「封印術式、第二段階限定解除」

『ハロー！ゲンキ!!』

俺が第二段階の封印を解除すると、そこから吹き荒れるサイオン光。それを見て

東方不敗もほお？と楽しそうにしている。

「なるほど、相手に不足はないようだの」

不敵な笑みを浮かべる東方不敗。ねえ、その殺気おかしくない？これクラウドボールの試合なんやけど？なんで殺気とばしてくんの？

すると、相手方のベンチにいるドモンが声を上げた。

「ししよおおおおー！ー！ー！！」

「行くぞっ！ドモンっ！！」

「はいっ！！ししよおおおおー！ー！ー！！」

でたー！ガンダム会でも屈指の暑苦しさを誇る師弟の掛け合い。これがクラウドボールの試合じゃなければ俺も純粋に楽しめるんだけどなあ・・・。

「流派！東方不敗、ハアツツツ！！」

ビシイ！！つと拳とラケットを突きつける東方不敗。絶妙な似合わなさだ。

「警告です」

ピツと笛の音と共に東方不敗が警告を浴びた。まあ、そらそうよね・・・。

「なにいつ!?なぜじゃっ!?!」

そりや、クラウドの試合で殴り合いはないし、試合前にバンバン魔法使つて背景燃やしたら警告くらい受けるでしょよ。そのまま不戦敗になればいいのに・・・。

そしてなんだかんだで始まる試合。

ピーっという笛の音と共にボールが吐き出されると・・・。

「行くぞ!十二王方稗、大車併つっ!!」

まだ一個しかボールが吐き出されていないのに東方不敗が突き出したラケットが梵字を出現させたかと思うと、そこからボールの分身を12個出現させ、こちらのコートにそれぞれ飛び込んでくる。

分身のボールがそれぞれ俺のコートに入ると、なぜか一気に12ポイント相手に加算されている。意味がワカラナイ・・・。分身なのにカウント入るって・・・俺の分裂魔球は入らなかつたのに・・・。

仕方なく俺はそれぞれのボールをテニヌではなく、戦闘用の技術を用いて返球する事にした。

「七閃、二連!」

俺がラケットを構えると、そこからワイヤーを伸ばして、それぞれの分身ボールをはじき返す。これは 聖人とか呼ばれてる俺の師匠の一人から伝授された技で、魔法を使わず人外の能力を発揮するファンタジー集団に片足を踏み込んだ技である。

普段は3閃くらいまでしか出せないが、封印解除している現在なら7閃、唯閃の再現は可能なのである。ただし、ボールを破壊しないように加減は必要なのだが……。

「ほうっ！神裂の技を使うか……面白い！」

……うそやん？師匠の一人を知ってるのん？つまり同類って事ですかヤダー。絶対1年じゃないよね？この人、特殊メイクとかでもなく普通に見た目どおりの年齢だろ!!
なんでそんな達人がこんな新人戦にでてるんだよおおおお!!

「デッドリーウェイブ！」

爆発させないでー！！

「超級霸王、電影弾！超級霸王、日輪弾!!」

ボールがすげえオーラをまとって飛んでくる、爆発させんなよー！！てか威力がかしいだろー!!?

コートを支えるようにして飛んでくるとんでも技に俺もまたそれぞれ七閃や燕返しを用いて返球していく。もはやクラウドの低反発ボールの1球1球が必殺の弾丸にか見えない。コートが穴だらけである。

「はああああああ!!石破、天驚拳つつつ!!」

「うおおおおお!!?!?」

ズゴオオオオオオオオオオン!!!

東方不敗の放つ最終奥義によりコートの半分がクレーターのようになり吹き飛ばす。

あつつつつつぶねええええええええ!!

とつさに回避しなかつたらシヤレにならないダメージを受けるところだったわ。つか、石破天驚拳まで完全再現してるとかまじでとんでもねえな。普通にモビルスーツ生身で倒せるんじゃないか?

「ほう・・・生きておったか・・・やるではないか」

生きておったかじゃねえよ!なんでクラウドの試合でこつち殺す気で来てんだよ!おかしいだろ!つかさつきから殺傷性Aランクオーバーの技ボンボン出てるけどなんでこのおっさん失格になんねえんだよ!コートも半壊してるし、なんなんだよ!?

しかし、さすがの大会委員会もコートが半壊した状況では試合を継続させることは出来ないようで、そのまま試合終了、東方不敗と俺の同時優勝という事に成った。

すっげえ納得いかねえ!!なんで俺が世紀末をボコっただけで失格になりそうになったのに、このおっさんはコートボコボコにして、殺傷性Aランク相当の技でオーバーキルしようとしてんのにならぬ失格にならないんだよ!

そんなイライラしている俺をよそに東方不敗は楽しそうにわっはっはと笑いながらどっかに行つてしまうのであつた。

「なつとくいかねえ・・・」

とりあえずあれだな、これでクラウドが終わつた事だけが救いだな。残りの日程は天使と姉さんとグレイに癒されながら過ごそう、うん。

こうして俺のクラウドボールの挑戦は終わるのであつた。

ハチ、天使を応援するうー

「かつとばせー!!……はっ!夢か……」

どうも、おはようございますハチです。いや、ハチですわ。眠いですわ。ですわ。

昨日はクラウドであれやこれやして、そんで東方不敗と一緒にコートをボコボコにしたせいで試合後にも魔王様と妹様にひたすら説教されてとすげえあれな一日だった。

まあ説教の細かい事なんも覚えてないけど、なんか正座させられたあたりまでは記憶あるけど、そこから先を思い出そうとすると、うっ、頭がっ……!てなるのだ。……俺は昨日いったい何をされたのだろうか?体のどこにも痛みも以上も感じないのが逆に怖い。

だから、おもわずかつとばせーって言ってしまうのも仕方ないと言える。言えるよね?ちがった、言えますすわよね?

まあそんなこんなで俺の出番はほぼ終わり。後は愛する天使のエンジニアをこなせばこの九校戦とかいうイベントも終了である。

「えーっと、今日の日程は……」

「今日はバトルボードの準決勝からと、アイスピラーズブレイクの決勝リーグだよ」

「おう、そうか、さんきゆな、北山」

眠い目をコシコシしながらベットから起き上がり、つぶやきに応えてくれた北山に感謝しつつ、俺は顔を洗いに行く。・・・ん??ええ??

「・・・え?なんでいるの?」

「おはよう」

「おはようございます!」

「ハチ、まずは顔を洗って来たら?」

思わずスルーしそうになってしまったが、なぜか北山と天使光井と妹様が部屋に居る件について。

それぞれ朝の挨拶をしてくれたが、いや、はい、顔洗ってきますね。はい。

混乱する状況に、とりあえず妹様に言われたとおりにベットから立ち上がり顔を洗うためにのそのそと洗面台に向かう。ぱしゃぱしゃと、うん、おめめもぱっちり(腐り目)んで?

「えつと、どゆこと?」

とりあえず顔洗って、寝ぐせはアホ毛以外を整えて、腐った目も諦めて、身だしなみをそれとなく整えてから部屋に戻ると、やはりそこには北山と天使光井と妹様がいた。幻覚ではなかったらしい。

「は、ハチさん！き、今日は、よろしくお願いしますっ!!」

こちらこそ、未来永劫永永く、いくひさしくよろしくおねがいます。危うくそう答えそうになるのを必死にこらえて、俺は任せとけ！と言わんばかりにおう、と答え
た。・・・つまり？

「緊張しすぎて早起きしちやったらしくて、それで、折角だからハチのここに来たのよ」
あれ？妹様が素敵な事を言ってる!?いつも冷たい目で俺を睨むか微笑んでるの
目が笑ってないやつで俺にあれこれ言う妹様が!?

「・・・ハチ？」

「なんでもないっす!!」

こえーよ！あいかわらずこえーよ！

ちよつと考えただけで殺気飛ばすとかおかしいでしょ!?

まあでも、天使光井がリラックサして競技に臨めるようにするのも俺の仕事だしな、
うん。

朝から天使と一緒に最高にハッピーではあるけど、そこはマジメに取り組もう。う
ん。

それから俺達は早朝という事もあって、天使光井と北山、妹様と俺の4人で軽くジョ
ギングをしたり、ストレッチをしたりして過ごした。もちろん試合もあるので体力を消

費しない程度にかるーくだ。

朝から天使と戯れる時間をくれた妹様には感謝である。

今はもう、天使の表情からは緊張の色はなくなり、すがすがしい笑顔でストレッチをしている。

北山と妹様とかるく雑談をしながらストレッチをする事で、精神的にも肉体的にも緊張が取れたようだ。

それにしてもあれだな……………。

「ふっ……………ふっ……………」

「こう……………ね？」

「はあ……………はあ……………」

先程から天使のトレーニングの補佐をしているのだが、こう、エロい。いや、エツツツツロイ!!

俺がすべすべでやわやわの足を抑えている間に天使は腹筋をしているわけだが、エロい。吐息がエロい。

以前から早朝トレーニングの時にいろいろと補佐をしていて、以前からずっと思っていた事だが。

ジョギングを擦れば胸部がたゆんたゆんするし、バランスボールに乗っても胸の主調

がはんばないし、筋トレすれば、吐息がエロいし、とにかくすべての行動がなぜかエロ方面に行ってしまうのだ。

天使をこのような目で見てしまう事に罪悪感が半端ないのだ。天使自身はマジメにやっているからこそ余計に感じてしまう。

しかも、それを感じ取っているのは妹様と北山だけで、天使事態は無自覚なところが、またばない。

妹様からは虫けらを見るような目で見られ、北山からは、なんかキラキラした目で見られて、天使は一生懸命で、俺はもう、どうすればいいのかわからないよ!!（マジメに補佐すれば良い）

そうやって、朝から俺の精神力を鍛えて過ごす事しばらくして、俺達はシャワーを浴びた後に朝食をとることにした。

天使と妹様と北山との朝食を終えた後はそれぞれの試合会場に移動である。

俺と天使光井は姉さんとグレイと天使柴田と合流し、バトルボードの決勝リーグへ、妹様と達也と千葉、西城に吉田はアイスピラースブレイクの会場に向かう事に。

「頑張つてね! 雫!!」

「ほのかもね」

天使と北山がそう言ってお互いを励まし合っていると（眼福ですわ）、妹様も姉さん甘

えながら励まされていた。

「ほどほどにな」

「達也もな」

達也と俺もそれぞれ軽く言葉を交わしてからそれぞれの会場に向かう。

さあ、天使の晴れ舞台だ。

まずは天使のレースから。

会場の控室で試合用のスーツに着替えた天使光井にジャージの上着をわたした俺は、そのまま天使のCADを機械にセットして調整を始める。

天使のダイビングスーツのようななびっこりとした姿に思わず視線がもってかれそうになるのを必死に隠したのだが、ばれてないよね？

高校一年とは思えないようなメリハリのあるというか、凹凸の激しいというか、見事なプロポーションをこれから大多数のやからに見られるのかと思うとジェラシーを感じてしまう。

姉さんも天使柴田も妹様も大変魅力的なバディをしているのだが、この辺もさすがは魔法科高校とでも言えば良いのだろうか？

おっと、それよりも集中しないとだな。

俺はCADに軽くサイオンを流して、内部の起動式の点検を始める。

それを見ている天使光井が目を輝かせながらこつちを見ている。惚れた？

「ほわぁ・・・相変わらず綺麗な光だなぁ・・・魔法力を全部、完璧に制御しているからですよね！」

「まあな、サイオン量はあれだが、制御にかんしちや達也にも負けない自信がある」「すごいですね！」

やだ、嬉しい・・・！

姉さんの魔法力に干渉しているせいで、普段まったく余剰のサイオンが無くて、コッブ一杯分のサイオンでどうにかして魔法を使おうと頑張ってた時期の俺、まじグツジョブである。

天使からの尊敬のまなざしが気持ちいいぜ。惚れてもいいのよ？

「調子はどうだ？違和感は？」

俺は作動確認したCADを機械から取り外し、天使に渡す。

天使は天使の微笑みを浮かべながら天使のような朗らかな笑顔で天使のような事を言ってくれる。

「バツチリです！それにハチさんおかげで調子もすごく良いんです!!」

もう結婚しよ？天使光井も天使柴田も俺が幸せにするよ。間違いない。

今の超絶ブラックな職場環境だつて、天使の微笑みがあれば乗り切れるもん。

でも当然そんな事くちに出来る訳はないので俺は1つうなずいた。

「そりゃよかった、少しでも違和感があったら言ってくれ、出来る限りは対応するから」
「わかりました!」

まあここまでの予選で楽勝も楽勝、この娘にかなうウマ娘はいるのか? ってレベルで大勝してたからそんなに心配はしていないのだが。

真剣にCADを操作しながら異常が無いかを確認している天使のなんと可愛らしい事かと思いつながらそんな事を考える。あ、あとそうだ。

「あと、そうだな・・・」

「なんですか?」

俺のつぶやきに真剣にCADを操作していた天使が頭を傾げながらこちらに問いかけてくる。かわいっ。

「バトルボードで優勝したら俺達から良い物をプレゼントすると約束しよう」

「ほんとですか?! わあっ楽しみだなあ!!」

やべ、はやく婚約届準備しなきゃ(暴走)。

少しでも緊張をほぐせればと思つて言つたが、予想以上である。まだ何をプレゼントするとも言つてないのにこのテンション、流星天使である。

「それじゃあそろそろ試合だ。いけるか?」

「はいっ！私、頑張りますねっ！」

準決勝でも天使は余裕の大逃げをして無事に決勝進出を果たしたのであった。

まあフラッシュ作戦を警戒した奴らには影落とし作戦を食らわせて、それでもぶれないやつには横から子供が飛び出してくる幻影を見せたりしたからね。

見た目も性格も言動も天使なのに、俺の鬼畜のような作戦のせいですこしばかり敵を作ってしまったような気がしなくもないが、まあ気のせいだろう。

「やりましたー!!」

「おう、お疲れさん」

またもや嬉しそうに掛けてくる天使光井、もしかしてやつぱり抱き留めてあげるべき？べきなのん??

そう内心でワタつてると目の前で立ち止まってくれた天使（残念じゃないやい）は、はあはあと息を整えてから可愛らしくピースサインを浮かべて俺に微笑んでくれた。

「決勝に進めました！ハチさん、ありがとうございます！」

「おう、次もがんばろうな」

「はいっ!!」

いやーこれ、もう楽勝でしょ？そも妹様ほどじゃないけど、天使光井の魔法力も十分優れているもん。

新人戦のレベルでそうそうこの天使にかなうのがいるとも思えないもんね。いや、昨日の東方不敗は、あれだよ、バグだから。そもあれ絶対高校一年じゃないし、なんでいたの？つてレベル。

本線よりハイレベルな新人戦とか言われてたらしいよ？完全に使ってた技が人殺す系の技だったのだが……。それでいいのか九校戦……。

まあそんな感じでノリに乗った天使と俺達。

それじゃあ決勝戦の相手を見に行くか？そうしましょうと言って見に来たのがついでさつき。

それで見終わったわけだが……。

「ええー……？なにあれえ？」

「すごい勢いで水が逆流してましたね……」

「他にも水面を陥没させたりかなり広範囲に魔法を使っているね」

俺のつぶやきに天使柴田と姉さんも関心したような声で答える。

そして、我らがプリティコーケティッシュユエンジェルこと、天使光井はと言うと……。

「あわわ……こんな魔法って……」

と顔面真っ白になってあわわってました。

……あれ？これもしかしてやばくね？